市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

中山間地域総合整備事業川上地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

oto si bira site
落シ平遺跡

taki no dan site
瀧之段遺跡

sai no ga hara site
才野ケ原遺跡

1999年3月

鹿児島県日置郡市来町教育委員会

序　　文

本報告書は，平成９年度県営中山間地域総合整備事業に伴ない発掘調査の結果をまとめたものです。

なかでも瀧之段遺跡については平成５年度に確認調査を実施した際，約1000㎡に埋蔵文化財が残存することが判明していました。そこで平成９年までの間，開発側と計画の見直しについて協議を重ねてきましたが，継続せざるを得ないとの結論に達し，緊急発掘調査が開始されることになったのです。

調査は，平成９年８月から実施され縄文時代の草創期石鏃が41本，最古級の無文土器，細石刃など貴重な遺物が出土しました。これまでの草創期石鏃本数は25本でしたが，今回の瀧之段遺跡の石鏃はそれを大きく上回り，南九州の先進遺跡ということで貴重なものとしてクローズアップされ，新聞・テレビなどマスコミ各社で大きく取り上げられました。現地説明会では地元はもとより全国各地から大勢の方々が来跡されました。

このように，縄文時代草創期の貴重な成果をまとめた本書が，多くの方々の埋蔵文化財に対する関心を高めるとともに，今後の調査研究にご活用いただければ幸甚に存じます。

本報告書を発刊するにあたり，発掘調査中や報告書作成においてご指導賜りました関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

1999年３月

市来町教育委員会
教育長　江口英雄

報　告　書　抄　録

ふりがな	おとしびらいせき・たきのだんいせき・さいのがはらいせき
書名	落シ平遺跡・瀧之段遺跡・才野ケ原遺跡
副書名	県営中山間地域総合整備事業（川上地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	市来町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第6集
編著者名	新町正
編集機関	市来町教育委員会
所在地	〒899-2192　鹿児島県日置郡市来町湊町3305番地　☎0996-36-3111
発行年月日	1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ふりがな 落シ平遺跡 瀧之段遺跡 才野ケ原遺跡	鹿児島県 日置郡 市来町 川上	4636 12	 57 58 27	31度 43分 48秒	130度 17分 35秒	落シ平・瀧之段遺跡 確認調査 199203 199203 瀧之段遺跡 全面発掘 199708 199712 才野ケ原遺跡確認 1997 1997	 119.75㎡ 620㎡ 116㎡	営中山間地域総合整備事業川上地区に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
落シ平遺跡		中世		土師器	
瀧之段遺跡		縄文草創期，早期	船形配石炉，集石，溝状遺構	石鏃，土器，石斧細石刃，細石刃核	縄文時代草創期の石鏃41本出土。その他細石刃核，土器も出土
才野ケ原遺跡		旧石器終末，縄文早期		細石刃，細石刃核石斧，石皿	

例　　言

1．本書は，県営中山間地域総合整備事業（川上地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は鹿児島県伊集院耕地事務所の受託事業として市来町が調査主体となり，市来町教育委員会が実施した。

3．本書の執筆・編集等及び遺物撮影には，市来町教育委員会の新町があたった。

4．本書に用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

5．本書に用いた遺物番号は遺跡・土器・石器の種類に関係なく通し番号とし，挿図・図版の番号と同一である。

6．遺物の実測は新町が主として行い，磨石・石皿等は坂口が行なった。またトレースは新町・池之上・坂口・榊が行なった。拓本は児玉・松崎が行なった。

本　文　目　次

序　文
報告書抄録
例　言
目　次
第１章　落シ平・瀧之段遺跡確認調査の経過 …… 3
第１節　調査に至るまでの経過 …… 3
第２節　調査の組織 …… 3
第３節　調査の経過 …… 3
第４節　整理・報告書作成作業の組織 …… 5
第２章　遺跡の位置及び環境 …… 6
第１節　位置及び環境 …… 6
第３章　落シ平・瀧之段遺跡確認調査 …… 8
第１節　調査の概要 …… 8
第２節　標準土層 …… 8
第３節　落シ平遺跡の概要 …… 10
第４節　落シ平遺跡のまとめ …… 10
第５節　瀧之段遺跡の概要 …… 11
第６節　瀧之段遺跡表採遺物の説明 …… 14
第７節　瀧之段遺跡出土遺物の概要 …… 14
第４章　瀧之段遺跡全面発掘調査 …… 17
第１節　調査に至るまでの経過 …… 17
第２節　調査の組織 …… 17
第３節　調査の経過 …… 17
第５章　縄文時代草創期 …… 22
第１節　表採遺物 …… 22
第２節　出土遺物 …… 22
第３節　遺構 …… 30
第４節　石材について …… 30
第５節　石材の分析 …… 34
第６節　小結 …… 34
第６章　縄文時代早期 …… 47
第１節　調査の概要 …… 47
第２節　早期の土器 …… 47
第３節　出土石器 …… 51
第４節　出土土器の分布 …… 54
第５節　縄文時代早期の遺構 …… 54
第６節　小結 …… 70
第７章　縄文時代前期以降 …… 79

第１節　出土遺物の概要 …… 79
第２節　出土遺物 …… 79
第３節　小結 …… 81
第８章　まとめ …… 94
第１節　縄文時代草創期 …… 94
第２節　縄文時代早期 …… 94
第３節　縄文時代前期以降 …… 95
第９章　才野ケ原遺跡の調査 …… 97
第１節　調査に至るまでの経過 …… 97
第２節　調査の組織 …… 97
第３節　調査の概要 …… 97
第４節　標準土層 …… 102
第５節　表面最終遺物 …… 102
第６節　トレンチの概要 …… 105
第７節　出土遺物 …… 105
第８節　まとめ …… 113
あとがき …… 171

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図 …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 2
第３図　トレンチ配置図 …… 7
第４図　落シ平遺跡表採遺物 …… 9
第５図　瀧之段遺跡表採遺物 …… 10
第６図　細石刃核・細石刃 …… 11
第７図　３トレンチ出土遺物 …… 12
第８図　３トレンチ遺物土層分布図 …… 13
第９図　10トレンチ出土遺物 …… 15
第10図　10トレンチ遺物土層分布図 …… 16
第11図　瀧之段遺跡遺物残存範囲 …… 18
第12図　グリット配置図 …… 20
第13図　圃場整備計画図 …… 21
第14図　瀧之段遺跡表採遺物 …… 23
第15図　西側土層断面図 …… 24
第16図　A地区出土遺物（土器） …… 25
第17図　B地区出土遺物（土器） …… 26
第18図　草創期石鏃（一） …… 27
第19図　草創期石鏃（二） …… 28
第20図　草創期石鏃（三） …… 29

第21図　A地区石鏃出土分布図 …… 31
第22図　A地区土器出土分布図 …… 32
第23図　A地区遺物分布図 …… 33
第24図　B地区石鏃，土器出土分布図 …… 35
第25図　B地区遺物分布図 …… 36
第26図　フレーク，チップ分布図（黒耀石A） …… 37
第27図　フレーク，チップ分布図（ガラス質流紋岩） …… 38
第28図　フレーク，チップ分布図（その他） …… 39
第29図　ブランク，細石刃 …… 40
第30図　石核，掻器，楔形石器 …… 41
第31図　ハンマーストーン …… 42
第32図　石核，剥片類 …… 43
第33図　剥片，その他の石器 …… 44
第34図　船形配石炉 …… 45
第35図　砥石 …… 46
第36図　Ⅰ・Ⅱ類土器（一） …… 48
第37図　Ⅲ類土器（Ⅲ層） …… 49
第38図　Ⅲ類土器（Ⅳ層） …… 50
第39図　Ⅳ類土器（Ⅲ・Ⅳ層） …… 51
第40図　Ⅴ類土器（Ⅳ層） …… 52
第41図　ⅣⅤ層出土石器分布図 …… 53
第42図　Ⅳ層出土石器（一） …… 55
第43図　Ⅴ層出土石器 …… 56
第44図　Ⅳ層出土石器（二） …… 57
第45図　Ⅳ層出土石器（三） …… 58
第46図　Ⅳ層出土石器（四） …… 59
第47図　Ⅳ層出土石器（五） …… 60
第48図　Ⅳ層出土石器（六） …… 61
第49図　Ⅳ層出土石器（七） …… 62
第50図　Ⅳ層出土石器（八） …… 63
第51図　Ⅳ層出土石器（九） …… 64
第52図　Ⅱ～Ⅳ類土器出土分布図 …… 65
第53図　Ⅴ類土器出土分布図 …… 66
第54図　遺構配置図 …… 67
第55図　SS－１号実測図 …… 68
第56図　SS－１号出土遺物（一） …… 69
第57図　SS－１号出土遺物（二） …… 70
第58図　SS－２号実測図 …… 71
第59図　SS－２号出土遺物（一） …… 72
第60図　SS－２号出土遺物（二） …… 73

第61図　SS－３号実測図 …… 74
第62図　SS－４号実測図 …… 75
第63図　溝状遺構実測図 …… 76
第64図　溝状遺構出土遺物 …… 77
第65図　Ⅵ・Ⅶ類出土遺物 …… 78
第66図　Ⅲ層出土遺物（一） …… 80
第67図　Ⅲ層出土遺物（二） …… 81
第68図　Ⅲ層出土遺物（三） …… 82
第69図　Ⅲ層出土遺物（四） …… 83
第70図　周辺遺跡分布図 …… 98
第71図　トレンチ配置図 …… 99
第72図　遺跡残存範囲 …… 100
第73図　圃場整備計画図 …… 101
第74図　才野ケ原遺跡表採遺物 …… 103
第75図　才野ケ原遺跡表採遺物 …… 104
第76図　１トレンチ遺物分布図 …… 106
第77図　１トレンチ出土遺物 …… 107
第78図　３トレンチ遺物分布図 …… 108
第79図　３トレンチ出土遺物（一） …… 109
第80図　３トレンチ出土遺物（二） …… 110
第81図　３トレンチ出土遺物（三） …… 111
第82図　近世の遺物 …… 112

表　目　次

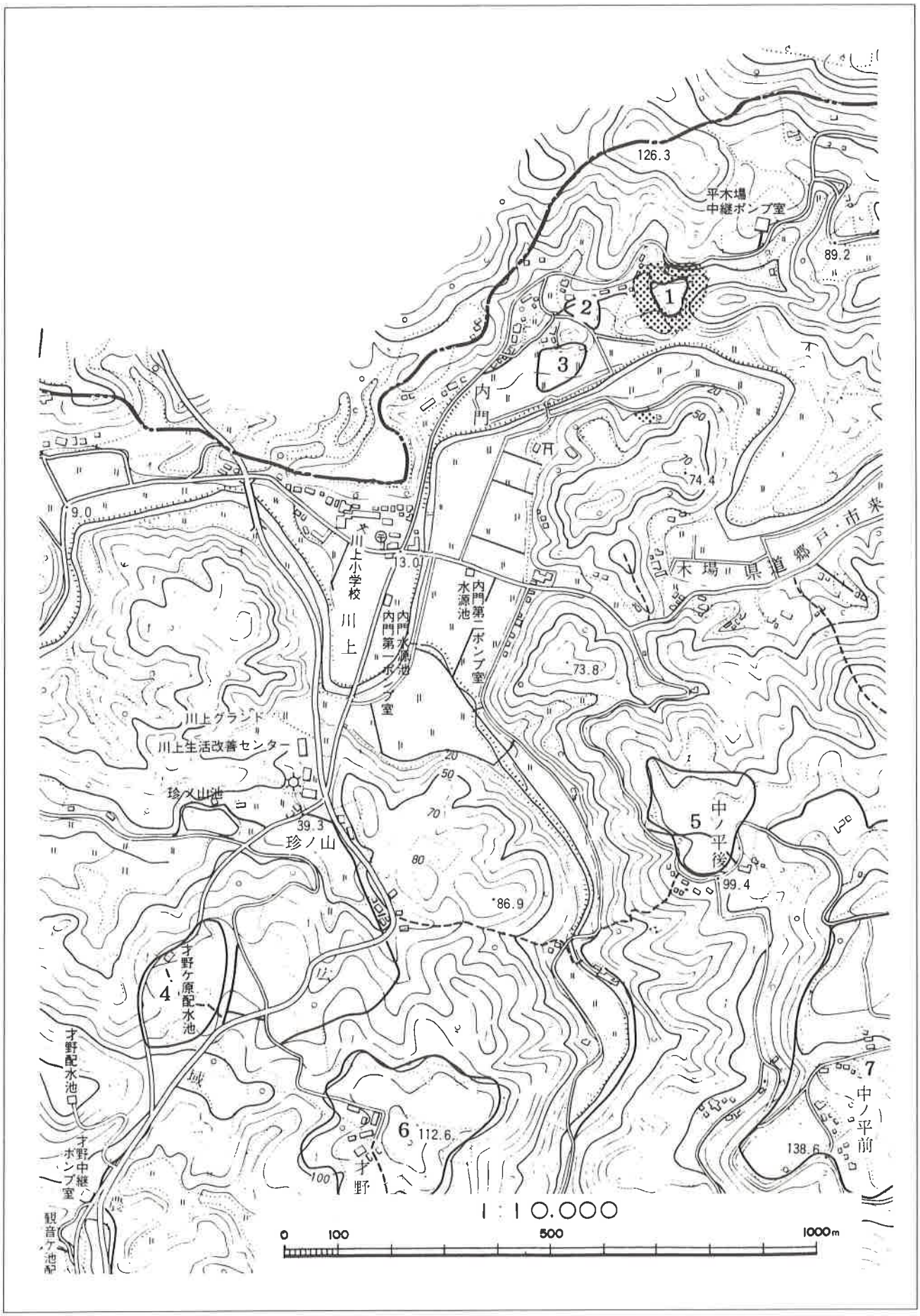
表１　瀧之段遺跡周辺の遺跡 …… 6
表２　石器一覧表(1) …… 88
表３　石器一覧表(2) …… 89
表４　石器一覧表(3) …… 90
表５　石器一覧表(4) …… 91
表６　石器一覧表(5) …… 92
表７　石器一覧表(6) …… 93
表８　石器一覧表(7) …… 114
表９　土器一覧表(1) …… 84
表10　土器一覧表(2) …… 85
表11　土器一覧表(3) …… 86
表12　土器一覧表(4) …… 87
　　土師器一覧表 …… 87
　　陶磁器一覧表 …… 87
表13　土器一覧表(5) …… 115

磁器一覧表 …… 115

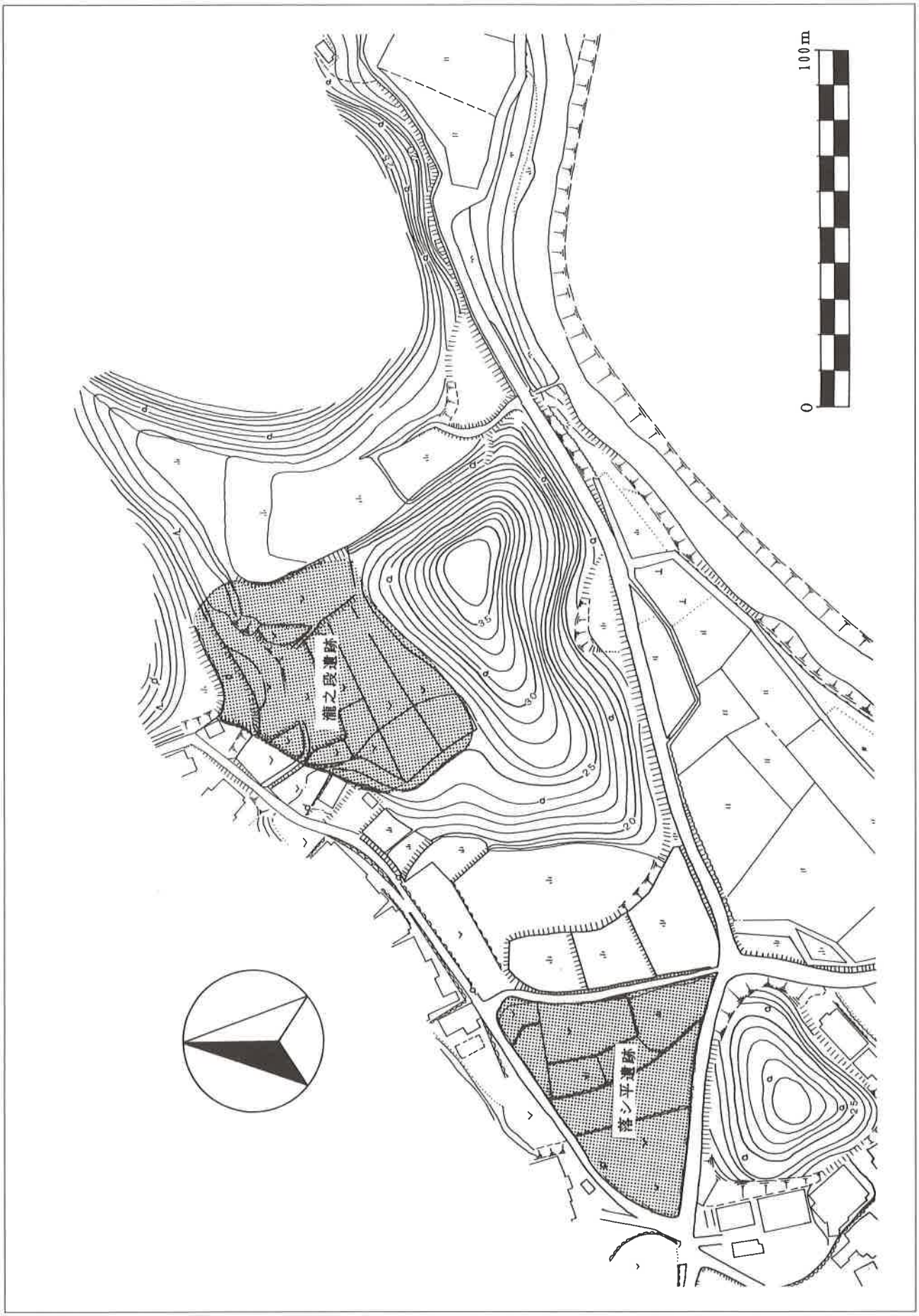
図 版 目 次

図版１　３トレンチ・３トレンチ掘り下げ …… 117
図版２　３トレンチ細石刃核出土状況・10トレンチ出土遺物 …… 118
図版３　10トレンチ掘り下げ・作業員の皆さん …… 119
図版４　落シ平遺跡遠景・瀧之段遺跡北から南 …… 120
図版５　発掘状況・１トレンチ検出 …… 121
図版６　集石移行出土状況・SS－１号検出状況 …… 122
図版７　SS－１号内出土遺物・SS－２号検出状況 …… 123
図版８　石皿検出状況・SS－３号・SS－３号遺物出土状況 …… 124
図版９　SS－４号検出状況・石皿磨石検出状況 …… 125
図版10　SD－１号検出状況・SD－１号１／２カット …… 126
図版11　SD－１号遺物出土状況・SD－１号土層断面 …… 127
図版12　遺物出土状況(1) …… 128
図版13　遺物出土状況(2) …… 129
図版14　遺物出土状況(3) …… 130
図版15　遺物出土状況(4)Ⅶ層掘り下げ …… 131
図版16　縄文時代草創期遺物出土状況・工事との同時進行 …… 132
図版17　草創期遺物分布状況・草創期無文土器 …… 133
図版18　ハンマーストーン検出・石鏃検出状況 …… 134
図版19　石鏃出土状況・配石炉検出 …… 135
図版20　落シ平遺跡表採遺物（第４図）瀧之段遺跡表採遺物（第５図） …… 136
図版21　細石刃核（第６図）３トレンチ出土遺物（第７図） …… 137
図版22　３トレンチ出土遺物（第７図）10トレンチ出土遺物（第９図） …… 138
図版23　B地区出土遺物（土器）（第17図） …… 139
図版24　草創期石鏃（一～三）（第18～20図） …… 140
図版25　ブランク・細石刃（第29図）ハンマーストーン（第31図） …… 141
図版26　石核・掻器・楔形石器（第30図）石核・剥片類（第32図） …… 142
図版27　石核・剥片類（第32図） …… 143
図版28　剥片・その他の石器（第33図） …… 144
図版29　砥石（第35図）ⅠⅡ類土器（一）（第36図） …… 145
図版30　ⅠⅡ類土器（一）（第36図）Ⅲ類土器（Ⅲ層）（第37図） …… 146
図版31　Ⅲ類土器（Ⅲ～Ⅳ層）（第37～38図） …… 147
図版32　Ⅳ類土器（Ⅲ～Ⅳ層）（第39図）Ⅴ類土器（Ⅳ層）（第40図） …… 148
図版33　Ⅴ層出土石器（第43図）Ⅳ層出土石器（一・二）（第42・44図） …… 149
図版34　Ⅳ層出土石器（三～四）（第45～46図） …… 150
図版35　Ⅳ層出土石器（三～五）（第45～47図） …… 151
図版36　Ⅳ層出土石器（五～六）（第47～48図） …… 152

図版37　Ⅳ層出土石器（六～七）（第49～50図）　…… 153
図版38　Ⅳ層出土石器（九）（第51図）　…… 154
図版39　SS－１号出土遺物（一～二）（第56～57図）　…… 155
図版40　SS－２号出土遺物（一）（第59図）　…… 156
図版41　SS－２号出土遺物（二）（第60図）　…… 157
図版42　溝状遺構出土遺物（第64図）ⅥⅦ類出土遺物（第65図）　…… 158
図版43　Ⅲ層出土遺物（一）（第66図）　…… 159
図版44　Ⅲ層出土遺物（二～三）（第67～68図）　…… 160
図版45　Ⅲ層出土遺物（四）（第69図）　…… 161
図版46　１・３トレンチ　…… 162
図版47　４・６～８トレンチ　…… 163
図版48　９・11トレンチ　…… 164
図版49　１トレンチ遺物出土状況・細石刃核出土状況　…… 165
図版50　３トレンチ遺物出土状況・３トレンチ石皿出土状況　…… 166
図版51　３トレンチ出土遺物（一～二）（第79～80図）　…… 167
図版52　才野ケ原遺跡表採遺物（第74～75図）１トレンチ出土遺物（第77図）　…… 168
図版53　３トレンチ出土遺物（第81図）　…… 169
図版54　近世の遺物（第82図）　…… 170


126.3
平木場
中継ポンプ室
89.2
1
2
3
内門
74.4
9.0
川上小学校
川上
3.0
内門水源池
内門第一ポンプ室
内門第二ポンプ室
水源池
73.8
木場
県道
郷戸・市来
川上グランド
川上生活改善センター
珍ノ山池
39.3
珍ノ山
5
中ノ平後
99.4
86.9
才野ケ原配水池
4
才野配水池
才野中継ポンプ室
観音ケ池配
6
112.6
才野
7
中ノ平前
138.6
1：10,000
0
100
500
1000m

第１図　周辺遺跡分布図



第２図　遺跡位置図

第１章　落シ平・瀧之段遺跡確認調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

市来町教育委員会では，文化財の保存・活用を図るため各開発機関との間で，事業区内の文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し，諸開発との調整を図っている。この事前協議により，川上地区の中山間地域農村活性化総合整備事業（圃場整備）を行なう伊集院耕地事務所は，実施計画内の埋蔵文化財の有無について市来町教育委員会に照会した。市来町教育委員会は，事業実施計画内に周知の遺跡「落シ平・瀧之段遺跡」が存在することが判明した為，その取り扱いについて伊集院耕地事務所と協議をした。その結果，市来町教育委員会は，２週間の予定で確認調査をすることになった。

第２節　調査の組織＜平成６年２月７日（月）～平成６年２月24日（木）＞

１．所在地　鹿児島県日置郡市来町川上瀧之段ほか

２．調査の目的　中山間地域農村活性化総合整備事業川上地区

３．調査組織

調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	松崎　孝
調査庶務	〃	社会教育課長	橋口正己
	〃	係長（派遣社会教育主事）	吉嶺　梓
	〃	主事補	奥之園　勝
調査担当者	市来町教育委員会	主事	新町　正

調査対象面積・・・・17000㎡

発掘面積　　・・・・99.75㎡

１Ｔ（５×1.5）２Ｔ（５×２）３Ｔ（5.5×1.5）４Ｔ（５×２）５Ｔ（1.5×５）
６Ｔ（５×２）７Ｔ（６×２）８Ｔ（５×1.5）９Ｔ（５×２）10Ｔ（５×１）
11Ｔ（６×２）

第３節　調査の経過

確認調査は平成６年２月７日（月）～平成６年２月24日（木）の間行われ，調査の経過については毎日の日誌抄をもってかえる。

【日誌抄】

２月７日（月）晴れ

発掘調査開始。第１トレンチ・第２トレンチ設定掘り下げ。第２トレンチは地表下50㎝のレベルで地山検出。午後より埋め戻し。新たに第３トレンチ設定掘り下げ。第１トレンチはアカホヤ火山灰（二次堆積）確認。第３トレンチ黄褐色土層（パミス含む）より，チャート片・黒耀石片出土。

２月８日（火）晴れ／曇り

１トレンチ・３トレンチ掘り下げ。新たに第４トレンチ設定掘り下げ。４トレンチは地山検出し，埋め戻し。

2月9日（水）雨

雨の為，作業中止。室内作業。

2月10日（木）晴れ

1トレンチは黄褐色土層（パミス含む）掘り下げ。3トレンチは黄褐色土層（パミス含む）より，礫群・黒耀石剥片出土。さらに掘り下げ。新たに第5トレンチ設定，掘り下げを行なったが，地山検出し埋め戻す。

2月11日（金）晴れ／曇り

建国記念の日で休み。

2月14日（月）晴れ／曇り

1トレンチは岩盤が検出されたので，掘り下げ終了。新たに第6トレンチ・第7トレンチ設定，掘り下げ。6トレンチは，すぐ地山を検出し終了，埋め戻す。1トレンチの土層断面実測作成。3トレンチの平板実測。

2月15日（火）曇り

7トレンチは地山検出し，埋め戻し。3トレンチは黄茶褐色粘質土層より，細石刃核・細石刃出土。新たに第8トレンチ設定，掘り下げ。午後より8トレンチは地山を検出したため，埋め戻す。3トレンチ平板実測。

2月16日（水）晴れ

新たに第9トレンチ設定，掘り下げ。すぐ，地山を検出した為埋め戻す。午後より第10トレンチ設定，掘り下げ。3トレンチは，黄茶褐色粘質土層掘り下げ。午後より平板実測図作成。

2月17日（木）晴れ

3トレンチは，茶褐色粘質土層掘り下げ。午後より平板実測図作成。10トレンチは，黄褐色土層（パミス含む）掘り下げ。黒耀石片出土。午後より平板実測図作成。

2月18日（金）晴れ

3トレンチは，淡茶褐色粘質土層掘り下げ（一部茶褐色粘質土層が残る）。午後より，平板実測図作成。10トレンチは，茶褐色粘質土層掘り下げ。黒耀石片出土。午後より平板実測図作成。

2月21日（月）晴れ

3トレンチは，淡茶褐色粘質土層掘り下げ。午後より平板実測図作成。10トレンチは，茶褐色粘質土層掘り下げ。黒耀石片出土。午後より平板実測図作成。

2月22日（火）晴れ

3トレンチは，淡茶褐色粘質土層掘り下げ。午後より平板実測図作成。10トレンチは，茶褐色粘質土層掘り下げ。黒耀石片出土。午後より平板実測図作成。新たに，第11トレンチを設定し，掘り下げる。

2月23日（水）晴れ

3トレンチは，淡茶褐色粘質土層掘り下げ。午後より平板実測図作成。10トレンチは，茶褐色粘質土層掘り下げ。午後より平板実測図作成。11トレンチはすぐに地山を検出し，埋め戻す。

2月24日（木）曇り

3トレンチは，淡茶褐色粘質土層掘り下げ。岩盤を検出。午後より埋め戻し。10トレンチも岩盤・もしくはシラスを検出し，午後より，埋め戻し。午前中，3・10トレンチの土層断面図作成。午後5時に発掘道具搬入し，作業終了。

第4節　整理・報告書作成作業の組織

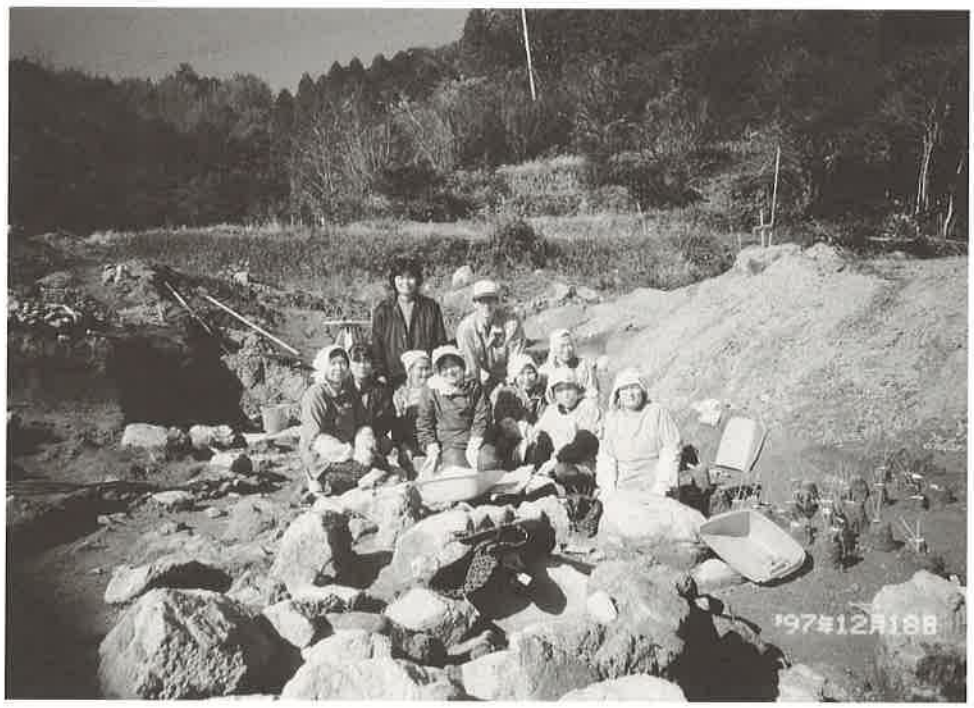
調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	市来町教育委員会	教育長	江口英雄
調査庶務	市来町教育委員会	社会教育課長	宇都隆雄
	市来町教育委員会	社会教育係長	吉田裕史
	市来町教育委員会	派遣社会教育主事	宮司和弘
	市来町教育委員会	主任	芹ケ野幸淑
	市来町教育委員会	主事	西久保敏彦
調査担当者	市来町教育委員会	主査	新町正

＜整理作業員＞

児玉千香子，坂口ひろ子，松﨑道子，池之上えみ子，榊裕美子

＜指導助言協力者＞敬称略

鹿児島県立埋蔵文化財センター，鹿児島大学教授上村俊雄，鹿児島大学助教授本田道輝，鹿児島大学非常勤講師雨宮瑞生，東京大学助手大塚達郎，千葉大学教授岡本東三，東海大学助教授織笠昭，大和市教育委員会村澤正弘，横浜市歴史博物館安藤広道，有限会社石橋組



現場での記念写真

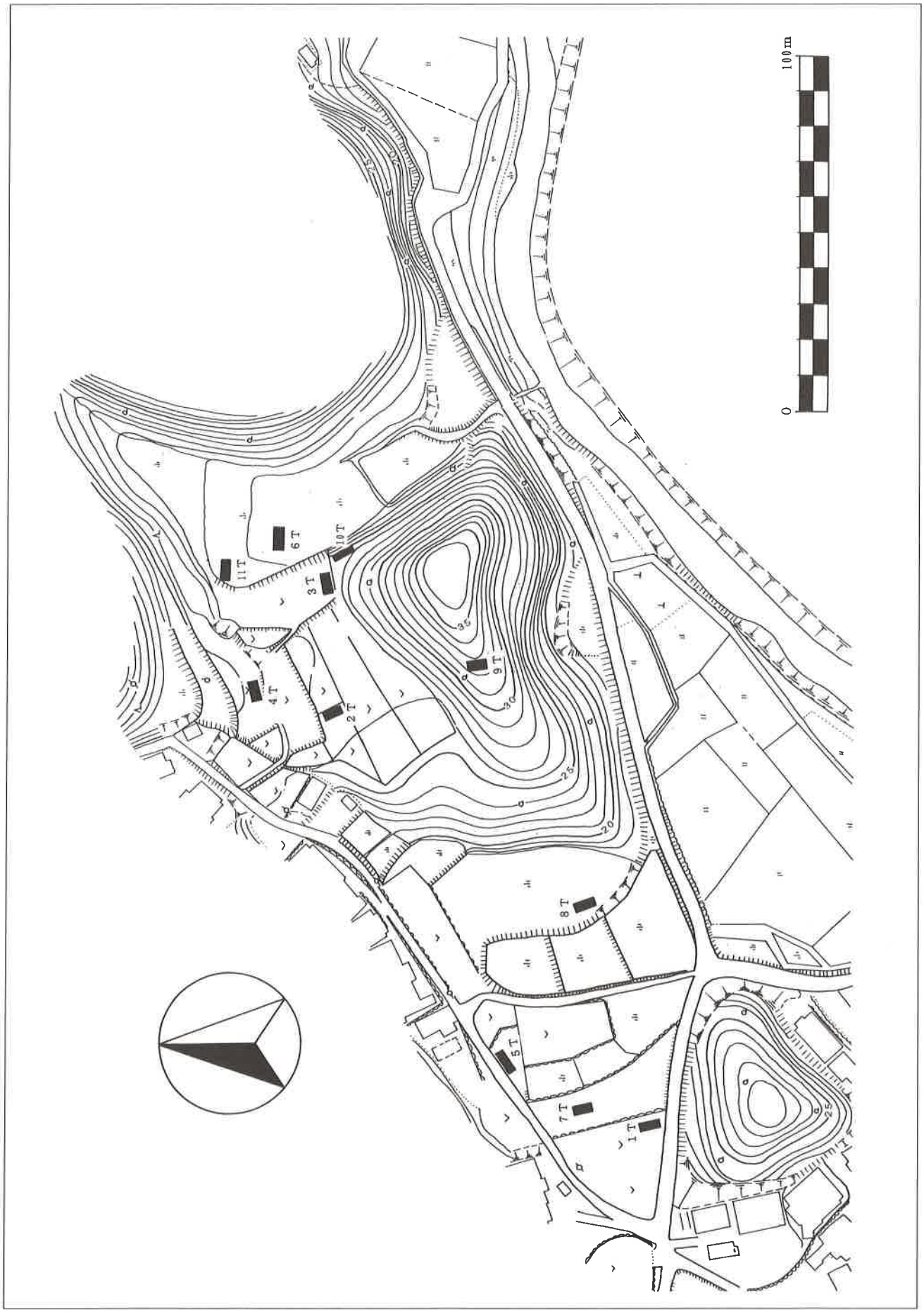
第２章　遺跡の位置及び環境

第１節　位置及び環境

市来町は日置郡の最北端に位置し，北は串木野市と接し，南から東には東市来町と接している。東側は山地が多く，西側には吹上浜があり毎年ウミガメが産卵にやってくる自然に溢れた町である市来町の総面積は3,156haで，北東から南西にかけて細長い。また町内には，矢岳の北東斜面にその源を発している八房川・重平山の北東斜面にその源を発している大里川・観音ケ池にその源を発している重信川等があり，八房川は支流まで含めた全長約22.8kmで，重信川は約2.9km，大里川は約24.5kmである。この川沿いには多くの遺跡が存在しており，現在62ケ所確認されている。そのほとんどは平成３年度に鹿児島県教育委員会が分布調査を行い発見されたもので，それ以前は13ケ所の遺跡の存在が確認されていただけである。また，丹後の局関連の史蹟も多く見受けられ，丹後の局休憩石・薩摩渡瀬・船着場・丹後の局の墓とされている方柱墓塔のある来迎寺墓塔群・鎌倉を離れて婚姻を結んだ惟宗廣言の墓のある鍋ケ城等がある。城廓にしても中世に遡り川上氏の居城と一般にされている川上城・重信川沿いに存在し弥生式土器も表面採集されている重信城・平成５年度に市来町教育委員会が確認調査を実施した上城・詰城・平成６年度に確認調査及び全面発掘調査を実施した鍋ケ城等が上げられる。62ケ所の遺跡の中には古くは旧石器時代の瀧之段遺跡・戸崎原遺跡から，縄文草創期と考えられる丸ノミ形石斧が表面採集された小原遺跡，縄文時代後期の南九州を代表する市来式土器の標識遺跡の市来貝塚等がある。無形民俗文化財で言えば国指定の七夕踊りがあり，毎月８月７日に近い日曜日に開催され，多くの観客で賑わっている。

表１　瀧之段遺跡周辺の遺跡

	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	才野	川上才野ほか	段丘	弥生・古墳	土器・土師器
2	小牟田	川上才野ケ原	台地		土器片
3	中島	川上中島ほか	田圃	縄文・古墳・中世	縄文土器・成川式土器・須恵器
4	落シ平	川上落シ平	丘陵	古墳・中世	土師器
5	瀧之段	川上瀧之段	丘陵	縄文・旧石器	剥片・細石刃核・細石刃
6	中ノ平	川上中ノ平ほか	丘陵	弥生・古墳・近世	土器・陶器
7	北山屋敷	川上中平後	台地	縄文？	土器片・打製石斧
8	前平木場	川上前平木場	段丘	古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器・磁器



第3図　トレンチ配置図

第３章　落シ平・瀧之段遺跡確認調査

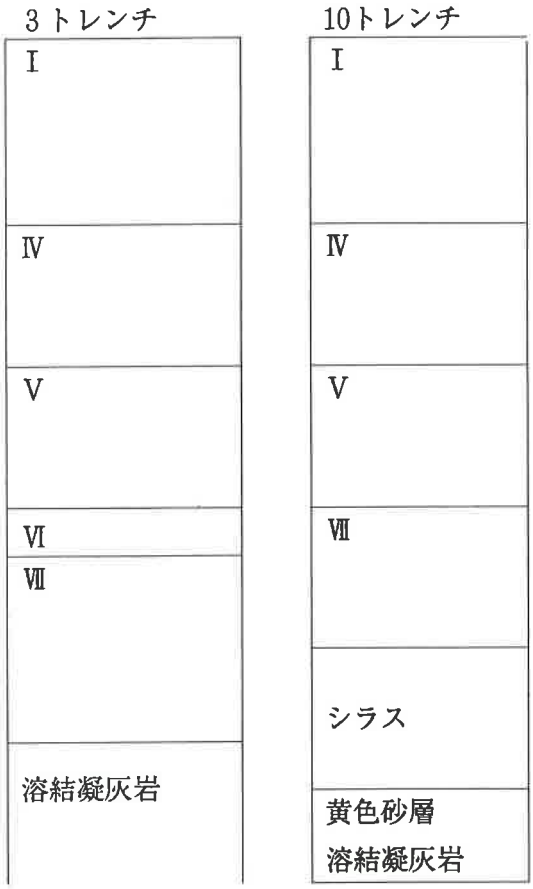
第１節　調査の概要

落シ平・瀧之段遺跡の圃場整備開発部分に，任意にトレンチを設定し調査を行なった。トレンチは５m×２mを基本とし，１から11トレンチを設定した。

１T（５×1.5）２T（５×２）３T（5.5×1.5）４T（５×２）５T（1.5×５）
６T（５×２）７T（６×２）８T（５×1.5）９T（５×２）10T（５×１）
11T（６×２）

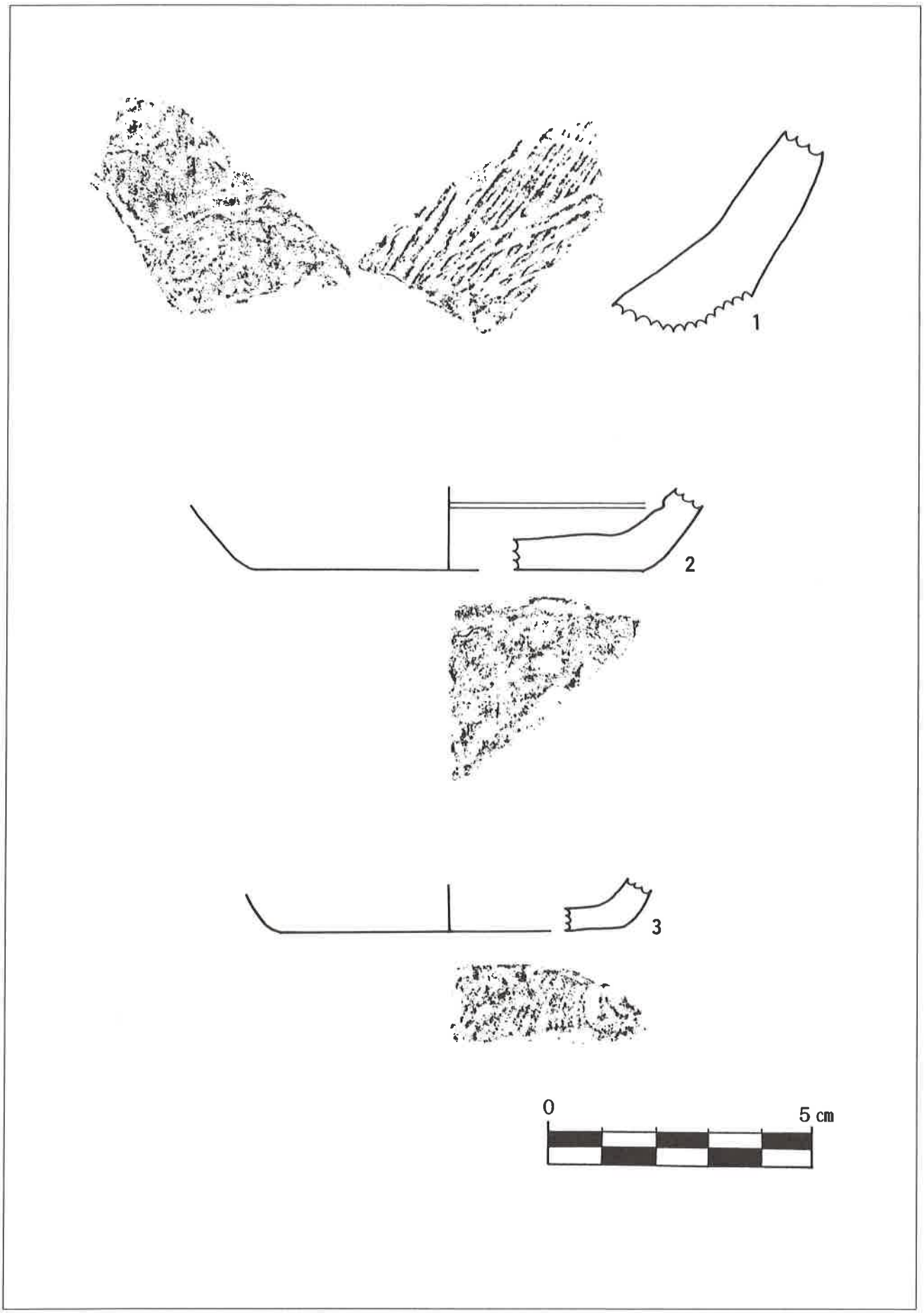
第２節　標準土層

両遺跡は阿多溶結凝灰岩の岩盤上に位置しており，基本的な層位は図の通りである。Ⅰ層は耕作土である。Ⅱ層は黒褐色粘質土層で，縄文晩期と中世の遺物が出土している。Ⅲ層は鬼界カルデラ噴出源のB.P. 6,300年前のアカホヤ火山灰である。ａ明黄褐色土層（二次堆積）とｂ黄橙色パミスに細分される。Ⅳ層は黄褐色土層で，縄文早期の遺物が出土している。Ⅴ層は黒褐色土層で，非常に固く上層で早期の遺物が出土する。Ⅵ層は黄色パミスで，桜島起原の薩摩火山灰層と呼ばれるものでB.P. 11,000年前の噴出火山灰である。本遺跡では部分的に見られる。Ⅶ層は，茶褐色粘質土層で旧石器時代から縄文時代草創期の遺物を出土する。

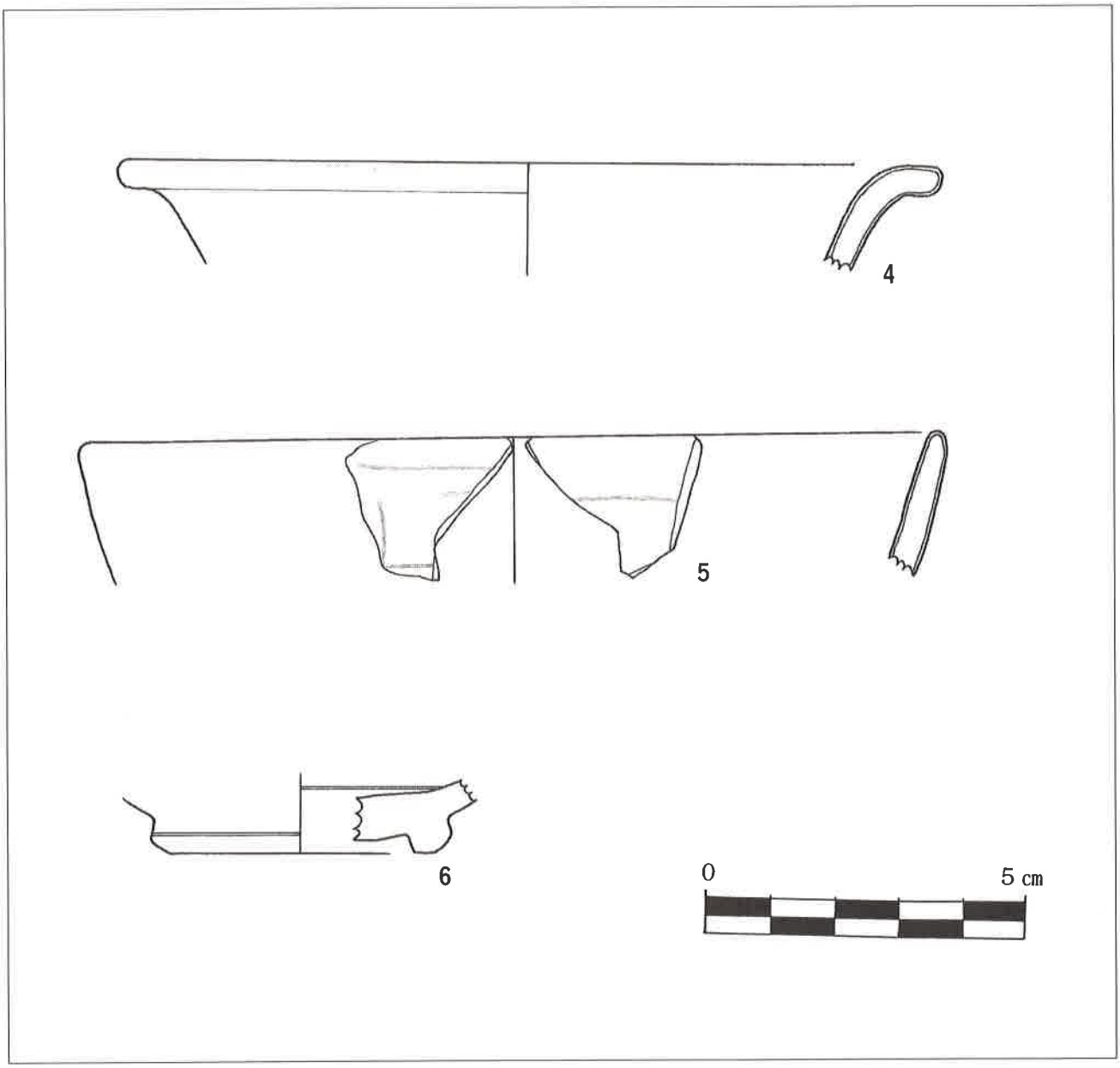


Ⅰ　耕作土
Ⅱ　黒褐色粘質土層
Ⅲ　ａ明黄褐色土層
Ⅳ　ｂ黄橙色パミス
Ⅳ　黄褐色土層
Ⅴ　黒褐色土層
Ⅵ　黄色パミス
Ⅶ　茶褐色粘質土層

瀧之段遺跡土層



第4図　落シ平遺跡表採遺物



第5図　瀧之段遺跡表採遺物

第3節　落シ平遺跡の概要

落シ平遺跡には任意に3ケ所（1・5・7トレンチ）のトレンチを設定し，掘り下げた。以下，トレンチ毎に説明を行なう。

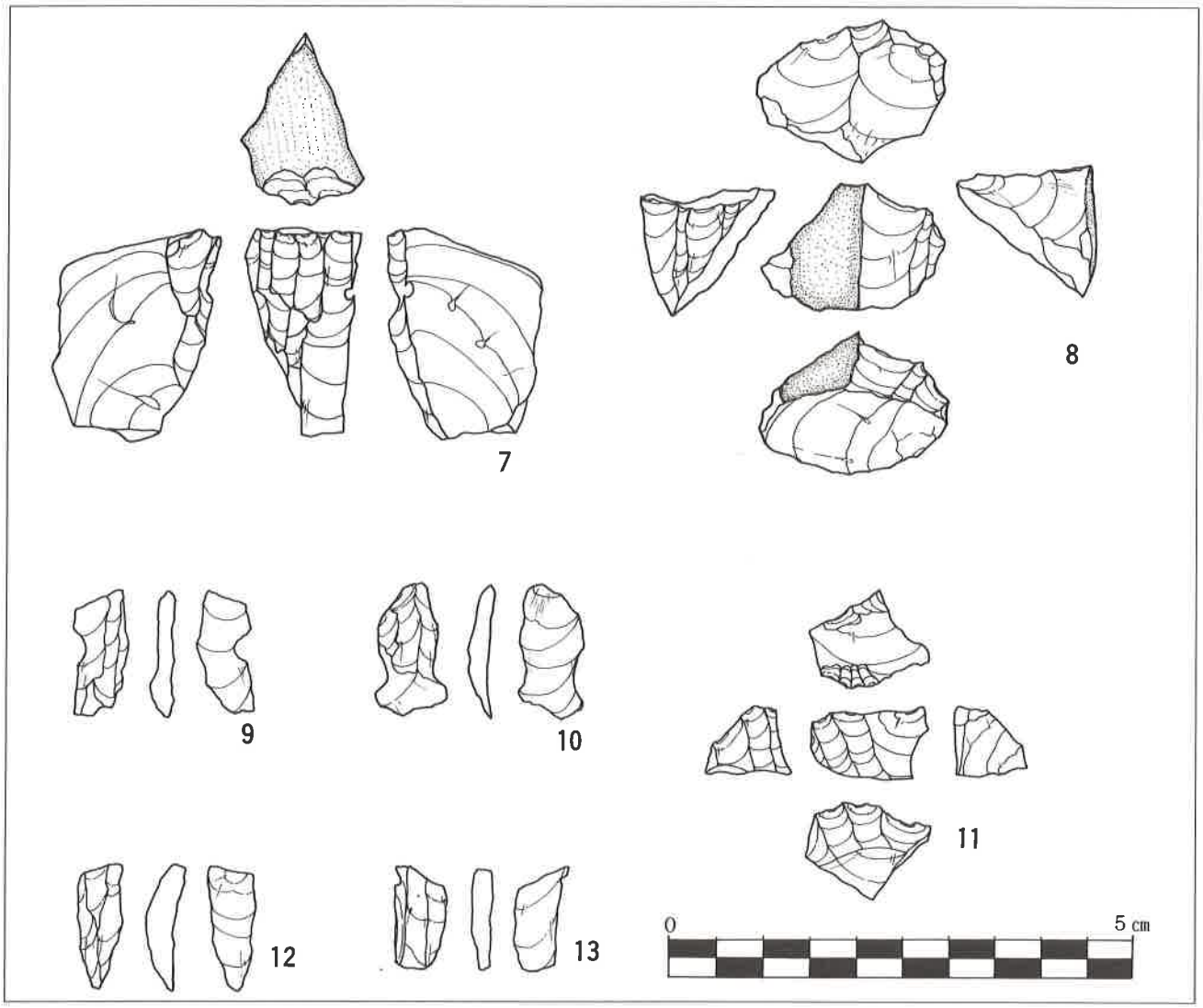
1トレンチ　　Ⅰ層耕作土，Ⅱ層は削平を受け消滅していた。表層より，土師器片（糸切り底・黒耀石剥片が採集された。Ⅲ層から土層は残っている。遺物は出土しなかった。

5トレンチ　　Ⅰ層耕作土。地表下，約50cmで地山検出。

7トレンチ　　Ⅰ層耕作土。地表下，約80cmでシラス検出。

第4節　落シ平遺跡のまとめ

表面採集で土師器片，黒耀石等を確認したが，後世の開墾等により遺物包含層は削平を受け，消滅していた。第4図の1は摺鉢の破片である。2・3は土師器片で，両方とも糸切底の坏である。



第6図　細石刃核・細石刃

第5節　瀧之段遺跡の概要

瀧之段遺跡には任意に7ケ所のトレンチを設定し，掘り下げを行なった。

2トレンチ　　Ⅰ層耕作土。地表下，約30cmで地山検出。

3トレンチ　　Ⅰ層耕作土，Ⅱ・Ⅲ層は削平を受け消滅していた。Ⅳ層下部より黒耀石剥片出土。礫群検出。Ⅶa層上部から細石刃核（マイクロコア）・細石刃（マイクロブレード）黒耀石剥片出土。Ⅶb層より細石刃（マイクロブレード）・黒耀石剥片が出土。Ⅶc層より黒耀石剥片出土。Ⅶ層は旧石器時代に該当するわけだが，ここより3種類の黒耀石が検出された。

4トレンチ　　Ⅰ層耕作土。地表下，約30cmで地山検出。

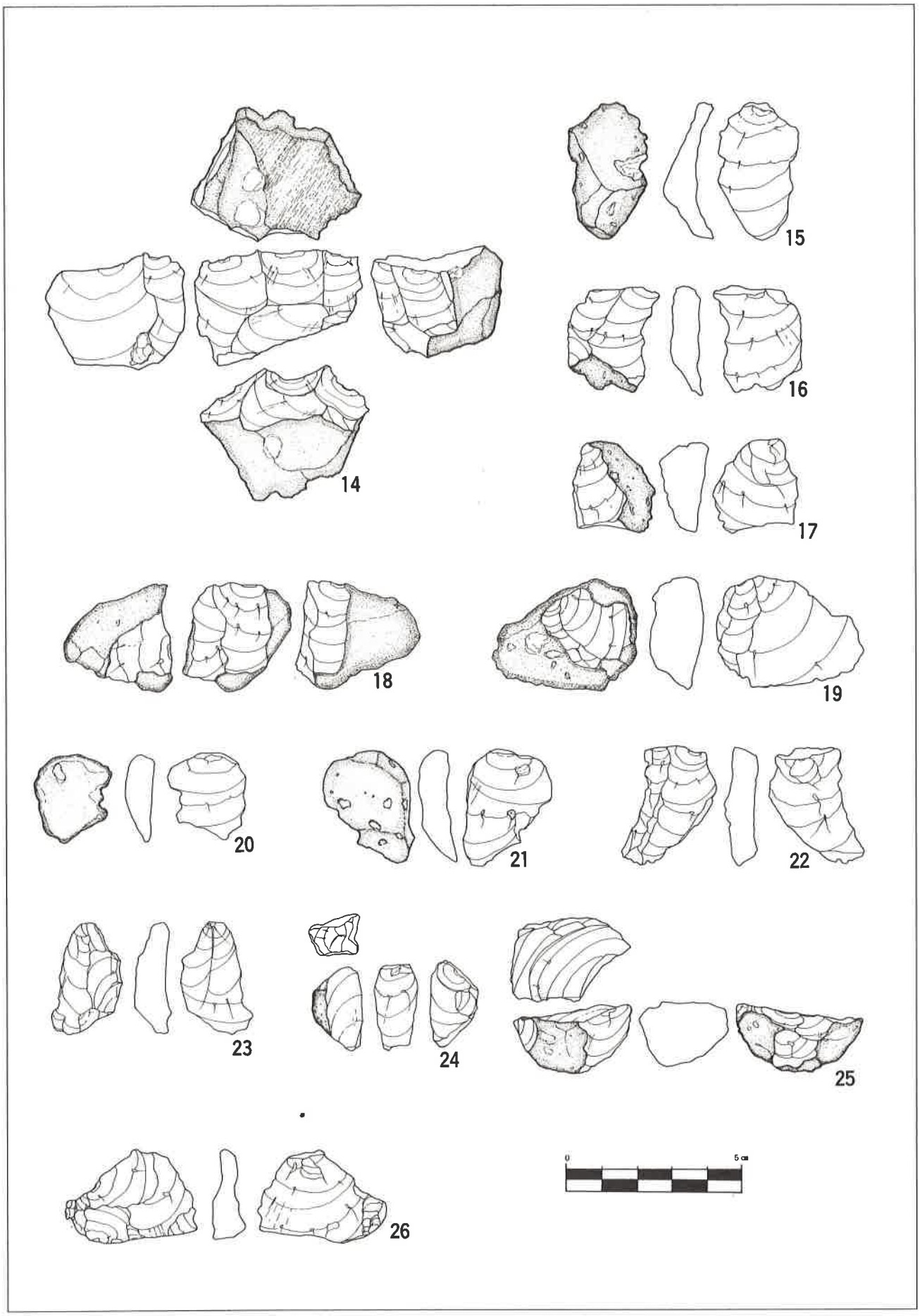
6トレンチ　　Ⅰ層耕作土。地表下，約30cmで地山検出。

8トレンチ　　Ⅰ層耕作土。地表下，約50cmで地山検出。

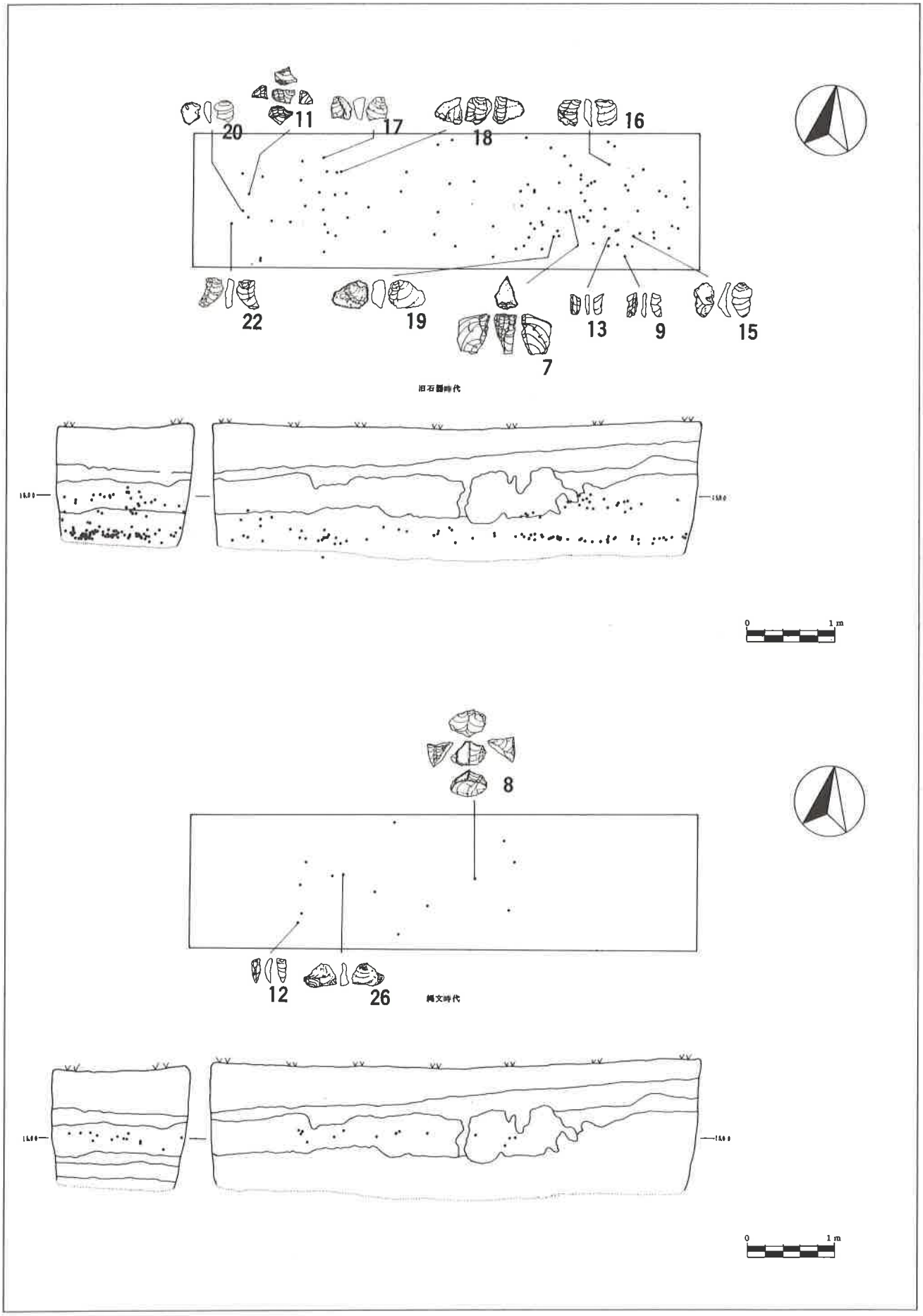
9トレンチ　　Ⅰ層耕作土。地表下，約30cmで地山検出。

10トレンチ　　Ⅰ層耕作土。Ⅱ・Ⅲ層は削平を受け消滅していた。Ⅳ層より，黒耀石剥片出土Ⅴ層からも黒耀石剥片出土。Ⅶ層よりシラス上部にかけて黒耀石剥片出土。

11トレンチ　　Ⅰ層耕作土。地表下，約50cmで地山検出。



第7図　3·トレンチ出土遺物



第8図　3トレンチ遺物土層分布図

第６節　瀧之段遺跡表採遺物の説明（第５図）

４は青磁口縁部破片で，口縁部は外反している。14世紀から15世紀にかけてのものであろう。５も青磁口縁部破片で，口縁部に雷文を施す。14世紀から15世紀のものであろう。６は白磁底部破片である。これも14世紀から15世紀のものであろう。

第７節　瀧之段遺跡出土遺物の概要

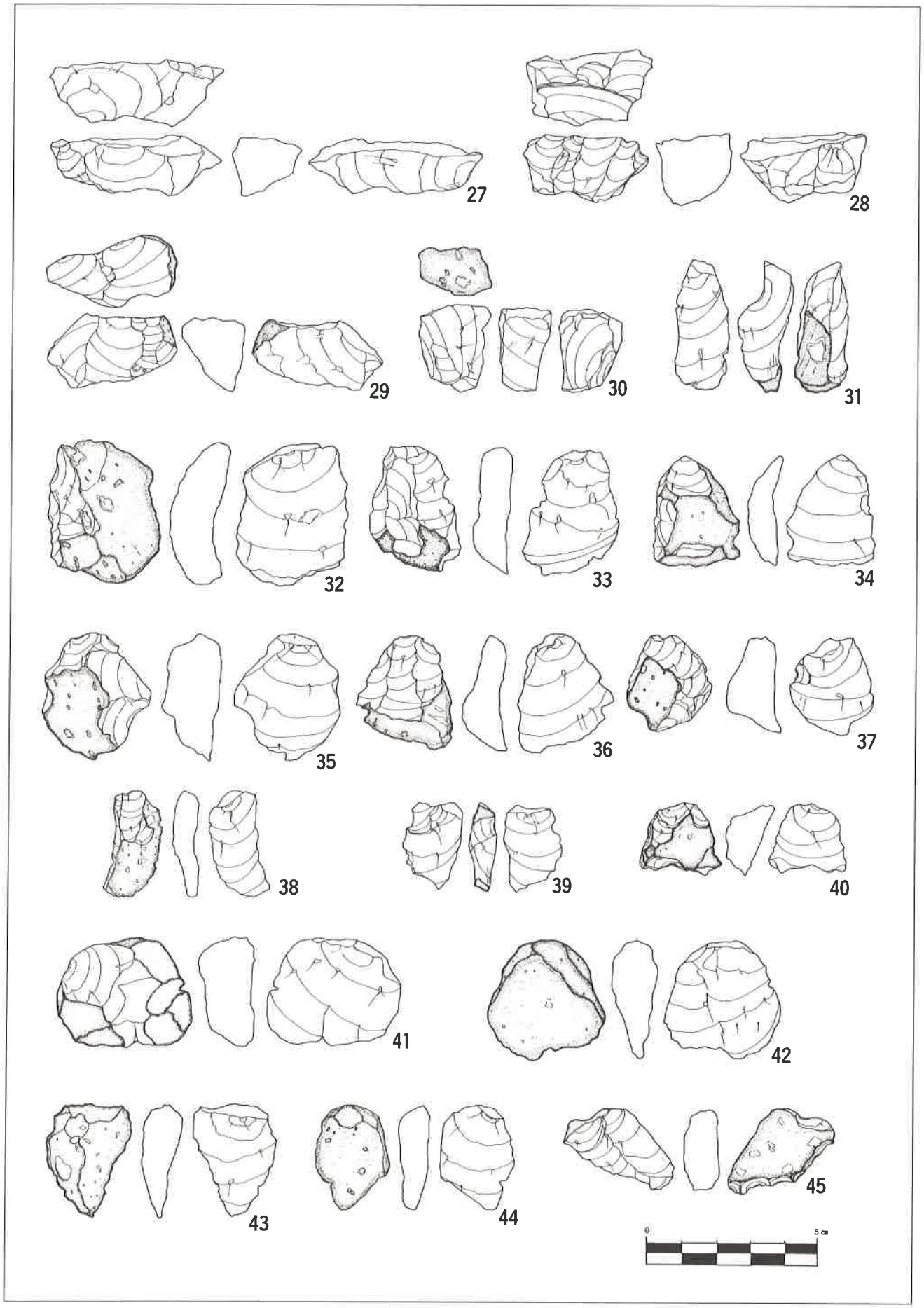
瀧之段遺跡からは３トレンチと10トレンチから遺物が出土している。以下，トレンチ毎に説明をする。

１．３トレンチ出土遺物（第６・７図）

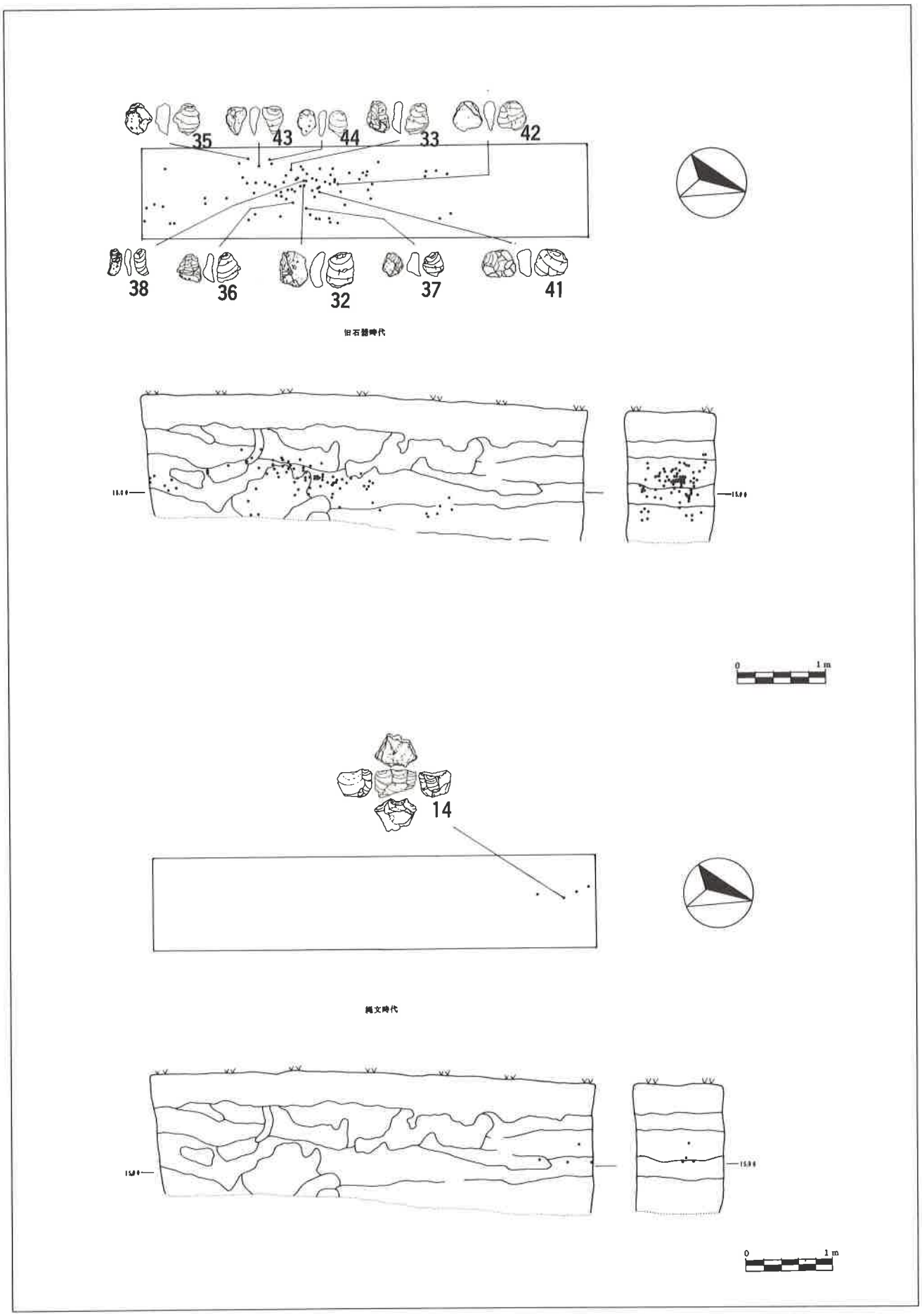
７は樋脇町上牛鼻産若しくは市来町平木場産黒耀石製の細石刃核である。打面には原石の表面部分を残し，作業面は１ケ所である。細石刃を取り出した面は６ケ所確認できる。８はグレー色をしたガラス質流紋岩製の細石刃核である。打面再生のため破棄されたものであろう。細石刃を取り出した面は４ケ所確認できる。11は樋脇町上牛鼻産若しくは市来町平木場産黒耀石製の細石刃核である。細石刃を取り出した面は４ケ所確認できる。その内１ケ所については作業面調整のための剥離痕の可能性がある。９から13は細石刃で，９・12・13は樋脇町上牛鼻産若しくは市来町平木場産黒耀石製で，10は鹿児島市の竜ケ水産の黒耀石である。14は石核である。黒耀石の転石をそのまま利用し，自然石の平坦面を打面として剥片を３ケ所取っている。15は黒耀石の自然石の石核調整の際に生じた破片で，自然面を残している。16・17・19も剥片である。両方とも黒耀石自然面を残す。18は黒耀石製の石核である。20・21は黒耀石の石核調整の際に生じた剥片である。黒耀石自然面を残す。22・23は剥片である。24はブランクと思われる。25は黒耀石製の石核である。26は剥片である。

２．10トレンチ出土遺物（第９図）

27～29は黒耀石製の石核である。すべて側面からの剥離痕が見受けられる。33～45はすべて剥片であり，黒耀石原石の自然面を残す。45はスクレイパーとして２次調整が成されている。



第9図　10トレンチ出土遺物



第10図　10トレンチ遺物土層分布図

第４章　瀧之段遺跡全面発掘調査

第１節　調査の経緯

平成５年度に中山間整備事業を推進していた市来町経済課は，市来町教育委員会に工事計画内の埋蔵文化財の有無を照会した。市来町教育委員会は工事計画内に「瀧之段遺跡」（当時は滝の下と呼称）があることを伝え，同年度中に確認調査を実施することとなった。確認調査の結果，旧石器時代終末期（後に縄文時代草創期と判明）を中心に遺物が包蔵されていることが判明した。その後何度かの協議を経て，平成９年度に緊急発掘調査を実施することになった。

対象面積・・・・約620㎡（実質：310㎡×２文化層）

第２節　調査の組織

調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	市来町教育委員会	教育長	松崎　孝
調査庶務	市来町教育委員会	社会教育課長	宇都隆雄
	市来町教育委員会	社会教育係長	吉田裕史
	市来町教育委員会	派遣社会教育主事	宮司和弘
	市来町教育委員会	主事	西久保敏彦
	市来町教育委員会	主事	芹ケ野幸淑
調査担当	市来町教育委員会	主査	新町　正

１．調査期間　　平成９年８月４日から平成９年12月22日

第３節　調査の概要

調査において南側から１・２・・・・，西側からA・B・C・・・の番号記号を任意に設定し，調査の基準とした。また，表土については重機などによる表土剥ぎを行い，迅速化に務めた。以下，経過は日誌抄により省略する。

【日誌抄】

◇８月４日～８月６日

重機による表土剥ぎ。

◇８月11日～８月12日

アカホヤ直土より縄文前期の曽畑式土器および集石遺構検出。集石より山形押形文土器検出。その他，黒川式土器，土師器，青磁出土。

◇８月18日～８月22日

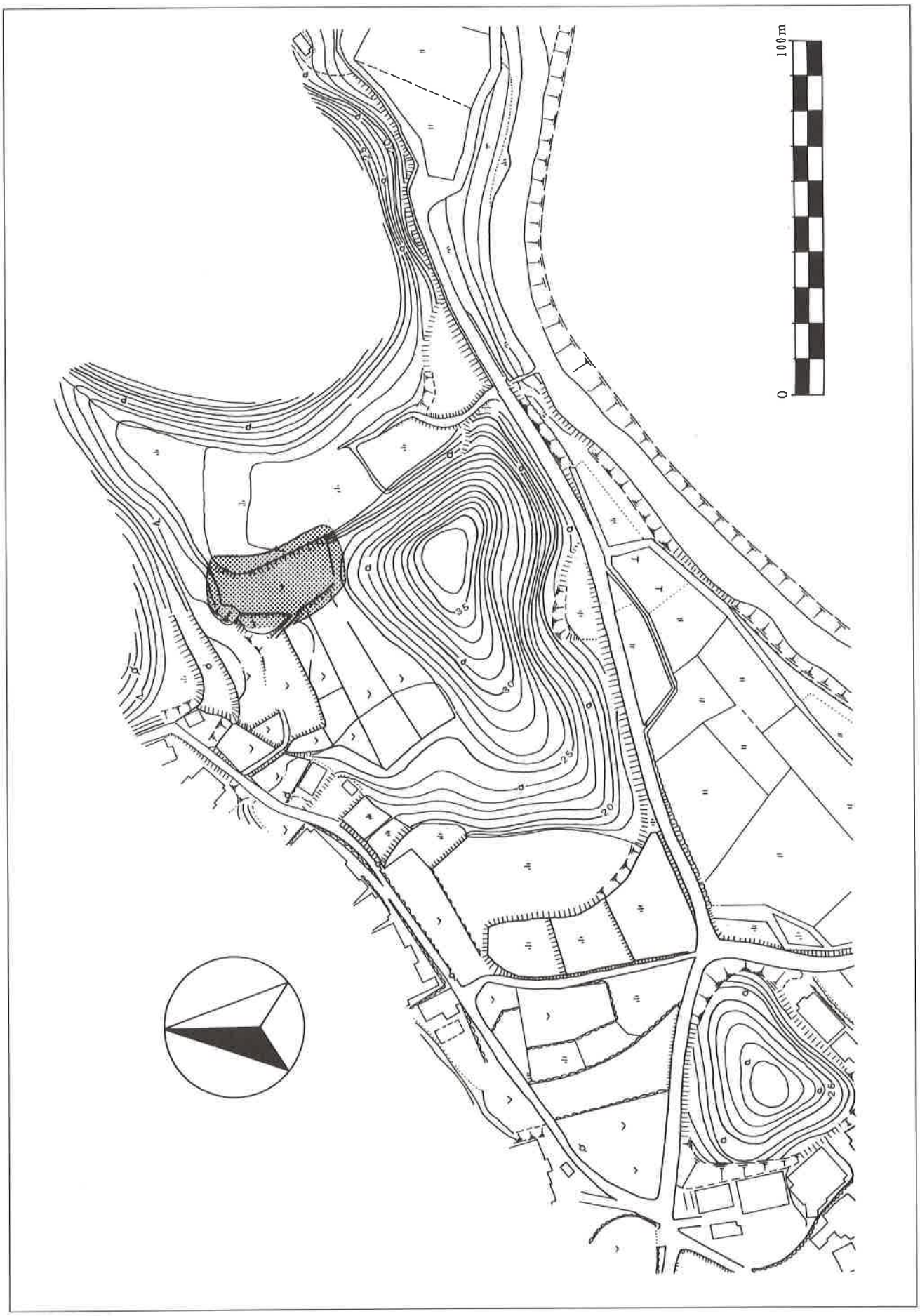
集石遺構精査。石皿，磨石出土。集石遺構実測Ｓ＝１／10。塞ノ神式土器出土。

◇８月25日～８月29日

集石遺構実測Ｓ＝１／10。桑ノ丸式土器，山形押形文土器，塞ノ神式土器，撚糸文土器が出土。蛇紋岩製の垂飾品検出。Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。SS－２号集石遺構より完形の山形押形文土器出土。集石遺構は全部で３基検出。

◇９月１日～９月５日Ｓ＝１／10。平板取り上げ。

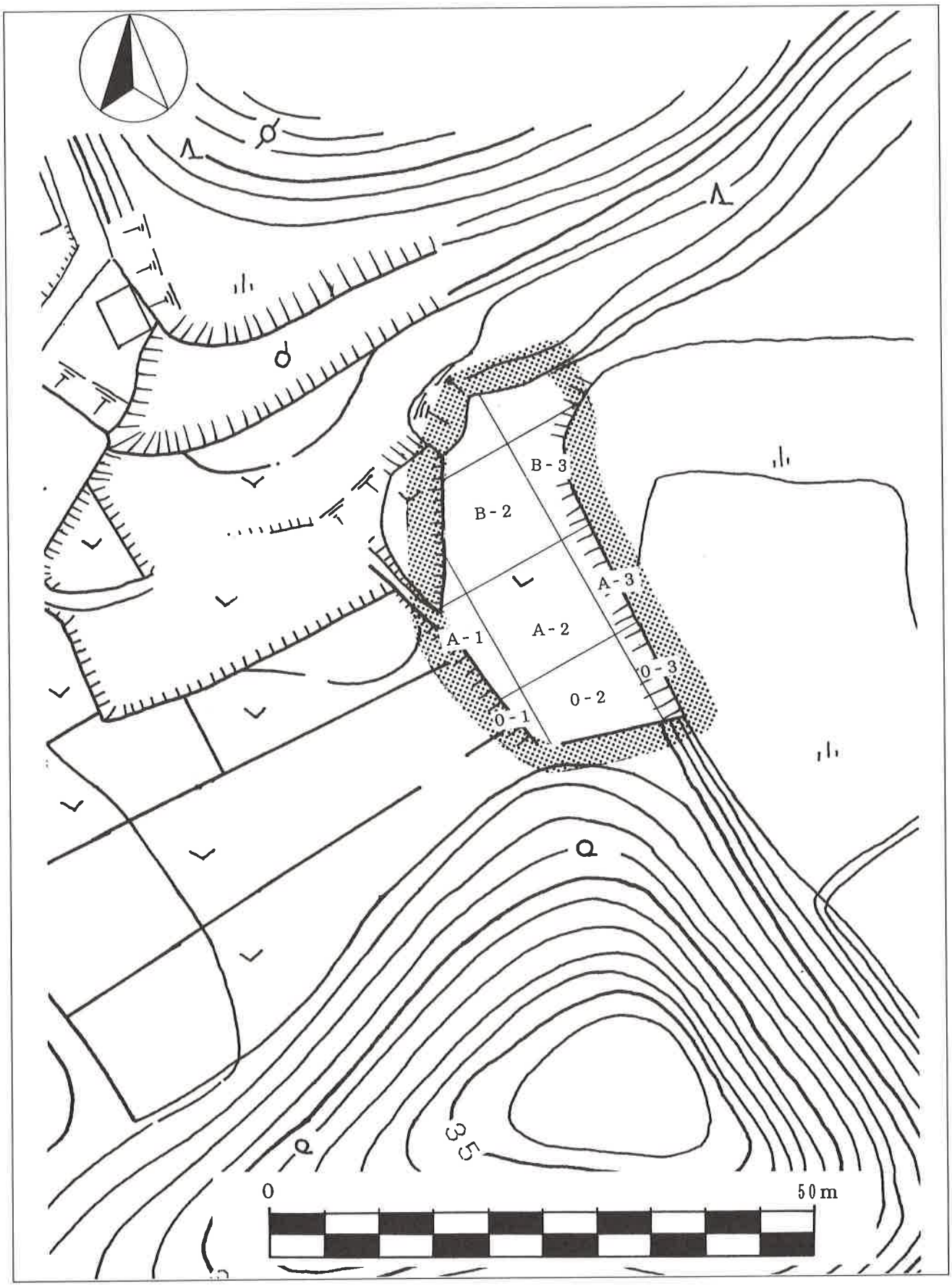
SS－２号実測



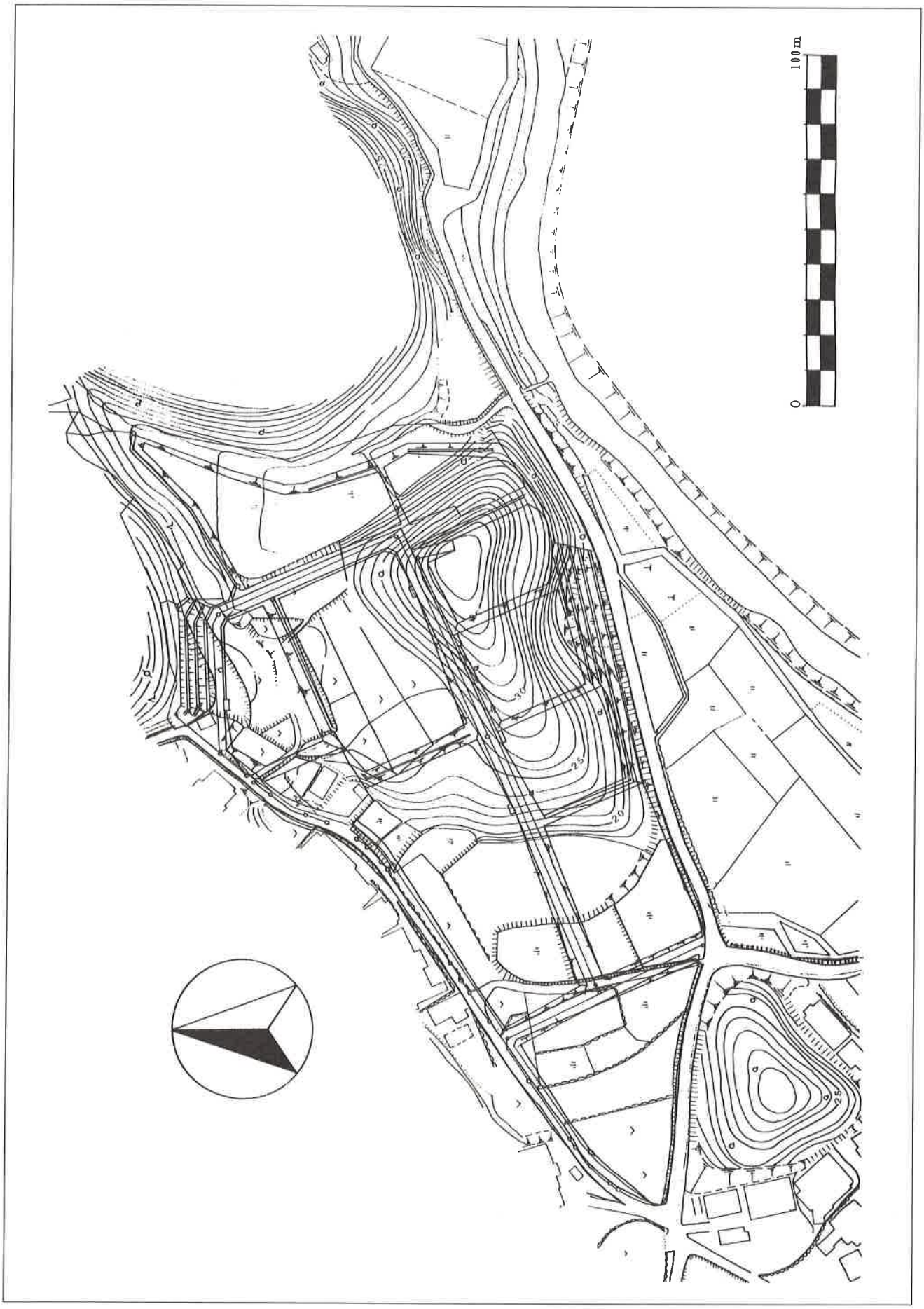
第11図　瀧之段遺跡遺物残存範囲

◇９月８日～９月12日
SS－３号実測終了。散石の平板測量Ｓ＝１／50。早期の石鏃が15本出土。
埋蔵文化財センターの新東晃一氏に指導を受ける。
◇９月16日～９月19日
SS－４号検出，実測開始。Ⅳ～Ⅴの出土遺物平板取り上げ。No196～No400。Ⅳ～Ⅴの出土遺物平板取り上げ。No401～No600。
◇９月22日～９月26日
Ⅲ～Ⅴ層の出土遺物平板取り上げ。No601～No701。SS－４号実測終了。
９／24日よりⅦ層（チョコ層）の調査に入る。チャート，蛋白石黒耀石検出。Ⅶ層より土器片と石鏃を検出し，縄文時代草創期の可能性が高まる。
◇９月29日～10月３日
Ⅴ～Ⅶ層遺物取り上げ，No702～No986。セクションベルト精査。牛ノ浜修氏来跡。Ⅶ層遺物取り上げ，No979～No1285。石鏃出土総数11点。
◇10月６日～10月９日
Ⅶ層よりハンマーストーン，石鏃２出土。川上小学校（文化財少年団）見学。
◇10月13日～10月17日
Ⅶ層掘り下げし，石鏃出土総数25点。雨宮瑞生氏来跡，現場指導。Ⅶ層遺物取り上げ，No1286～No1614。
◇10月20日～10月25日
Ⅶ層掘り下げ。鹿児島大学の上村教授と本田助手来跡，現場指導。
◇10月27日～10月30日
Ⅵ層掘り下げ。29日に新聞発表。MBC,KTS,NHK,共同，西日本，南日本，読売，朝日，毎日，鹿児島新報取材。午後より現地説明会を開く。
土層断面図作成Ｓ＝１／20。Ⅶ層遺物取り上げ，No1615～No2016。船形配石炉らしきもの確認。石鏃出土総数31本。
◇10月31日～11月４日
現場休み。
◇11月５日～11月７日
Ｂ地区の船形配石炉の検出。その周りより，隆帯文土器らしき遺物出土。Ⅶ層掘り下げ。
◇11月10日～11月14日
Ⅶ層掘り下げ。
◇11月17日～11月21日
Ⅶ層掘り下げ。Ⅶ層遺物取り上げ，No2017～No2203。Ⅶ層遺物取り上げ，No2204～No2333。
◇11月25日～11月28日
Ⅶ層掘り下げ。
◇12月１日～12月５日
船形配石炉をＳ＝１／10で実測。Ⅶ層掘り下げ。
◇12月８日～12月12日
Ⅶ層の地形測量図作成Ｓ＝１／10。Ⅶ層遺物取り上げ，No2334～No2600。
◇12月15日～12月19日

Ⅶ層遺物取り上げ，No2601～No2800。縄文時代早期の溝状遺構実測Ｓ＝１／20。
◇12月22日　事務所整理，後片付け。



第12図　グリット配置図



第13図　圃場整備計画図

第５章　縄文時代草創期

第１節　表採遺物（第14図）

遺物の殆どは，調査区内から採集された。46はガラス質流紋岩製の細石刃核と思われる。正面と側面にかけて細石刃剥離痕が見受けられる。47～51はすべて石鏃である。47は樋脇町上牛鼻・市来町平木場産の黒耀石を使用している。48の石材はガラス質流紋岩である。49はアメ色の黒耀石で熊本県桑ノ木津留産と考えられる。50は竜ケ水産の黒耀石である。51は鼠色をした黒耀石で，長崎系統の黒耀石か?

第２節　出土遺物

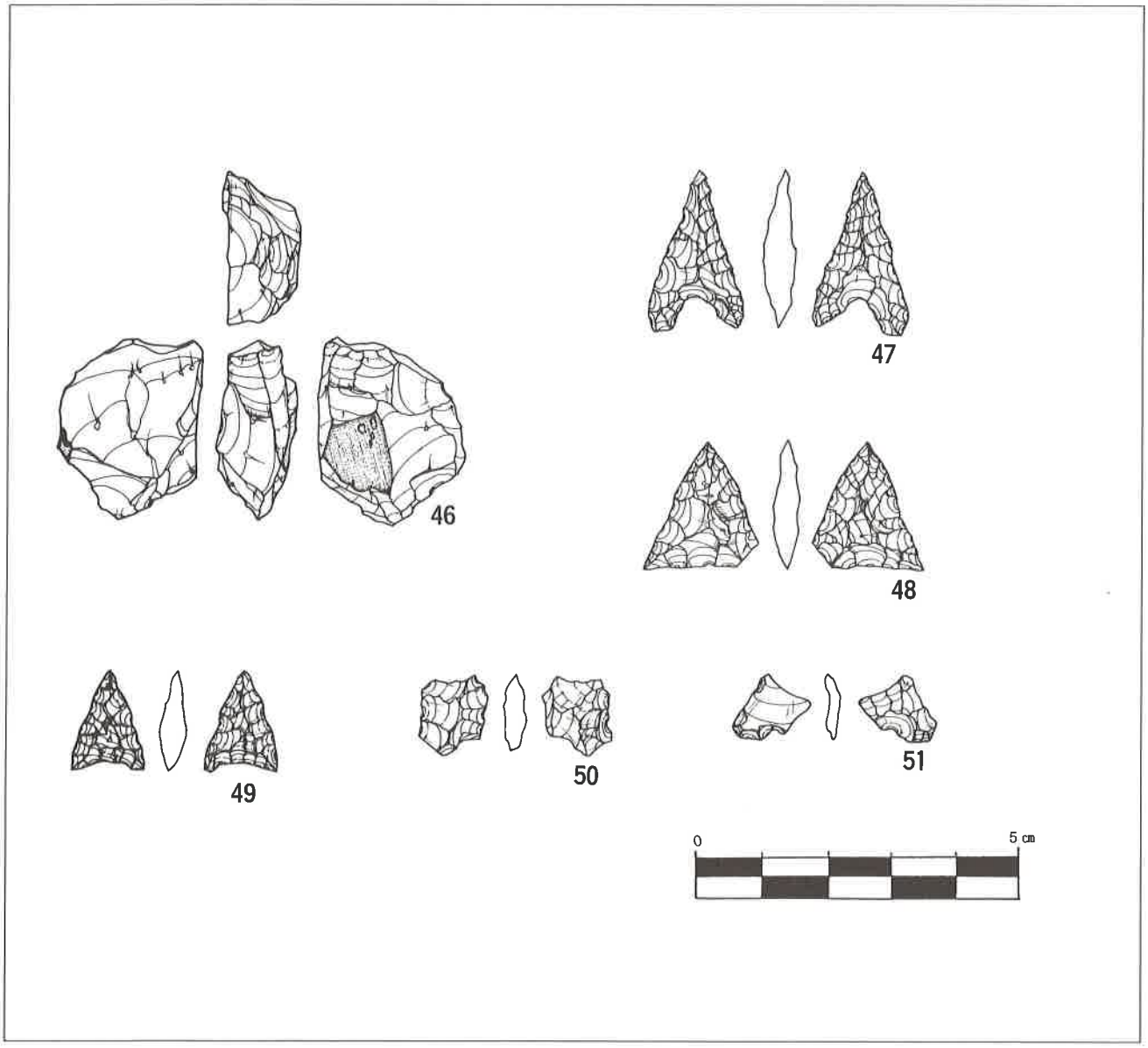
縄文時代草創期の遺物は，Ⅶ層（暗茶褐色粘質土層）を包含層とし，Ａ－２区とＢ－２区に集中して出土した。出土数は約2500点で，特に石鏃が41本出土したのを初め，土器，細石刃，多量のチップ，剥片等が検出された。また，黒くガラス質が強く良質な黒耀石（これを黒耀石Ａとする），ガラス質が強く透明で黒い筋の入った良質の黒耀石（黒耀石Ｂ），ガラス質流紋岩（広い意味では黒耀石だが，ガラス質が弱く一見して頁岩と見える石），ガラス質が強くアメ色をした黒耀石（黒耀石Ｃ），ガラス質がやや弱くグレー色をした黒耀石（黒耀石Ｄ），チャート，蛋白石，鉄石英，メノウ，頁岩など様々な石材を用いている。

１．土器（第16・17図）

52～57はすべてＡ地区からの出土で，第22図の通り細石刃や石鏃・細石刃核ブランクと共伴してⅦ層中より出土した。52～54は口縁部に刺突文が見受けられる。爪にも見えるが，植物繊維状の刺突とも考えられる。53～54は口唇部は平坦に作られ，内傾しているのが特徴である。また口縁部は胴部に向かうにしたがって次第に厚さが増している。土器表面は，撫でによる調整が成されている。55～57は無文である。55は口縁部破片であろう。口縁部の形態は53～54に似ており，同種の可能性もある。56は胴部破片であろう。57は擬似口縁である。輪積み法で土器を製作するにあたって下方の粘土紐を上下に摘まみ上げている。58～63はＢ地区出土の土器である。すべてⅦ層中より出土した。細石刃・細石刃核などは共伴しない。58は口縁部破片である。破片からして，外傾するようだ。59～63は胴部破片である。59は外面に条痕がみられる。60は内外共に条痕により整形されている。61は隆起が見られ，隆帯文の一種か？62は内面に条痕が観察できる。63は隆帯文が添付されている。この隆帯文土器は，舟形配石炉と思われる遺構の横で検出されている。

２．石鏃（第18～20図）

64～70・72～104はすべてＡ地区からの出土で，唯一71だけがＢ地区からの出土である。石材は様々で，黒耀石Ａの石鏃が80・85・93・95・99,76・83・86・104がチャート，70がメノウ，100が鉄石英，65が頁岩，71が蛋白石，その他がガラス質流紋岩である。製作途中のものも多く，石鏃が出土したブロックから，１㎝以下の剥片や５㎜以下のチップ，ハンマーストーンの出土からもそれが伺える。完形品は少ない。64～70は未製品である。64は素材剥片の主要剥離面の打点部分を基部にし，先端部を作り出している。しかしまだしっかりとは先端を尖す事にはこだわっていない。あわせて基部と側辺部に軽い調整剥離を施している。65は先端部を少々欠損しているため先端部の作りは分からないが，恐らく64と同様に少々の先端部作りだしで第一段階は終わっているものと思わ



第14図　瀧之段遺跡表採遺物

れる。その他，基部と側辺部の調整がされている。66は更に調整が進んだ段階の石鏃未製品である。先端部の尖り具合には余りこだわらず，周辺の調整で終わっている。68は素材となる剥片の中央部分が凹んで薄くなっており，特に薄い部分は基部の抉りとして設定し周辺の盛り上がり部分の調整をしている。石鏃の素材としてはあまり良いとは言えない。基本的には石核から剥離された剥片の打点部分を基部としているが，それに余りとらわれず素材としてある程度それ以外のものの使用も認められる。このように石鏃の製作にあたって瀧之段遺跡では次の事が考えられる。

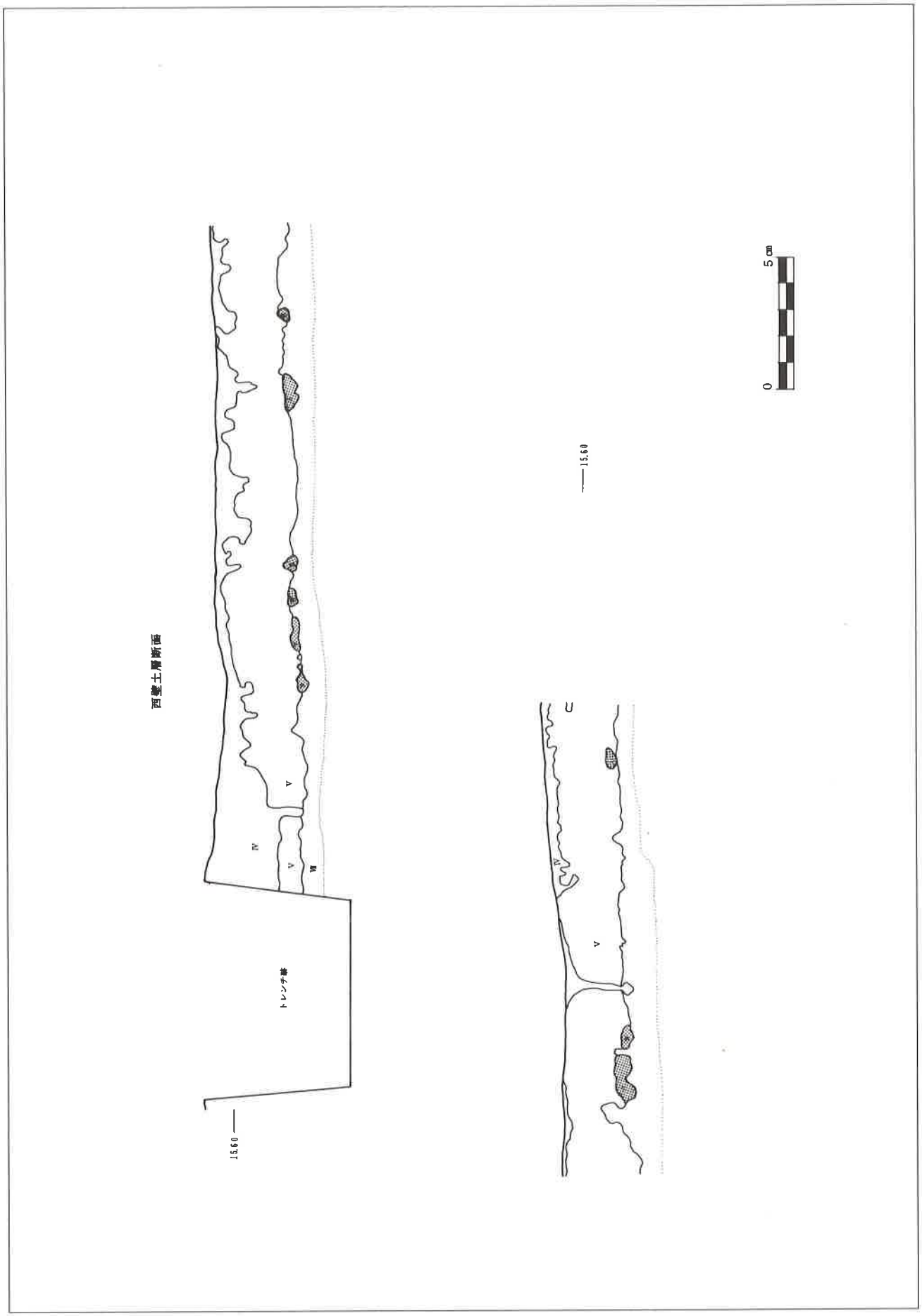
①素材剥片の打点部分を基部もしくは脚部付近に設定する。

②まず先端部の作り出しを行い，側辺の調整を行なう。その際，先端部の尖り具合には余りこだわらない。剥片の形状上必要であれば基部の調整を合わせて行なう。

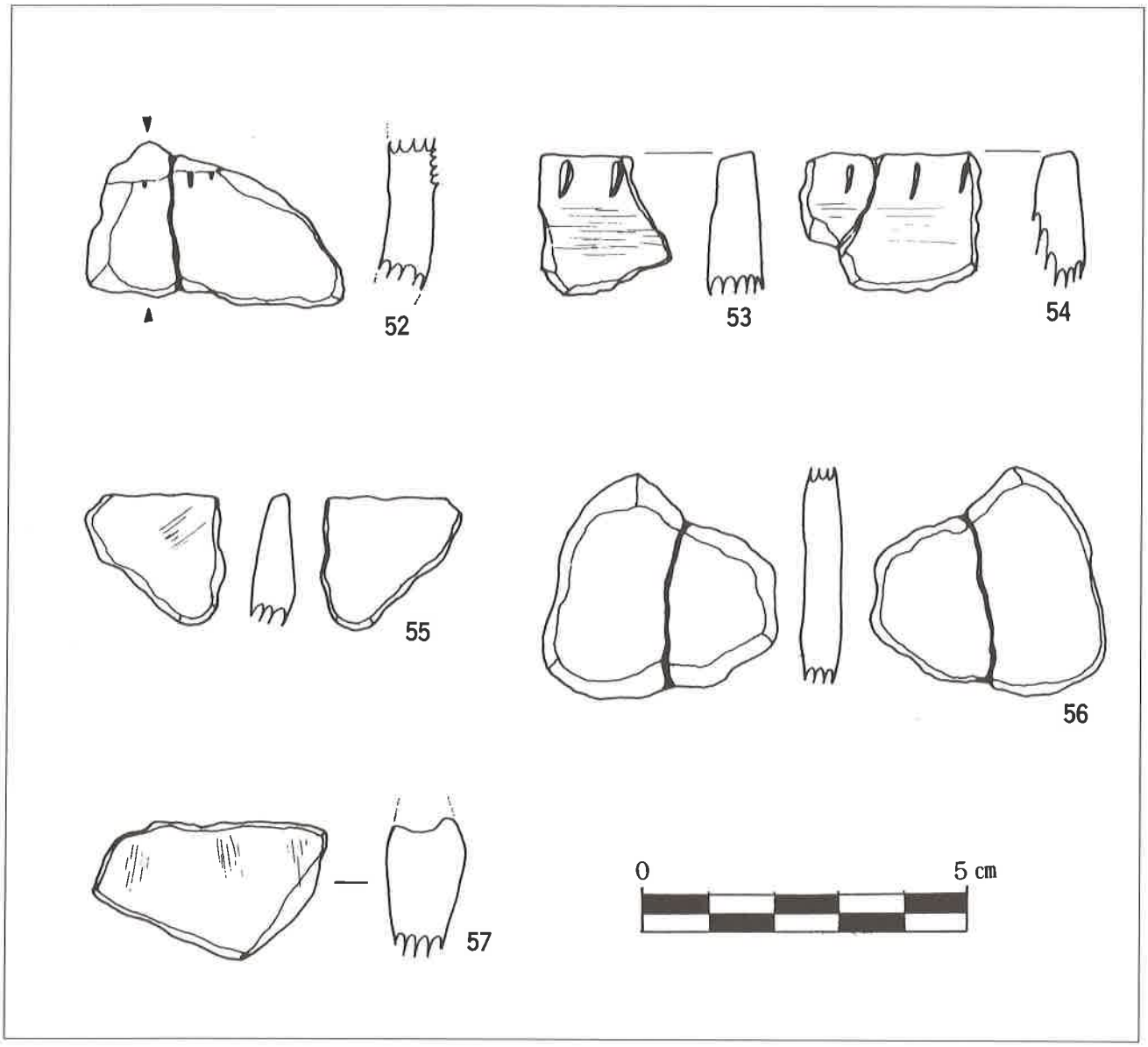
③更に調整が進み素材の中央に至るような長い調整剥離が行われる。

④採集段階として先端・脚部の尖りを付ける。

基本的には以上のようであるが，石鏃の形態も抉りで言えば抉りが深いもの，浅いもの，また平基のものなどある。また，77・79・81などは左右不対象であるように見える。



第15図　西側土層断面図



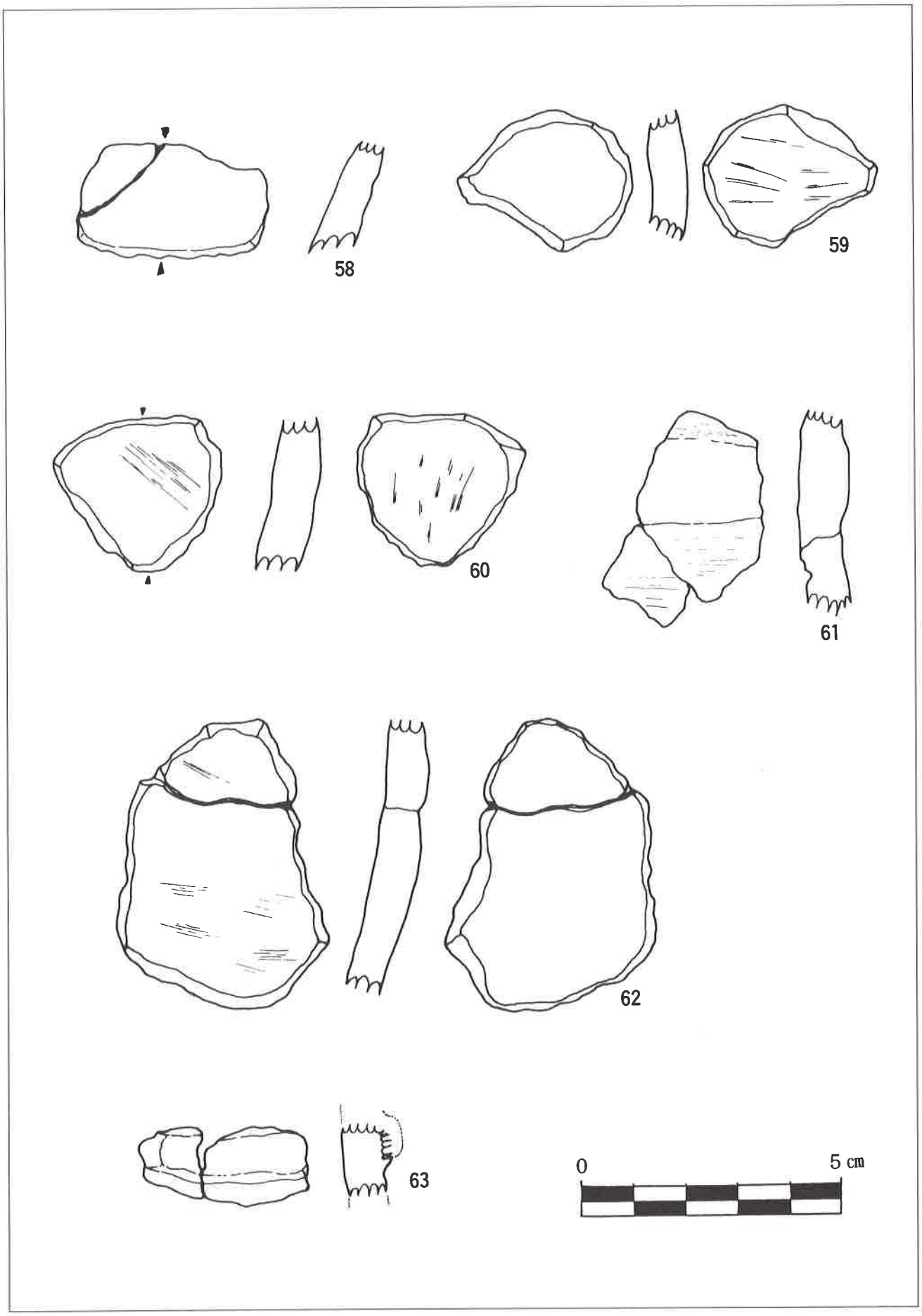
第16図　A地区出土遺物（土器）

3．ブランク・細石刃（第29図）

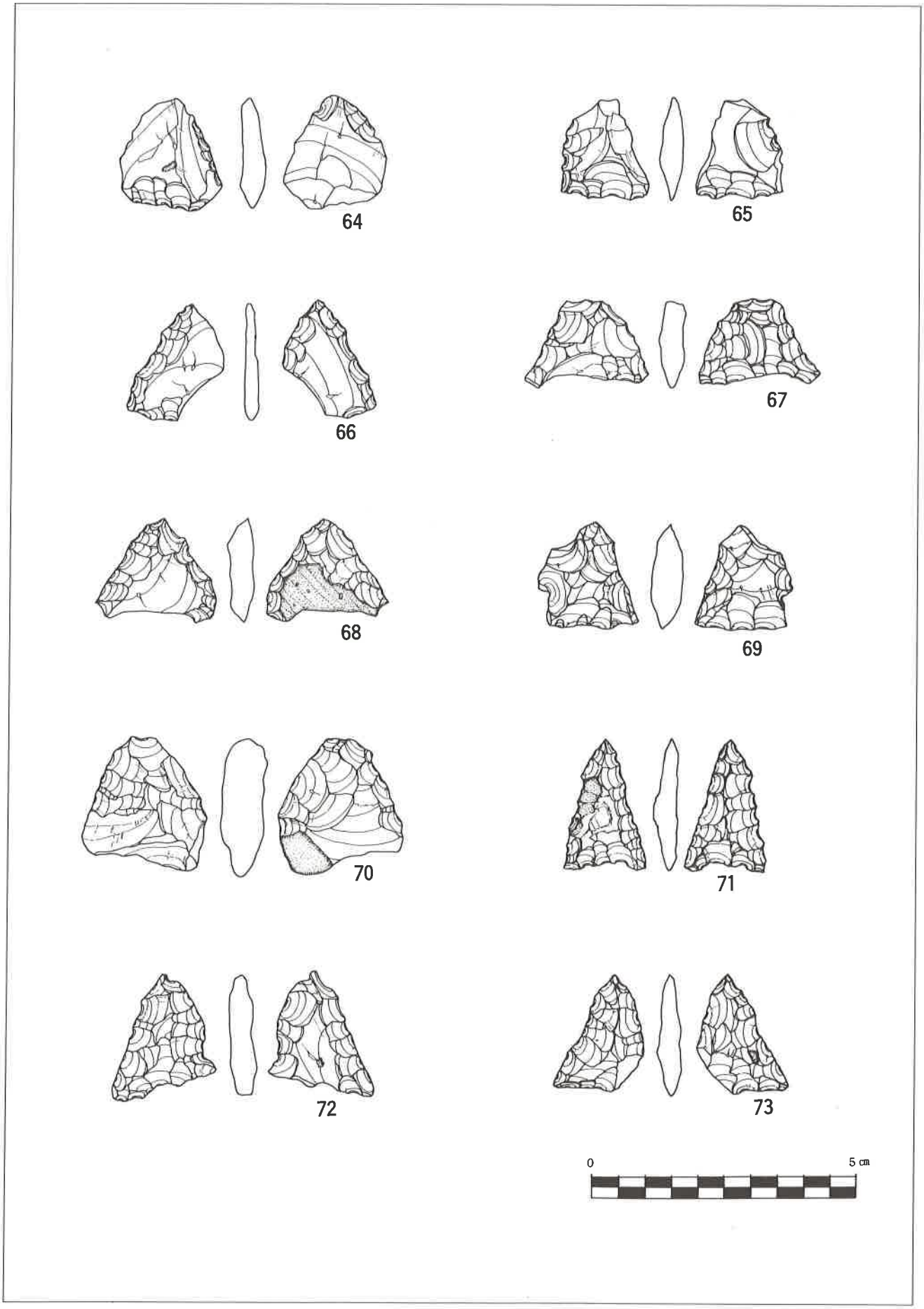
105～110は細石刃核ブランクと思われる。石材は105～108がガラス質流紋岩で，109～110は黒耀石製である。105～106は打面平坦面に打面調整の細かな剥離が見受けられる。106は稜柱状になるのか。108は細石刃核の可能性もあるブランクである。109は下縁調整が成されている。110も下縁調整が成されている。111～116は細石刃である。111～112は黒耀石Ａの細石刃である。113～114・116はガラス質流紋岩で，115はグレー色黒耀石Ｄである。112が完形品でその他は上部や下部が欠損している。

4．石核・掻器・楔形石器（第30図）

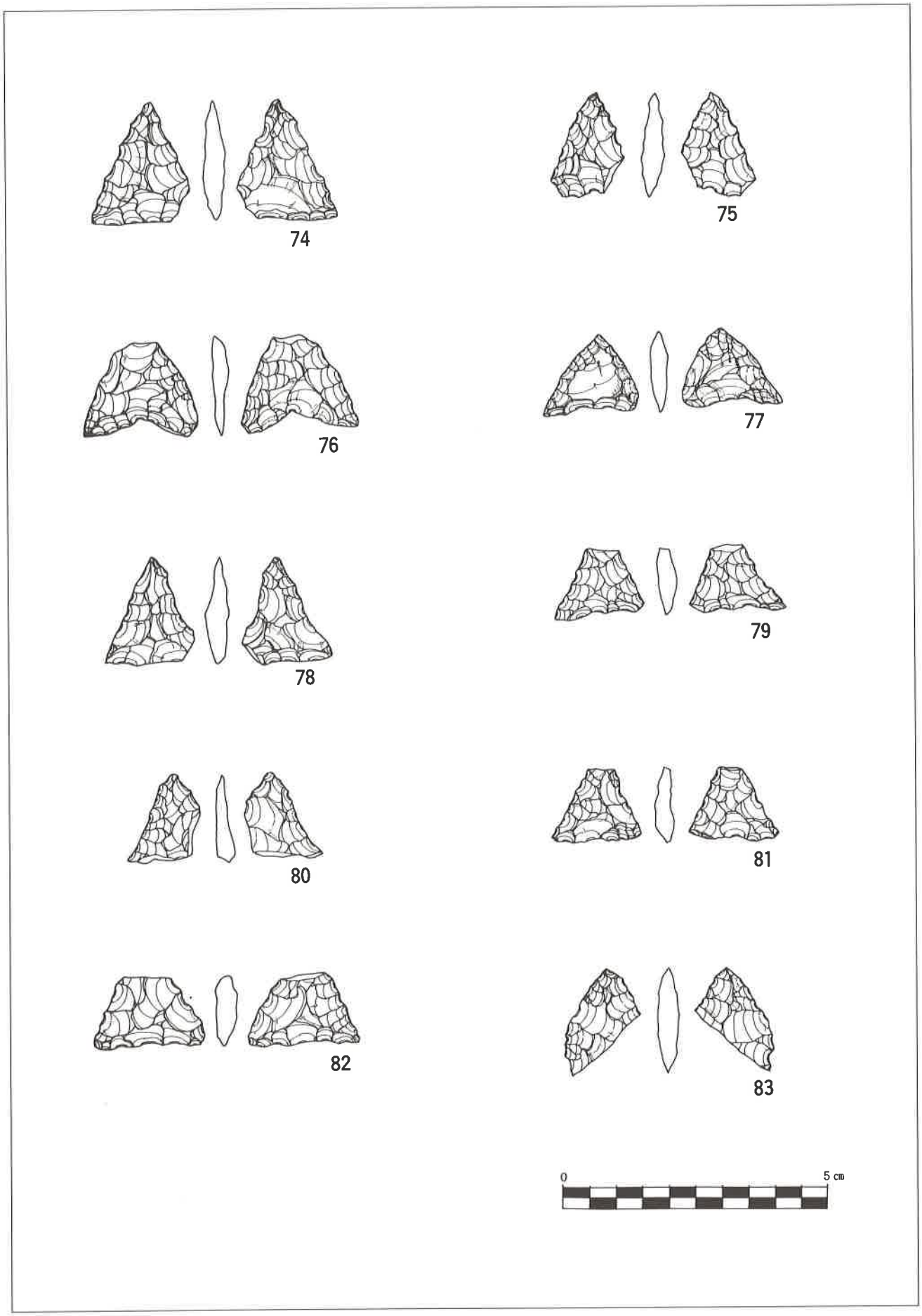
117～118は石核である。黒耀石Ａの転石をそのまま使用し，117は正面と側面に剥離痕が残る。118は正面に３ケ所に剥離痕が残る。119～125は掻器である。119はメノウ製，120～121はガラス質流紋岩，123・125は黒耀石Ａ製である。122・124は楔形石器である。両方ともガラス質流紋岩製である。



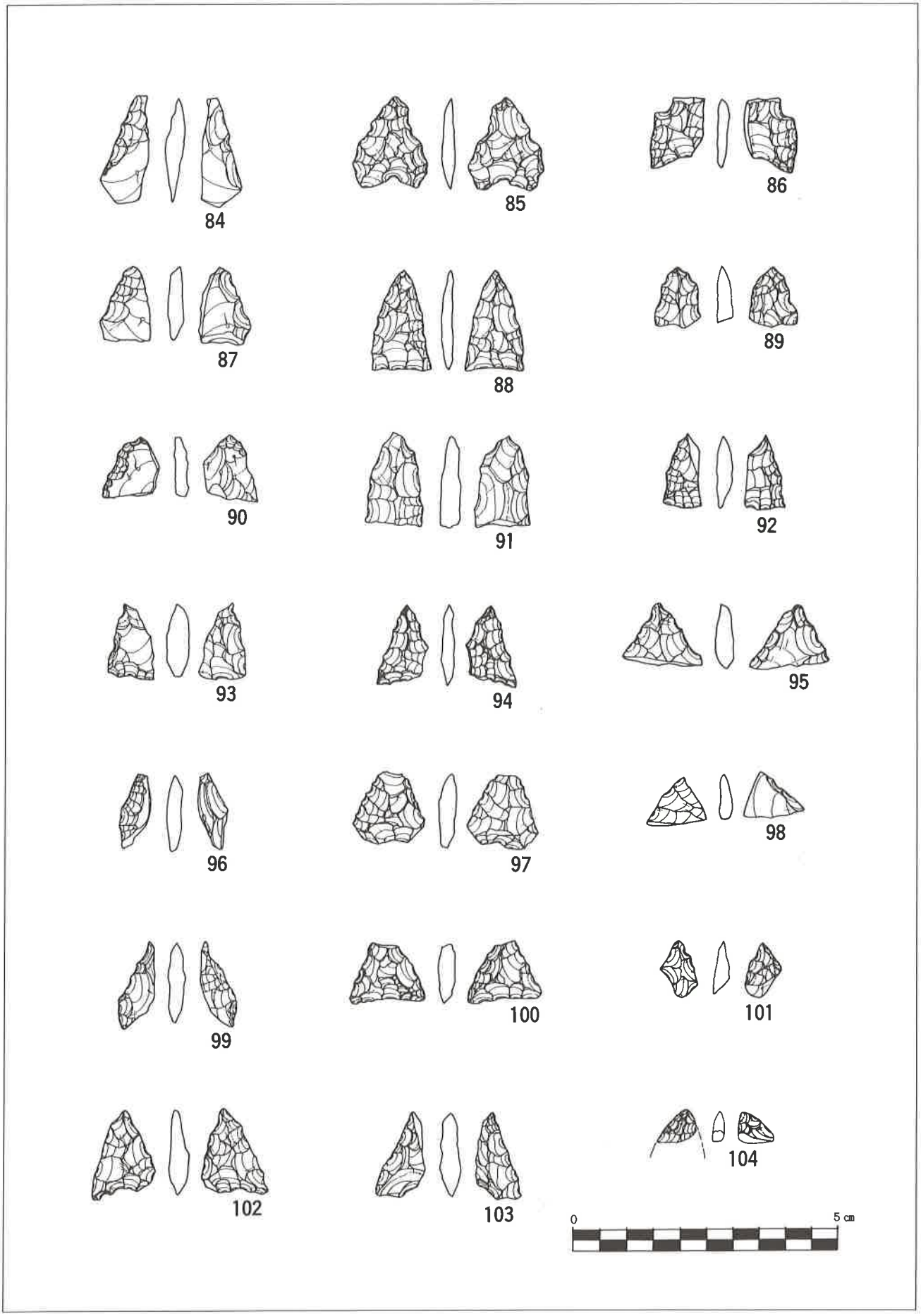
第17図　B地区出土遺物（土器）



第18図　草創期石鏃（一）



第19図　草創期石鏃（二）


84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
0
5 cm

第20図　草創期石鏃（三）

5．ハンマーストーン（第31図）

凝灰岩製のもので，敲打の痕跡が見受けられる。A地区出土で，石鏃や土器，細石刃と共に出土した。第21図に出土地点が標されているが，ブロック内の石鏃製作に係ると見られるチップ片とともに出土しており，何らかの石器製作に係っていると思われる。

6．石核，剥片類（第32図）

127・129・131・135は石核である。127・135はガラス質流紋岩，129・131は黒耀石Aである。129は黒耀石の自然面を残す。128・130・132・133・136～149は剥片である。128及び145～149は原石の自然面を残す。

7．剥片・その他（第33図）

150～156はガラス質流紋岩の剥片である。157は黒耀石A製の石槍であろう。先端及び胴部から基部にかけて大きく欠損しており，断定は避けたい。がしかし，レンズ状の断面や剥離をみる限りでは石槍に思える。158は小型の磨石と思われる。凝灰岩製で，重量は34g。159は凝灰岩であるが，葦科の植物の跡がはっきりと残っている。Ⅶ層中には見当らず，人為的に持ちこまれたものと考えられるが，どう言った目的で持ちこまれたかは不明である。160は頁岩製で，2次調整剥片である。

第3節　遺構（第34図）

縄文時代草創期の遺構は，舟形配石遺構が1基である。調査した範囲が狭く，他にも遺構があった可能性が考えられる。第34図の遺構はB地区で検出され，長軸約1m30cm，短軸約70cmである。石は人頭大の丸石を長軸の上下に配置し，側縁は板石を中央に向かって敷き並べ，真中は板石を水平に敷き詰めている。また石は赤く変色し，熱を受けているのが観察できる。特記すべきは，遺構の横に砥石と思われる石器（第35図）が置かれており，遺構に何らか関係するものか分からない。時代的にはB地区で隆帯文土器が検出されており，実際，遺構周辺に集中している点から隆帯文時と同時期のものであろう。

第4節　石材について

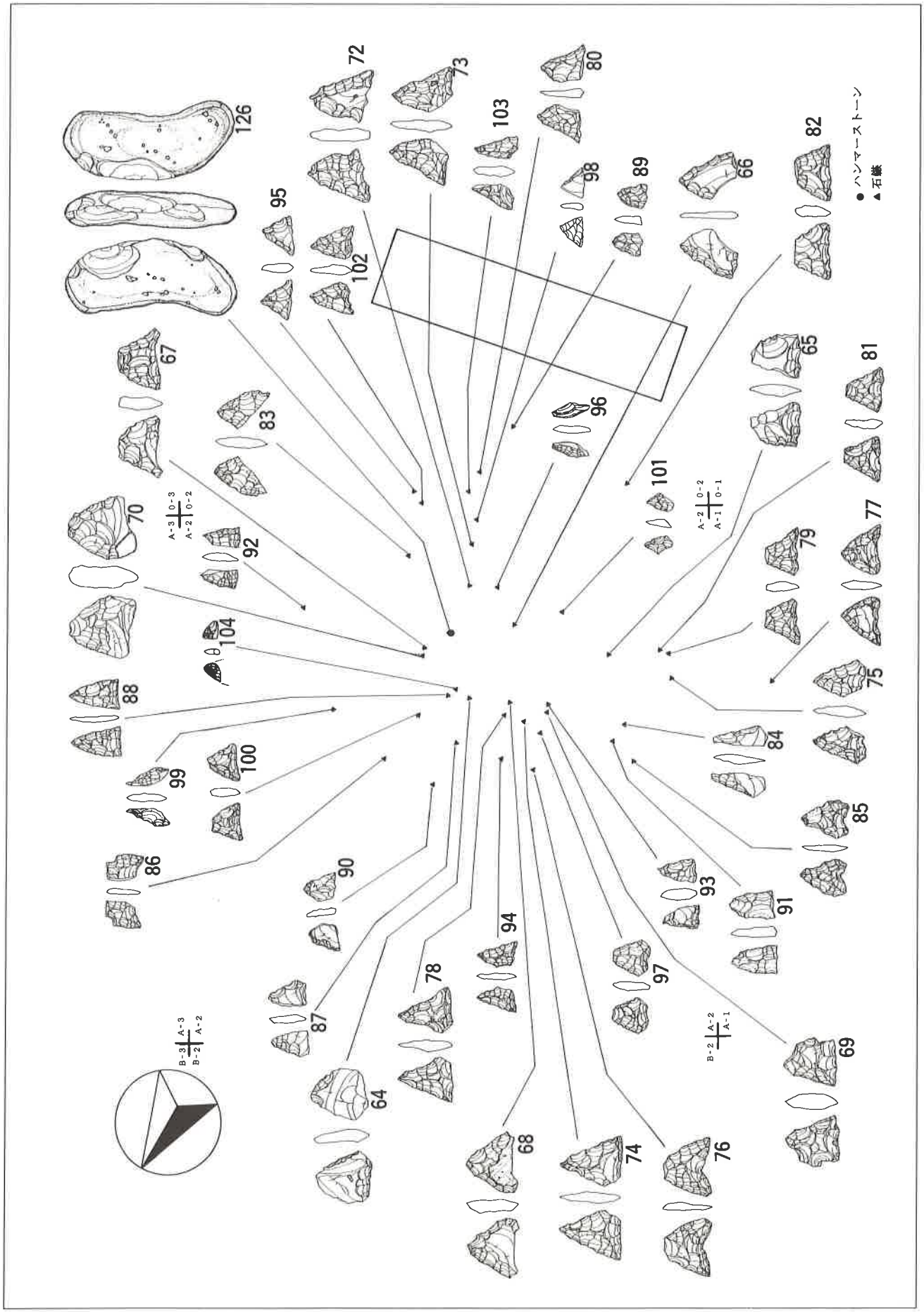
A地区に草創期のブロックが検出されたが，このブロックのフレークチップ片の石材別の分布図が第26～28図である。対象は1cm以下のフレークチップで，石材は黒耀石A・ガラス質流紋岩・その他に分けた。

①ガラス質流紋岩

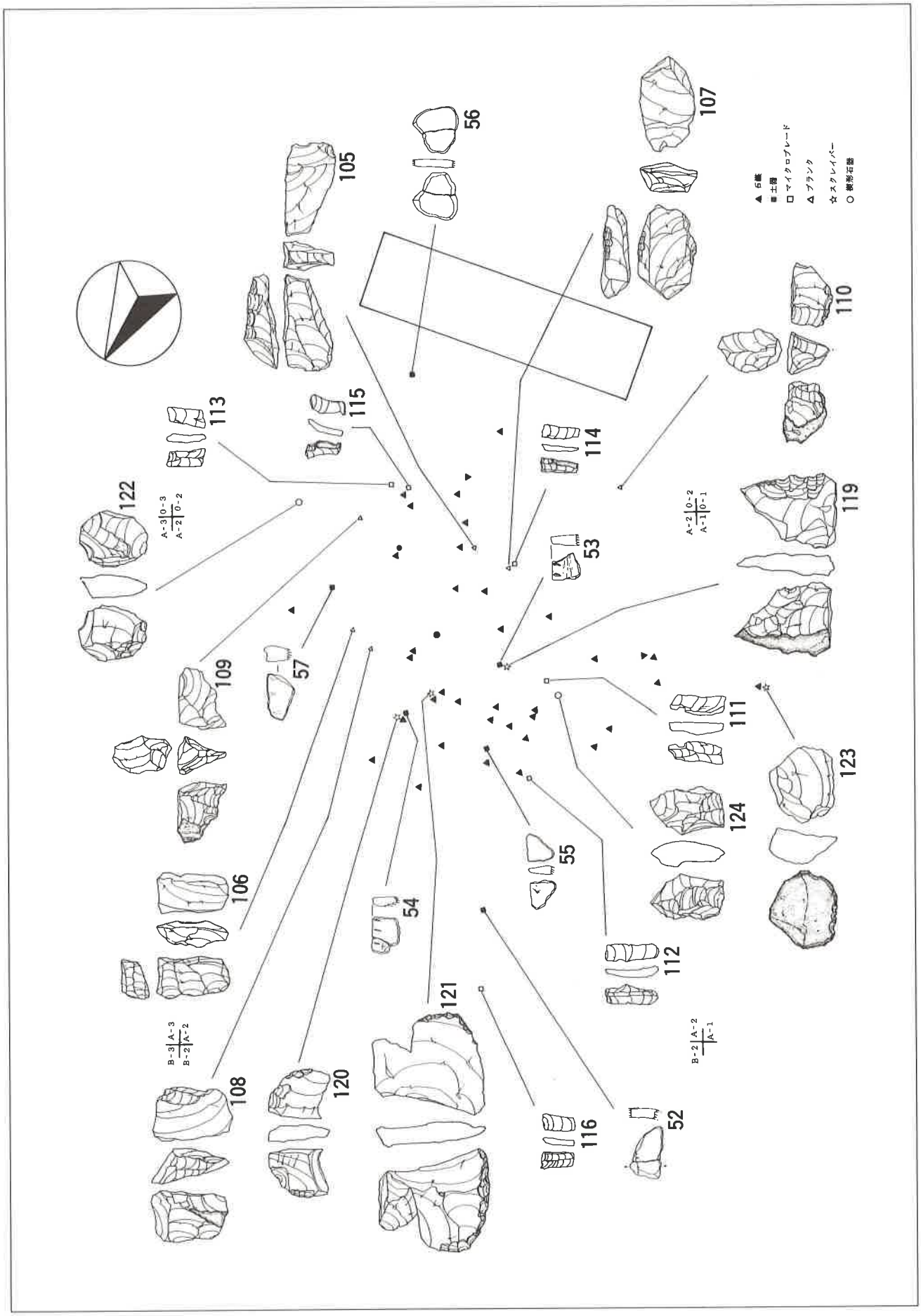
②黒耀石A　ガラス質が強く黒色で良質な黒耀石

③その他（蛋白石・チャートなど）

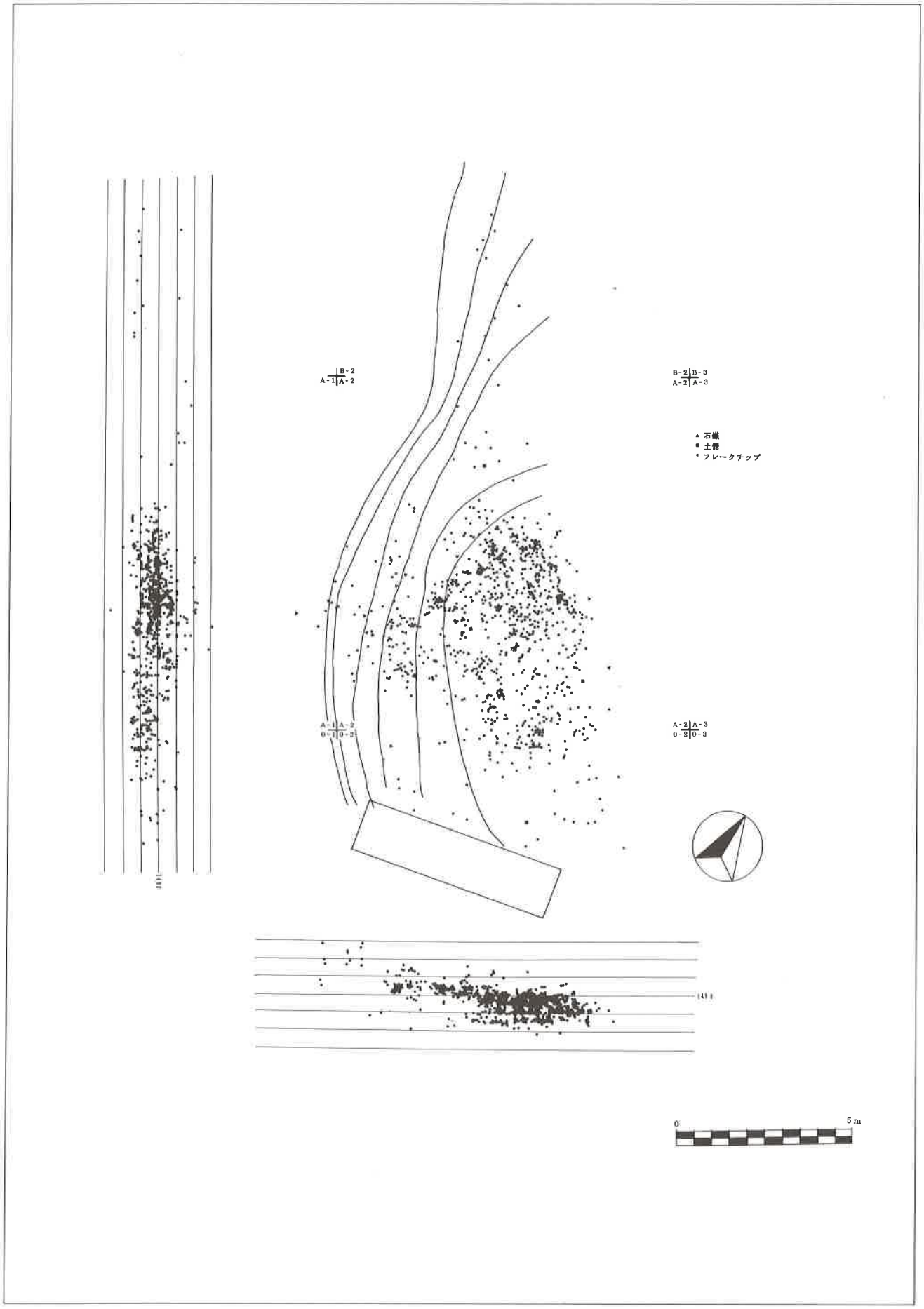
それぞれの石材で一番多く検出されたのはガラス質流紋岩で，その他の石材と分布域は変わらない。このブロックでは石鏃の未製品が多く検出されており，このフレークチップ片は石鏃製作過程で生じたものである。石鏃ではやはりガラス質流紋岩製の石鏃が最も多く，この結果を裏付ける。このガラス質流紋岩は厳密な意味では黒耀石の一種である。黒耀石の脈の末端部はガラス質が希薄になり，このような石が出来上がる。現在各地で発見されている草創期の石鏃は，黒耀石の使用率が低く，もし本遺跡でこのガラス質流紋岩を黒耀石と認識しながら使用したとしたらこれと異なる結果となる。そこで瀧之段遺跡草創期のすべての石材を分析し，一般に使用される黒耀石とこのガ



第21図　A地区石鏃出土分布図



第22図　A地区土器出土分布図



第23図　A地区遺物分布図

ラス質流紋岩の出土率を出し，石鏃に使用された石材との比較をしてみたいと思う。

＜出土石材＞

○ガラス質流紋岩

○黒耀石Ａ　ガラス質が強く黒色で良質な黒耀石

○黒耀石Ｂ　ガラス質が強く透明で黒い筋の入った良質の黒耀石

○黒耀石Ｃ　ガラス質が強くアメ色をした良質の黒耀石

○黒耀石Ｄ　ガラス質が弱くグレー色をした黒耀石

○その他（チャート・頁岩・蛋白岩・鉄石英）

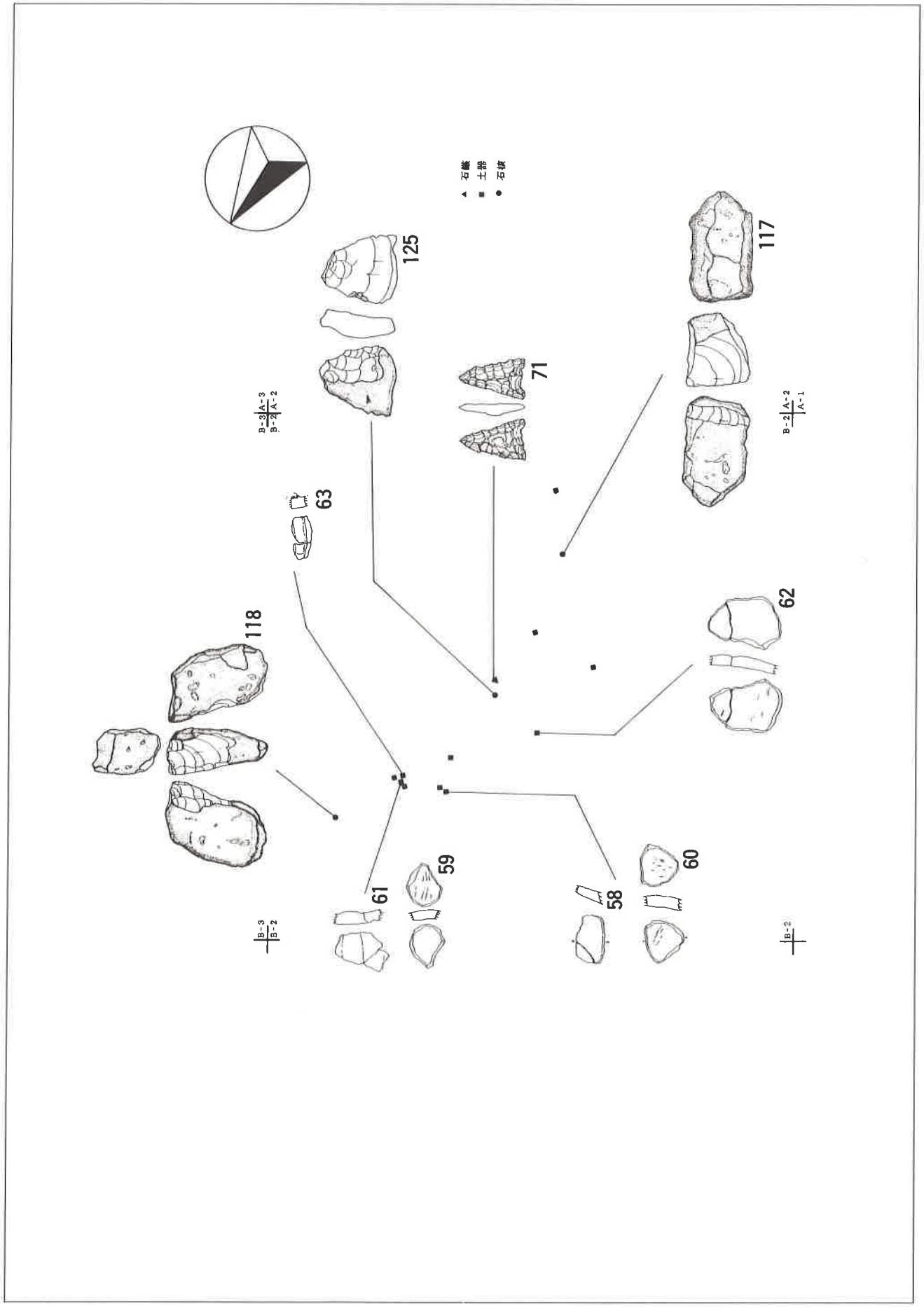
第５節　石材の分析

まず，その根拠として，縄文時代前期から早期の各層全ての石材の比率と石鏃に使用した石材の比率を出し，更に，縄文時代草創期の全ての石材の比率と出土した石鏃の石材の比率を比べてみた。すると，Ⅲ層の石材の比率は，黒耀石Ａは68.1％，ガラス質流紋岩は27.9％で，この２つで全体量の97.6％を占める。その中で石鏃に使用した各石材の比率は黒耀石Ａが22.2％，ガラス質流紋岩が22.2％，チャート22.2％，頁岩11.13％，鉄石英11.13％，黒耀石Ｃ11.13％であった。Ⅲ層の石材は黒耀石Ａとガラス質流紋岩が殆どであるが石鏃には各種の石材を平均的に使用している。こんどはⅥＶ層の分析をしてみた。ⅥＶ層の石材は黒耀石Ａが68.1％，ガラス質流紋岩が30.4％で全体の98.5％を占める。その内石鏃の石材は，黒耀石Ａが41.2％，ガラス質流紋岩が35.3％，蛋白石が11.75％，チャートが11.75％であった。特に石材の偏りは感じられない。では，草創期ではどうか。Ⅶ層中の石材は黒耀石Ａが49.4％，ガラス質流紋岩が47.45％で，全体の96.9％であった。黒耀石Ａとガラス質流紋岩の比率は同じくらいである。石鏃の石材使用率は，黒耀石Ａが13.5％，ガラス質流紋岩が70.3％，チャートが10.8％であった。これでわかることは草創期の全ての石材の殆どが黒耀石Ａとガラス質流紋岩であり比率的にも同率であるのに対し，石鏃使用の石材にはガラス質流紋岩だけが特に約70％も占めており，草創期初期の非黒耀石の使用率が高いという点を考えれば，ガラス質流紋岩は黒耀石と認識せず，頁岩や蛋白石，チャートなどと同じく黒耀石以外の石材として意識的に石鏃に使用したものと推定できる。

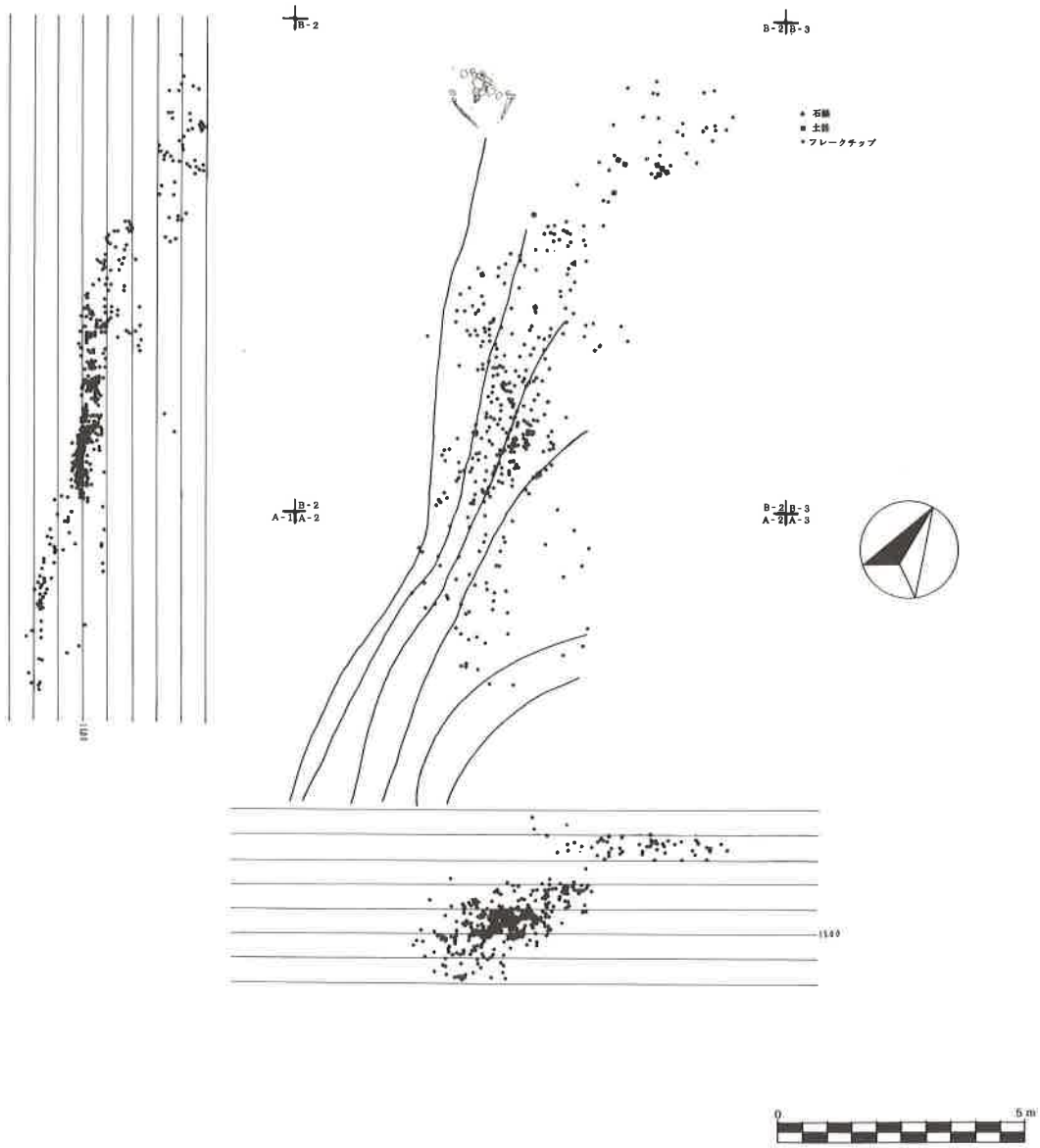
第６節　小結

草創期の遺物は大きく二時期に分けられると考えられる。Ａ地区では細石刃核（確認調査で出土）細石刃，石鏃，土器が同一ブロック内で出土し，細石器文化終末から縄文時代へ移り変わる時期のものと考えられ，Ｂ地区では舟形配石遺構と共に，隆帯文土器が検出された。細石刃や細石刃核は全く検出できず，Ａ地区とは様相を異にする。恐らく，Ａ地区よりも新しい時期のものと思われる。

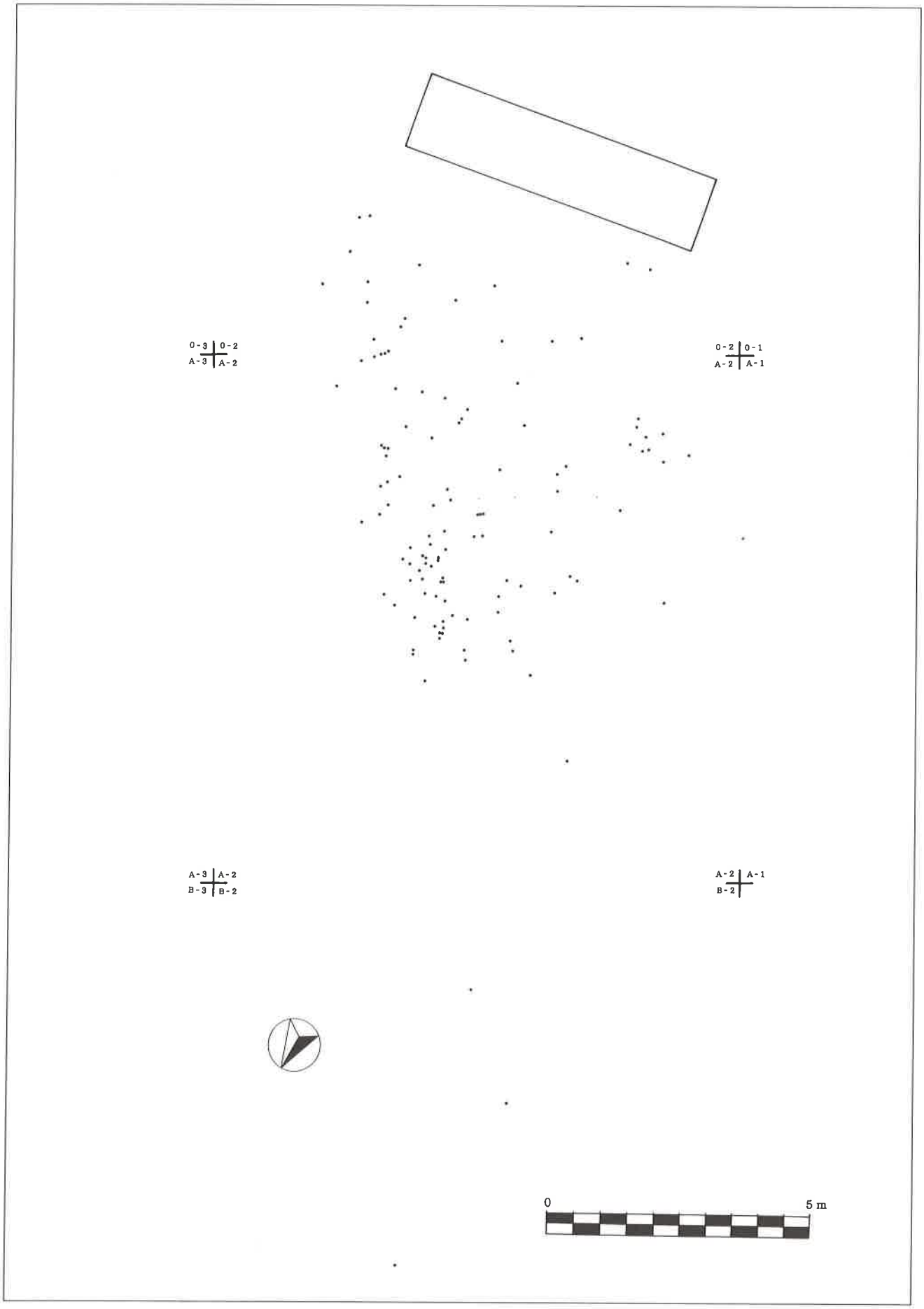
草創期の遺物で特徴的なのは石鏃の数である。Ａ地区でブロック内から40本もの石鏃が出土し，Ｂ地区から１本，合計41本の石鏃の出土をみた。これらの石鏃は，ガラス質流紋岩や黒耀石，蛋白石，鉄石英，チャート，頁岩，メノウ等様々な石材を使用しており，この点については草創期の初期の遺跡と同様の結果を得た。形態としては三角形鏃，二等辺三角形鏃が見られ，大きさも大中小ある。石鏃の未製品も多く見られ，チップ片やハンマーストーンの出土から，石鏃の製作跡と考えられる。また土器で言えば，Ａ地区から無文と思われる土器片や，口縁部に浅い刺突文のある土器が出土し，Ｂ地区から出土した条痕文や隆帯文土器とは様相を異にする。口縁部に浅い刺突文のある土器は爪にも見えるが，良く観察すると違うようである。また，神奈川県の相模野第149遺跡出



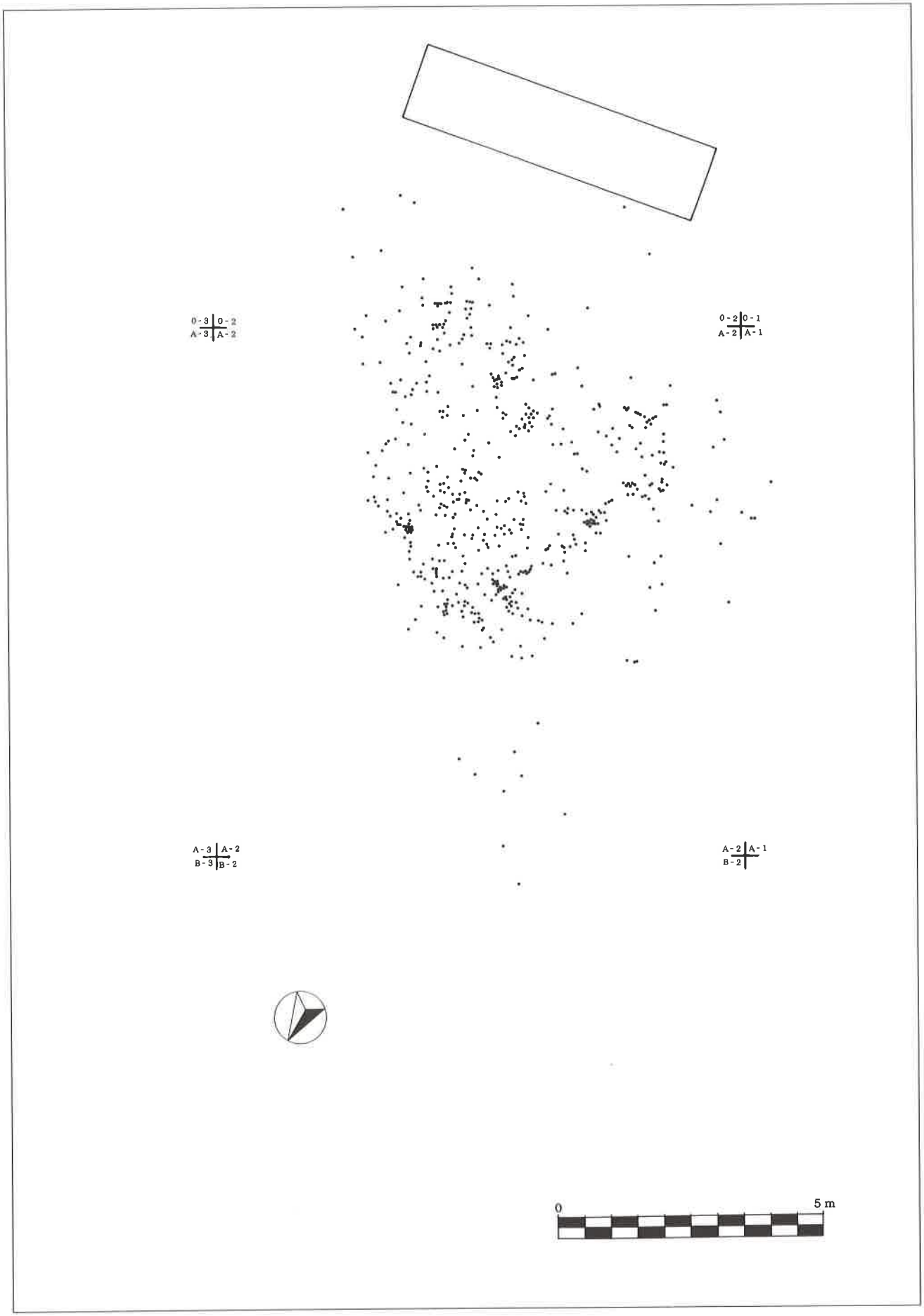
第24図　B地区石鏃，土器出土分布図



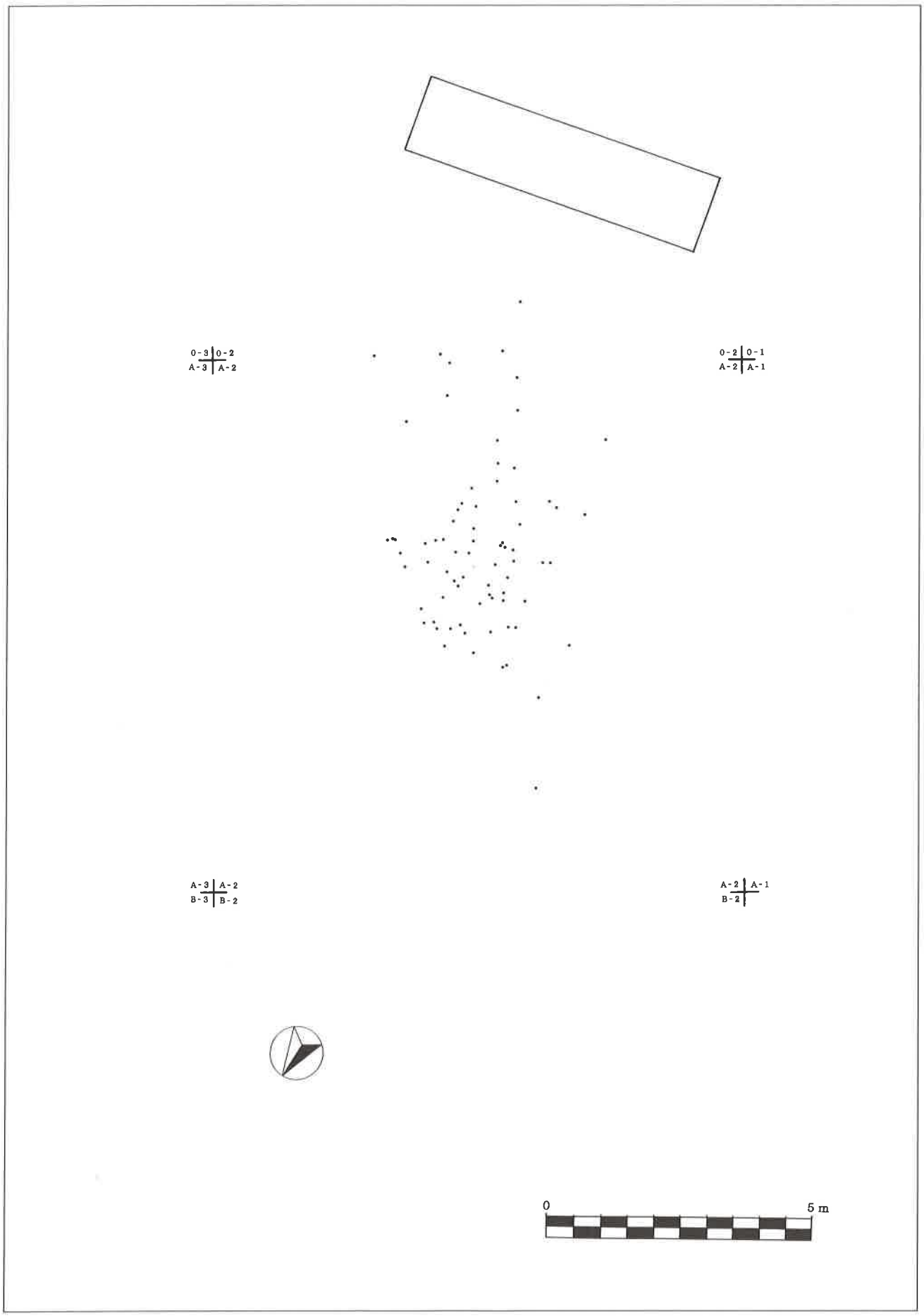
第25図　B地区遺物分布図



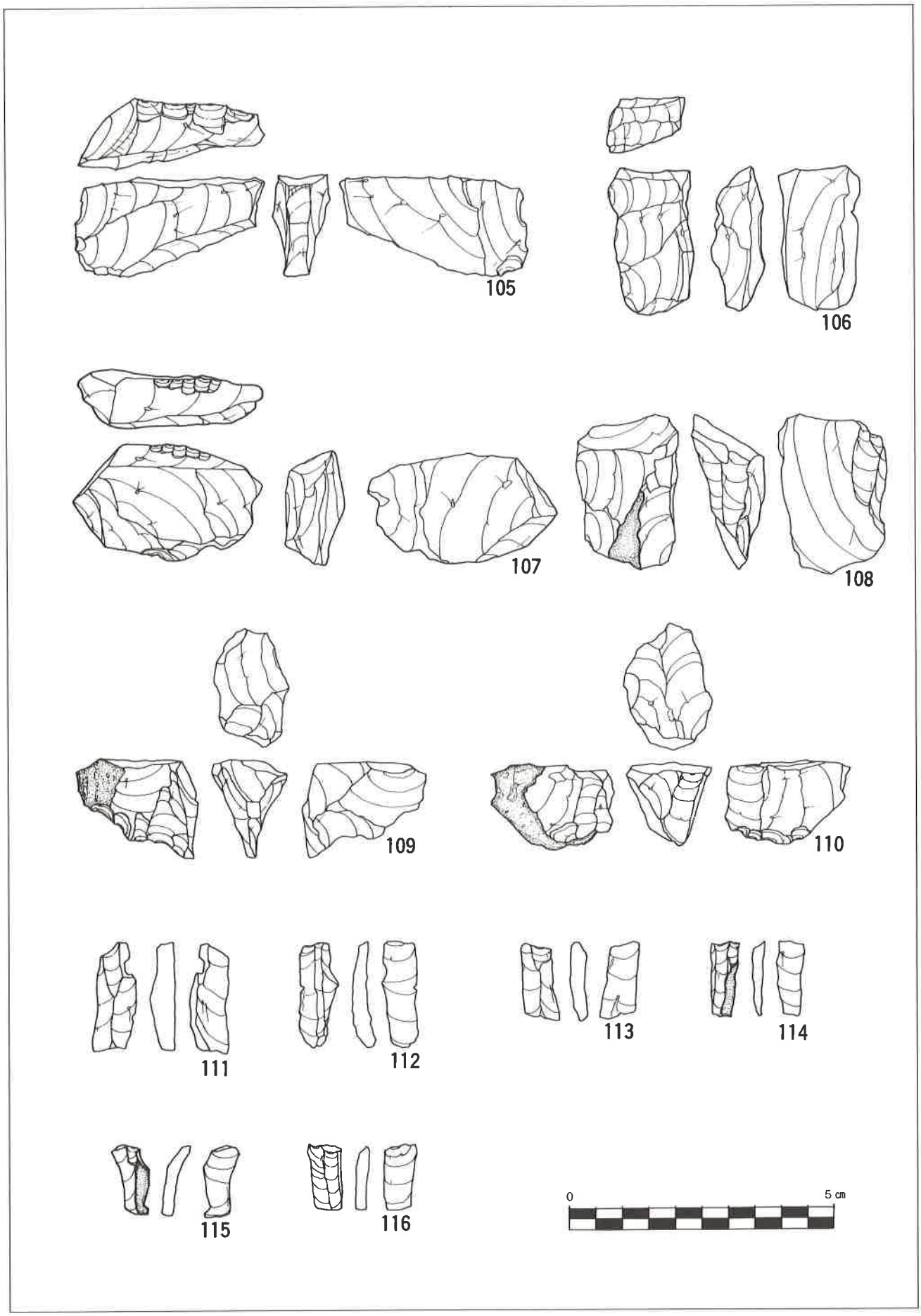
第26図　フレーク，チップ分布図（黒耀石Ａ）



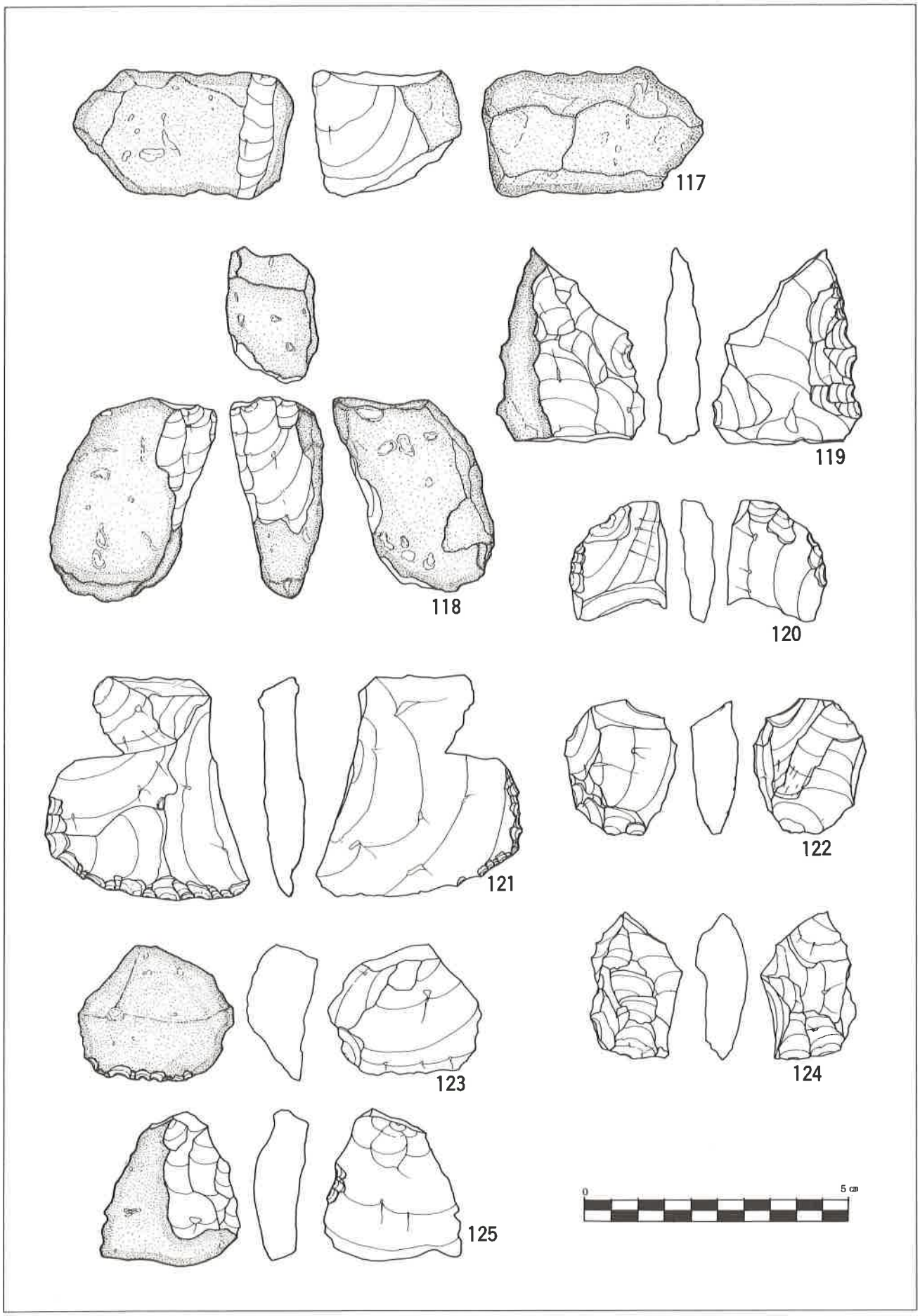
第27図　フレーク，チップ分布図（ガラス質流紋岩）



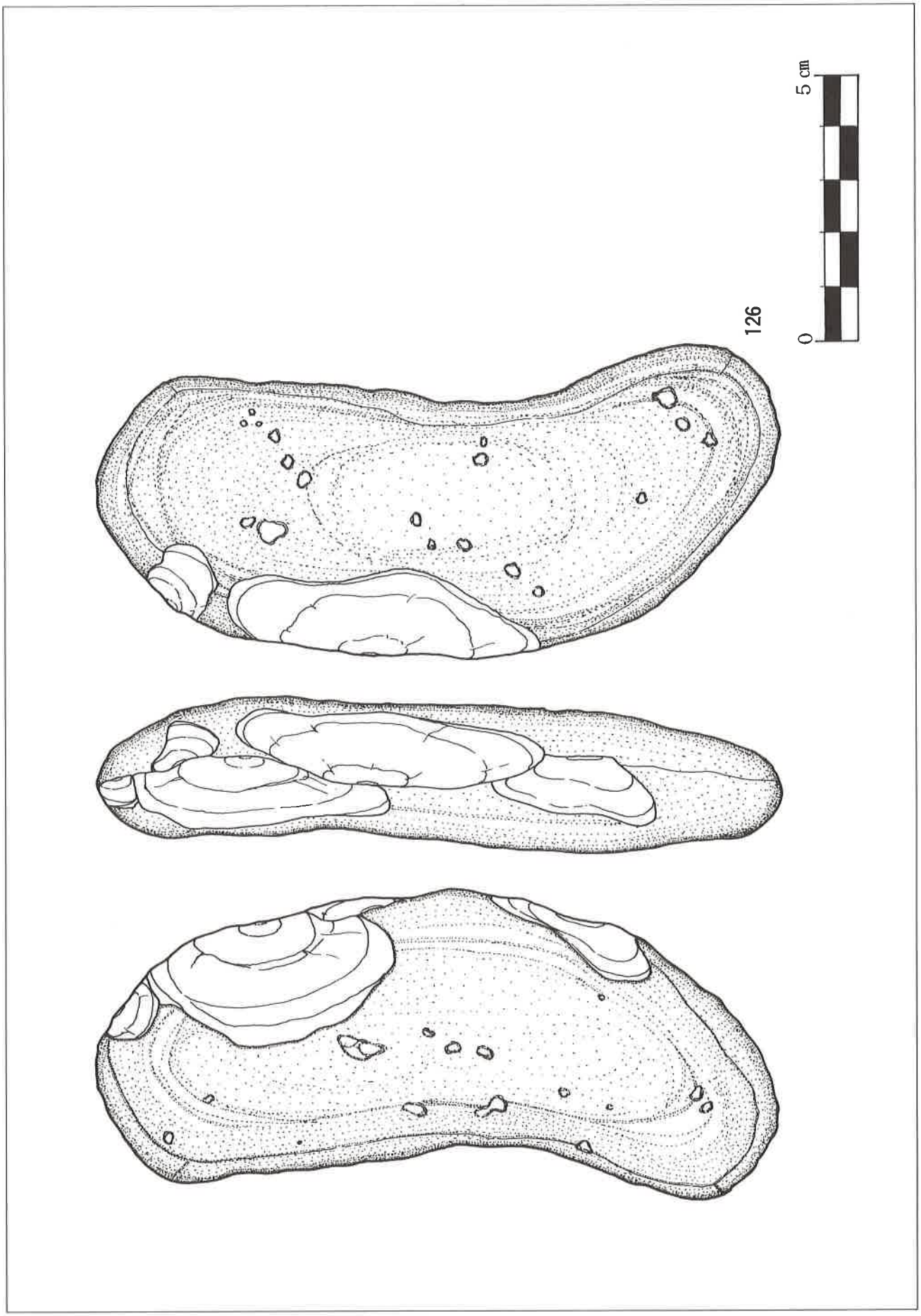
第28図　フレーク，チップ分布図（その他）



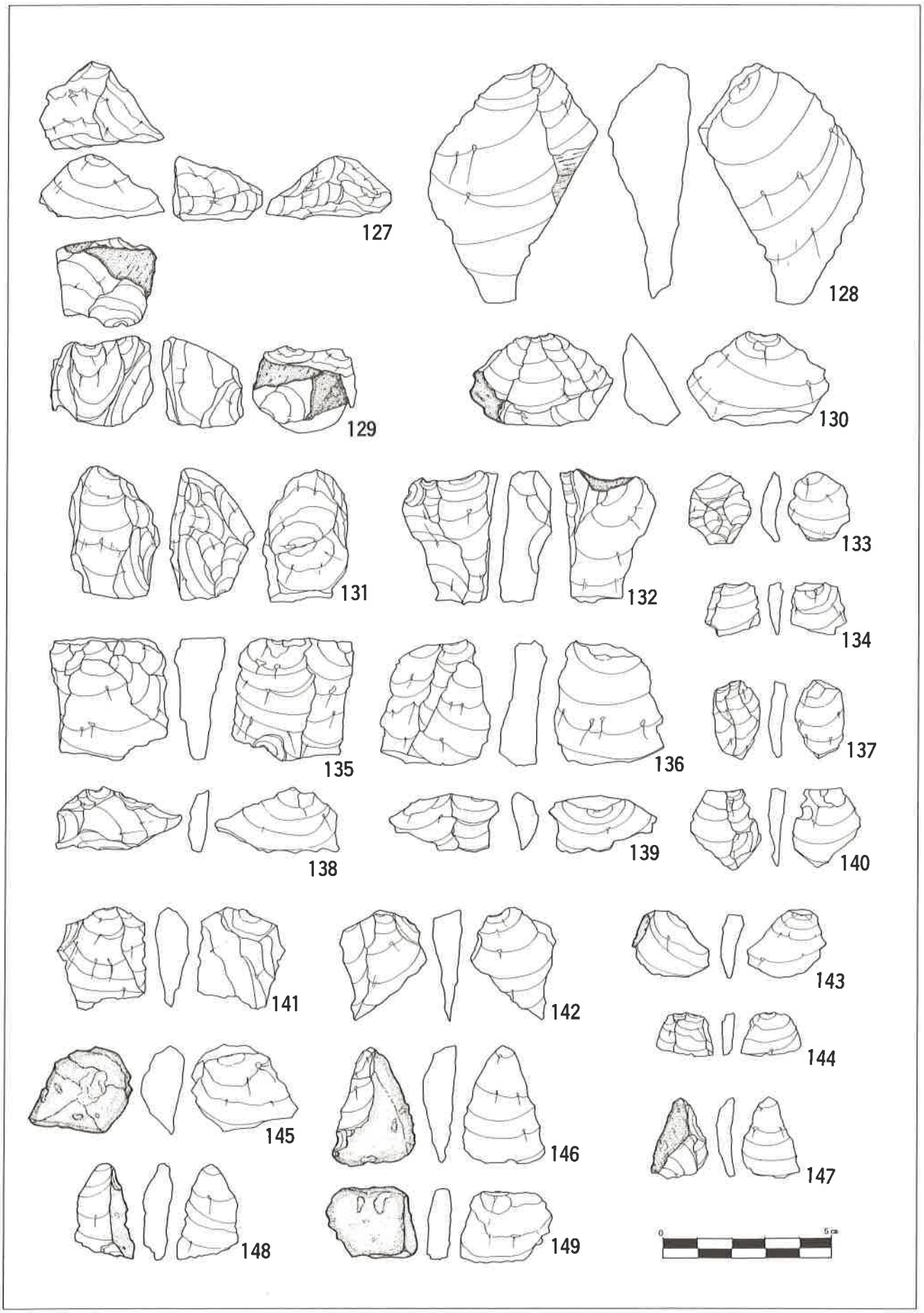
第29図　ブランク，細石刃



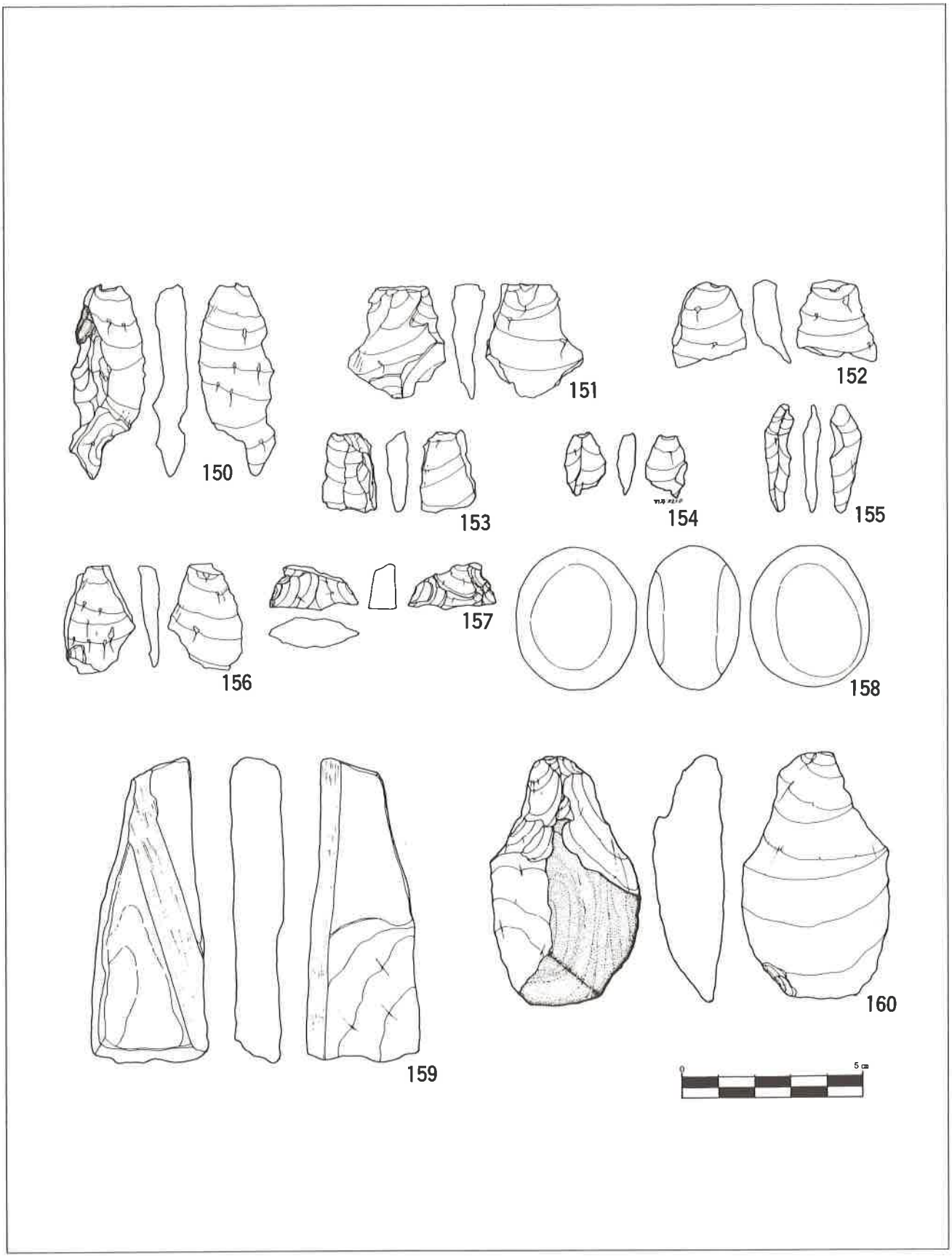
第30図　石核，掻器，楔形石器



第31図　ハンマーストーン

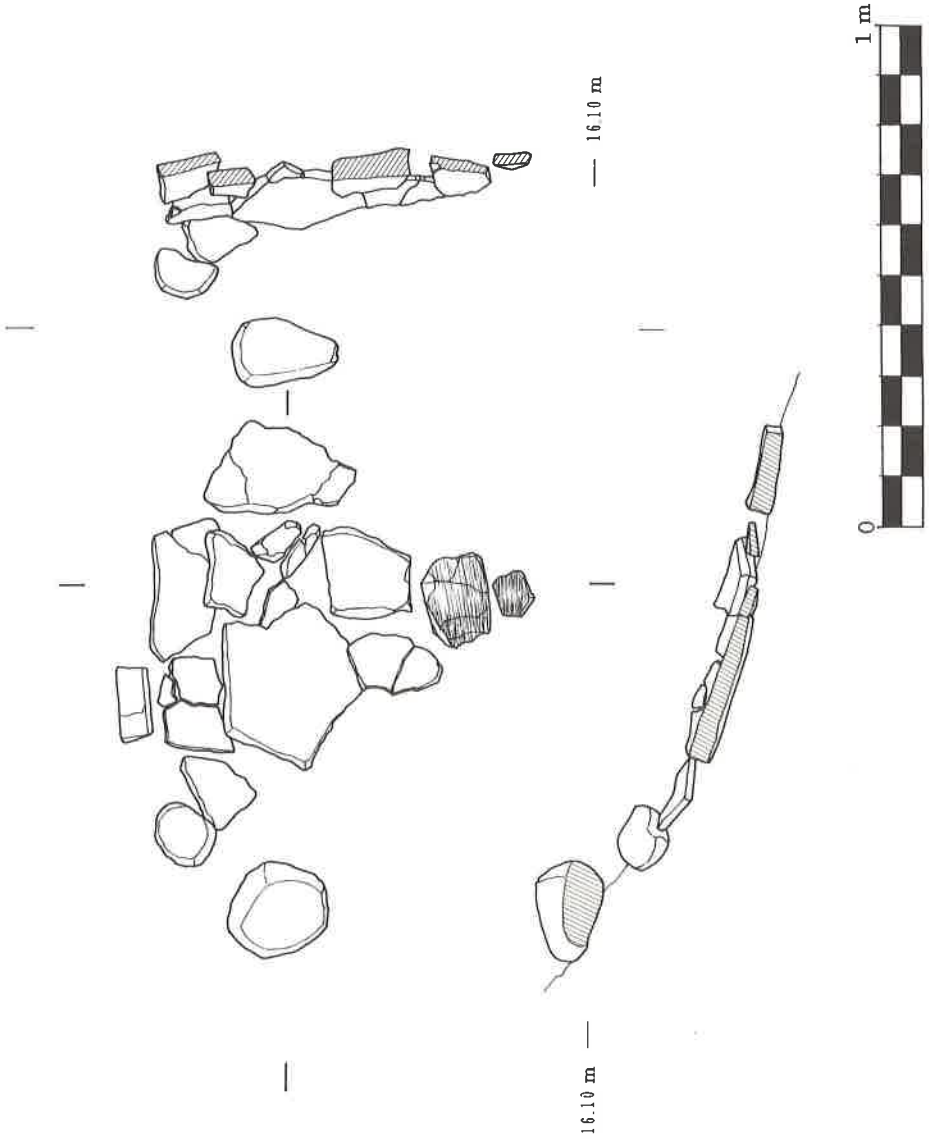

127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149

第32図　石核，剥片類

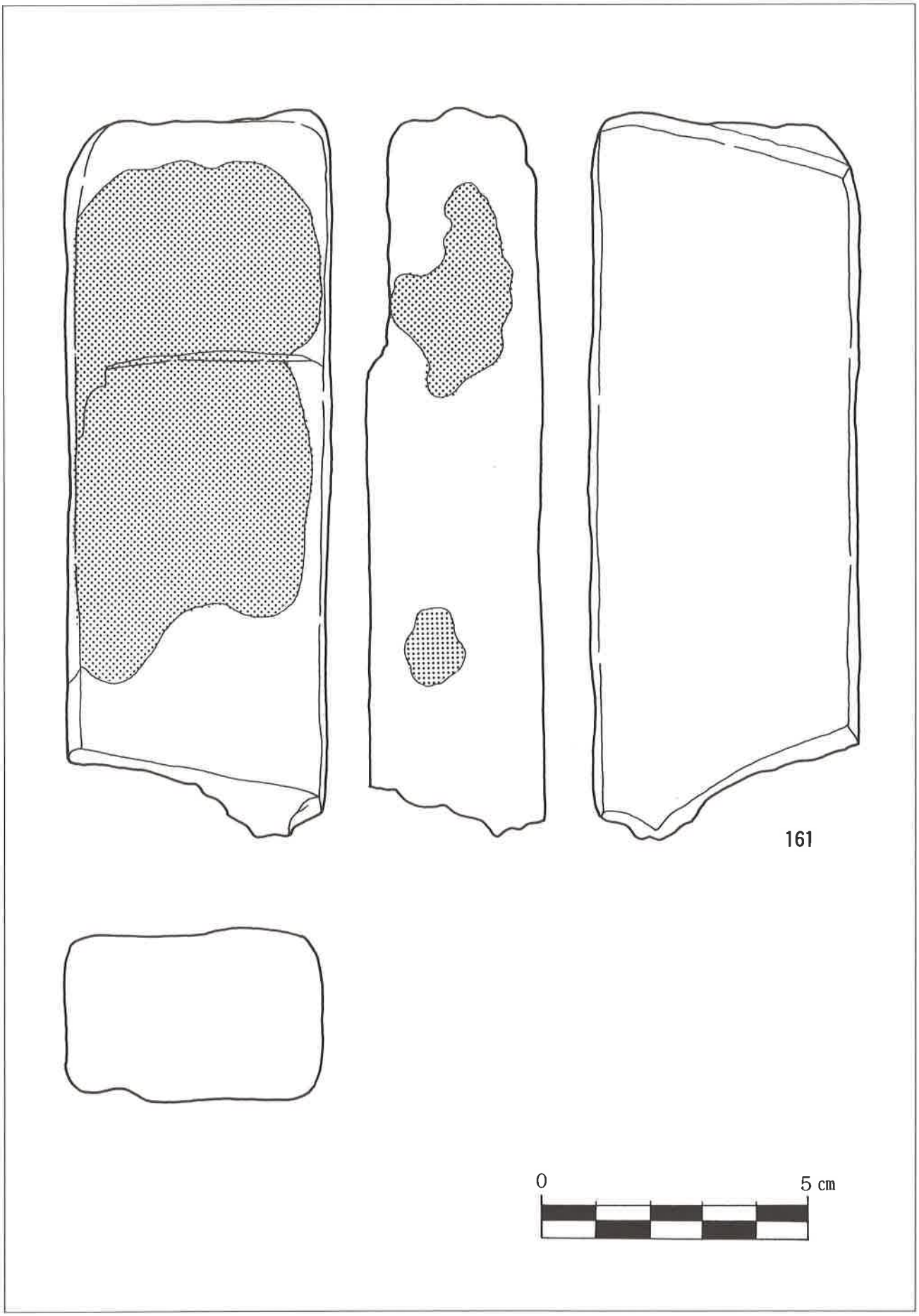


第33図　剥片，その他の石器

土の土器や寺尾遺跡出土の土器等で知られる隆起線文系土器，大塚達郎氏のいわゆる窩文土器との関連を調べたが関連性は低いようである。今後の類例の増加に期待したい。



第34図　船形配石炉



第35図　砥石

第６章　縄文時代早期

第１節　調査の概要

縄文時代早期の土器は確認調査では確認できず，礫とチャート片や黒耀石破片が少量出土しただけであったので当初縄文時代早期の遺物は少ないものと考えていたが，全面調査に入る時点で石鏃や土器を表採し，また早期の層もしっかりしていた。掘り下げを開始すると確認調査では出土しなかった土器が多数出土し，遺構も検出できた。特に礫が多く，集石遺構や磨石，石皿等も出土した。

第２節　早期の土器

縄文時代早期の遺物は，Ⅲ～Ⅴ層上部に検出された。出土した土器はⅠ類からⅤ類に分けられた。

Ⅰ類　貝殻腹縁やヘラ状工具により条痕文を逆くの字形に施す。

Ⅱ類　口縁部は外反し，胴部にいくに従って膨らみ，胴部中央部で屈曲する。底部は平底で小さい。文様は撚糸文を口縁部から底部付近まで縦位に施文するものと，山形押型文を縦位二施文する。

Ⅲ類　バケツ状を呈し，口唇部から底部付近まで山形押型文を施文する。

Ⅳ類　円筒形を呈し，口縁部や胴部に横位に貝殻条痕文を施文する。

Ⅴ類　口縁部はラッパ状に広がり口唇部には刻みを入れ，口縁部には沈線文，頸部に刺突文，胴部には縦位に撚糸文を施す。

１．Ⅰ・Ⅱ類土器（第36図）

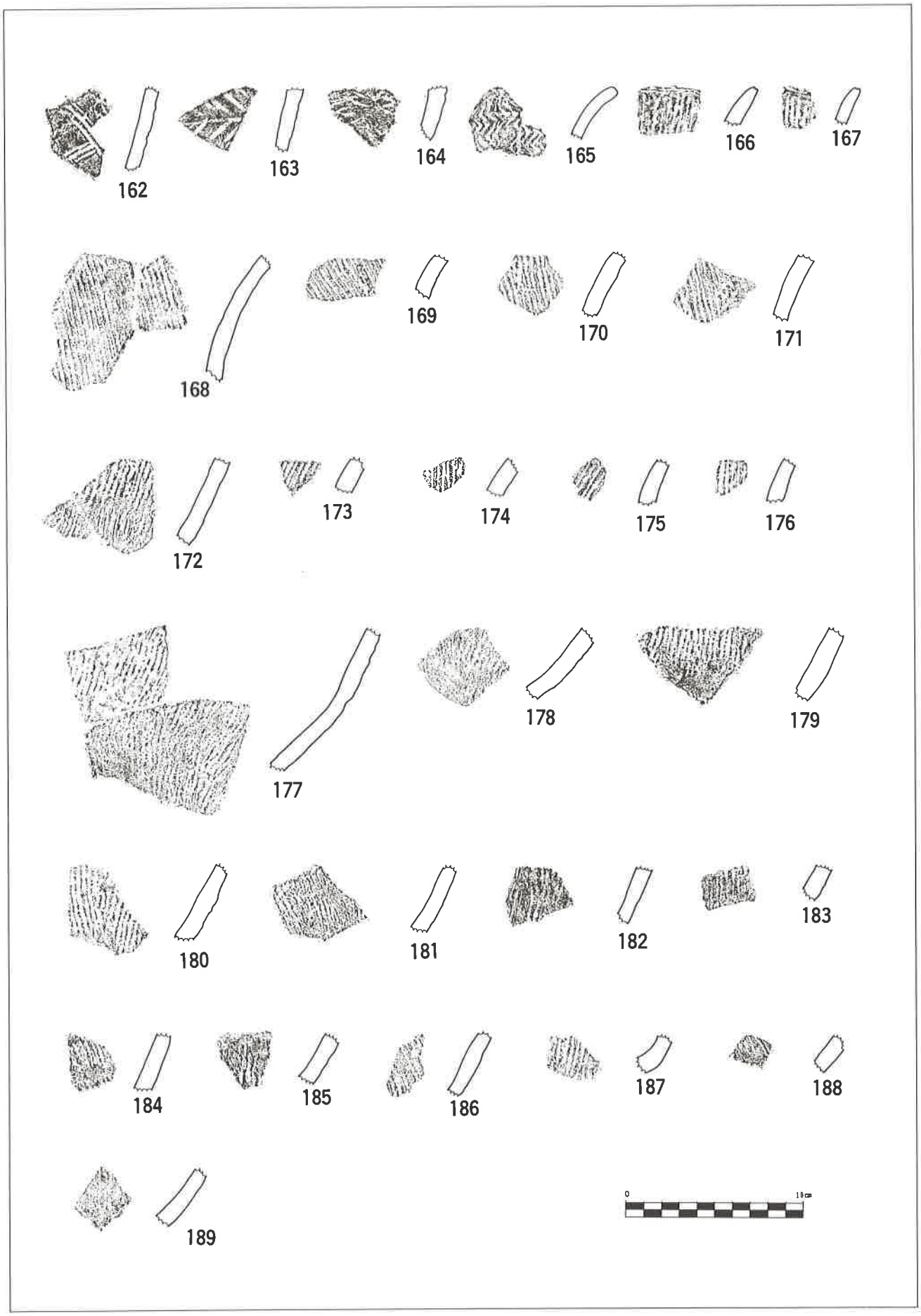
162～164はⅠ類土器である。162は胴部破片で，貝殻腹縁により条痕文を逆くの字形に施す。焼成は良である。163も胴部破片で，ヘラ状工具により条痕文を逆くの字形に施す。焼成は良である。164はヘラ状工具により細い条痕文を逆くの字形等に施す。焼成は良である。165～189はⅡ類土器である。165は口縁部破片で縦位の山形押型文が施文されている。166～171は口縁部破片である。口唇部平坦面に横位に撚糸文を施文，口縁部にも縦位に撚糸文を施文する。172～189は胴部から底部へかけての破片である。すべて縦位の撚糸文である。

２．Ⅲ類土器（第37～38図）

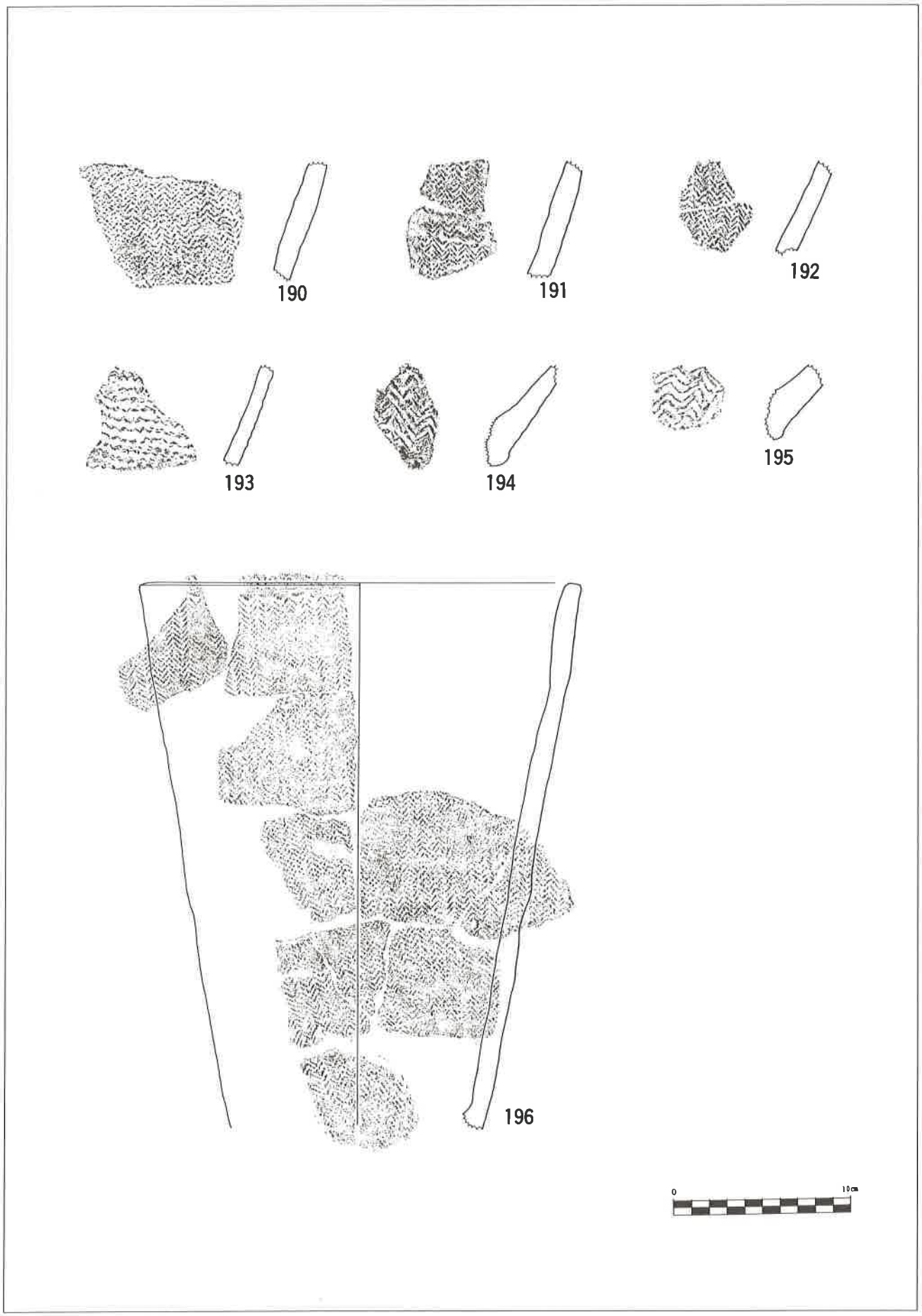
190～196はⅢ層出土遺物である。190～193は胴部破片で山形押型文を横位に施文する。193は色調は赤茶褐色を呈し，山形押型文も波状に施文されその他の山形押型文とは異なる。195～196は底部破片である。底部付近まで山形押型文が施文され，底部は平底でかなり口径に比べて小さくなっている。196は口縁部から底部にかけてほぼそろっている。口唇部は平坦に作り，その平坦面に山形押型文を施文する。口縁部から底部にかけて山形押型文を横位に施文している。197～209はⅣ層出土遺物である。胴部から底部付近の破片で，山形押型文を施文している。

３．Ⅳ類土器（第39図）

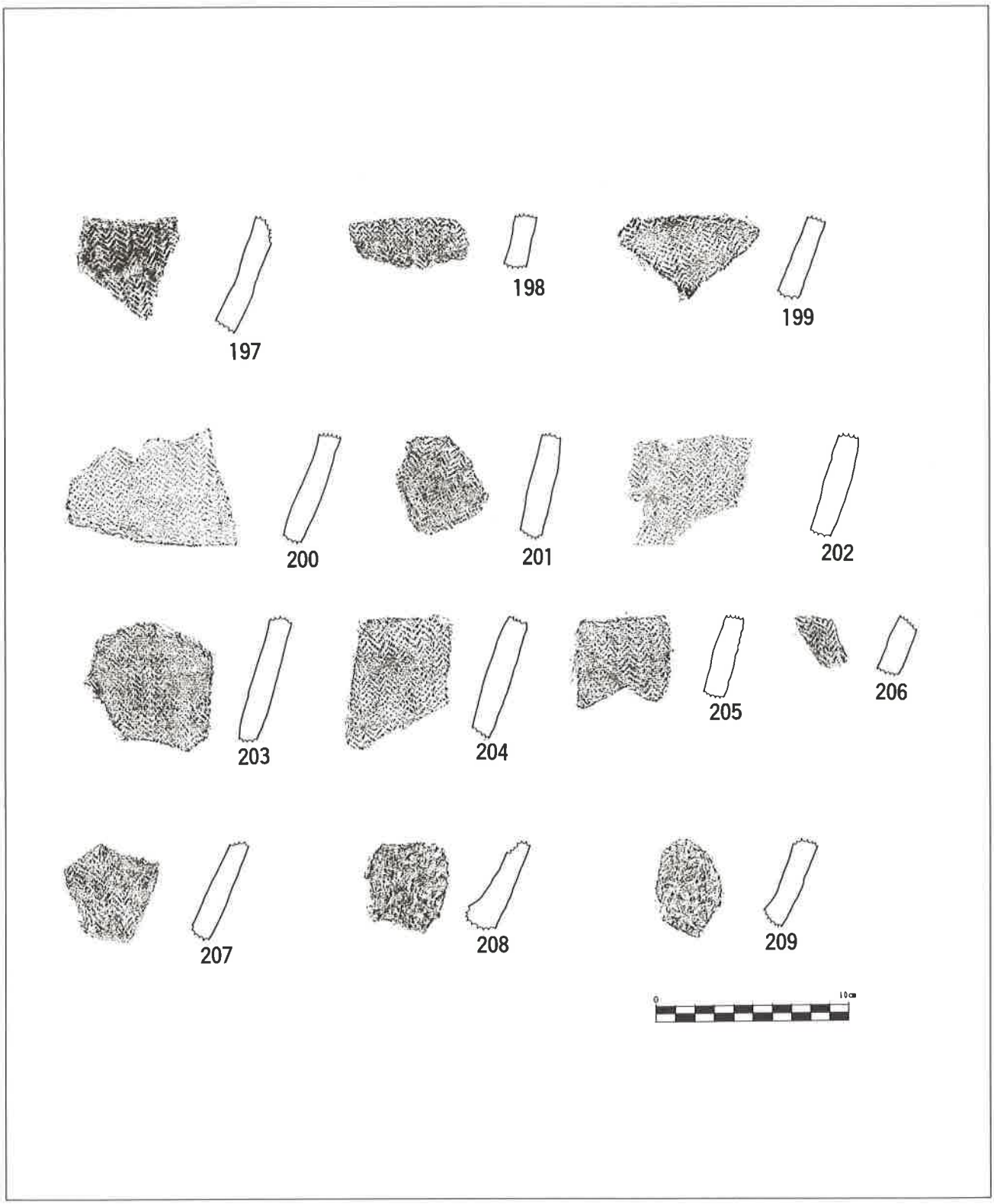
210～226はⅢ～Ⅳ層出土遺物である。器形は円筒形を呈し，口縁部に貝殻条痕文を施文するものと，口縁部から胴部まで貝殻条痕文を施文するものとがあり，後者には縦位の条痕文も施文されている。前者をａ,後者をｂとして，両者とも横位の条痕文は波形に施文している。


162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
0
10cm

第36図　Ⅰ・Ⅱ類土器（一）



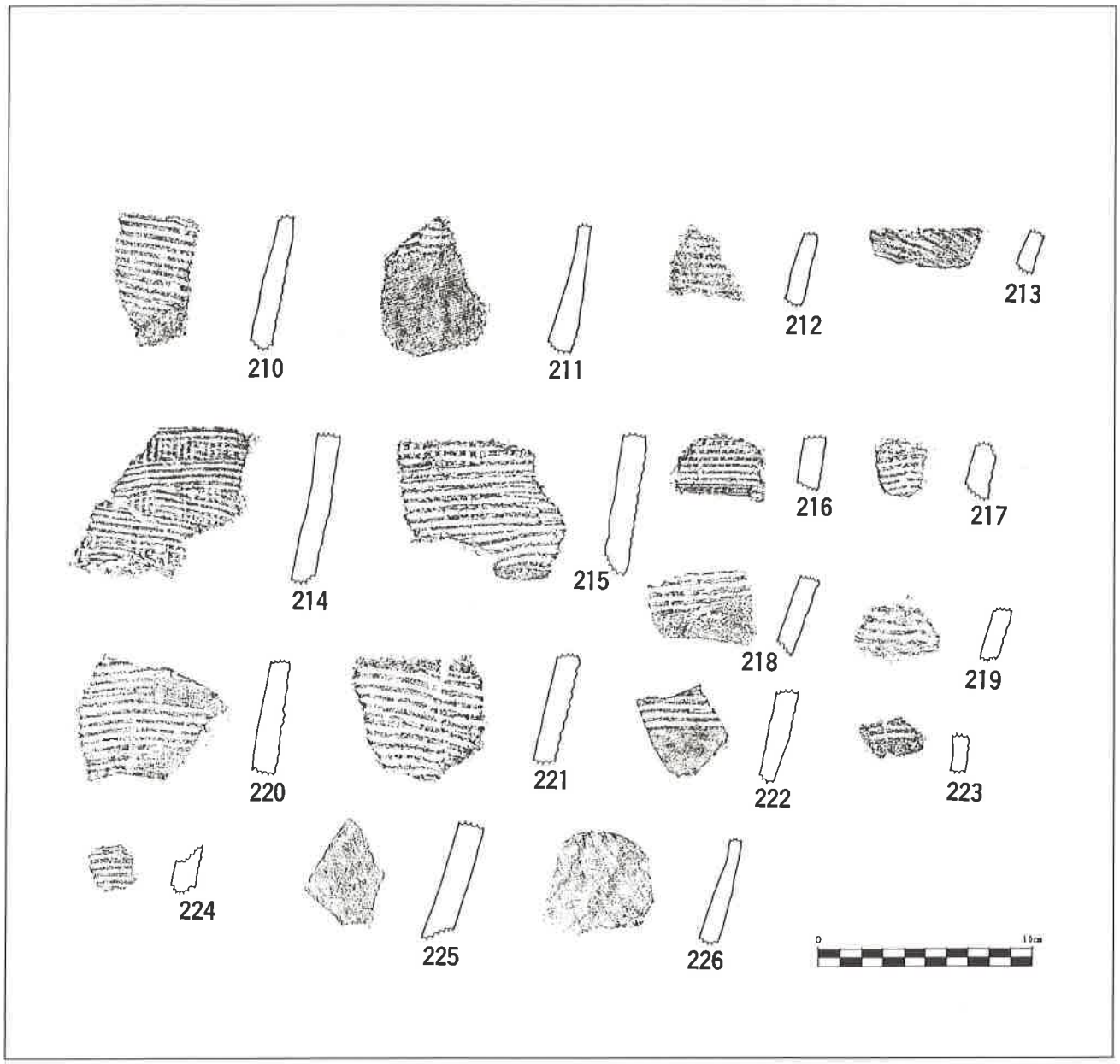
第37図　Ⅲ類土器（Ⅲ層）



第38図　Ⅲ類土器（Ⅳ層）

4．Ⅴ類土器（第40図）

227～242はすべて，Ⅳ層出土遺物である。227～233は口縁部破片で，口唇部に刻み入れ，口縁部には条痕文を施文する。頸部には刺突もしくは刻みを入れる。234～240は胴部破片である。胴部は縦位に撚糸を網目状に施文する。234は横位の条痕文が施文されている。241～242は底部破片である。底部は多少，上げ底気味になる。



第39図　Ⅳ類土器（Ⅲ・Ⅳ層）

第３節　出土石器

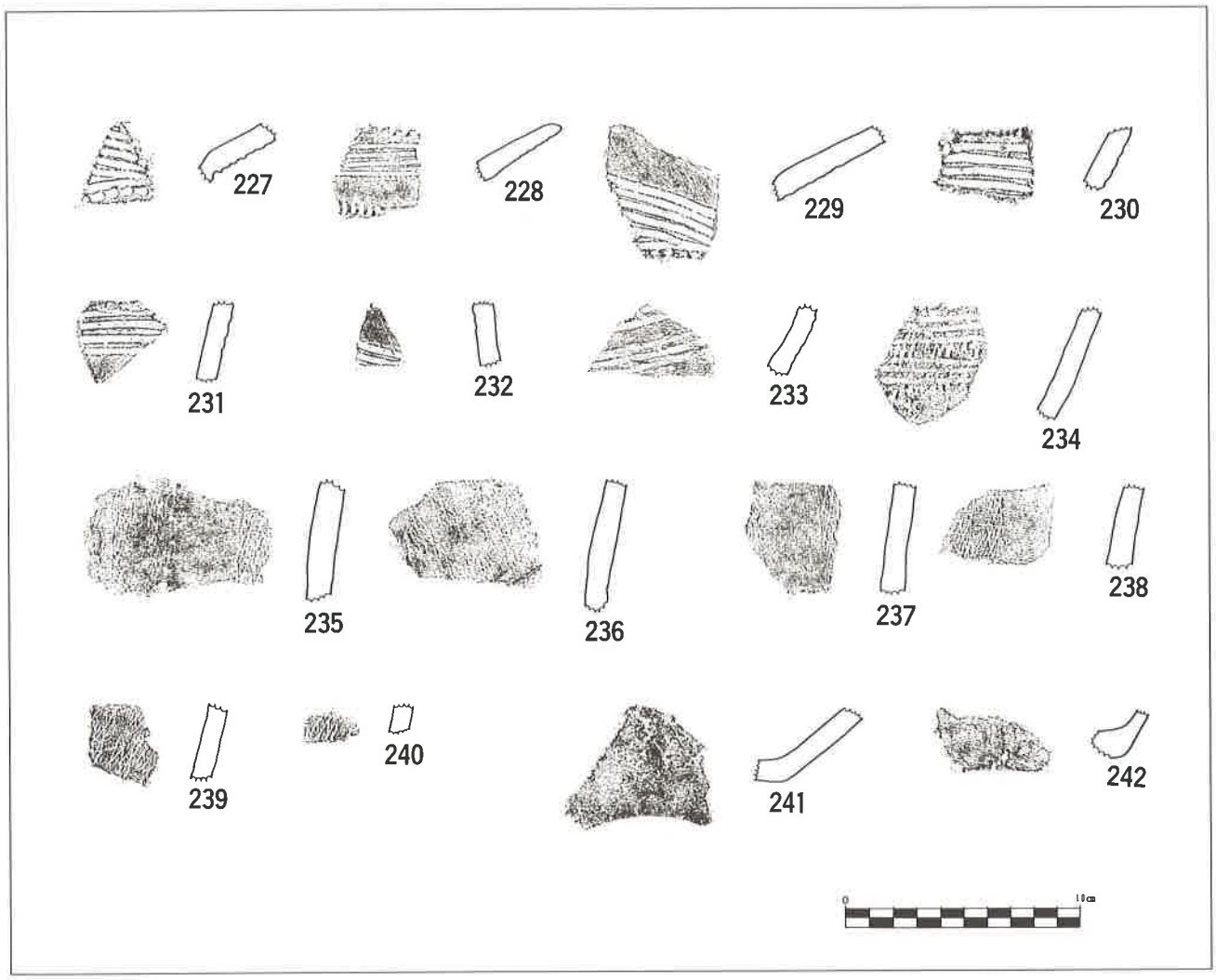
１．石鏃（第41～43図）

243～255はⅣ層出土の石鏃である。石材は様々で，243～247は黒耀石Ａ,248～250・252はガラス質流紋岩，251・254・255はチャート，253は蛋白石製である。249が最も重く４gある。251は石鏃未製品である。256～265はⅤ層出土の石鏃である。256～258・261・265は黒耀石，259～260・262はガラス質流紋岩，263はチャート，264は蛋白石製である。

Ⅳ層出土の石鏃もⅤ層出土の石鏃も抉りが入るものや平基のものなど様々である。

２．スクレイパー（第44図）

266はⅣ層から出土した。全面に渡り調整剥離が行われ，特に長辺の一方には更に細かな剥離を入れている。この部分が歯になるサイドスクレイパーであると思われる。材質はガラス質流紋岩である。重量は91g。



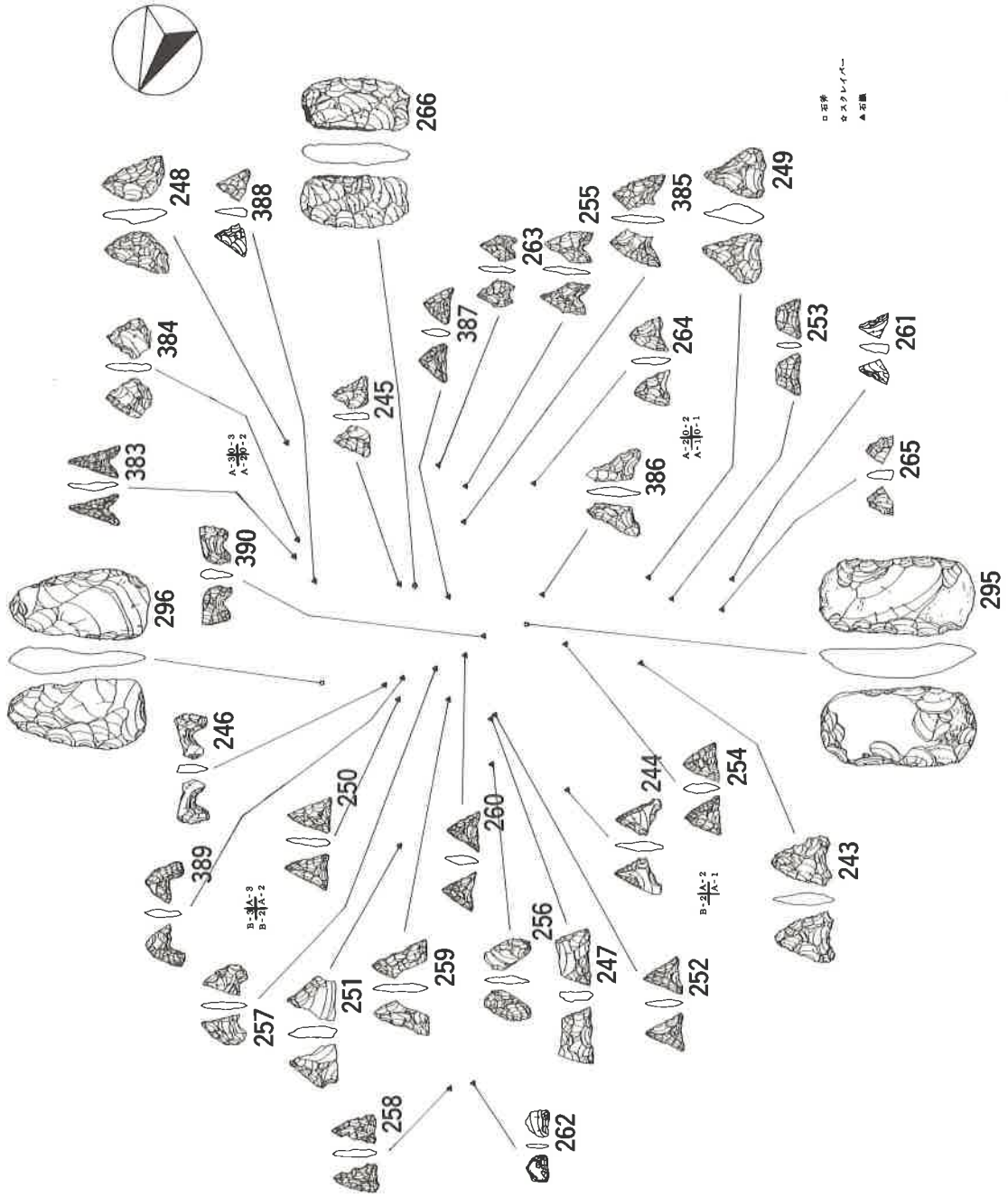
第40図　Ⅴ類土器（Ⅳ層）

3．石核・剥片等（第45～47図）

267～268はⅣ層出土の石核である。267はガラス質流紋岩の原石を用い，主に一方の面から剥片を剥離している。268は黒耀石Ａ製の石核で，黒耀石原石から剥離された剥片を元に，小さな剥離が行われている。黒耀石の自然面が残っており，これを剥がす目的の調整剥離痕の可能性もある。両石核とも原石の自然面を残している。269～284は剥片である。269～271・273・277～278・282はガラス質流紋岩の剥片で，272,274～276,280,281,283は黒耀石A,284は黒耀石Ｃ,279はチャートである。270～272,275,281,283は原石の自然面を残す。

4．石核・その他（第47図）

すべてⅣ層出土の石器である。285～286,289,291,293は石核で，すべて原石自然面を残している。287は原石の自然面を残した剥片である。原石の調整する際に出た剥片であろう。285・287・293はガラス質流紋岩で，286・289・291は黒耀石Ａである。288はガラス質流紋岩製の石槍であると思われる。縦長剥片を使用し，剥片の打点部分を基部にして細かな調整剥離を行い，尖端部も調整を行い作り出している。長さ約４㎝，重さ６gである。290は，取り出された縦長剥片の長辺に二次調整を行い，サイドスクレイパーとしている。292も両面を二次調整している。294は翡翠製のもので，全体を研磨している。恐らく装飾品として使用されたものであろう。



第41図　Ⅳ V 層出土石器分布図

5．石斧（第48図）

295～296はⅣ層出土のものである。295は頁岩製の石斧で，母岩から剥離された大きな剥片を用い，周囲に剥離を行い調整したものに刃部と基部を研磨して作り出している。重量は408gで，長さ13.8cm，幅７cm，厚さ2.8cmを計る。296も頁岩製で，剥離された大型剥片の周囲を二次調整して成形し，刃部などの研磨は特に行なわない。重量は151gで，長さ12.4cm，幅6.2cm，厚さ2.25cmを計る。

6．磨石・敲石（第49～50図）

297～304,306～310はすべてⅣ層からの出土である。298,299,302,306,307,309は，磨石である。最大のものは738gで，最小は150gである。表面の観察により磨面は，ほぼ両面を使用しているが297,309は例外である。302,310は表面が打撃により剥離痕が残されており，敲石の可能性がある。300,301,308,310は磨面が観察できなかったが，恐らくは磨石であると思われる。磨石と敲石併用の石器は，297,303,304である。平な両面を磨面に使用し，側面を敲きに使用している。305は角状の石器で恐らく敲石であろう。

7．石皿（第51図）

311～314はすべてⅣ層からの出土である。311,313,314は石皿で，すべて片面だけの使用である。311は重量が10.4kgで，長さ34cm，幅23cm，厚さ10cmを計る。312は311と共伴して出土した磨石で，セット関係である。両面とも摩擦により研磨されているのが分かる。313は311と同じく大型の石皿で，重量は12.4kg，長さ38.2cm，幅21.5cm，厚さ9.1cmを計る。314は小型の石皿である。重量は5.2kg，長さ23cm，幅18.5cm，厚さ10.2cmを計る。

第４節　出土土器の分布（第52～53図）

早期の土器はⅠ～Ⅴ類に大きく分類される。その内，大半を占めるのがⅡ～Ⅴ類土器である。第52図はⅡ～Ⅳ類土器の分布を示している。第53図はⅤ類である。それぞれ大きく分布の隔たりは無いが，Ⅲ類土器は他の土器とは分布が異なるように思える。Ⅱ・Ⅳ～Ⅴ類土器は同一分布のようであるが，Ⅱ類土器とⅤ類土器は分布が同じように思える。

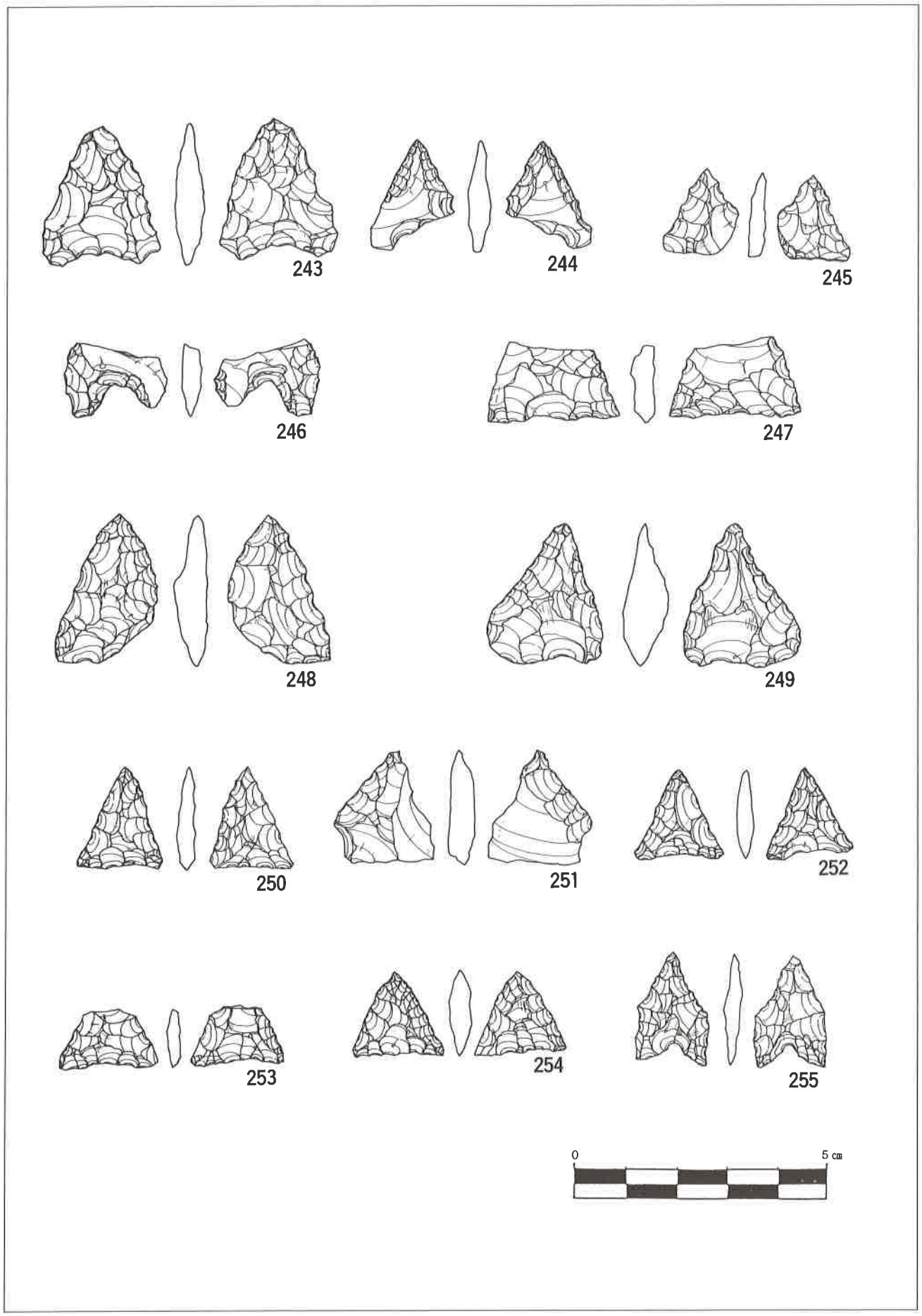
第５節　縄文時代早期の遺構

縄文時代早期の遺構は，集石遺構がSS－１号からSS－４号まで４基と溝状遺構（SD－１号）が１基確認された。

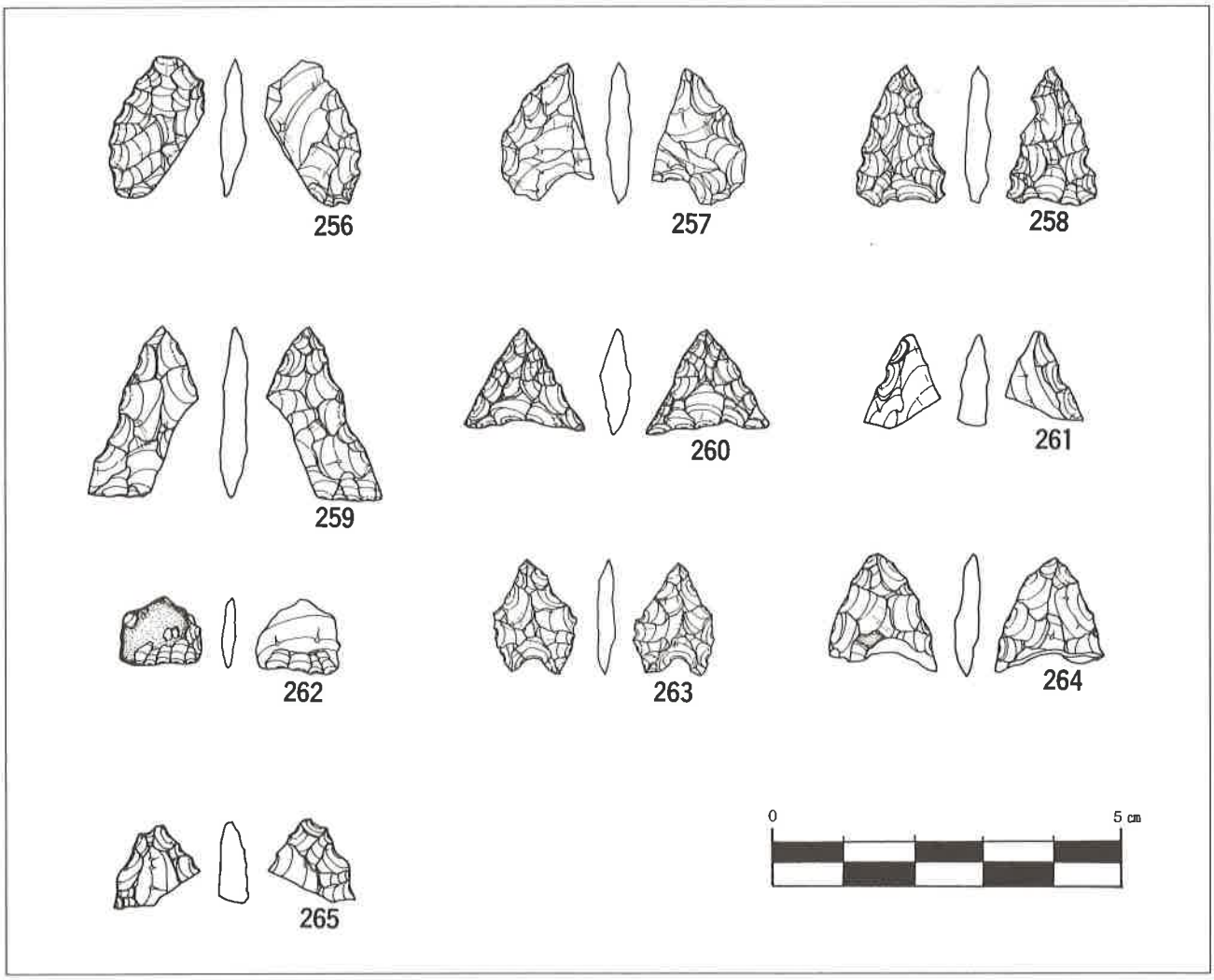
1．SS－１号（第55～57図）

SS－１号は掘り込みは余り無く，地面にばらばらと散乱した状態で検出された。しかし２基の集石遺構があり，中身を取り出す際に崩された可能性もある。そこで出土遺物を見てみると，土器はⅢ類・Ⅳ類土器が検出されている。恐らく，Ⅲ類土器の集石とⅣ類土器の集石があったのであろう。この２つの集石遺構が同時に使用されたのか，それとも時期差があるのかはっきりとはしない。しかしSS－２号でも同様にⅢ類・Ⅳ類土器が検出されていることを考慮すると，同時期の所産の可能性も大いにある。

315～333は遺構内出土遺物である。315～319,321～324はⅣ類土器で胴部から底部付近の破片で



第42図　Ⅳ層出土石器（一）



第43図　Ⅴ層出土石器

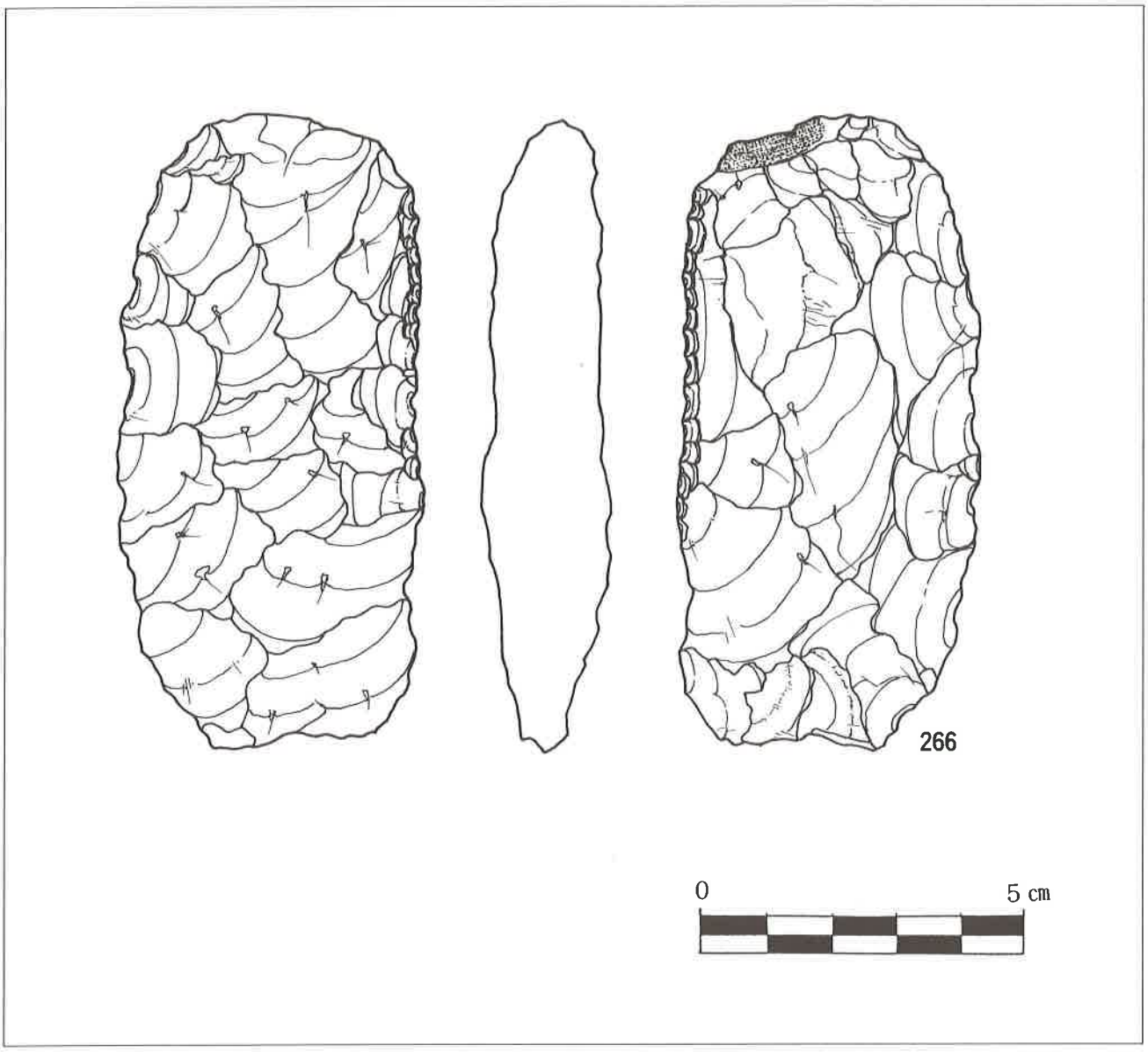
ある。文様は横位及び縦位に貝殻条痕文を施文している。破片などから少なくとも２個体分あるようだ。320はⅢ類土器で，胴部破片である。山型押形文を施文している。325は石核で，石材はガラス質流紋岩である。326～332は剥片である。石材は329がガラス質流紋岩で，その他はすべて黒耀石Ａである。333は黒耀石Ａ製の石鏃である。

２．SS－２号（第58～60図）

SS－２号は掘り込みが浅く，直径約60㎝の小さな集石である。すぐ横では，磨石と共にほぼ一個体分のⅢ類・Ⅳ類土器が検出された。334はⅢ類土器で，口縁部から胴部にかけての破片である口唇部平坦面に山型押形文を施文し，胴部にも全体に山型押形文を施文する。335・336はⅣ類土器である。器形は円筒形を呈し，口縁部から胴部まで横位の貝殻条痕文を施文している。337は磨石である。両面は磨ることにより綺麗に研磨がなされ，肉眼でもはっきりと判別できる。また，側面は敲きにより敲打痕跡が残る。338・340は黒耀石Ａの剥片である。339・341は石鏃である。339が黒耀石Ａ,341がチャート製である。

３．SS－３号（第61図）

SS－３号は，掘り込みのある直径約１ｍの集石遺構である。中心部には比較的小さな板石を敷き



第44図　Ⅳ層出土石器（二）

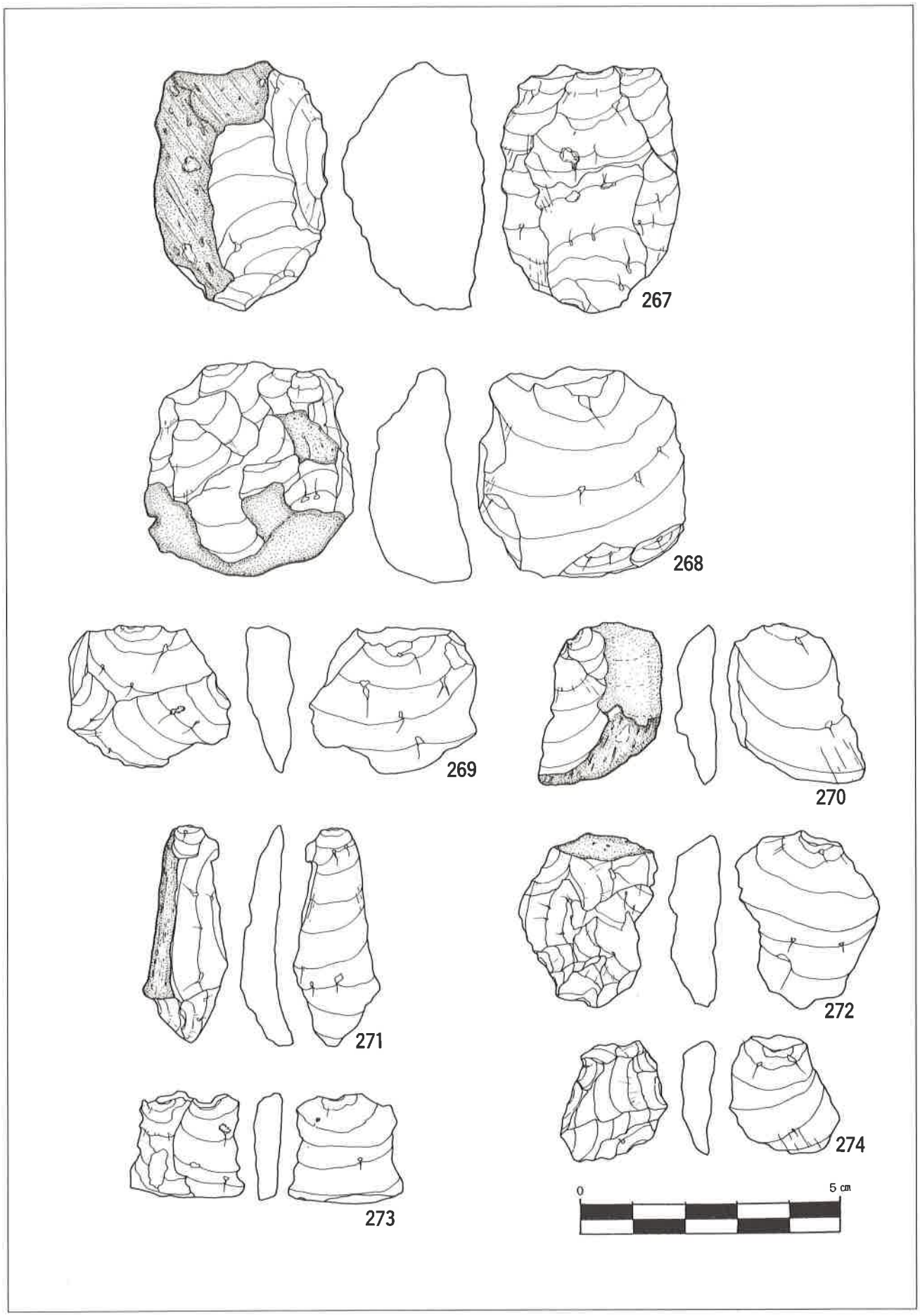
詰め，周囲には比較的大きな石を配置している。小さくて図化していないが，黒耀石剥片と，Ⅱ類土器が検出された。この集石遺構はⅡ類土器の分布と重なることからして，恐らくⅡ類土器の時期のものであろう。

4．SS－4号（第62図）

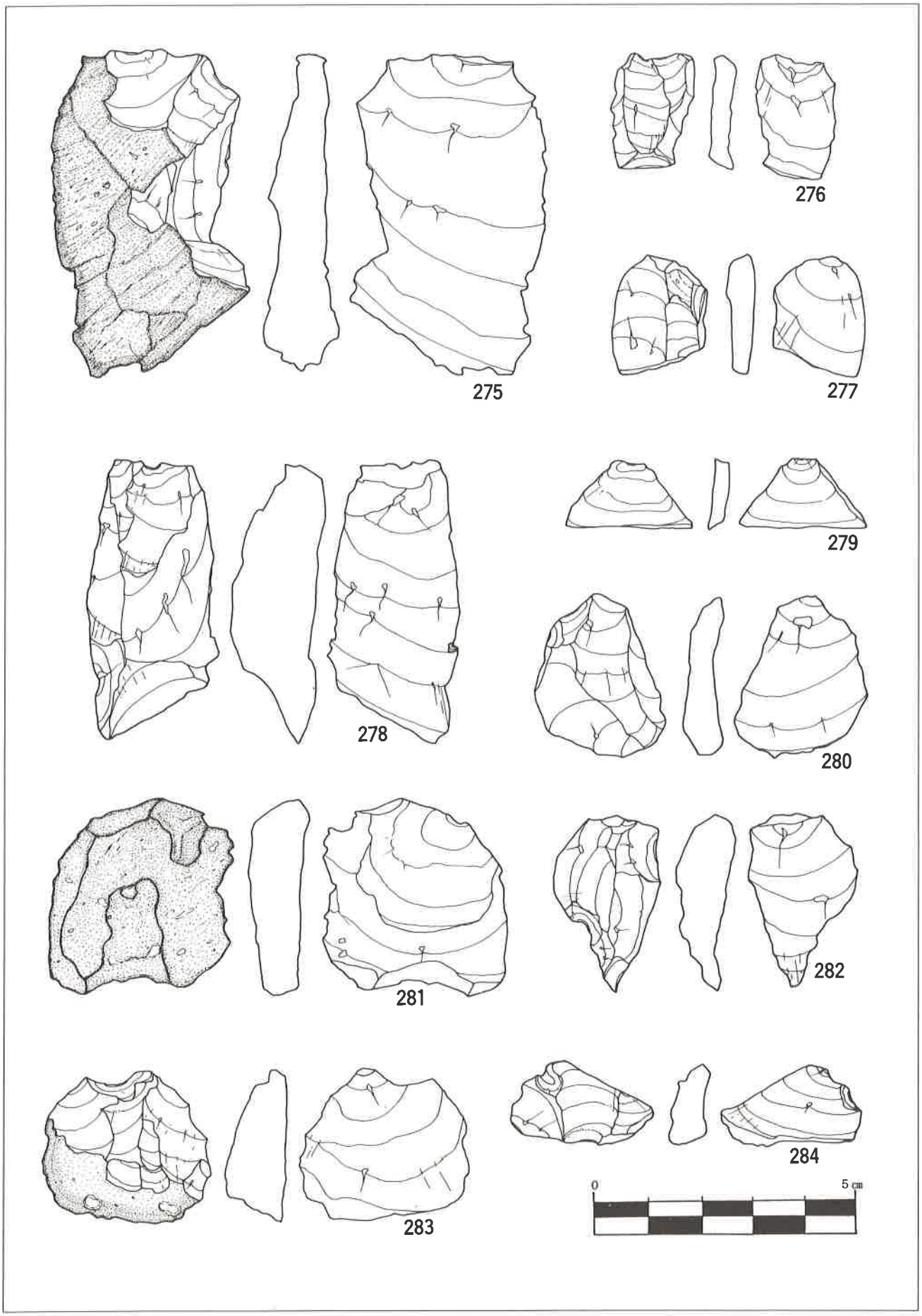
SS－4号は他のSS－1～3号とは異なる。直径1mの集石は，検出面から約30cmの掘り込みを持ち，掘り込みの落ち込みに添って大きな板石を敷き詰め，その上に拳大の礫を敷き詰めている。遺物としては，黒耀石Aの原石が混入していたが，その他の遺物は検出できなかった。土器の分布からするとV類土器が該当する。恐らく，V類土器の頃の集石遺構であろう。

5．SD－1号（第63～64図）

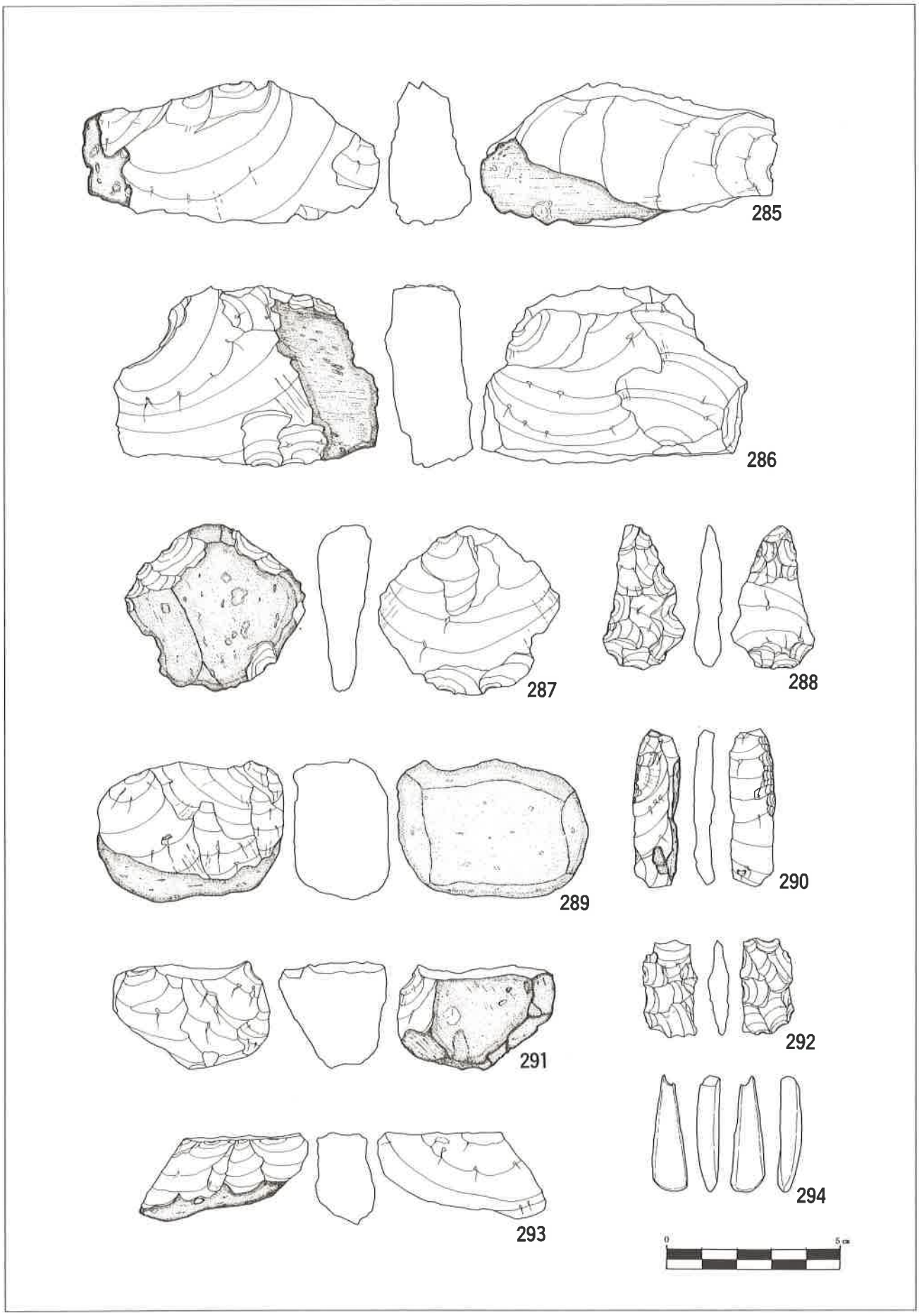
B－2区において，縄文時代早期の遺構はこの溝状遺構1つだけである。ほぼ南北に伸びており，溝の南側の立ち上りが検出できなかった。検出できた部分の長さは，約6mで検出面からの深さは



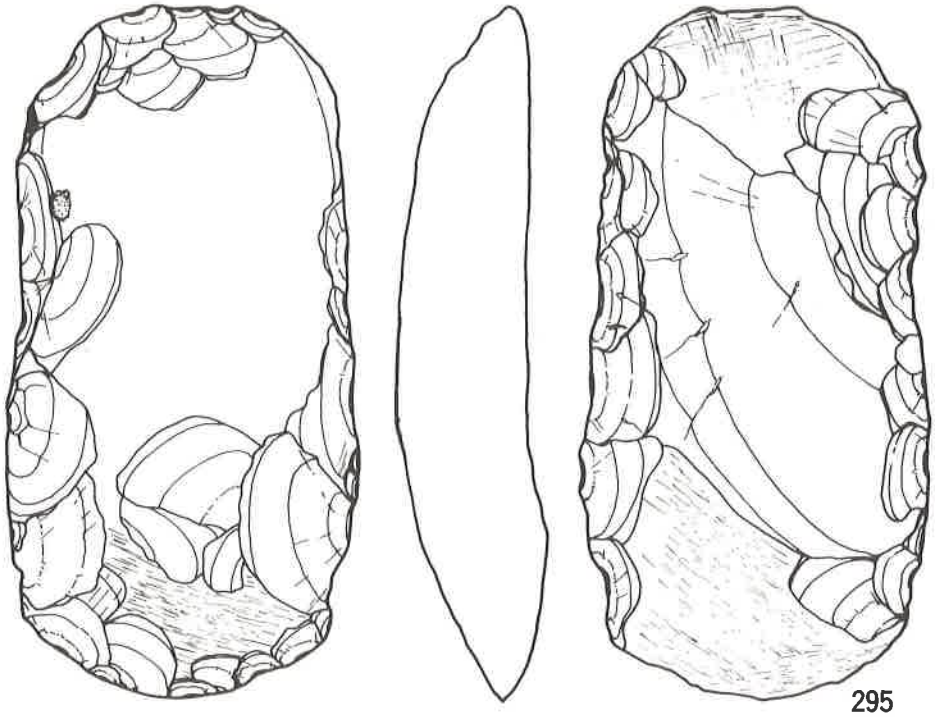
第45図　Ⅳ層出土石器（三）

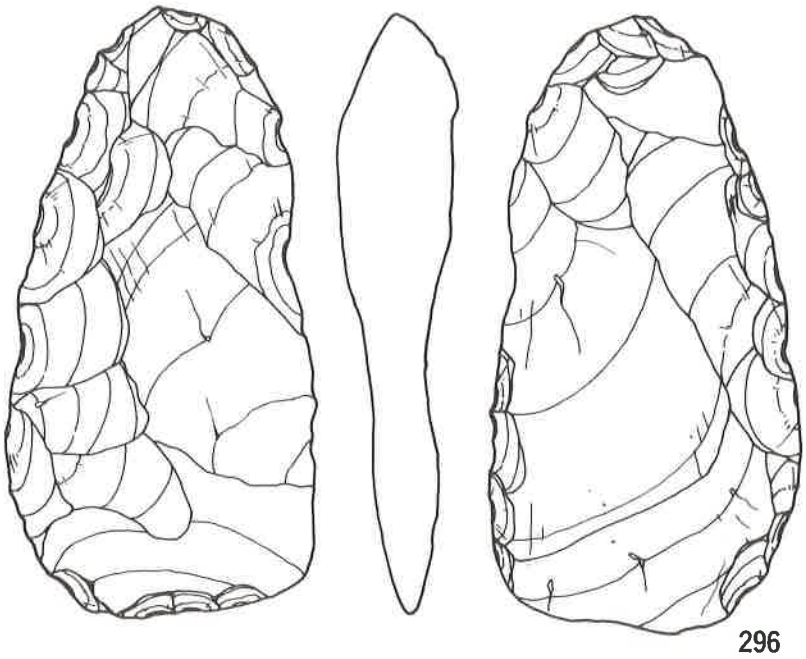


第46図　Ⅳ層出土石器（四）

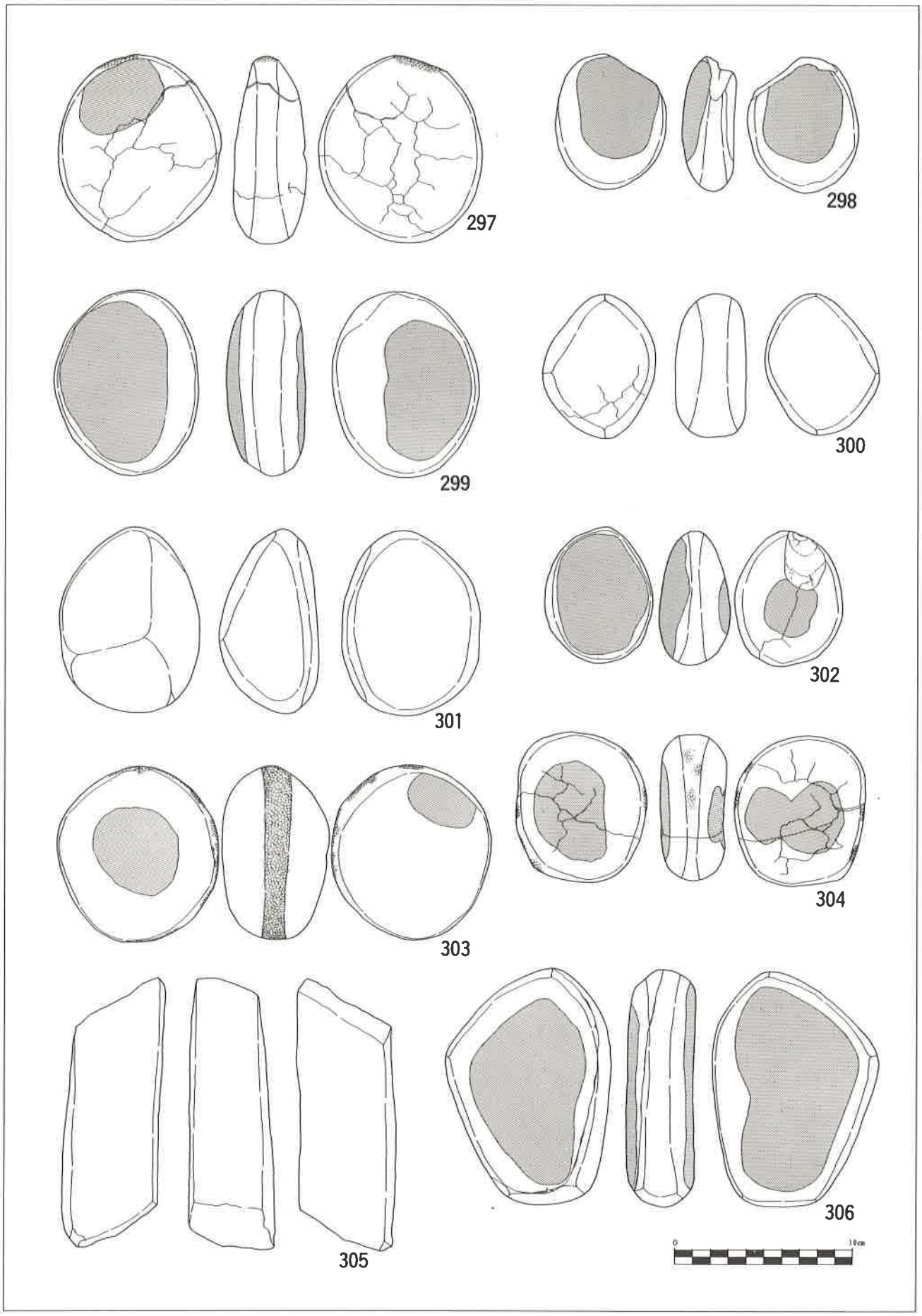


第47図　Ⅳ層出土石器（五）

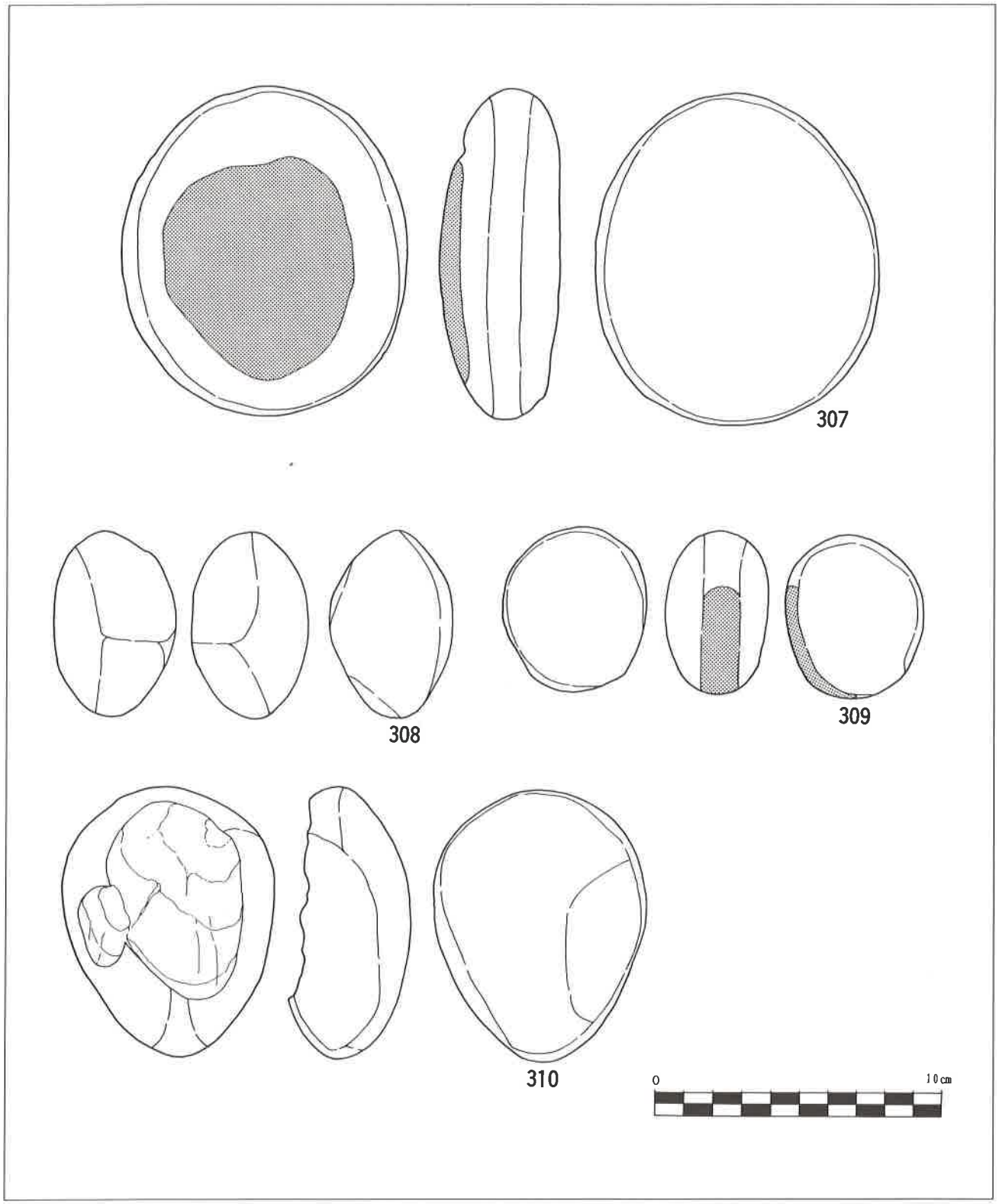




第48図　Ⅳ層出土石器（六）



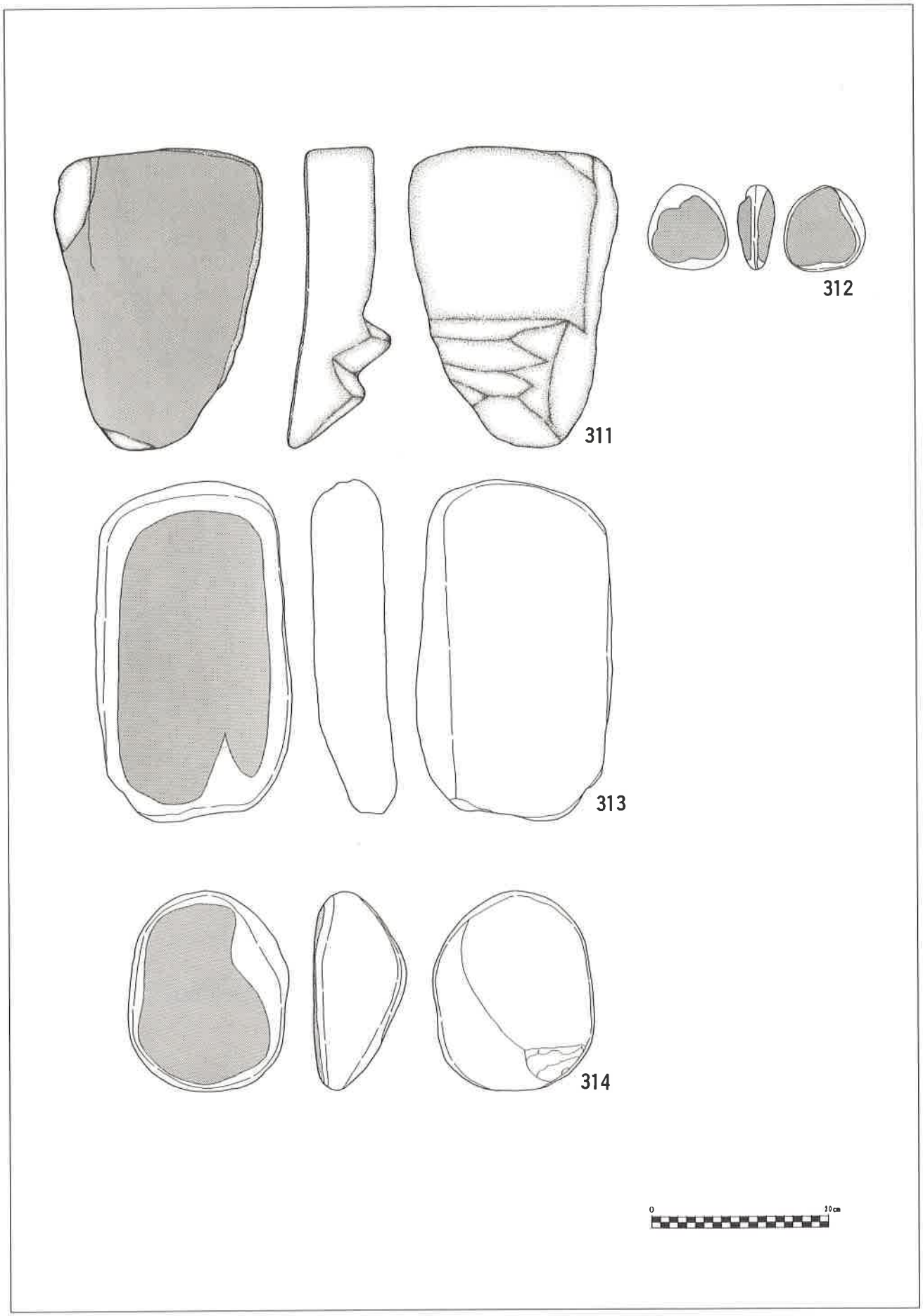
第49図　Ⅳ層出土石器（七）



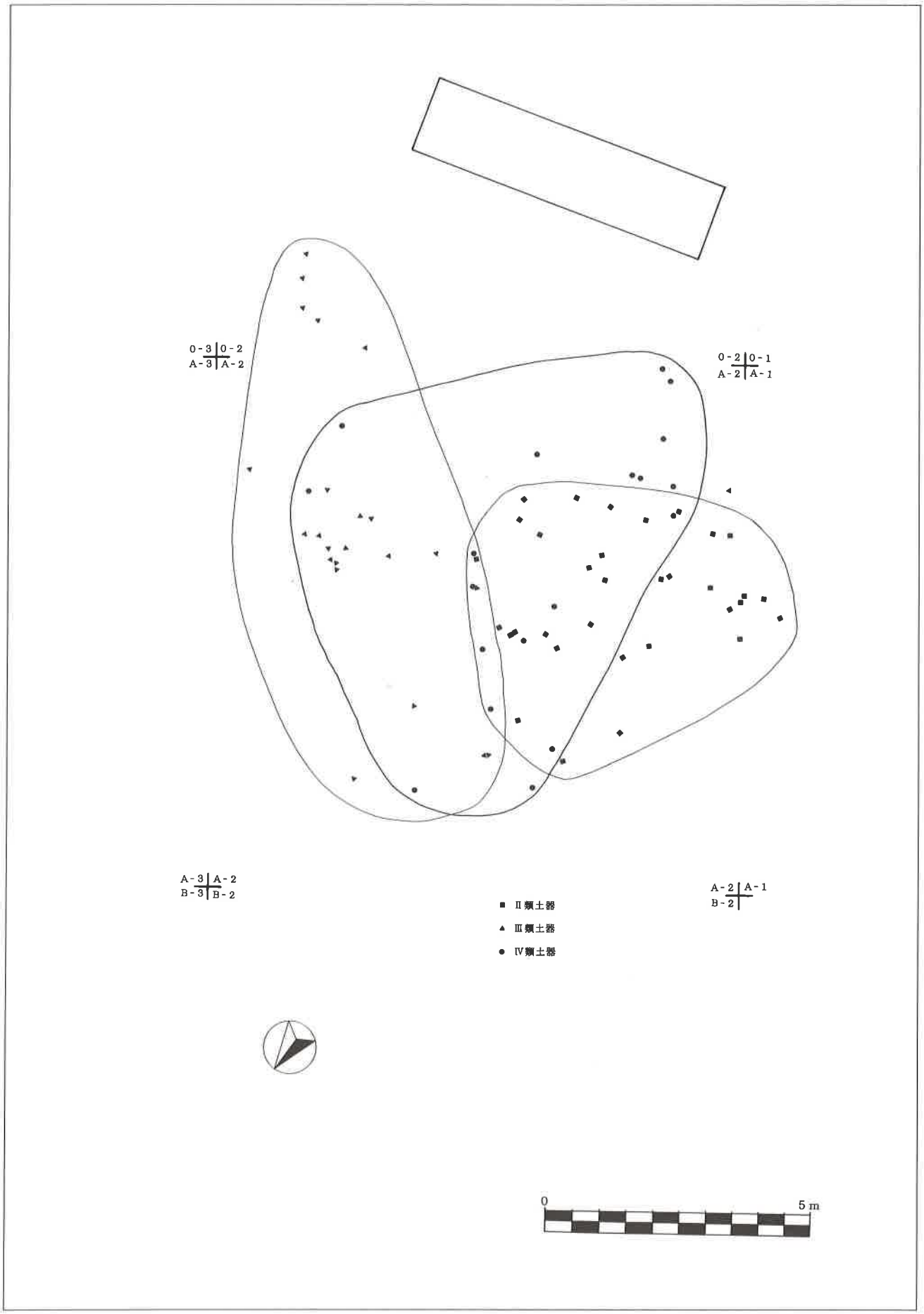
第50図　Ⅳ層出土石器（八）

約40cmである。幅は約70cmで，溝の南半分の埋土上部は火を受け，固く締まり多量の炭化物が検出された。出土遺物は石器だけで，土器の出土は無かった。

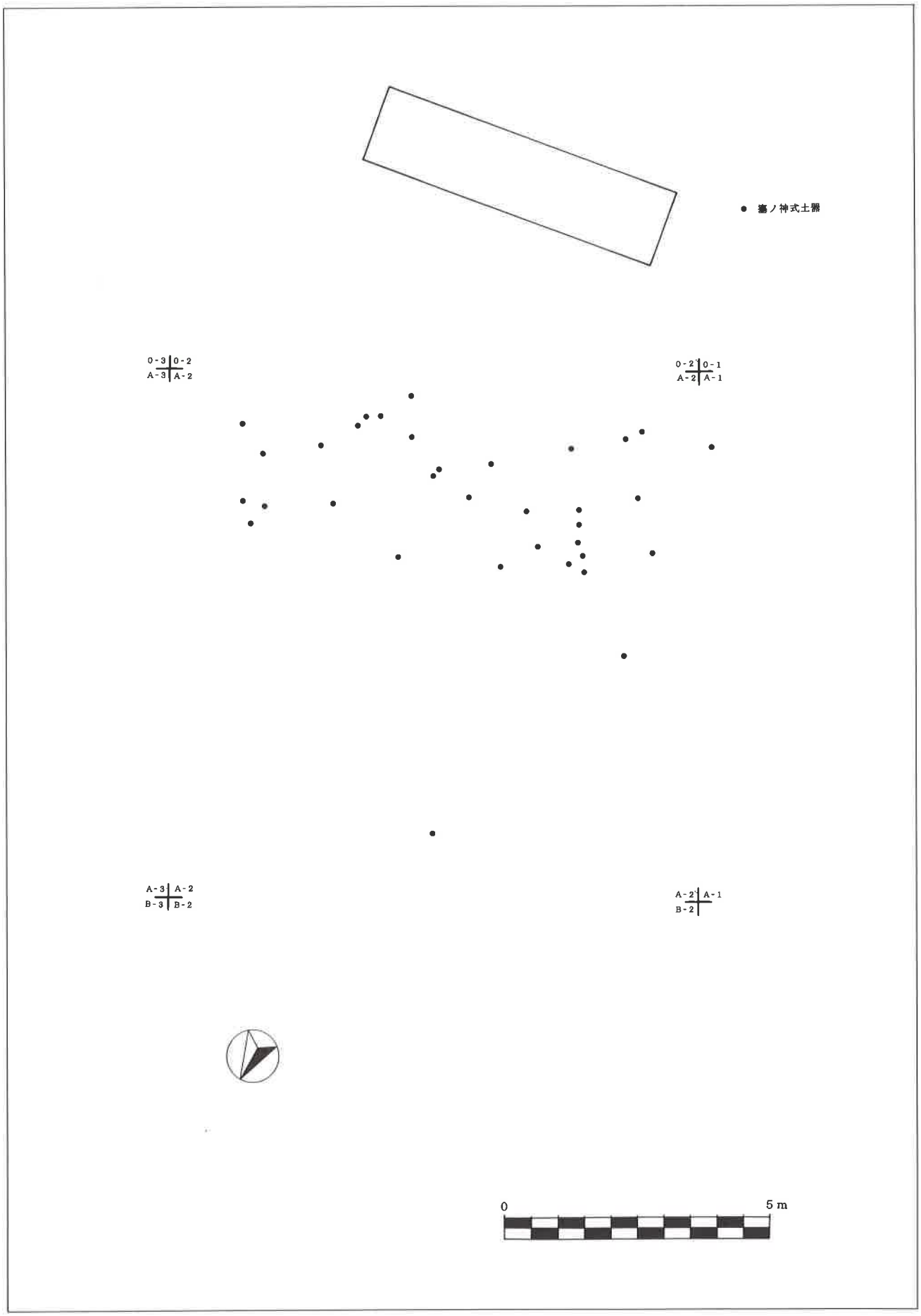
342は安山岩製の磨石である。熱を受けて，ヒビが入っている。343は凝灰岩製の石核？で母岩の周囲に調整剥離を行い，一端から比較的大型の剥片を取り出している。しかし，スクレイパーや石斧としての機能も考えられる。344はガラス質流紋岩の石核残欠か? 345・346はガラス質流紋岩の剥片である。347はガラス質流紋岩製の石鏃で，溝底部付近から出土した。



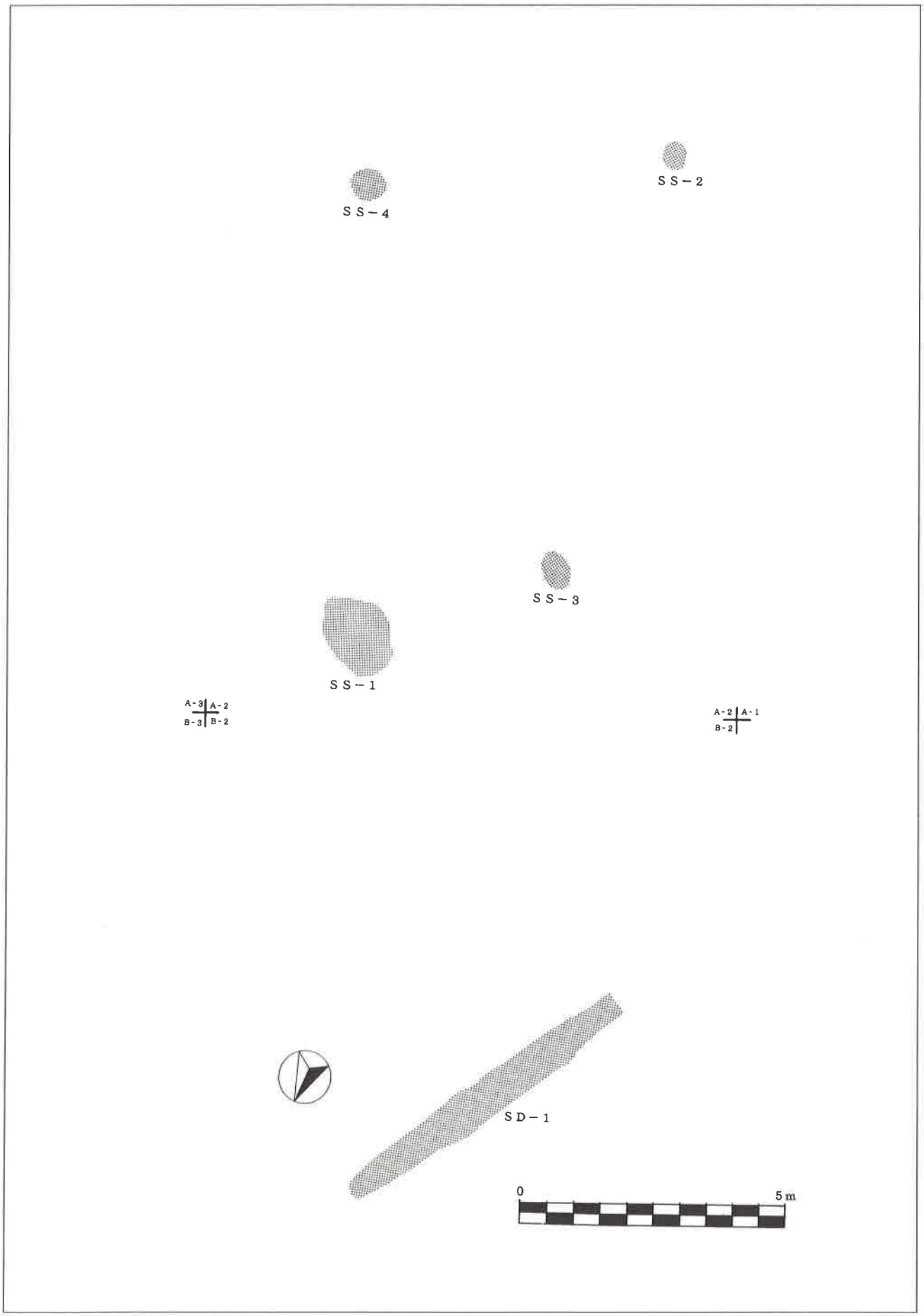
第51図　Ⅳ層出土石器（九）



第52図　Ⅱ～Ⅳ類土器出土分布図

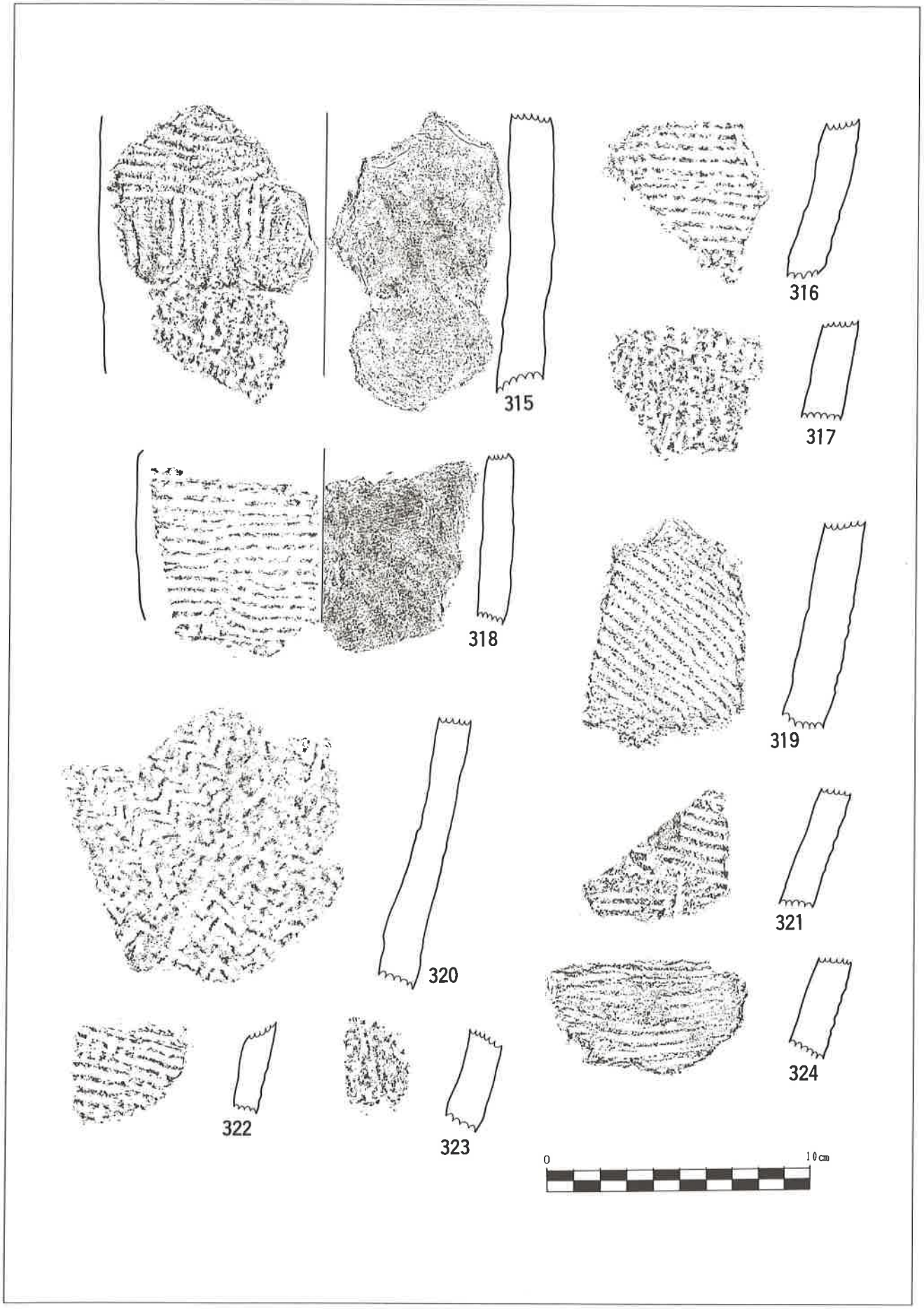


第53図　V類土器出土分布図

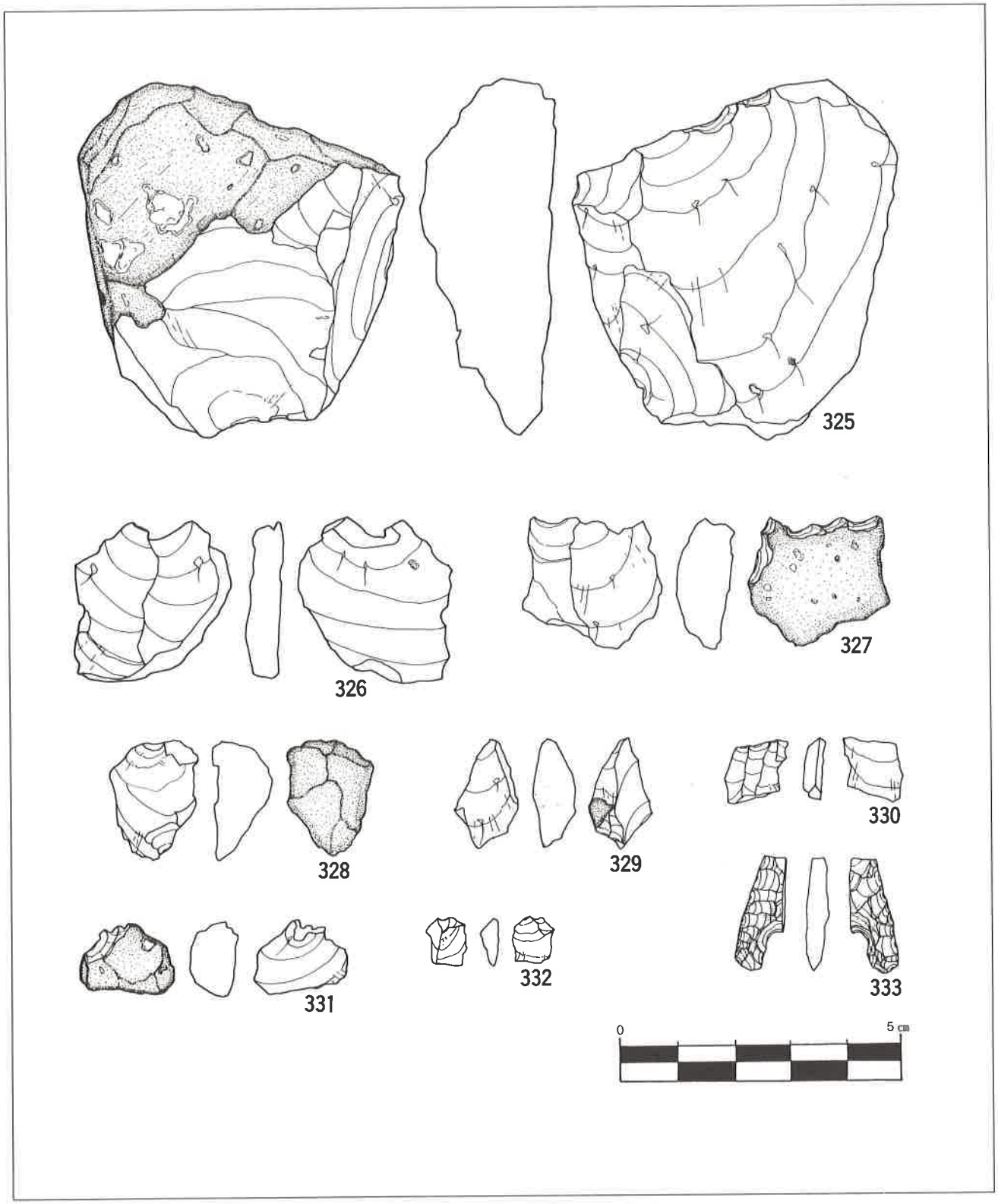


第54図　遺構配置図

第55図　SS－１号実測図



第56図　SS－１号出土遺物（一）

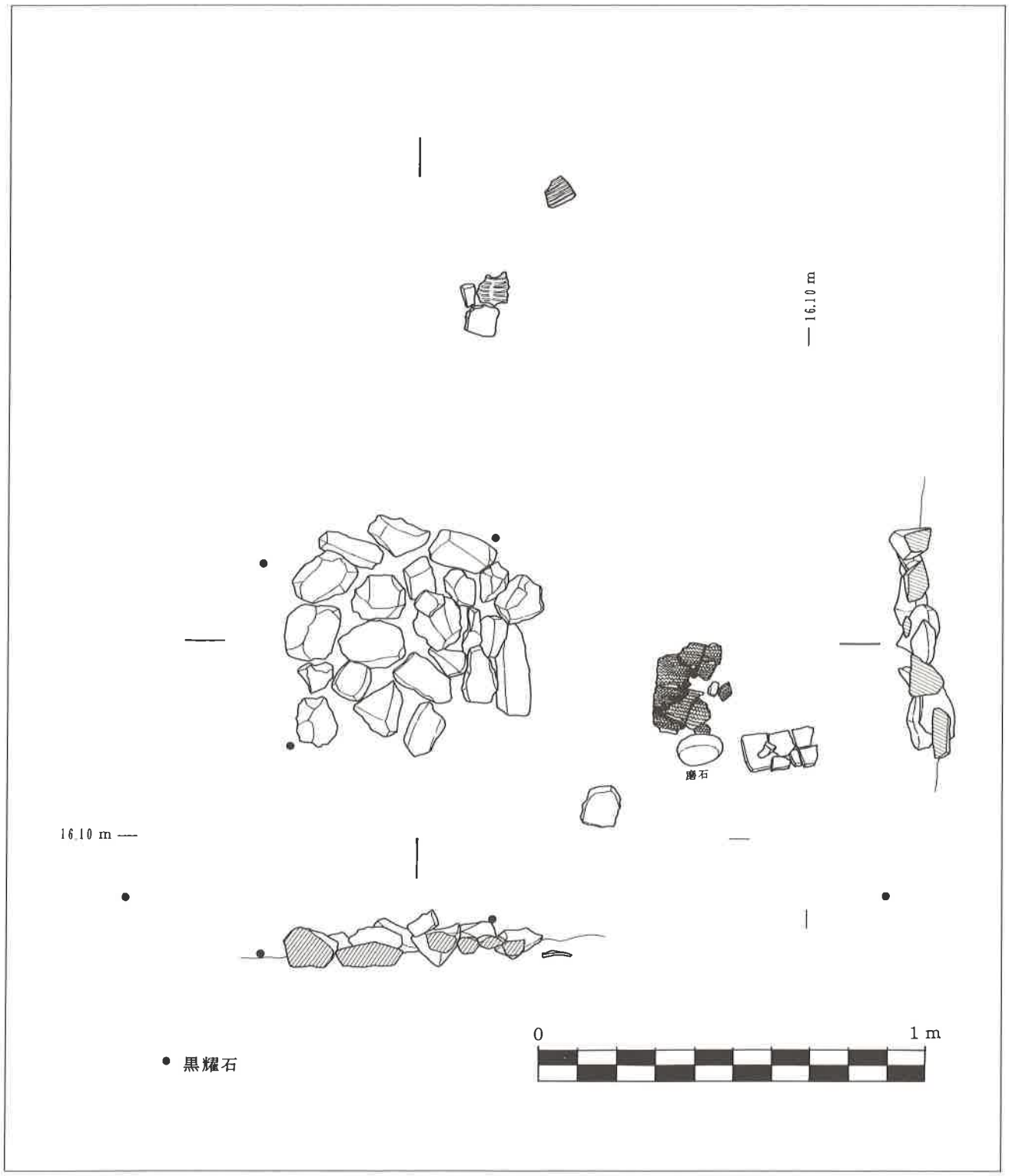


第57図　SS－１号出土遺物（二）

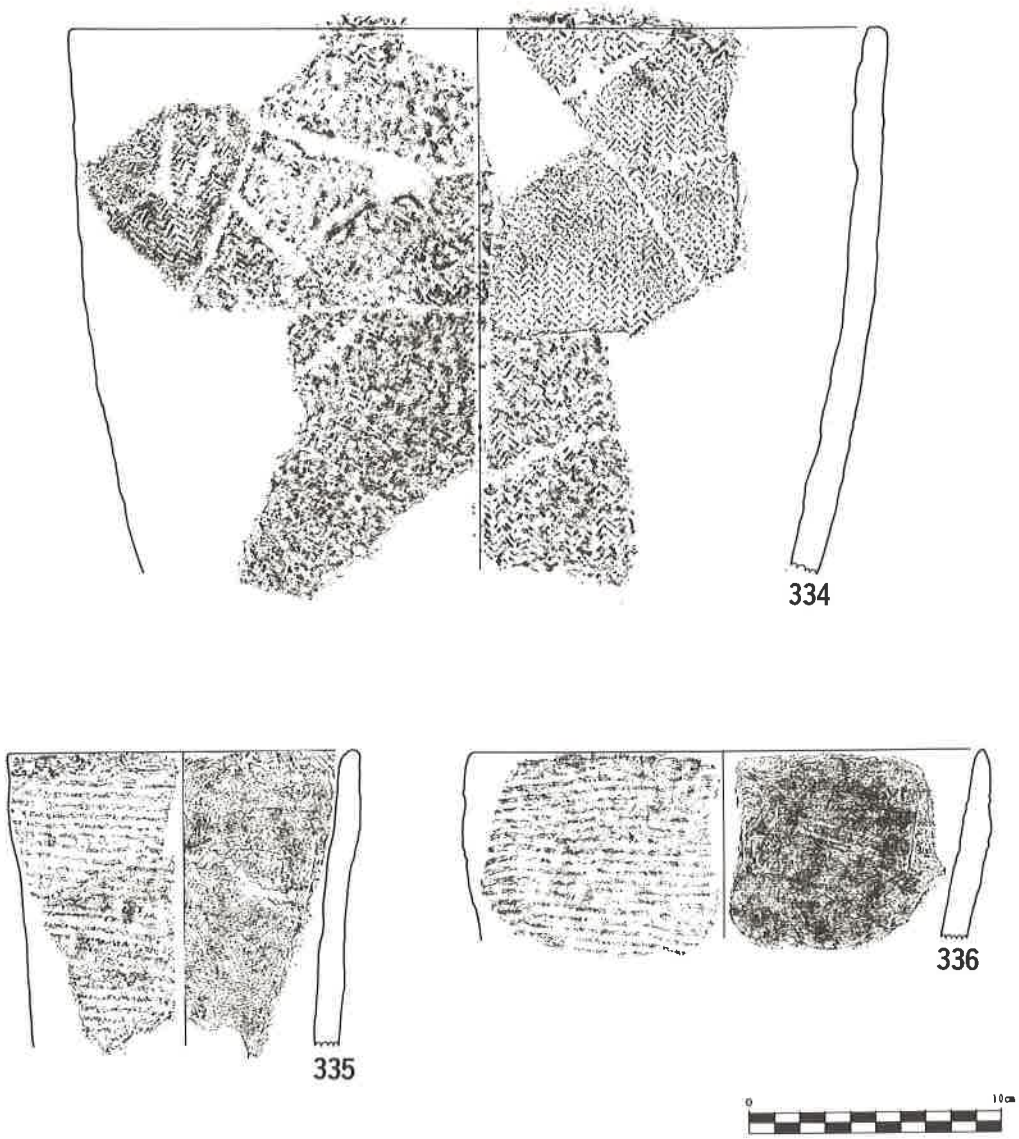
第６節　小結

縄文時代早期の遺物はⅣⅤ層を中心に検出され，分布はＡＢ地区に渡って出土した。土器はⅠ～Ⅴ類に大別されⅠ類は早期中葉の桑ノ丸式土器に該当する。162～164などがこれに当たる。文様はクシ状の工具で鋸歯状にクシ描き文を施すものや（Ⅰａ），ヘラ状の工具で沈線を逆くの字形に施すもの（Ⅰｂ）がある。162は特に西之表市の下剥峯遺跡出土のⅡａ,枕崎市奥木場遺跡のⅡａｂに

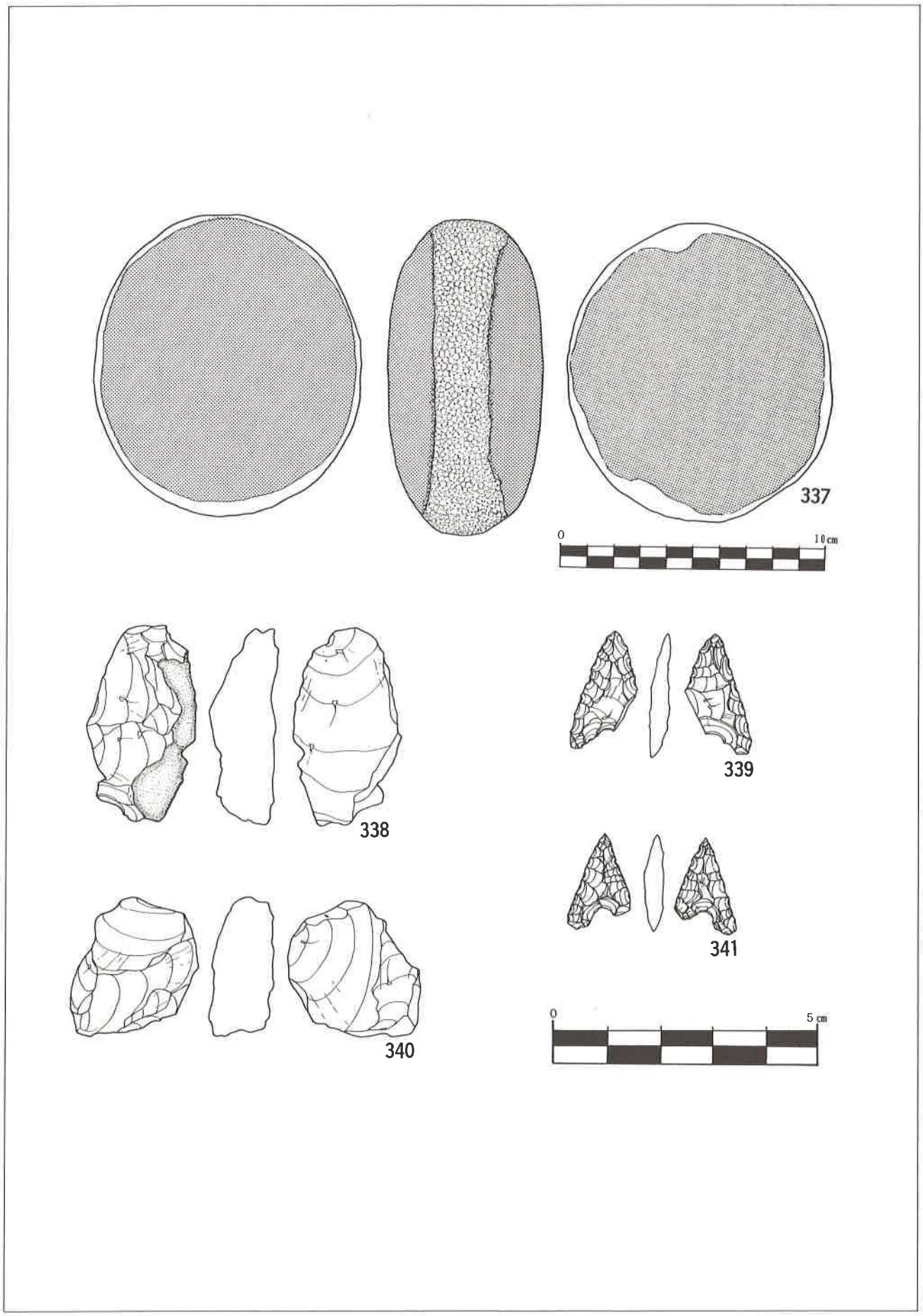
酷似している。本遺跡の163は奥木場遺跡のＩａと，164は同遺跡のＩｃと酷似している。165・189はⅡ類土器で早期後葉の手向山式土器に該当する。胴部はくの字形に屈曲し，胴部から口縁部にかけてもしくは全面に山形押型文を施すもの（Ⅱａ）と，胴部はくの字形に屈曲し，胴部から口縁部にかけてもしくは全面に撚糸文を施すもの（Ⅱｂ）とに細分される。前者は横手浩二郎氏分類の手向山１式に，後者は２式にそれぞれ該当する。190～209はⅢ類土器で，早期中葉の山型押形文土器である。円筒形を呈し，平底である。山形は横位に施文され，口縁部平坦面にも施文されている。



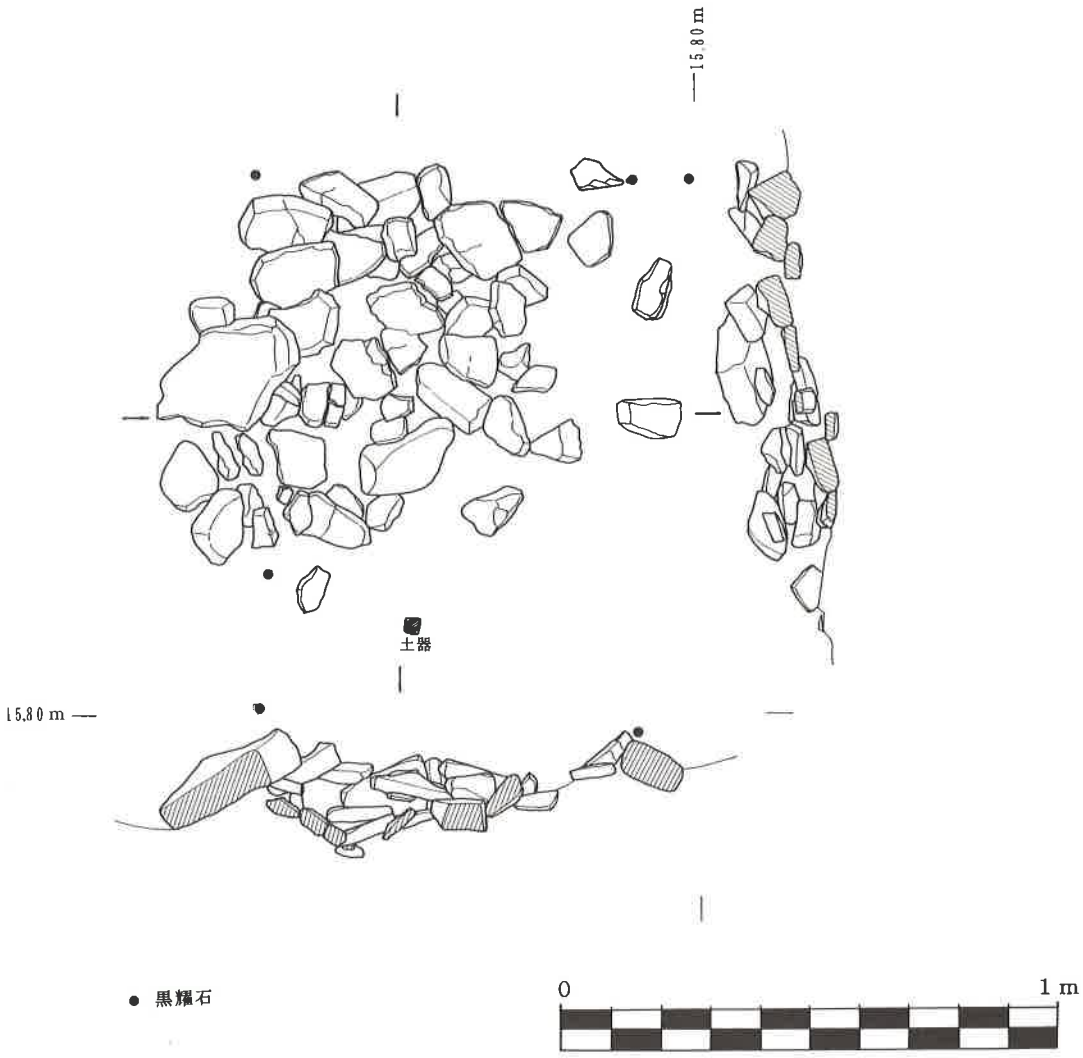
第58図　SS－２号実測図



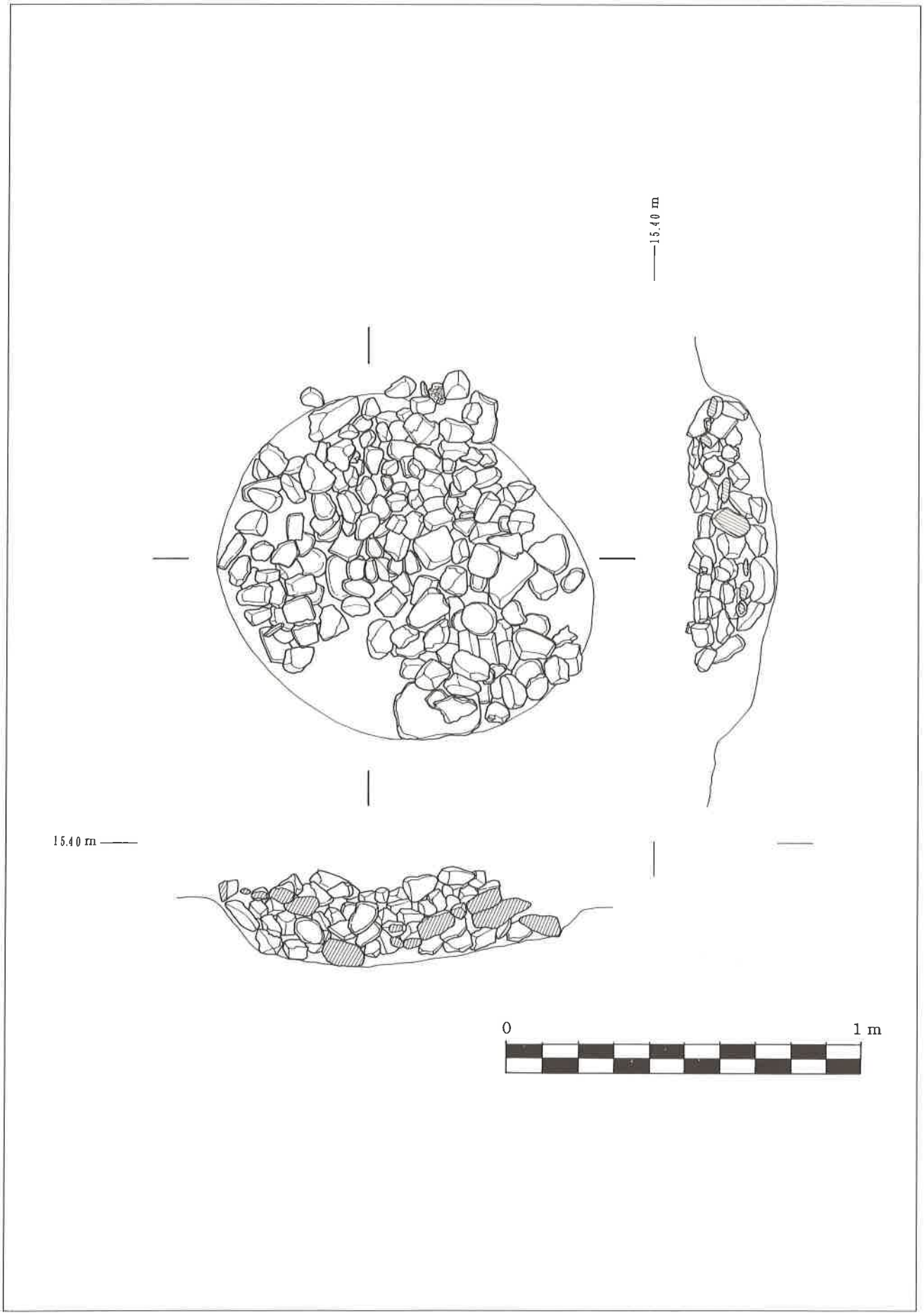
第59図　SS－２号出土遺物（一）



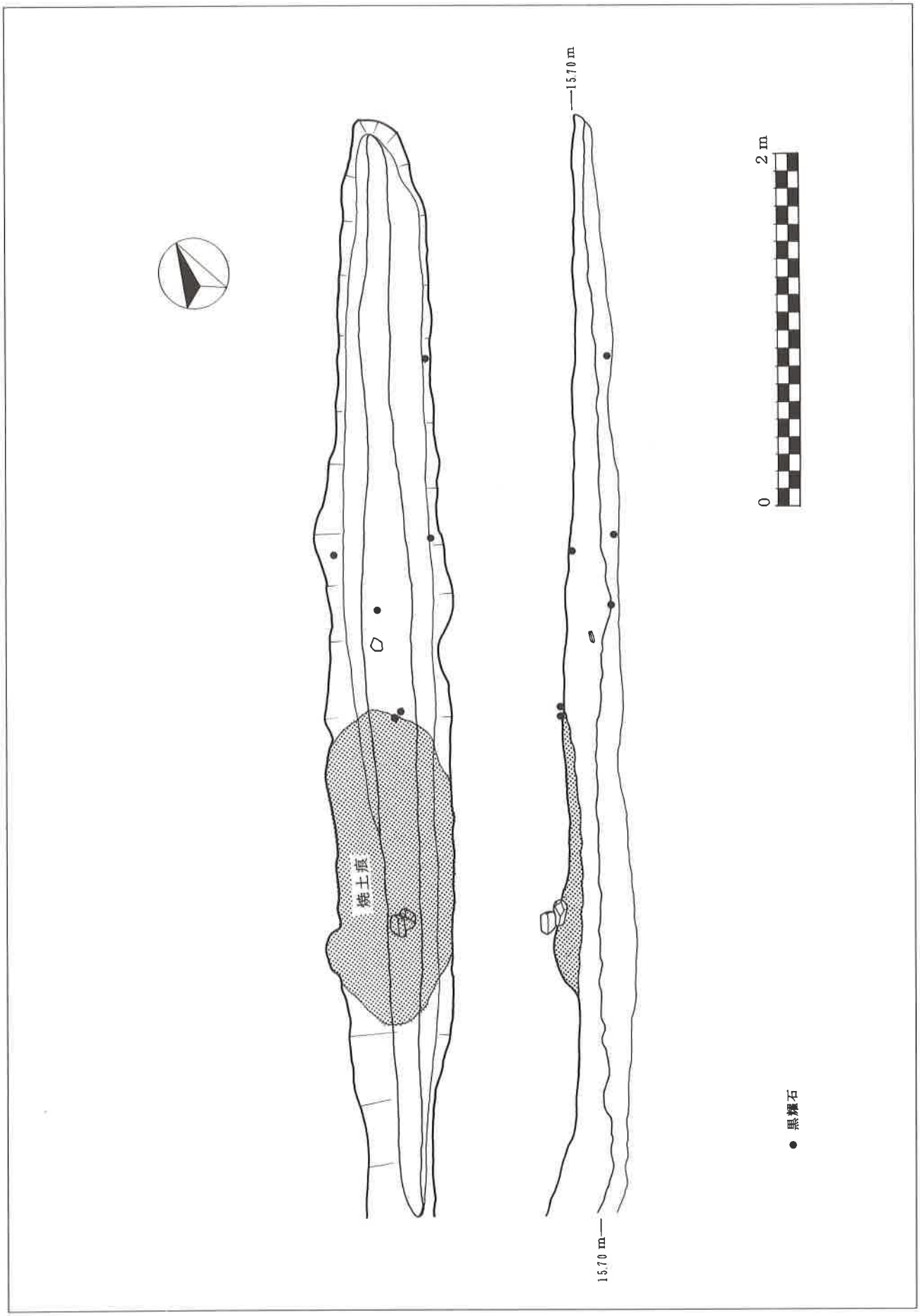
第60図　SS－２号出土遺物（二）



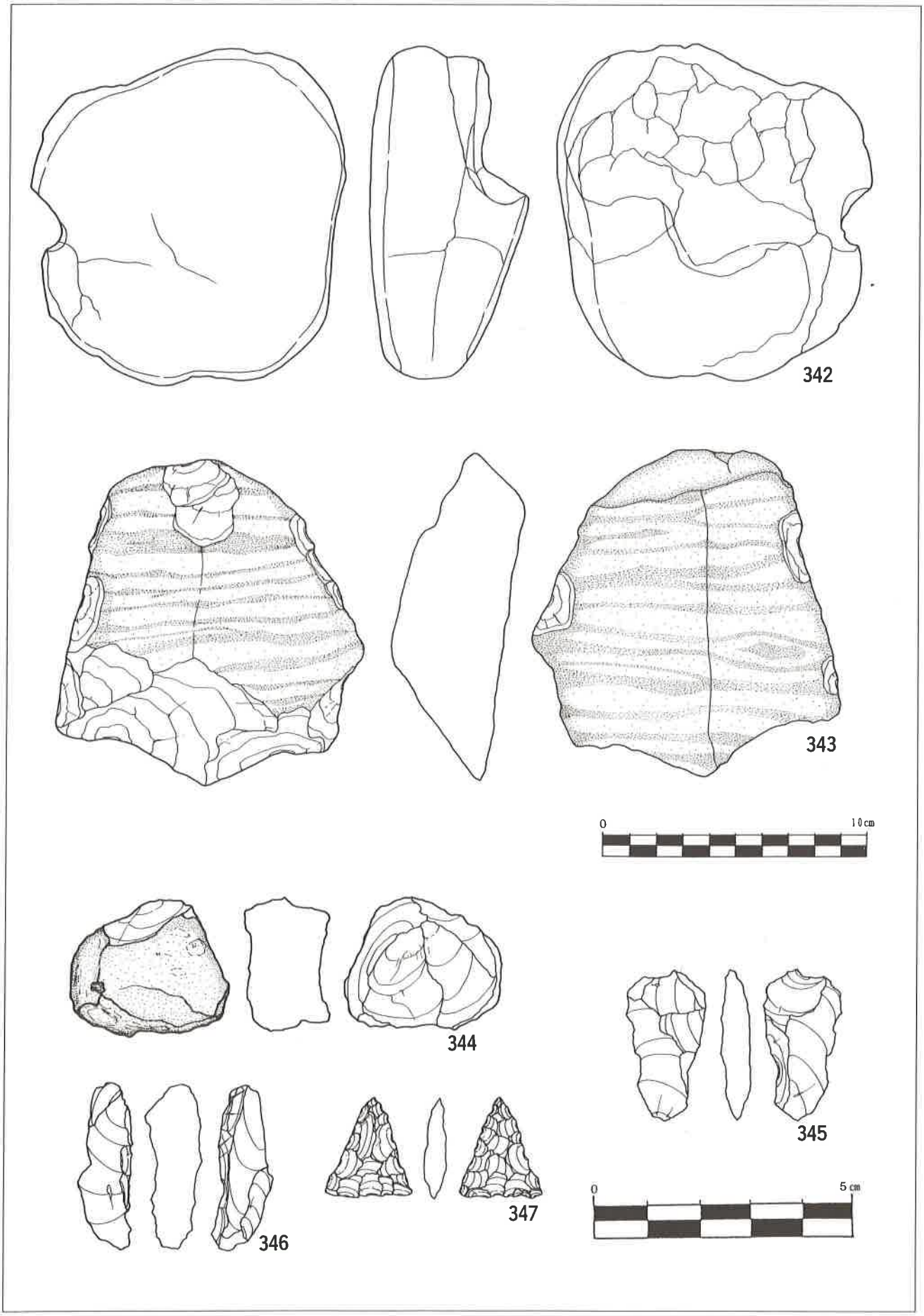
第61図　SS－3号実測図



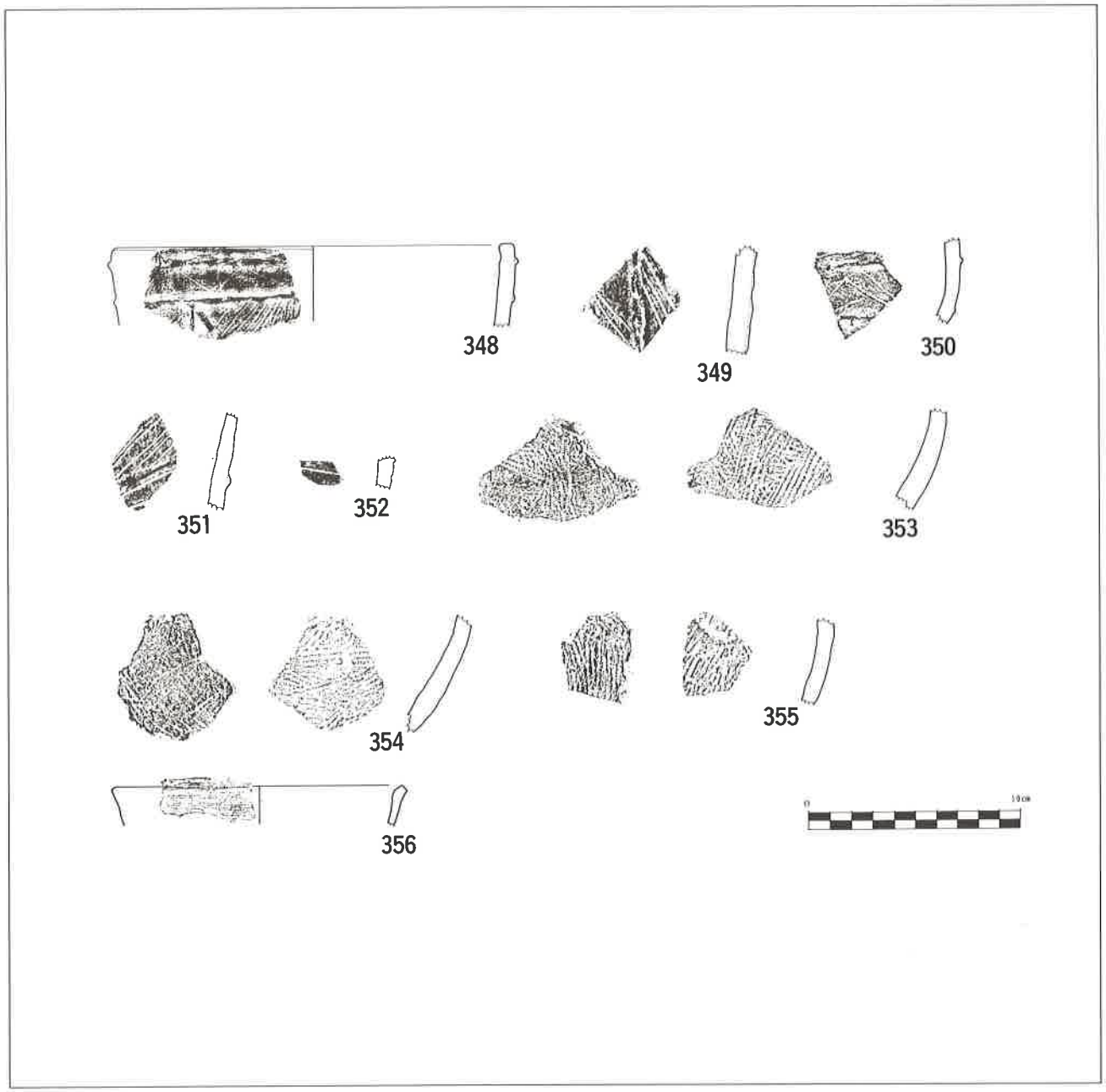
第62図　SS－４号実測図



第63図　溝状遺構実測図



第64図　溝状遺構出土遺物



第65図　Ⅵ・Ⅶ類出土遺物

210～226はⅣ類土器で，貝殻円筒形条痕文土器である。この土器は木崎康弘氏の中原Ⅳ・Ⅴ式にあたり，水ノ江和同氏の一野式土器に該当する。木崎氏は早期前葉から中葉の所産と考察しているが，現在確定はしていない。本遺跡において山形押型文土器（山形押型文土器が在地の円筒形土器文化に接触し，生まれた円筒形を呈し，口縁部が平坦な土器）とこの円筒形条痕文土器が集石遺構の中で共伴して検出されたことを考慮すると，そんなに古くなることは考えられず，時期的には早期中葉のものと考えたい。Ⅴ類土器は早期後葉の塞ノ神式土器である。河口貞徳氏の塞ノ神Aa式土器，新東晃一氏の石坂上式土器・栫ノ原式土器，高橋信武氏の塞ノ神１式土器に該当する。現在この塞ノ神式土器は貝殻文系塞ノ神式土器と撚糸文系塞ノ神式土器の時期の前後について様々な論争が成されている。型式論的にはどちらが古いのかそれぞれの意見には納得させられる合理性があるが，出土の状況の詳しい分析などから撚糸文系塞ノ神式土器が古くなるようである。本遺跡では撚糸文系塞ノ神式土器が出土しており，縄文時代早期中葉から後葉にかけての土器が出土したことになる。

第７章　縄文時代前期以降

第１節　出土遺物の概要

縄文時代前期の遺物は，アカホヤ火山灰の二次堆積層中に混じって検出された。遺構などは検出できなかった。遺物も早期・晩期の遺物も出土し，しっかりとはしていない。土器は大きくⅥ～Ⅷ類土器に大別され，石器は石鏃や剥片が殆どである。

第２節　出土遺物

遺物はアカホヤ火山灰の二次堆積層中に包含され，土器はⅥ～Ⅷ類土器に分けられた。Ⅵ～Ⅶ類土器は縄文時代前期に該当し，Ⅷ類土器は縄文時代晩期である。

Ⅵ類土器　口縁部に横位・縦位・斜位に短い粘土紐を貼付し，その突帯文（粘土紐）区切られた部分に斜位の沈線文を施文する。器形は砲弾形を呈するようである。

Ⅶ類土器　貝殻による条痕文を内外に施す。表面採集品ではみみず腫れ状の粘土貼付文が施文される。

Ⅷ類土器　口縁部末端は小さく外反し，全体としてきれいに研磨されている。器形は鉢状である。

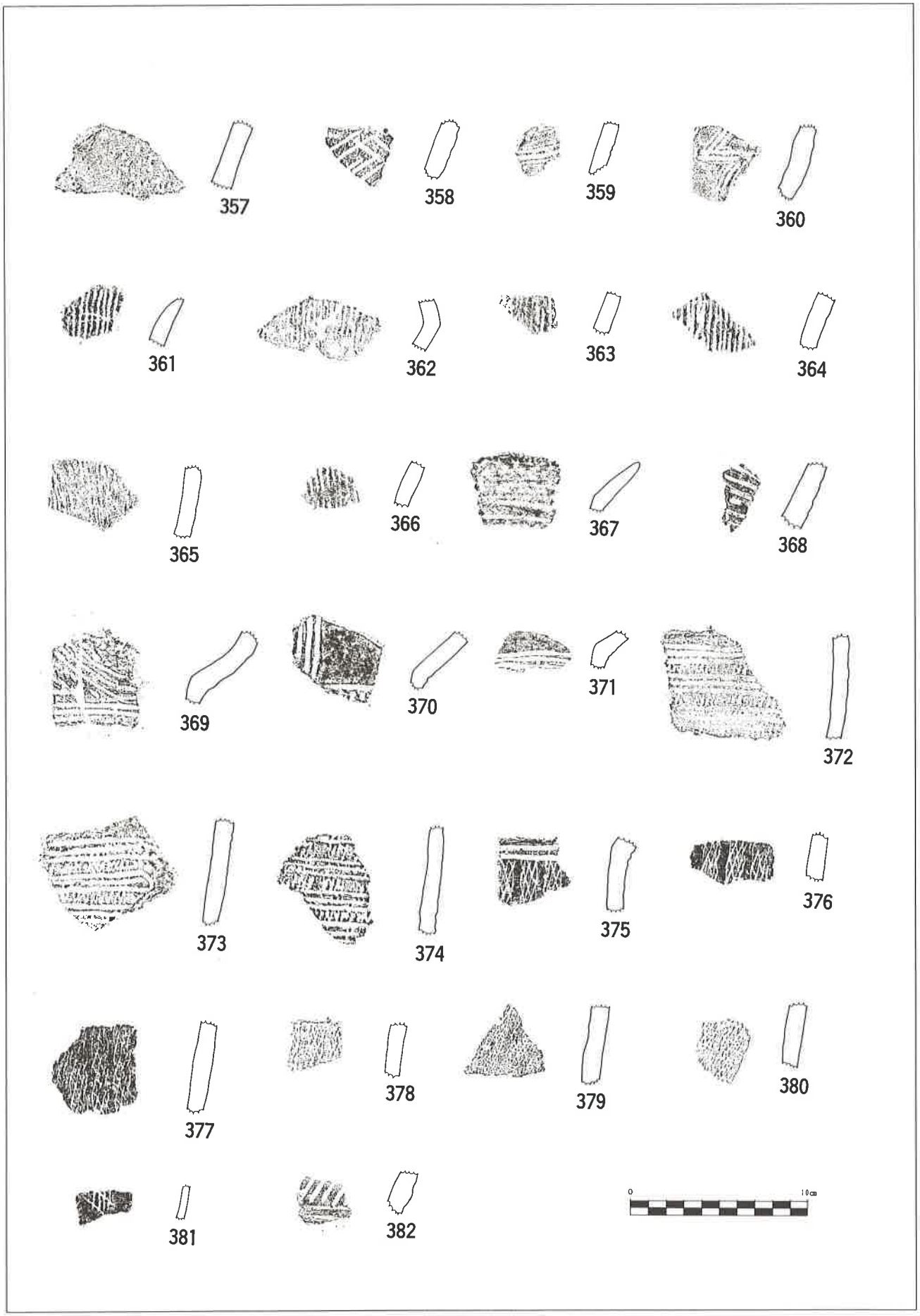
１．Ⅵ～Ⅷ類土器（第65図）

348～352はⅥ類土器である。348は口縁部破片である。口唇部は平坦に作られ，口縁部は横位に２条の短い粘土紐を貼付し，また縦・斜位にも付く。粘土紐が貼付されている部分以外は斜位に沈線文を施文している。349～352は胴部破片である。しかし，350は胴部から底部へかけての破片と思われ，口縁部上部と同じく横位に短い粘土紐を貼付している。353～355はⅦ類土器である。すべて胴部付近の破片と思われ，内外に貝殻による条痕文を施す。356はⅧ類土器で，口縁部破片である。全体に良く研磨されている。

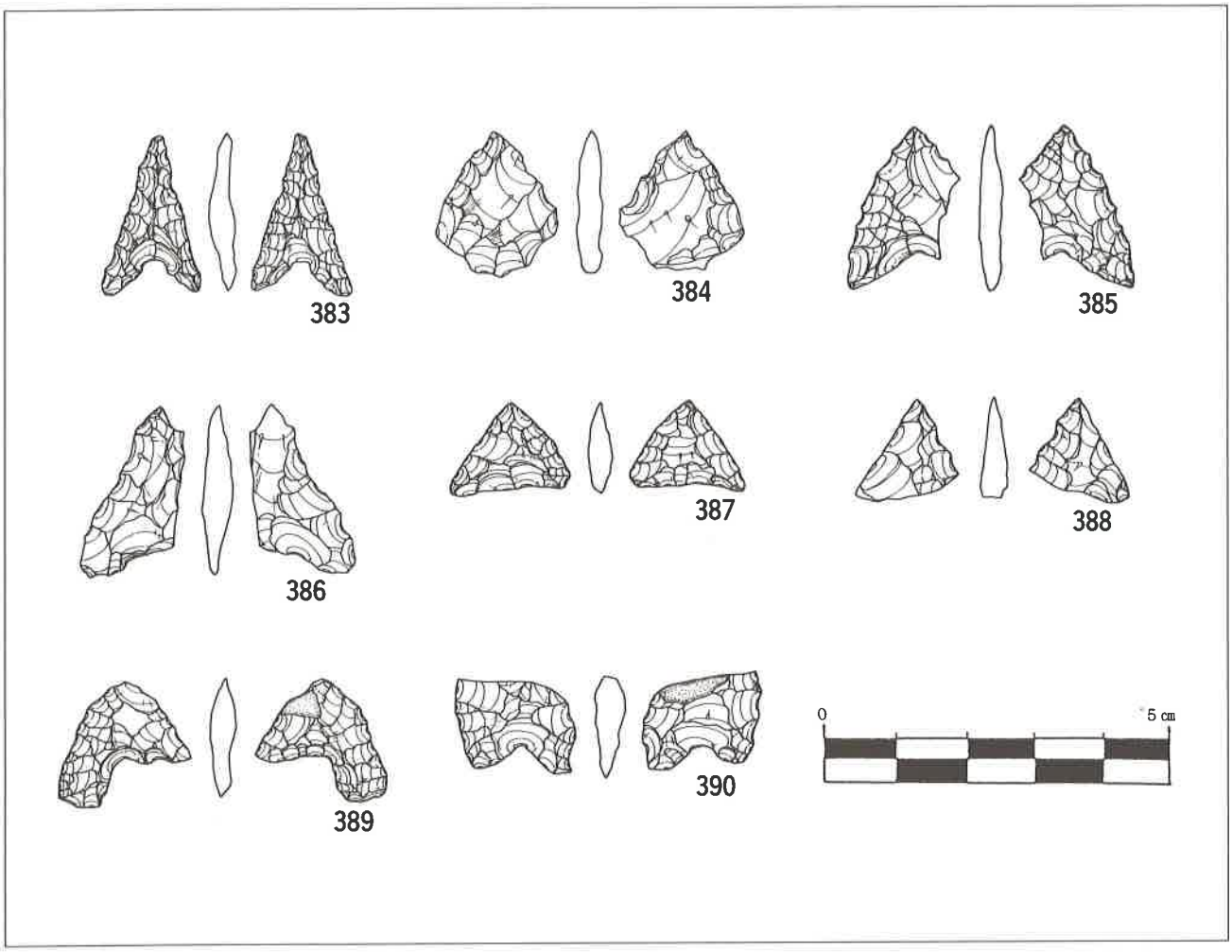
２．その他の土器（第66図）

すべてアカホヤ火山灰の二次堆積層中から出土したが，縄文時代早期の土器である。357は胴部破片である。文様に刺突文を施している（Ｘ類土器）。358～360はI類土器である。358はヘラ状の施文具を使用し，逆くの字に沈線文を施文する。359・360は同一固体であると思われる，胴部破片である。貝殻による条痕文を逆くの字に施文する。361～366はⅡ類土器である。361は口縁部破片である。口唇部平坦面に添って撚糸文を施文する。口縁部から胴部に向かって縦位の撚糸文。362は胴部の屈曲部分の破片で，撚糸文を施文している。367～382はⅤ類土器である。その内，367～371は口縁部破片である。367は口唇部に刻みを入れ，口縁部は貝殻による条痕文を施す。368～382は口縁部は沈線文若しくは沈線文＋刺突文で施文されている。頸部は２ないし３条の沈線を巡らし，刺突文を施文している。372～374は胴部破片で，横位の条痕を折り返しながら施文し，下地に撚糸文を縦位に施文する。恐らく同一固体と思われる。375～381は胴部破片であるが，撚糸文を縦位に施文するタイプである。382は口縁部の可能性も残るが，頸部付近の可能性が強いと考え配置してみた。斜位と横位の沈線文を施文する。

３．出土石器（第68～69図）



第66図　Ⅲ層出土遺物（一）

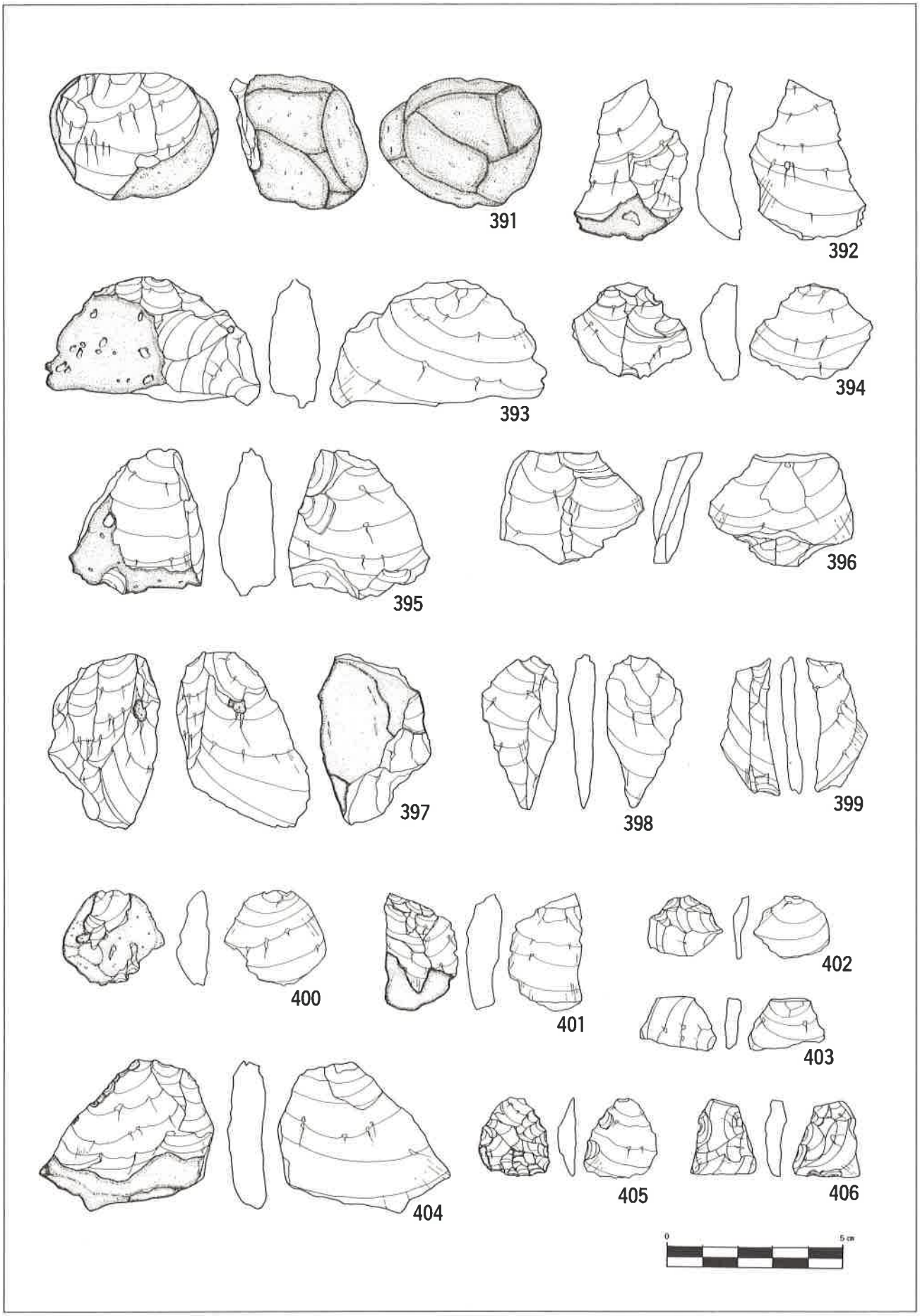


第67図　Ⅲ層出土遺物（二）

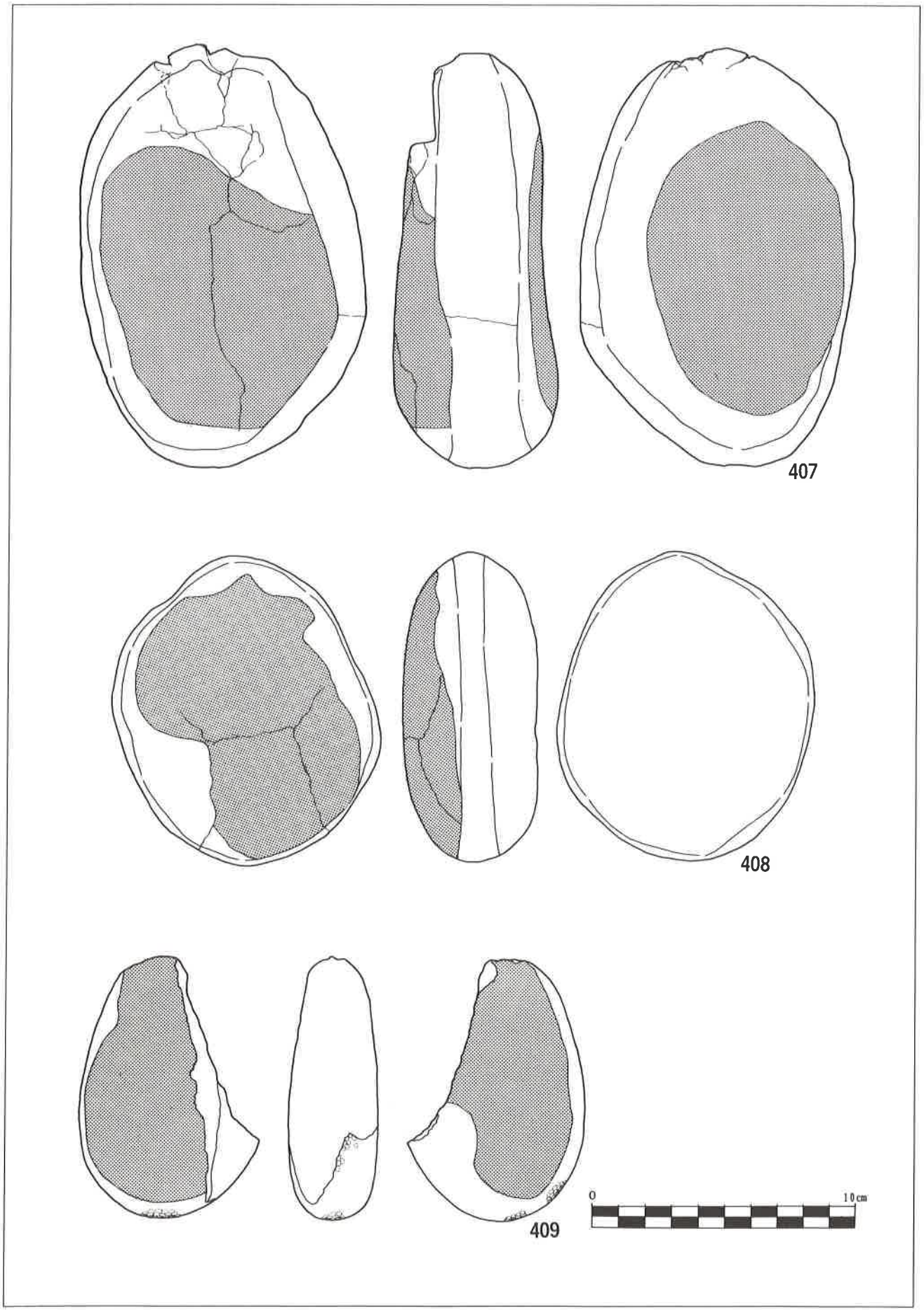
391～409まですべてⅢ層出土の石器である。391・393・395・397は石核で，391・395・397は黒耀石Ａ,393はガラス質流紋岩製である。392・394・396・397～404は剥片である。石材は様々で，392・394・395・397・400・401・404は黒耀石Ａ,393・398・399・403はガラス質流紋岩，396は鉄石英，402はチャート製である。401は剥片を取り出しが困難になったため，作業面をフラットにするため剥離された調整剥片であろう。404は大型の剥片であるが，二次調整痕が残る。405・406の石鏃の未製品である。405・406ともガラス質流紋岩で，405は片面を細かな剥離を施し，裏面は元々の剥離面を残す。406は表裏とも側整剥離が見受けられる。407・408は磨石である。両方とも凝灰岩製で，407は両面，408は片面に研磨の跡が残る。409は磨りと敲きとの併用である。磨り面は両面に渡り，敲きは側辺部に見受けられる。

第３節　小結

すべて遺物はアカホヤの二次堆積層中から出土した。土器はⅥ～Ⅷ類土器が検出され，それぞれⅥ類土器は深浦式土器，Ⅶ類土器は轟式土器，Ⅷ類土器は黒川式土器に該当する。深浦式土器・轟式土器は縄文時代前期で，黒川式土器は晩期に当たる。前期の土器も晩期の土器も出土数は少ない。石器は石鏃が多いが磨石も出土しており，居住の一端を感じさせるが遺構等は検出できなかった。その他，中世の青磁・白磁片も出土している。この川上地区には，中世山城である川上城跡があり，中世の集落が存在したのかもしれない。この地区には鎌倉～室町時代の伝承も残っている。



第68図　Ⅲ層出土遺物（三）



第69図　Ⅲ層出土遺物（四）

土器一覧表(1)

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	部位	焼成	色調	調整 外	調整 内	胎土	備考
16	52	2186	A－2	Ⅶ	口縁部	不良	淡黄茶褐色	刺突文	ナデ	石英・長石・角閃石・礫	
	53	1094	〃	〃	〃	良好	灰褐色	刺突文・ナデ	〃	〃	
	54	1459	〃	〃	〃	不良	黄茶褐色	〃	〃	〃	
	55	1601	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	
	56	723	〃	〃	胴部	〃	赤茶褐色		〃	〃	
	57	845	〃	〃	〃	良	淡黄茶褐色	ナデ	〃	〃	疑似口縁
17	58	2297	〃	〃	口縁部	不良	黄茶褐色	〃	〃	〃	
	59	2318	〃	〃	胴部	〃	茶褐色	条痕文	〃	〃	
	60	2297	〃	〃	〃	〃	黄茶褐色	〃	条痕文	〃	
	61	2318	〃	〃	口縁部?	〃	茶褐色	隆帯文？	ナデ	〃	
	62	2287	B－2	〃	胴部	良	〃	ナデ	〃	〃	
	63	2315	〃	〃	〃	不良	淡赤茶褐色	隆帯文	〃	〃	
36	162	514	A－2	Ⅳ	胴部	良	淡赤褐色	羽状ヘラ書	ナデ	〃	
	163	391	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	164	553	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	165	258・259	〃	〃	口縁部	〃	暗茶褐色	山形押型文	〃	〃	手向山
	166	274	〃	〃	〃	〃	淡灰褐色	撚糸	〃	〃	
	167	286	〃	〃	〃	〃	黄茶褐色	〃	〃	〃	
	168	405	〃	〃	胴部	〃	〃	〃	〃	〃	
	169	280	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	170	275	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	171	270	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	172	404	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	173	571	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	174	303	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	175	268	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	176	307	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	177	212・407	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	178	217	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	179	401	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	180	402	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	181	335	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	〃	
	182	339	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	183	401	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	184	571	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	185	221	〃	〃	〃	良	〃	〃	〃	〃	
	186	307	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	187	677	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	188	309	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	189	679	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
37	190	71	A－2	Ⅲ	〃	良好	黄茶褐色	山形押型文	ナデ	〃	
	191	94・95	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	192	14・72	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	193	13	〃	〃	〃	〃	赤褐色	〃	〃	〃	
	194	93	〃	〃	底部	〃	〃	〃	〃	〃	
	195	89	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

土器一覧表(2)

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	部位	焼成	色調	調整 外	調整 内	胎土	備考
37	196	77	A－2	Ⅲ	口縁部	良好	黄茶褐色	山形押型文	ナデ	石英・長石・角閃石・礫	同一個体
	〃	109	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	〃	87	〃	〃	胴部	〃	〃	〃	〃	〃	
	〃	22	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
38	197	359	〃	Ⅳ	〃	〃	黒褐色	〃	〃	〃	
	198	476	〃	〃	〃	〃	黄茶褐色	〃	〃	〃	
	199	359	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	200	79・365	〃	〃	〃	〃	黒褐色	〃	〃	〃	
	201	497	〃	〃	〃	〃	黄茶褐色	〃	〃	〃	
	202	143・344	〃	〃	〃	〃	灰褐色	〃	〃	〃	
	203	398	〃	〃	〃	良	黄茶褐色	〃	〃	〃	
	204	625	〃	〃	〃	〃	灰褐色	〃	〃	〃	
	205	730・731	〃	〃	〃	〃	黄茶褐色	〃	〃	〃	
	206	577	〃	〃	〃	〃	灰褐色	〃	〃	〃	
	207	558	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	208	211	〃	〃	底部	〃	淡赤褐色	〃	〃	〃	
	209	509	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
39	210	187	〃	Ⅲ	胴部	〃	赤褐色	条痕文	〃	〃	
	211	188	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	212	186	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	213	81	〃	〃	〃	良好	〃	貝殻条痕文	貝殻条痕文	〃	
	214	347・348	〃	Ⅳ	〃	良	黄茶褐色	〃	ナデ	〃	
	215	341	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	216	301	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	217	301	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	218	203	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	219	218	〃	〃	〃	〃	淡赤褐色	〃	〃	〃	
	220	204	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	〃	
	221	599・666	〃	〃	〃	良	黄茶褐色	〃	〃	〃	
	222	441	〃	〃	〃	良好	淡赤褐色	〃	〃	〃	
	223	198	〃	〃	〃	良	黄茶褐色	〃	〃	〃	
	224	301	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ナデ	〃	
	225	577	〃	〃	〃	良好	淡赤褐色	ナデ	〃	〃	
	226	205	〃	〃	〃	良	〃	〃	〃	〃	
40	227	535	〃	〃	口縁部	良好	赤褐色	刺突文・沈線	〃	〃	
	228	604	〃	〃	〃	〃	淡赤褐色	〃	〃	〃	
	229	529	〃	〃	〃	〃	赤褐色	〃	〃	〃	
	230	276	〃	〃	〃	〃	淡赤褐色	沈線・キザミ	〃	〃	
	231	528	〃	〃	〃	〃	赤褐色	沈線	〃	〃	
	232	624	〃	〃	〃	〃	淡赤褐色	〃	〃	〃	
	233	446	A－2	Ⅳ	胴部	良	暗茶褐色	沈線	ナデ	〃	
	234	235	〃	〃	〃	〃	赤褐色	撚糸・沈線	〃	〃	
	235	550	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	撚糸	〃	〃	
	236	441	〃	〃	〃	〃	赤褐色	〃	〃	〃	
	237	525	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	238	441	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

土器一覧表(3)

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	部位	焼成	色調	調整 外	調整 内	胎土	備考
40	239	261	A－2	Ⅳ	胴部	良	赤褐色	撚糸	ナデ	石英・長石・角閃石・礫	
	240	206	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	241	214	〃	〃	底部	〃	淡赤褐色	ナデ	〃	〃	
	242	436	〃	〃	〃	〃	黄茶褐色	〃	〃	〃	
56	315	13・11		SS1	胴部	〃	淡赤褐色	条痕文	〃	〃	
	316	13		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	317	8		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	318	13		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	319	13		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	320	7		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	321	13		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	322	13		〃	〃	〃	淡灰褐色	〃	〃	〃	
	323	13		〃	〃	〃	淡赤褐色	〃	〃	〃	
	324	15		〃	〃	〃	淡灰褐色	〃	〃	〃	
59	334	1		SS2	口縁部	〃	黄茶褐色	山形押型文	〃	〃	同一個体
	〃	1		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	〃	1		〃	胴部	〃	〃	〃	〃	〃	
	〃	1		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	〃	1		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	〃	1		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	335	9		〃	口縁部	〃	赤褐色	条痕文	〃	〃	
	336	8		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
65	348	69・70	A－2	Ⅲ	〃	良好	暗茶褐色	突帯・沈線	〃	〃	
	349	501	〃	〃	胴部	〃	〃	〃	〃	〃	
	350	82	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	351	492	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	352	493	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	353	48	〃	〃	〃	〃	淡黄茶褐色	貝殻条痕文	貝殻条痕文	〃	
	354	47	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	355	543	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	356	500	〃	〃	口縁部	〃	淡灰茶褐色	ナデ	ナデ	〃	
66	357	18	〃	〃	胴部	〃	黄茶褐色	刺突文	〃	〃	
	358	352	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	羽状のヘラ書	〃	〃	
	359	15	〃	〃	〃	〃	黄茶褐色	ヘラ書	〃	〃	
	360	15	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	361	57	〃	〃	口縁部	〃	〃	撚糸	〃	〃	
	362	123	〃	〃	胴部	〃	〃	〃	〃	〃	
	363	136	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	364	119	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	365	181	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	366	59	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	367	83	〃	〃	口縁部	〃	茶褐色	条痕文・キザミ	〃	〃	
	368	175	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	刺突文・突帯・沈線	〃	〃	
	369	193・199	〃	〃	〃	良	〃	沈線・刺突文・キザミ	〃	〃	
	370	36	〃	〃	〃	良好	黄茶褐色	沈線・刺突文	〃	〃	
	371	121	〃	〃	〃	〃	〃	沈線	〃	〃	

土器一覧表(4)

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	部位	焼成	色調	調整		胎土	備考
								外	内		
66	372	452	A－2	Ⅲ	胴部	良好	茶褐色	沈線・撚糸	ナデ	石英・長石・角閃石・礫	
	373	183	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	374	34	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	375	194	〃	〃	〃	良	暗茶褐色	撚糸	〃	〃	
	376	180	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	377	177	〃	〃	〃	良好	〃	〃	〃	〃	
	378	178	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	379	118	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	380	50	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
	381	65	〃	〃	〃	〃	黄茶褐色	〃	〃	〃	
	382	350	〃	〃	〃	〃	黒褐色	沈線	〃	〃	

土師器一覧表

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	部位	器種	備考
4	2	表		表	底部	土師器坏	糸切底
	3	〃		〃	〃	〃	〃

陶磁器一覧表

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	部位	器種	備考
4	1	表		表	底部	すり鉢	内面に櫛掻文
5	4	〃		〃	口縁部	青磁碗	口縁部に雷文
	5	〃		〃	〃	〃	
	6	〃		〃	底部	白磁碗	ゴケ底

石器一覧表(1)

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
6	7	13	3 T	Ⅶ	細石刃核	黒耀石A	2.35	1.05	1.70	4	
	8	21	〃	Ⅴ			1.90	1.35	1.45		
	9	2	〃	Ⅶ	細石刃	黒耀石A	1.35	0.55	0.15	0.2	
	10	表	〃	〃	〃	黒耀石B	1.50	0.75	0.15	0.2	
	11	31	〃	〃	細石刃核	黒耀石A	0.75	1.25	0.80	1	
	12	29	〃	Ⅴ	細石刃	〃	1.35	0.45	0.25	0.2	
	13	174	〃	Ⅶ	〃	〃	(1.05)	0.45	0.20	0.2	
7	14	155	〃	〃	細石刃核	〃	2.90	4.75	3.85	53	
	15	194	〃	〃	剥片	〃	3.80	2.30	0.90	6	
	16	198	〃	〃	〃	〃	3.00	2.25	0.65	5	
	17	203	〃	〃	〃	〃	2.35	2.40	1.30	7	
	18	202	〃	〃	細石刃核	〃	3.05	2.40	3.05	23	
	19	192	〃	〃	剥片	〃	3.15	4.15	1.45	16	
	20	180	〃	〃	〃	〃	2.45	2.20	0.80	4	
	21	181	〃	〃	〃	〃	3.55	2.35	0.80	6	
	22	179	〃	〃	〃	〃	3.50	1.95	0.75	5	
	23	5	〃	Ⅲ	〃	〃	3.20	1.75	0.90	4	
	24	199	〃	Ⅶ	〃	〃	2.40	1.20	1.35	5	
	25	27	〃	Ⅲ	石核	〃	1.70	3.62	2.45	14	
	26	26	〃	Ⅲ下	剥片	黒耀石B	2.55	3.70	0.80	7	
9	27	119	10T	Ⅶ	石核	黒耀石A	1.65	4.95	1.55	12	
	28	95	〃	〃	〃	〃	1.90	3.60	1.85	16	
	29	70	〃	〃	〃	〃	1.80	3.70	1.75	12	
	30	57	〃	〃	ブランク	〃	2.30	1.45	1.95	7	
	31	117	〃	〃	剥片	〃	3.80	1.40	1.40	7	
	32	87	〃	〃	〃	〃	4.15	2.85	1.35	18	
	33	62	〃	〃	〃	〃	3.60	2.80	0.95	9	
	34	39	〃	〃	〃	〃	3.05	2.55	0.72	5	
	35	45	〃	〃	〃	〃	3.65	3.05	1.52	14	
	36	104	〃	〃	〃	〃	3.42	2.70	1.15	9	
	37	91	〃	〃	〃	〃	2.75	2.25	1.25	9	
	38	86	〃	〃	〃	〃	3.05	1.35	0.65	3	
	39	102	〃	シラス上	〃	〃	2.45	1.60	0.65	3	
	40	46	〃	Ⅶ	〃	〃	1.95	2.30	0.95	4	
	41	37	〃	〃	〃	〃	3.10	3.90	1.45	19	
	42	107	〃	〃	〃	〃	3.35	3.32	1.20	12	
	43	44	〃	〃	〃	〃	3.25	2.42	0.95	7	
	44	42	〃	〃	〃	〃	3.00	2.10	0.80	6	
	45	55	〃	Ⅳ下	〃	〃	2.05	2.25	1.00	6	
14	46	表	表	表	細石刃核	ガラス質流紋岩	2.85	1.15	2.05	9	
	47	〃	〃	〃	石鏃	黒耀石A	2.40	1.45	0.45	1	
	48	〃	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	1.90	(1.60)	0.35	1	
	49	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	〃	黒耀石C	1.53	1.13	0.38	0.4	
	50	〃	〃	〃	〃	黒耀石B	—	—	—	0.3	
	51	〃	〃	〃	〃	黒耀石D	—	—	—	0.2	
18	64	1974	A－2	Ⅶ	〃	ガラス質流紋岩	2.10	1.90	0.50	1	未製品
	65	1143	〃	〃	〃	頁岩	(1.95)	(1.60)	0.42	1	一部欠損

石器一覧表(2)

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
18	66	1090	A－2	Ⅶ	石鏃	ガラス質流紋岩	2.12	(1.45)	0.25	1	胴部欠損（未製品）
	67	873	〃	Ⅴ下	〃	〃	(1.60)	2.30	0.50	1.9	先端部欠損
	68	1588	〃	Ⅶ		〃	1.95	2.25	0.50	0.9	未製品
	69	999	〃	〃	〃	〃	1.95	1.75	0.60	2	〃
	70	874	〃	Ⅴ下	〃	メノウ	2.60	2.30	0.80	5	〃
	71	2607	B－2	Ⅶ	〃	タンパク石	2.50	1.50	0.45	0.5	完形品
	72	794	A－2	Ⅴ下	〃	ガラス質流紋岩	2.25	(1.80)	0.42	2	脚部欠損（未製品）
	73	1195	〃	Ⅶ	〃	〃	2.30	(1.30)	0.45	1.5	脚部欠損
19	74	2546	〃	〃	〃	〃	2.30	(1.65)	0.32	0.7	〃
	75	2226	〃	Ⅴ下	〃	〃	1.95	(1.20)	0.35	0.5	〃
	76	997	〃	Ⅶ	〃	チャート	(1.85)	(2.20)	0.25	1	先端部欠損
	77	2264	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	1.50	1.85	0.30	0.4	完形品（左右不対称）
	78	1005	〃	〃	〃	〃	2.05	(1.65)	0.42	1	脚部欠損
	79	2582	〃	〃	〃	〃	(1.30)	(1.55)	0.35	0.3	先端部及び脚部欠損
	80	2272	〃	〃	〃	黒耀石A	(1.65)	(1.30)	0.35	0.7	脚部欠損
	81	2583	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	(1.40)	1.70	0.30	0.6	先端部欠損（左右不対称）
	82	1293	〃	〃	〃	〃	(1.38)	2.15	0.45	1.5	先端部欠損
	83	826	〃	〃	〃	〃	2.05	1.20	0.35	1.0	欠損（未製品）
20	84	1121	〃	〃	〃	〃	2.05	(0.80)	(0.35)	0.6	〃
	85	1112	〃	〃	〃	黒耀石A	1.75	1.40	0.25	0.5	一部欠損
	86	1890	〃	〃	〃	チャート	(1.45)	(1.05)	(0.30)	0.4	先端部及び脚部欠損
	87	1546	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	(1.45)	(1.00)	(0.25)	0.4	欠損
	88	1492	〃	〃	〃	〃	1.90	1.15	0.15	0.5	完形品
	89	2336	〃	〃	〃	〃	(1.15)	(0.90)	(0.30)	0.3	先端部のみ
	90	1912	〃	〃	〃	〃	(1.15)	(0.95)	(0.25)	0.4	欠損（未製品）
	91	1115	〃	〃	〃	〃	(1.70)	(1.05)	(0.40)	0.9	未製品？
	92	1266	〃	〃	〃	〃	(1.35)	(0.75)	(0.30)	0.5	欠損
	93	1102	〃	〃	〃	黒耀石A	(1.35)	(0.85)	0.40	0.6	先端部のみ
	94	995	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	1.50	(0.80)	0.22	0.4	脚部欠損
	95	2435	〃	〃	〃	黒耀石A	(1.20)	(1.45)	(0.30)	0.4	先端部のみ
	96	1084	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	(1.45)	(0.55)	(0.25)	0.2	欠損（未製品）
	97	1565	〃	〃	〃	〃	(1.35)	(1.30)	0.30	0.4	脚部及び先端部欠損
	98	1191	〃	〃	〃	〃	(0.85)	(1.10)	(0.20)	0.3	先端部のみ
	99	638	〃	〃	〃	黒耀石C	(1.60)	(0.60)	(0.30)	0.2	欠損
	100	913	〃	〃	〃	鉄石英	(1.15)	1.40	0.30	0.6	先端部欠損
	101	1162	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	(1.05)	(0.75)	(0.25)	0.2	先端部のみ
	102	2422	〃	〃	〃	〃	1.70	(1.15)	0.35	0.5	脚部欠損
	103	1203	〃	〃	〃	〃	(1.65)	(0.75)	(0.35)	0.4	〃
	104	1062	〃	〃	〃	チャート	(0.55)	(0.60)	(0.20)	0.1	先端部のみ
29	105	1755	〃	〃	ブランク	ガラス質流紋岩	1.90	1.15	3.45	7	
	106	1420	〃	〃	〃	〃	2.80	1.05	1.35	5	
	107	785	〃	〃	〃	〃	2.15	1.10	3.65	9	
	108	867	〃	Ⅴ下	〃	〃	2.90	1.20	2.00	8	
	109	2034	〃	Ⅶ	〃	黒耀石A	1.95	1.40	2.25	5	
	110	2039	〃	〃	〃	〃	1.60	1.50	2.25	6	
	111	886	〃	〃	細石刃	〃	(2.00)	0.75	0.35	0.6	
	112	1996	〃	〃	〃	〃	2.00	0.65	0.25	0.5	

石器一覧表(3)

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
29	113	1239	A－2	Ⅶ	細石刃	ガラス質流紋岩	(1.50)	0.65	0.30	0.3	
	114	1184	〃	〃	〃	〃	1.40	0.50	0.20	0.2	
	115	1647	〃	〃	〃	〃	(1.40)	0.55	0.20	0.2	
	116	2195	〃	〃	〃	黒耀石A	(1.20)	0.65	0.20	0.2	
30	117	2688	B－2	〃	石核	〃	2.35	4.10	2.70	36	
	118	2328	〃	〃	〃	〃	3.80	1.60	2.50	22	
	119	1077	A－2	〃	スクレイパー	メノウ	3.70	2.75	0.80	8	石鏃の可能性あり
	120	1015	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	2.30	1.90	0.50	3	
	121	1488	〃	〃	〃	〃	4.25	3.60	0.70	9	
	122	1256	〃	〃	楔形石器	〃	2.60	2.15	0.85	5	
	123	2264	〃	〃	スクレイパー	黒耀石A	2.55	2.90	1.20	8	
	124	1577	〃	〃	楔形石器	ガラス質流紋岩	2.75	1.65	0.95	4	
	125	2290	B－2	〃	スクレイパー	黒耀石A	2.85	2.65	0.90	6	
31	126	1470	A－2	〃	ハンマーストーン	安山岩	13.10	5.00	2.60	227	
32	127	1313	〃	〃	石核	ガラス質流紋岩	1.75	2.45	3.35	12	
	128	2208	〃	〃	剥片	黒耀石A	6.60	4.20	2.25	43	
	129	1178	〃	〃	石核	〃	2.60	2.15	2.90	19	
	130	2400	〃	〃	剥片	〃	2.60	1.30	1.15	13	
	131	1301	〃	〃	石核	〃	3.70	2.40	2.35	24	
	132	632	〃	〃	剥片	ガラス質流紋岩	3.80	2.50	1.30	11	
	133	1205	〃	〃	〃	黒耀石B	2.00	1.85	0.50	1	
	134	1439	〃	〃	〃	黒耀石A	1.45	1.55	0.40	1	
	135	1298	〃	〃	石核	ガラス質流紋岩	3.45	3.20	1.35	14	
	136	2199	〃	〃	剥片	黒耀石A	3.50	3.05	1.05	10	
	137	1412	〃	〃	〃	〃	2.15	1.30	0.40	1	
	138	626	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	1.75	3.40	0.45	2	
	139	2301	〃	〃	〃	〃	1.65	3.10	0.60	2	
	140	784	〃	〃	〃	黒耀石C	2.35	1.90	0.40	1	
	141	1391	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	2.80	2.45	0.90	6	
	142	1715	〃	〃	〃	〃	3.15	2.35	0.80	4	
	143	2442	〃	〃	〃	〃	1.85	2.05	0.50	2	
	144	1502	〃	〃	〃	黒耀石A	1.20	1.65	1.35	1	
	145	1940	〃	〃	〃	〃	2.50	2.80	1.10	7	
	146	1776	〃	〃	〃	〃	3.30	2.25	0.85	5	
	147	929	〃	Ⅴ下	〃	〃	2.25	1.55	0.40	1	
	148	1140	〃	Ⅶ	〃	ガラス質流紋岩	2.75	1.65	0.80	3	
	149	1781	〃	〃	〃	〃	2.05	2.45	0.60	4	
33	150	870	〃	Ⅴ下	〃	〃	5.25	2.00	0.95	8	
	151	792	〃	〃	〃	〃	3.10	2.65	0.75	5	
	152	864	〃	〃	〃	〃	2.35	2.10	0.70	3	
	153	1756	〃	Ⅶ	〃	〃	2.15	1.50	0.60	2	
	154	2210	〃	〃	〃	〃	1.70	1.10	0.45	0.8	
	155	2168	〃	〃	〃	〃	3.00	0.70	0.42	0.6	
	156	691	〃	Ⅴ	〃	〃	3.00	1.95	0.50	2	
	157	2939	〃	Ⅶ	〃	黒耀石A	(1.25)	(2.40)	(0.75)	2	
	258	2385	〃	〃	磨石	安山岩	3.95	3.35	2.50	34	
	159	1276	〃	〃	植物化石	泥岩	8.40	3.20	1.40	31	

石器一覧表(4)

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
33	160	648	A－2	Ⅶ	二次調整剥片	頁岩	6.80	4.05	1.85	46	
35	161	SS 5	B－2		砥石	〃	13.60	5.00	3.20	387	
42	243	278	A－2	Ⅳ	石鏃	黒耀石A	2.62	(2.15)	0.55	2	
	244	333	〃	〃	〃	〃	2.05	(1.65)	0.35	1	
	245	519	〃	〃	〃	〃	(1.60)	(1.45)	0.32	0.9	
	246	381	〃	〃	〃	〃	(1.42)	1.95	(0.40)	1	
	247	296	〃	〃	〃	〃	(1.50)	2.45	0.45	2	
	248	477	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	2.80	(1.60)	0.60	2	
	249	216	〃	〃	〃	〃	2.65	2.20	0.80	4	完
	250	699	〃	〃	〃	〃	1.90	1.60	0.32	1	完
	251	356	〃	〃	〃	チャート	2.10	1.85	0.50	2	
	252	297	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	1.70	1.65	0.32	1	完
	253	676	〃	〃	〃	タンパク石	(1.15)	1.75	0.30	0.8	
	254	254	〃	〃	〃	チャート	1.60	1.75	0.35	1	完
	255	400	〃	Ⅲ下	〃	〃	2.15	1.45	0.30	0.5	完
43	256	342	〃	Ⅴ	〃	黒耀石A	2.10	(1.20)	0.30	0.5	
	257	582	〃	〃	〃	〃	2.00	(1.30)	0.35	1	
	258	2641	〃	〃	〃	〃	1.95	1.25	0.30	0.8	完
	259	967	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	2.45	(1.10)	0.40	1	
	260	962	〃	〃	〃	〃	1.45	1.75	0.42	0.8	完
	261	2263	〃	〃	〃	黒耀石A	(1.30)	(0.95)	(0.40)	0.7	
	262	2648	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	(1.05)	1.15	0.25	0.6	
	263	1710	〃	Ⅶ	〃	チャート	1.60	1.20	0.20	0.7	完
	264	698	〃	Ⅴ	〃	タンパク石	(1.65)	(1.50)	0.35	0.9	
	265	2246	〃	〃	〃	黒耀石A	(1.15)	(1.15)	(0.40)	0.6	
44	266	555	〃	Ⅳ	スクレイパー	ガラス質流紋岩	9.60	4.60	1.95	91	
45	267	201	〃	〃	石核	〃	4.65	3.35	2.70	44	
	268	305	〃	〃	〃	黒耀石A	4.15	3.95	1.65	32	
	269	284	〃	〃	剥片	ガラス質流紋岩	2.85	3.10	0.85	7	
	270	374	〃	〃	〃	〃	3.05	2.25	0.75	4	
	271	200	〃	〃	〃	〃	4.20	1.50	0.70	4	
	272	357	〃	〃	〃	黒耀石A	3.30	2.60	0.90	3	
	273	685	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	2.00	2.20	0.55	2	
	274	650	〃	〃	〃	黒耀石A	2.40	1.90	0.65	2	
46	275	430	〃	〃	〃	〃	6.10	3.35	1.40	25	
	276	508	〃	〃	〃	〃	2.25	1.50	0.40	2	
	277	1793	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	2.25	1.70	0.50	2	
	278	471	〃	〃	〃	〃	5.30	2.40	1.50	17	
	279	2516	〃	〃	〃	チャート	1.25	2.40	0.25	1	
	280	424	〃	〃	〃	黒耀石A	3.10	2.35	0.55	4	
	281	559	〃	〃	〃	〃	3.65	3.45	1.00	14	
	282	442	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	3.30	2.05	1.00	5	
	283	328	〃	〃	〃	黒耀石A	2.85	3.15	1.15	10	
	284	469	〃	〃	〃	黒耀石C	1.55	2.65	0.60	2	
47	285	322	〃	〃	石核	ガラス質流紋岩	4.00	8.40	2.10	81	
	286	283	〃	〃	〃	黒耀石A	5.15	7.50	2.15	86	
	287	435	〃	〃	剥片	〃	4.80	5.10	1.50	31.9	

石器一覧表(5)

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
47	288	326	A－2	Ⅳ	石槍	ガラス質流紋岩	4.10	2.25	0.75	6	
	289	290	〃	〃	石核	黒耀石A	3.95	5.35	2.75	82	
	290	279	〃	〃	サイドスクレイパー	ガラス質流紋岩	4.45	1.25	0.60	4	
	291	554	〃	〃	石核	黒耀石A	3.00	4.40	3.05	44	
	292	413	〃	〃	二次調整剥片	〃	2.75	1.55	0.60	3	
	293	418	〃	〃	石核	ガラス質流紋岩	2.70	4.20	1.35	14	
	294	100	〃	Ⅲ	装飾品	ヒスイ	3.25	1.00	0.55	2	
48	295	246	〃	Ⅳ	石斧	頁石	13.80	7.00	2.70	408	
	296	397	〃	〃	〃	〃	12.40	6.20	2.25	151	
49	297	256	〃	〃	磨石・敲石	安山岩	10.60	9.20	4.00	390	
	298	623	〃	〃	磨石	〃	7.55	6.00	2.85	183	欠損
	299	288	〃	〃	〃	凝灰岩	10.40	8.10	4.50	550	
	300	302	〃	〃	〃	安山岩	7.95	6.20	4.05	241	
	301	340	〃	〃	〃	〃	10.20	7.85	5.70	536	
	302	399	〃	〃	〃	〃	7.50	6.10	4.05	231	
	303	389	〃	〃	磨石・敲石	〃	9.75	8.95	5.80	654	
	304	409	〃	〃	〃	〃	8.30	7.20	3.60	235	
	305	291	〃	〃	敲石	頁岩	15.30	5.20	4.85	598	
	306	585	〃	〃	磨石	安山岩	13.10	9.20	3.90	738	
50	307	415	〃	〃	〃	〃	11.30	9.90	4.10	624	
	308	690	〃	Ⅴ	〃	〃	6.30	4.10	4.10	129	
	309	2265	〃	〃	〃	〃	5.55	4.85	3.60	150	
	310	312	〃	Ⅳ	〃	〃	9.35	7.35	(3.90)	424	欠損
51	311	1167	〃	〃	石皿	〃	34.00	23.00	10.00	10400	完
	312	467	〃	〃	磨石	〃	9.90	8.80	4.25	497	
	313	410	〃	〃	石皿	〃	38.20	21.50	9.10	12400	完
	314	460	〃	〃	〃	〃	23.00	18.50	10.20	5200	完
57	315	SS1　1	〃		石核	ガラス質流紋岩	6.40	5.55	2.20	80	
	326	SS1　3	〃		剥片	黒耀石A	2.75	2.75	0.55	4	
	327	SS1 16	〃		〃	〃	2.30	2.40	0.90	5	
	328	SS1 17	〃		〃	〃	2.10	1.50	0.90	3	
	329	SS1 14	〃		〃	ガラス質流紋岩	1.95	1.10	0.75	1	
	330	SS1　4	〃		〃	黒耀石A	1.10	0.95	0.35	0.5	
	331	SS1　6	〃		〃	〃	1.30	1.65	0.80	2	
	332	SS1　5	〃		〃	〃	0.82	0.70	0.30	0.2	
	333	SS1　2	〃		石鏃	〃	(2.05)	(0.75)	0.35	0.6	
60	337	SS2　2	〃		磨石	凝灰岩	11.80	10.20	5.70	1050	
	338	SS2　7	〃		剥片	黒耀石A	3.75	2.05	1.20	9	
	339	SS2　4	〃		石鏃	〃	2.35	(1.00)	0.40	0.9	
	340	SS2　6	〃		剥片	〃	2.65	2.45	1.15	7	
	341	SS2　5	〃		剥片	チャート	1.80	(1.10)	0.35	0.7	
64	342	SD　1	B－2		磨石	安山岩	(12.60)	11.80	(6.10)	928	欠損
	343	SD　2	〃		石核?	〃	12.40	11.20	4.20	624	
	344	SD　8	〃		石核残欠	ガラス質流紋岩	2.50	3.05	1.60	12	
	345	SD　4	〃		剥片	〃	2.85	1.55	0.55	2	
	346	SD　4	〃		〃	〃	3.10	0.95	1.05	4	
	347	SD　6	〃		石鏃	〃	1.90	1.60	0.40	1	

石器一覧表(6)

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
67	383	84	A－2	Ⅲ	石鏃	黒耀石D	2.25	1.35	0.35	0.5	
	384	495	〃	〃	〃	黒耀石A	2.00	1.65	0.35	1	
	385	49	〃	〃	〃	〃	2.25	(1.25)	0.35	1	
	386	122	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	2.35	(1.30)	0.40	1	
	387	63	〃	〃	〃	凝灰岩	1.25	1.65	0.30	0.7	完
	388	502	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	(1.45)	(1.30)	(0.40)	0.8	
	389	31	〃	〃	〃	鉄石英	1.75	(1.70)	0.35	1	
	390	576	〃	〃	〃	チャート	(1.35)	(1.60)	0.45	1	
68	391	593	〃	〃	石核	黒耀石A	3.75	4.75	3.35	73	
	392	140	〃	〃	剥片	〃	4.50	3.00	1.00	9	
	393	44	〃	〃	石核	ガラス質流紋岩	3.50	6.05	1.45	31	
	394	29	〃	〃	〃	黒耀石A	2.70	3.30	0.95	7	
	395	117	〃	〃	剥片	〃	4.15	4.00	1.55	22	
	396	56	〃	〃	〃	鉄石英	3.20	4.00	0.90	11	
	397	4	〃	〃	石核	黒耀石A	5.00	3.10	3.30	55	
	398	503	〃	〃	剥片	ガラス質流紋岩	4.30	2.10	0.70	5	
	399	168	〃	〃	〃	〃	3.80	1.40	0.35	2	
	400	27	〃	〃	〃	黒耀石A	2.70	2.80	0.80	6	
	401	88	〃	〃	〃	〃	3.30	2.05	0.90	6	
	402	578	〃	〃	〃	チャート	1.75	2.10	0.35	1	
	403	498	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	1.40	2.15	0.35	1	
	404	185	〃	〃	〃	黒耀石A	4.30	4.70	0.95	21	
	405	574	〃	〃	石鏃	ガラス質流紋岩	2.20	1.95	0.45	2	未製品
	406	表	〃	〃	〃	〃	2.20	1.85	0.45	2	〃
69	407	16	〃	〃	磨石	安山岩	15.80	10.50	6.25	1210	
	408	75	〃	〃	〃	〃	11.65	9.75	5.00	516	
	409	24	〃	〃	磨石・敲石	〃	9.90	(6.60)	3.40	252	欠損

第8章　まとめ

第1節　縄文時代草創期

瀧之段遺跡（1万3千年前）の時代は，ビュルム氷河期の最寒冷期（約2万～1万8千年前）を過ぎ，気候が温暖化してゆく時代である。2万年から1万年前までには温暖化がゆっくりと進み，北極・南極の氷が溶け，約100mも海水面が上昇したといわれる。これにより，動植物の生態系が変化し，例えばオオツノジカなどの大型草食動物も減少した。また，海水面が上昇したゆえに人口密度も高まり，食料不足も生じた可能性も指摘できる。また，このような環境変動の中で技術革新も行われ，幅約1㎝以下の刃ものである細石器文化が生まれた。これは石材の節約・効率化であり，移動しての狩猟活動に適している。そして最終的には，最も発達した狩猟具である石鏃が生まれたのである。更に気候の変化で大型動物が減少したことにより，温帯森林化する環境のもとで堅果類への依存が高まっていった。堅果類を煮沸するために使用されたのが土器である。土器もこのころに初めて使用されたものの一つである。瀧之段遺跡では，縄文時代草創期初頭の日本最古級の土器と共に石鏃が41本出土した。この時期の遺跡で現在確認されている石鏃の本数は横井竹ノ山遺跡（鹿児島市犬迫町横井9757番地字地ノ眼：鹿児島市教育委員会が昭和63年5月から7月にかけて調査）の25本で，本遺跡の石鏃検出数は41本で全国で最も多い検出例である。（千葉大学岡本東三教授指摘）氷河期から温暖化に向かう気候変化に伴い，人々は様々な技術革新を行なった。移動効率のよい細石刃の使用が行われ，また最も発達した狩猟具である矢の発明を示す石鏃（矢じり）も現れる。さらに堅果類への依存度が高まり，移動生活最後の時代であると同時に，その後の縄文定住狩猟採集生活の基本道具である土器を持つようになった時代でもある。約200万年前から行われていた移動活動が次第に定住化に向かってゆくのだが，その当時生活していた人々の生活を考える上で，本遺跡は縄文時代草創期初頭において石鏃が41本と日本で最も出土数が多く，石鏃の出現においての南九州の先進性がうかがえる遺跡であると言えよう。

第2節　縄文時代早期

縄文時代早期は中葉から後葉にかけての土器が出土した。種類としては，桑ノ丸式土器・山形押型文土器・手向山式土器・円筒形条痕文土器・塞ノ神式土器である。桑ノ丸式土器は西之表市の下剥峯遺跡出土のⅡａ,枕崎市奥木場遺跡のⅡａｂに酷似している。時期的には下剥峯式土器から桑ノ丸式土器へ変化した頃のものと考えられる。手向山式土器は，胴部はくの字形に屈曲し，胴部から口縁部にかけてもしくは全面に山形押型文を施すもの（Ⅱａ）と，胴部はくの字形に屈曲し，胴部から口縁部にかけてもしくは全面に撚糸文を施すもの（Ⅱｂ）とに細分される。前者は横手浩二郎氏分類の手向山1式に，後者は2式にそれぞれ該当する。本遺跡では大部分が手向山2式である。手向山式土器は，南九州の貝殻文文化に新しい押型文という施文方法が採用され，生み出された土器である。この土器から平栫式土器へ変化するのかどうか，ようするにそれまでの南九州に伝統的に採用されていた円筒形土器文化が終焉を迎えたかどうか議論の分かれるところである。その他，早期中葉の山形押型文土器も出土している。山形は横位に施文され，口縁部平坦面にも施文されている。この山形押型文土器も在地の円筒形土器文化に交じり，平底で円筒形を呈している。また，円筒形条痕文土器も出土しているが，この土器は木崎康弘氏の中原Ⅳ・Ⅴ式にあたり，水ノ江和同氏の一野式土器に該当する。木崎氏は早期前葉から中葉の所産と考察しているが，現在確定はしていない。本遺跡において山形押型文土器（山形押型文土器が在地の円筒形土器文化に接触し，生ま

れた円筒形を呈し，口縁部が平坦な土器）とこの円筒形条痕文土器が集石遺構の中で共伴して検出されたことを考慮すると，そんなに古くなることは考えられず，時期的には早期中葉のものと思われる。口縁部に施文されている条痕文も山形に波打ち，山形押型文土器を模しているようにもおもえる。このように押型文文化が伝播し，それまでの貝殻文土器文化に吸収されて生み出された時期の土器が多数出土した。これらの土器の後続型式の候補の一つである早期後葉の平栫式土器は一片のかけらも検出されていない。押型文土器が伝播した後にどの土器が後続するのか定かではない。議論は大きく３つに分かれている。新東晃一・多々良友博氏などの早期中葉の南九州には，南九州を分布の中心とする貝殻文円筒形土器の系統と西日本に分布し，南九州にも分布域を拡大してきた押型文土器の系統という２系統の土器が存在していたという２系統説。木崎康弘・松永幸男氏などの１系統（貝殻文円筒形土器→貝殻文系塞ノ神式土器→撚糸文系塞ノ神式土器→平栫式土器と変遷する)。もう一つは高橋信武・八木澤一郎・桑畑光博氏などの１系統（押型文土器→手向山式土器→平栫式土器→撚糸文系塞ノ神式土器→貝殻文系塞ノ神式土器）である。どの変遷案とも詳細に土器の型式変化を考慮し，考えられた案である。桑畑氏は層位的にこれを証明しようと詳細な観察を行なっており，それによると若干ではあるが，撚糸文系塞ノ神式土器が貝殻文系塞ノ神式土器よりも下層から出土しているという。瀧之段遺跡で出土した塞ノ神式土器は，河口貞徳氏のいう塞ノ神Ａａ式土器，新東晃一氏の石坂上式土器・栫ノ原式土器，高橋信武氏の塞ノ神１式土器に該当する。要するに撚糸文系塞ノ神式土器が出土しており，桑畑氏の分析が正しいとするならば古手の塞ノ神式土器が出土したことになる。

第３節　縄文時代前期以降

縄文時代前期以降ではないが，表採遺物で縄文時代早期末の河口貞徳氏のいう轟１式がある。この土器には微隆起線文が観察できる。しかし，堂込秀人氏のいう苦浜式土器の可能性もある。縄文時代前期の遺物は，河口氏の轟２式と深浦式土器が数点出土しただけであった。前期の遺構も，何ら検出されなかった。縄文時代草創期前葉・後葉，早期中葉・後葉，前期と縄文の人々が代わる代わるこの地に生活を営んでいた歴史が判明した。

＜参考引用文献＞

1982『市来町郷土誌』市来町郷土誌資料編纂委員

新東晃一他　1978「下剥峯遺跡」『西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書』

1983「深見諏訪山遺跡」『大和市文化財調査報告書　第14集』大和市教育委員会

中村喜代重　1988「大和市の先土器時代遺跡展望」『大和のあけぼのⅡ』大和市教育委員会

白石浩之　1988「縄文文化の起源を求めて」『大和のあけぼのⅡ』大和市教育委員会

相田　薫　1988「神奈川県指定重要文化財の指定を受けた考古資料の概要について」『大和のあけぼのⅡ』大和市教育委員会

1990「長堀北遺跡」『大和市文化財調査報告書　第39集』大和市教育委員会

出口浩・雨宮瑞生　1990「横井竹ノ山遺跡」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書10』

大塚達郎　1990「窩紋土器研究序説（前編)」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要９』

大塚達郎　1991「窩紋土器研究序説（後編)」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要10』

雨宮瑞生　1991「南九州縄文草創期土器」『南九州縄文通信No４』

雨宮瑞生　1992「南九州縄文草創期土器（補）」『南九州縄文通信No６』
1992「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書61』鹿児島県教育委員会
雨宮瑞生　1992「縄文期の定住生活と定住性に関する人類史上の諸問題」『南九州縄文通信No６』
新東晃一　1992「島嶼の縄文早期土器の様相」『南九州縄文通信No６』
雨宮瑞生　1993「縄文時代の定住生活出現に関する研究現状」『南九州縄文通信No７』
雨宮瑞生　1993「南九州縄文時代草創期研究の現状」『南九州縄文通信No７』
雨宮瑞生　1994「南九州縄文草創期資料の新旧関係」『南九州縄文通信No８』
新町　正　1994「市来町潟小路発見の丸ノミ形石斧」『南九州縄文通信No８』
1996『かながわの縄文文化の起源を探る』神奈川県考古学会
1996『縄文時代草創期資料集』横浜市博物館（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
宮田栄二　1996「南九州における細石刃文化終末期の様相」『坂詰秀一先生還暦記念論文集　考古学の諸相』
新町　正　1997「鍋ケ城跡」『市来町埋蔵文化財発掘調査報告書４』
矢野健一　1998「南九州縄文早期文化の評価」『南九州縄文通信No12』
宮田栄二　1998「縄文時代草創期の石器群」『南九州縄文通信No12』
春成秀爾　1998「更新世－完新世移行期の動物と人類」『更新世－完新世移行期の比較考古学』東京都立大学人文学部史学科考古学研究室 国立歴史民俗博物館 春成秀爾研究室
梶原　洋　1998「極東の更新世－完新世移行期と土器の起源」『更新世－完新世移行期の比較考古学』
東京都立大学人文学部史学科考古学研究室 国立歴史民俗博物館 春成秀爾研究室
堤　　隆　1998「日本列島の終末と人類の適応システム」『更新世－完新世移行期の比較考古学』
東京都立大学人文学部史学科考古学研究室 国立歴史民俗博物館 春成秀爾研究室

第９章　才野ケ原遺跡の調査

第１節　調査に至るまでの経過

中山間整備事業を推進している市来町経済課は，市来町教育委員会に工事計画内の埋蔵文化財の有無を照会した。市来町教育委員会は工事計画内に「才野ケ原遺跡」があることを伝え，平成９年度，確認調査を実施することとなった。

１．所　在　地　鹿児島県日置郡市来町川上才野ケ原
　　対象面積……約40,000㎡

第２節　調査の組織

調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	市来町教育委員会	教育長	松崎　孝
調査庶務	市来町教育委員会	社会教育課長	宇都隆雄
	市来町教育委員会	社会教育係長	吉田裕史
	市来町教育委員会	派遣社会教育主事	宮司和弘
	市来町教育委員会	主事	西久保敏彦
	市来町教育委員会	主事	芹ケ野幸淑
調査担当	市来町教育委員会	主査	新町　正
調査期間	平成10年１月16日から平成10年２月18日		

第３節　調査の概要

調査において任意にトレンチを設定し，確認調査を行なった。また，現地表面の観察により削平を受け，岩盤が確認できたところは発掘調査の迅速化の為，掘り下げを実施しなかった。以下，経過は日誌抄により省略する。

【日誌抄】

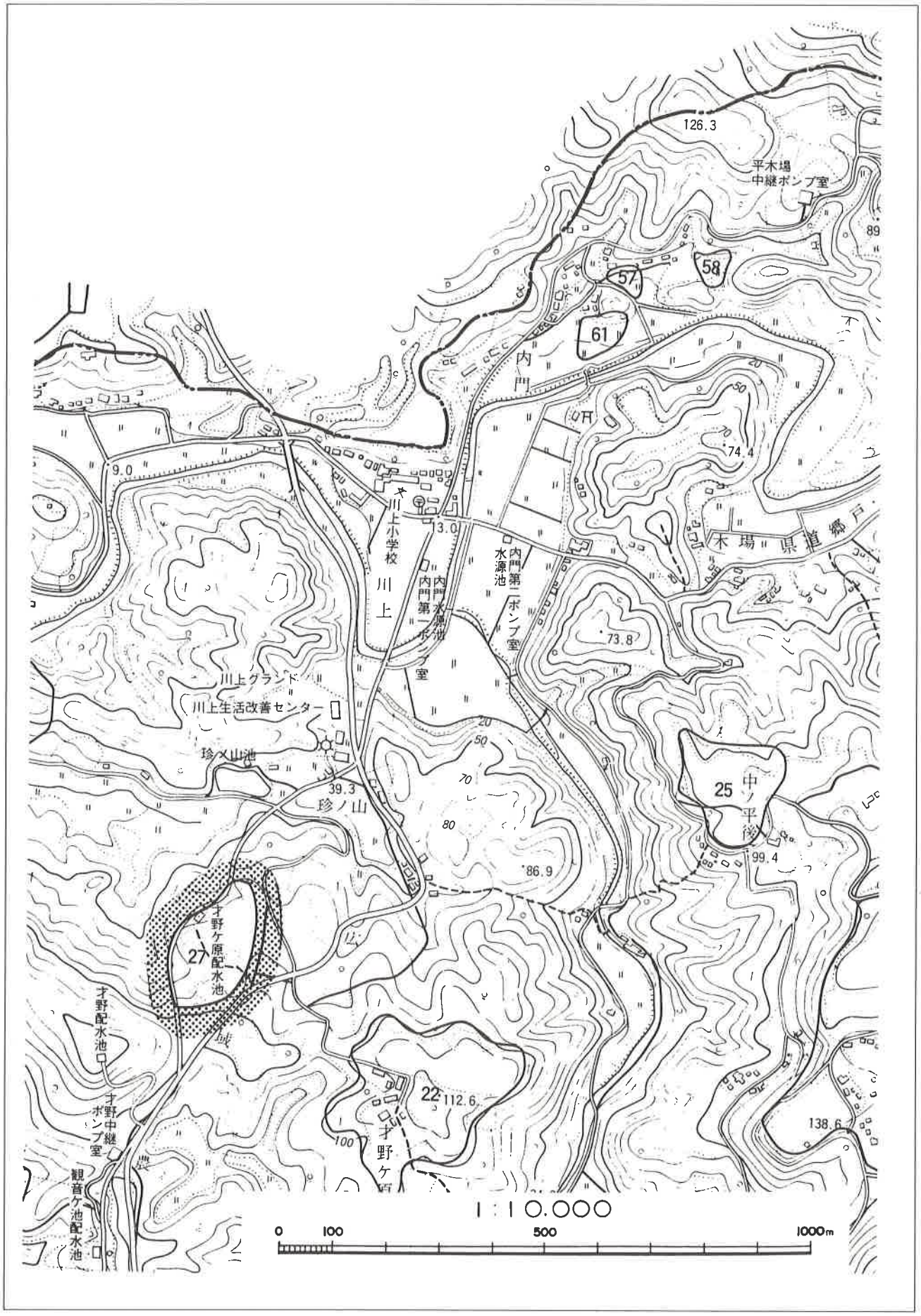
◇１月16日
　トレンチ設定。掘り下げ。

◇１月22日～１月23日
　トレンチ設定。掘り下げ。岩盤やシラス検出。

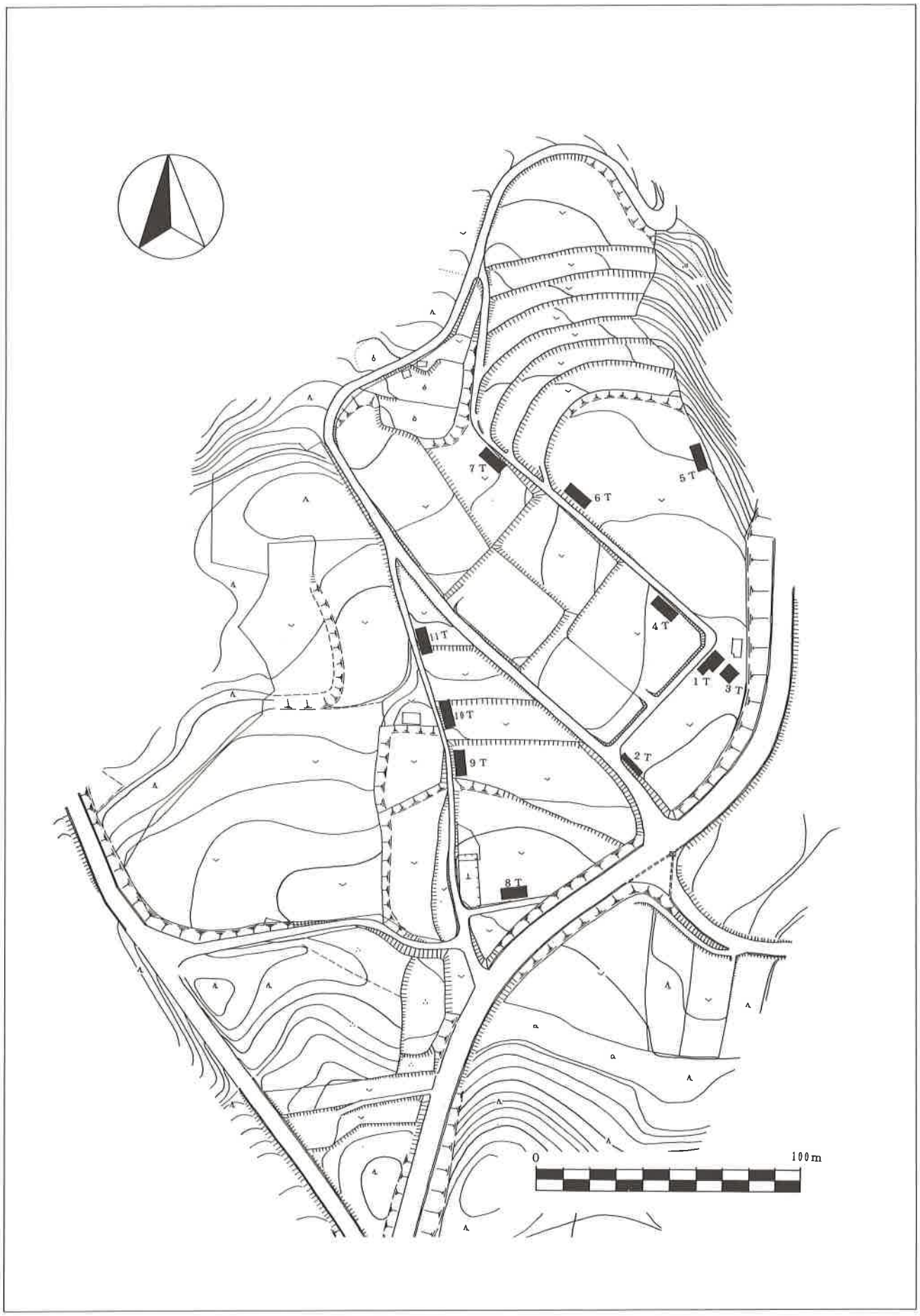
◇１月26日～１月30日
　トレンチ設定。掘り下げ。１トレンチより旧石器時代の遺物検出。細石器文化のものと思われる。１トレンチを更に拡張し，確認を行なう。トレンチの埋め戻しを行なう。写真撮影を行い，遺物の平板実測を行なう。

◇２月２日～２月６日
　鹿児島大学の雨宮瑞生氏に遺物指導を受ける。１トレンチに近接して３トレンチを設定，掘り下げを行なう。その結果，縄文時代早期の遺物が出土。

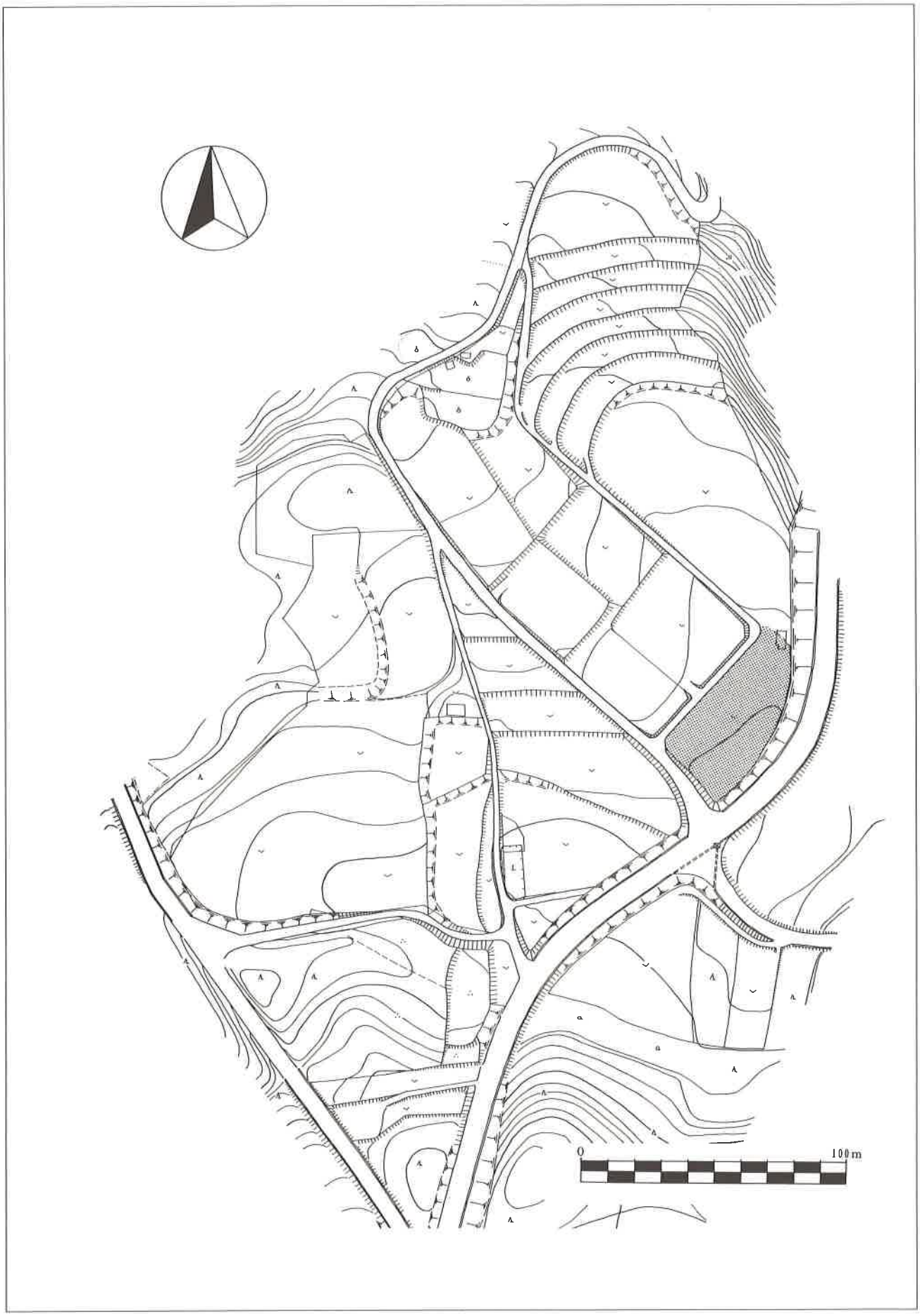
◇２月９日～２月13日
　現場休み。



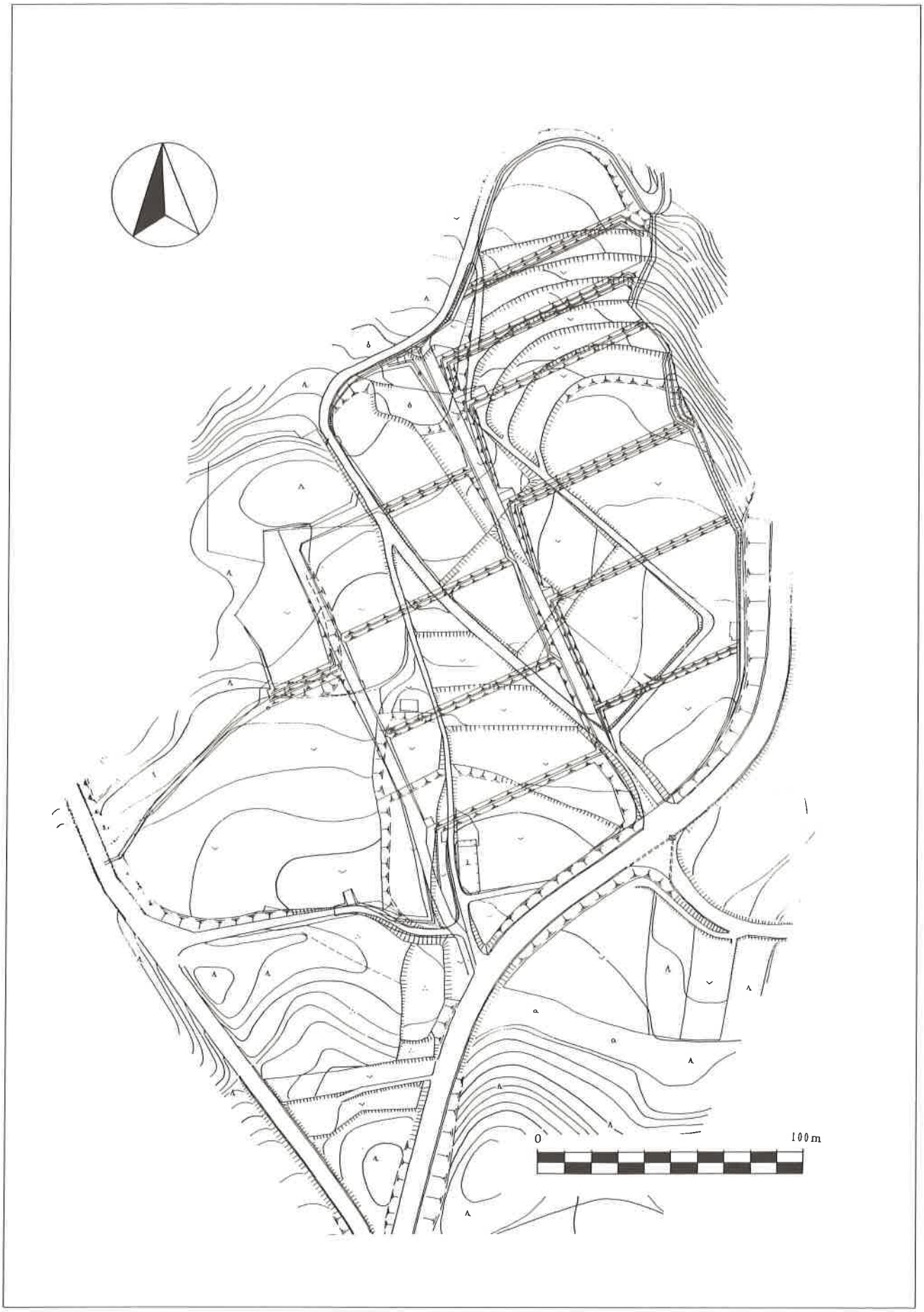
第70図　周辺遺跡分布図



第71図　トレンチ配置図



第72図　遺跡残存範囲



第73図　圃場整備計画図

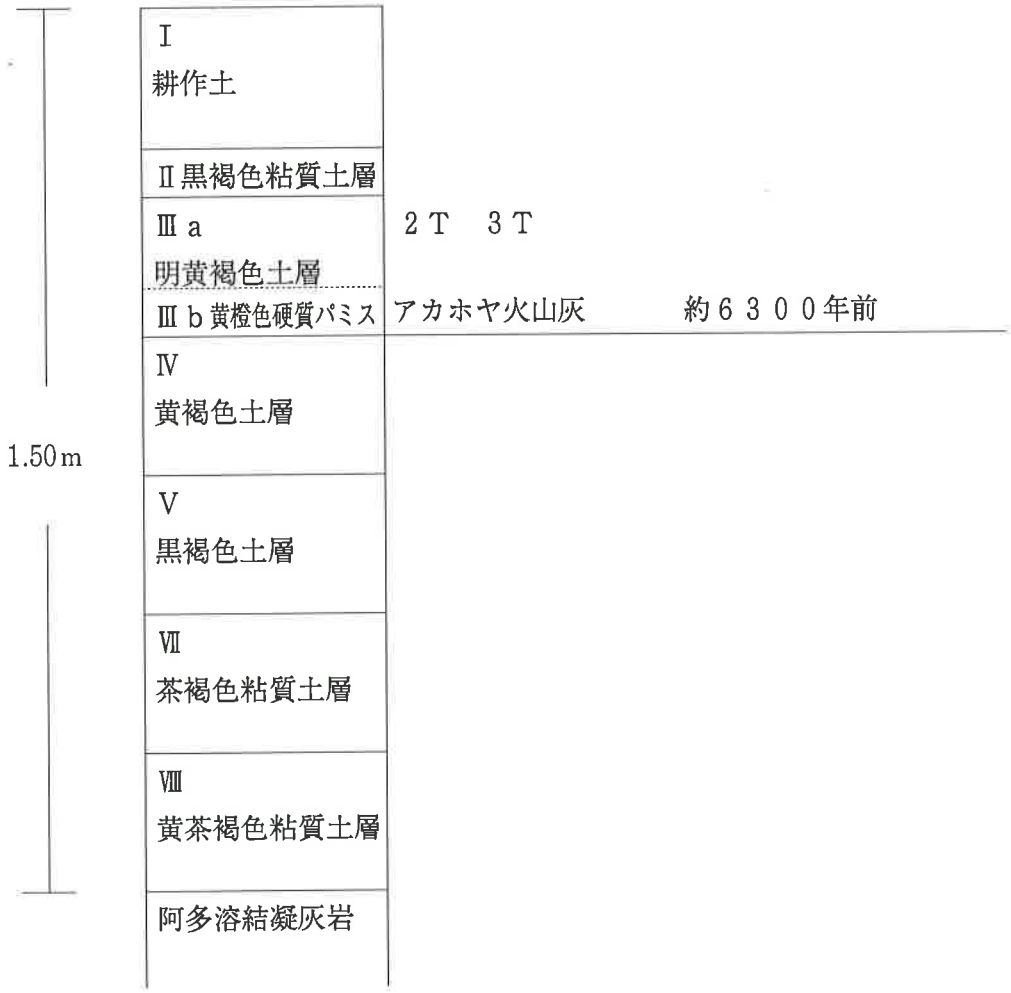
◇２月16日～２月18日

遺物の取り上げ作業。埋め戻し。

第４節　標準土層

過去，畑を造成したことにより削平を受けており，また最近も畑として使用されていたため殆どがシラス若しくは岩盤まで削平を受けていた。

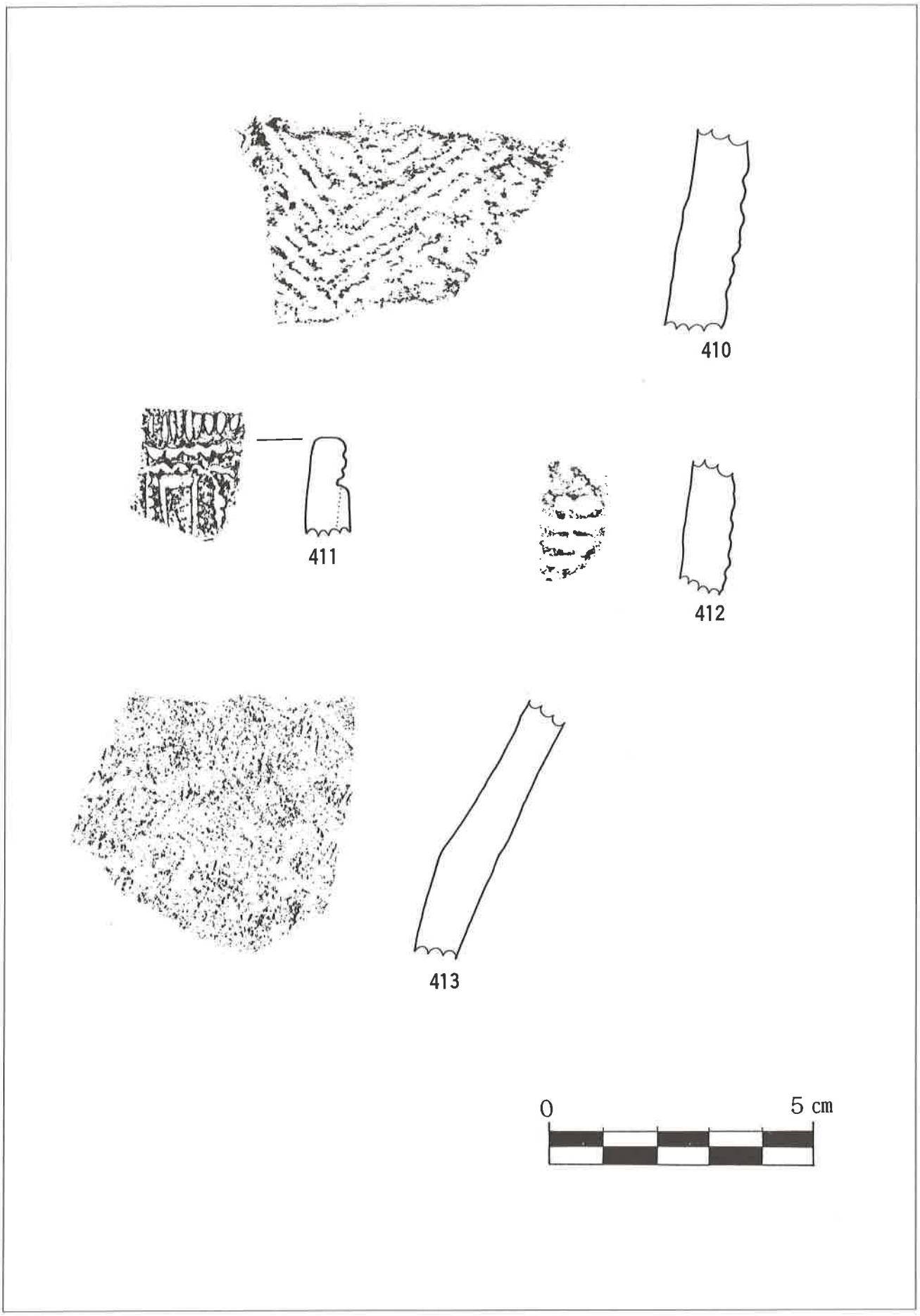
土　層　図



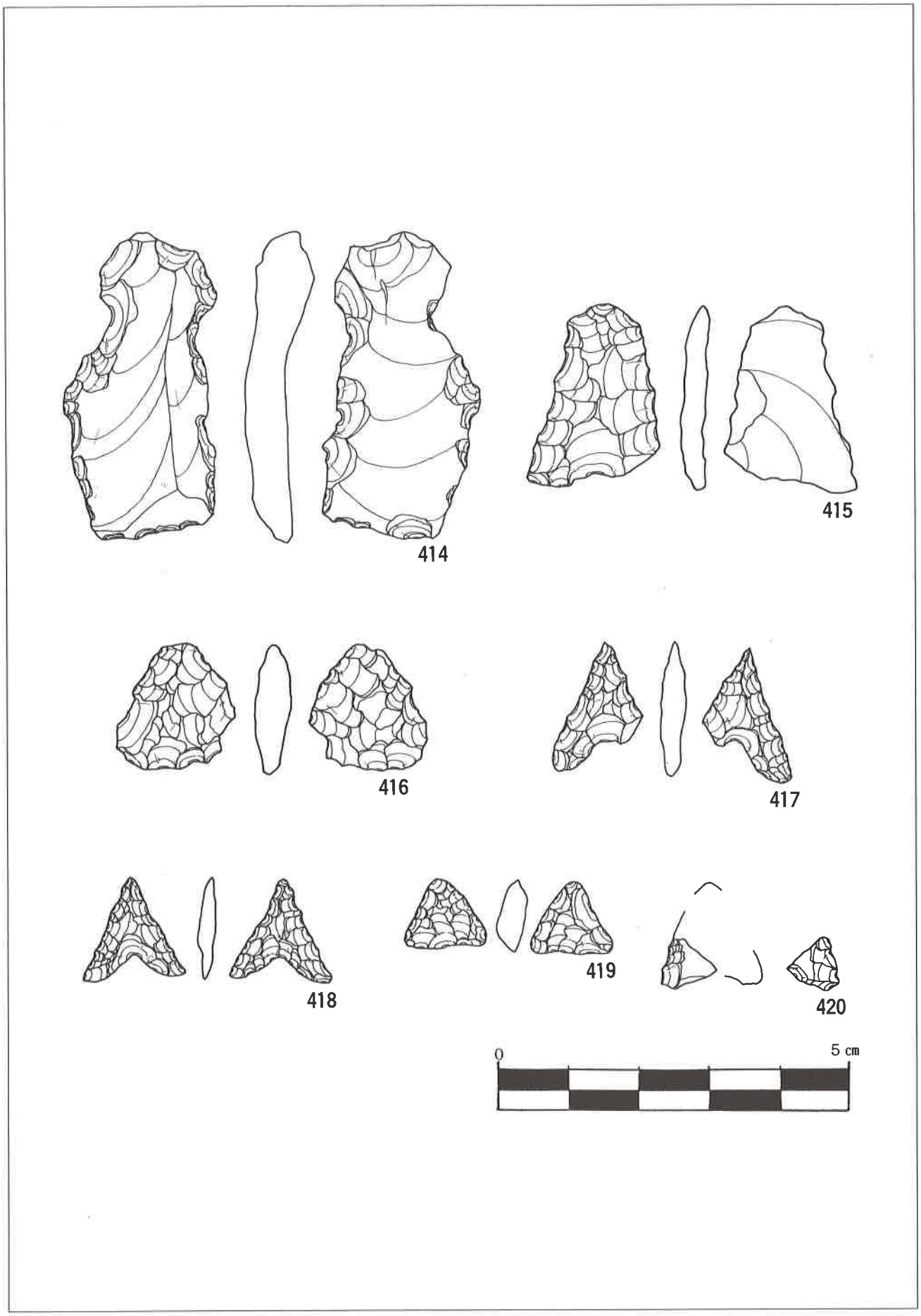
第５節　表面採集遺物

１．土器（第74図）

才野ケ原遺跡はその殆どが削平を受けて，地表面の観察によりはっきり判るほどである。約40000㎡ある圃場整備地内を歩いても，遺物が表面で確認できたのは１～３トレンチ周辺だけである。この区画だけは良質の土壌が残っており，その中に遺物が混ざっていた。第74図には図化できる土器片を上げてみた。410は黄茶褐色の良質の土器で，貝殻腹縁により綾杉状に貝殻条痕文を施す縄文時代早期中葉の石坂式土器の胴部破片である。411は同じく縄文時代早期前葉の吉田式土器の口縁部破片である。茶褐色を呈し，楔型突帯が添付されている。412も同じく吉田式土器の破片で，胴部片である。貝殻腹縁による押引文を施す。413は縄文時代早期後葉の手向山式土器の口縁部付近の破片である。細くはっきりした縦位の「くの字」の押型文を施す。



第74図　才野ケ原遺跡表採遺物



第75図　才野ケ原遺跡表採遺物

2．石器（第75図）

414は頁岩製の石匙で，縦匙である。縦長剥片を使用し，打点方向を摘まみ部分にしている。415～420はすべて石鏃である。415は頁岩製の石鏃で，主要剥離面を残しており剥片の一面だけ調整を施している。大型の石鏃である。416は黒耀石Ａを使用している。脚部の一部分を欠損している。417は灰色をした黒耀石Ｄを使用し，抉りは深く，脚部を欠損している。418も黒耀石Ａを使用している。417と同じ形を呈し，同時刻の所産と思われる。419は黒耀石Ｂを使用した平基式小型三角形鏃である。早期前葉に多く見られる。420は417と同じく黒耀石Ｄを使用。脚部の部分だけである。

第６節　トレンチの概略

１トレンチ

耕作土から20cmで旧石器時代の茶褐色粘質土層を確認。層中から細石刃核，細石刃を検出した。

２トレンチ

耕作土から20cmでアカホヤ火山灰（黄橙色硬質パミス）を確認。桑ノ丸式土器の範疇に属する土器と石皿，磨石，石斧出土。

３トレンチ

耕作土から20cmから60cmでアカホヤ火山灰確認。土器片１検出。

４トレンチ

耕作土から20cmで凝灰岩検出。

５トレンチ

耕作土が20cmありその下60cmまで埋土。その下層はシラス検出。

６トレンチ

耕作土から20cmでシラス検出。

７トレンチ

耕作土から20cmでシラス検出。

８トレンチ

耕作土から20cmでシラス検出。

９トレンチ

耕作土から20cmでシラス検出。

10トレンチ

耕作土から20cmで茶褐色粘質土層を検出。掘り下げを行なったが遺物は検出できなかった。

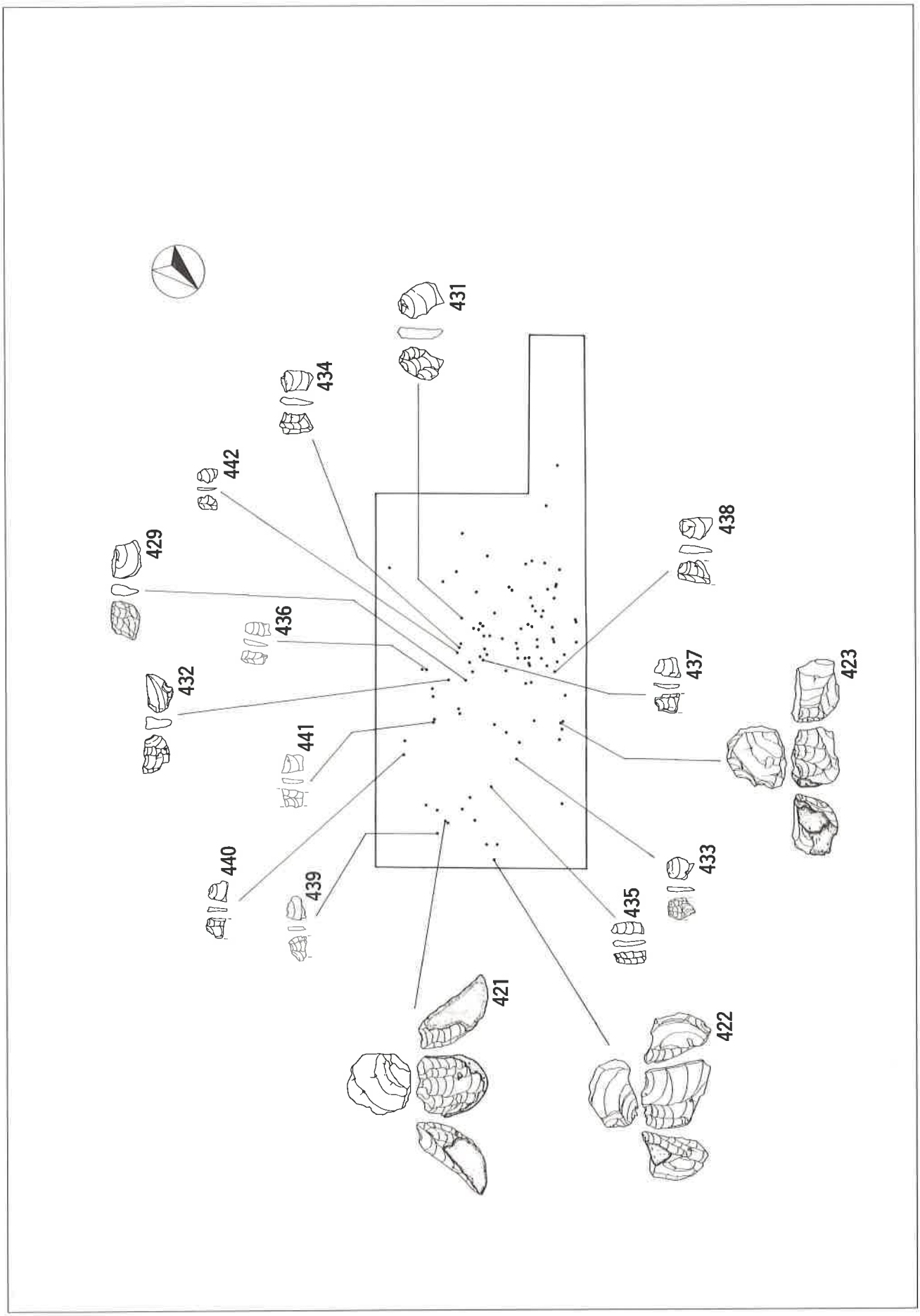
11トレンチ

耕作土から20cmで黄褐色土層を検出。掘り下げを行なったが遺物は検出できなかった。

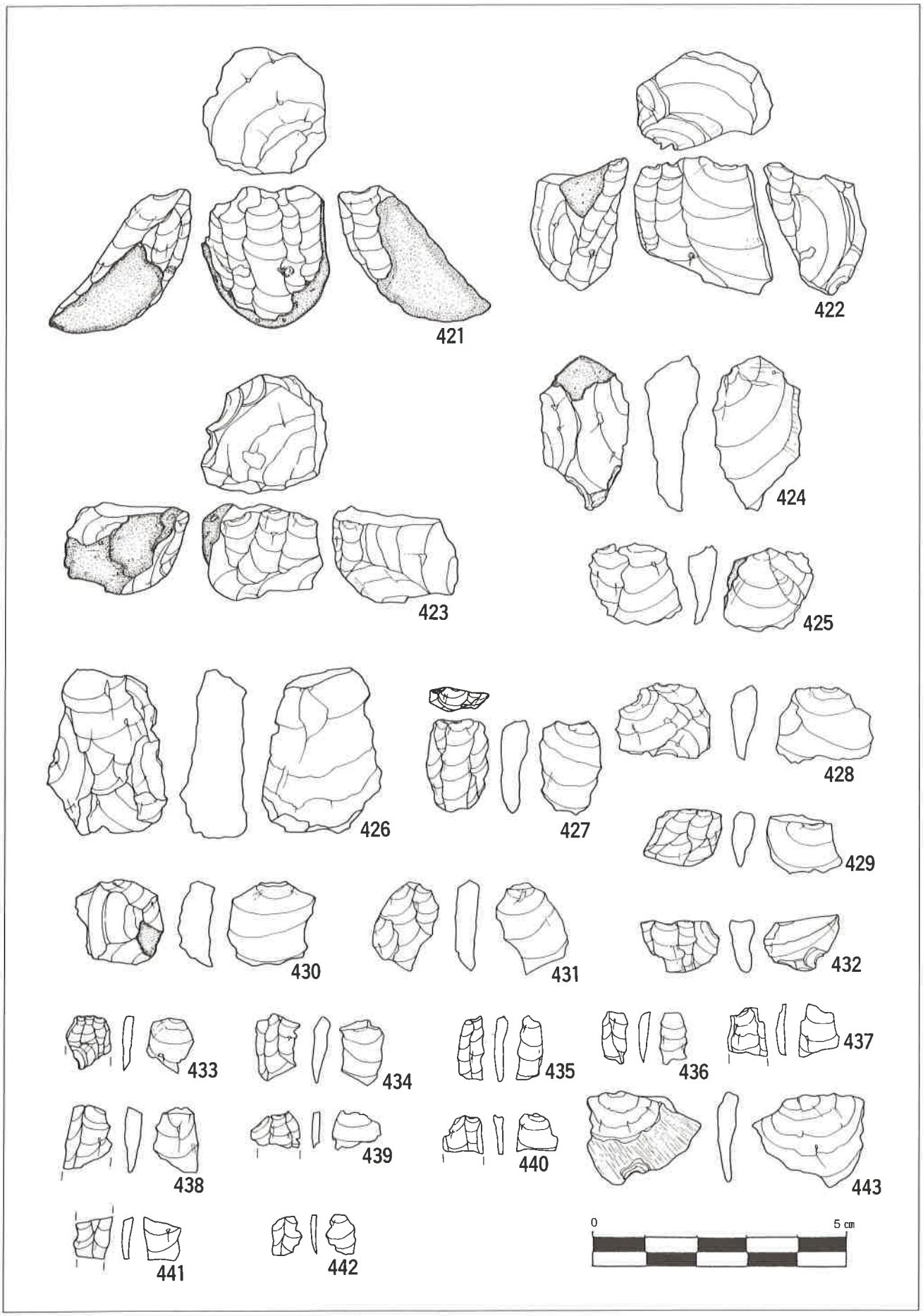
第７節　出土遺物

１．１トレンチ出土遺物（第76～77図）

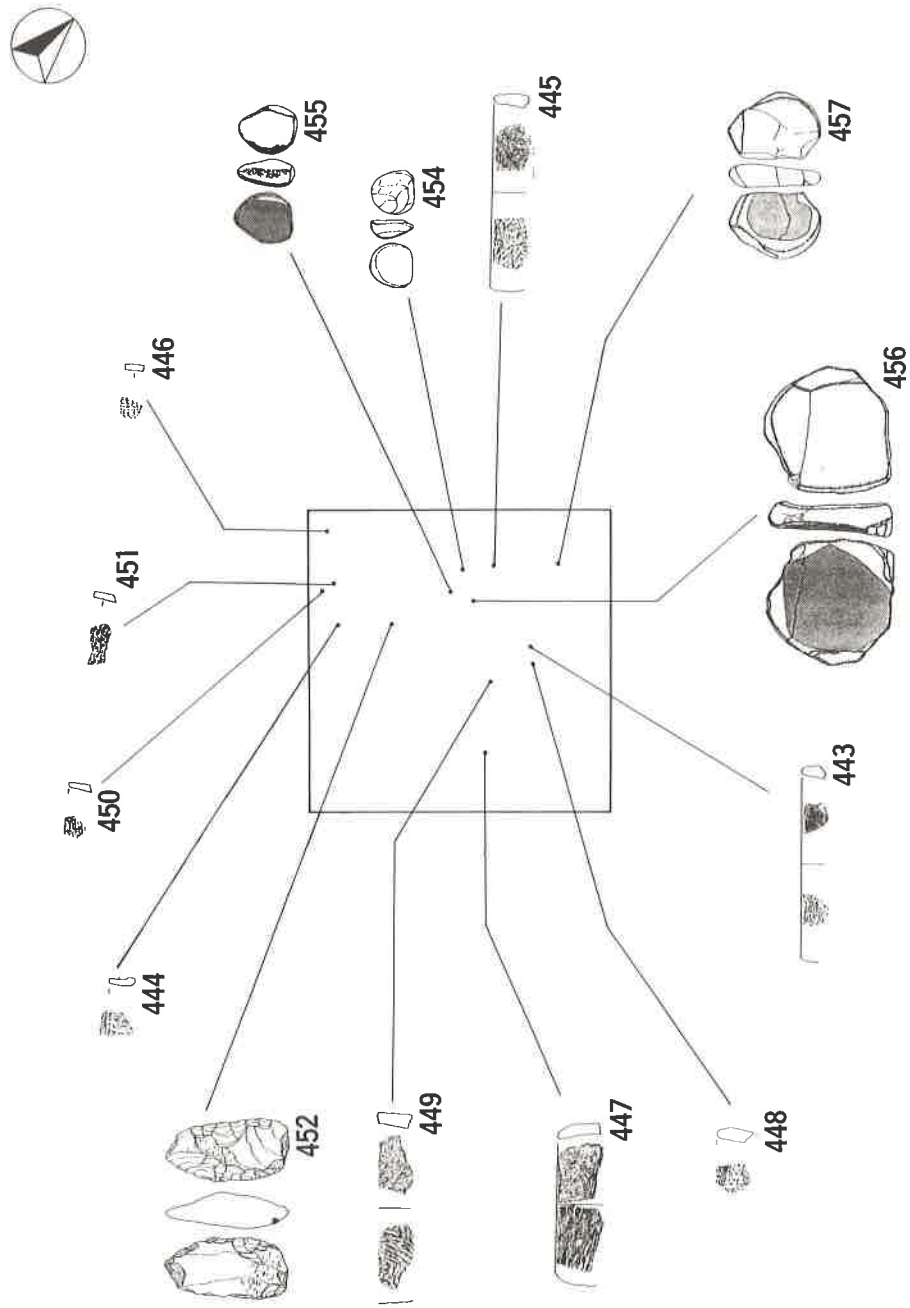
421は黒耀石Ａ製の細石刃核である。原石を半割し，剥離面の一端を打点としている。全体は原石面を残し，剥がされた細石刃は５本確認できる。正面形は正方形を呈し，打面調整はない。422も421と同じ石材を使用した細石刃核である。側面は両面とも整形し，その後，正面からの打面調整が認められる。細石刃剥離痕は２本で，正面右側に作業面調整剥離痕を残す。423も同様の黒耀石を使用した細石刃核である。左側面に，原石面を残す。作業面は一ケ所で，３本の細石刃剥離痕



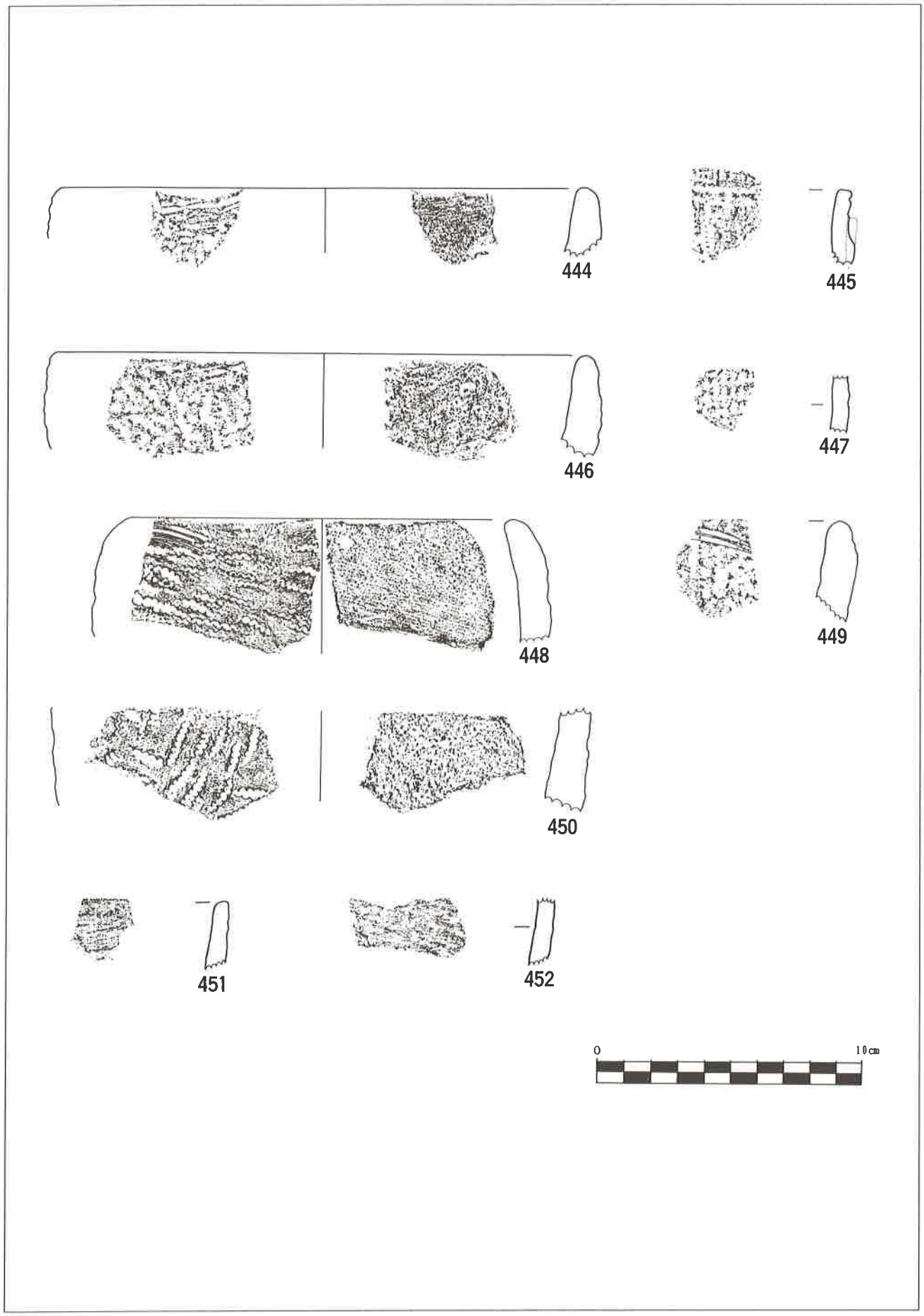
第76図　1トレンチ遺物分布図



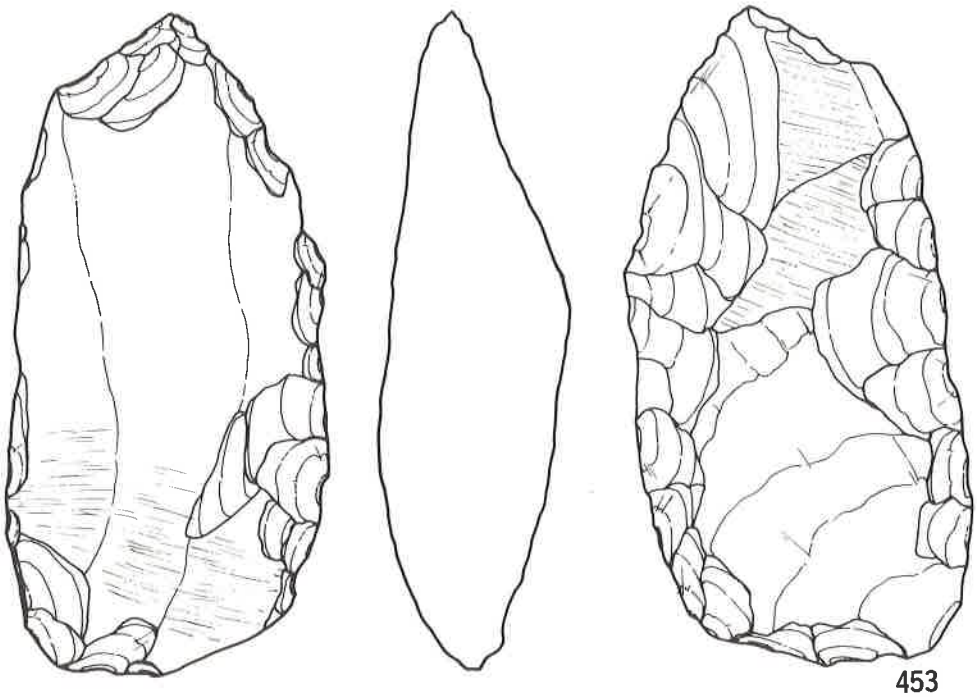
第77図　1トレンチ出土遺物

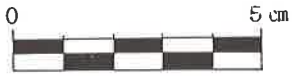


第78図　3トレンチ遺物分布図

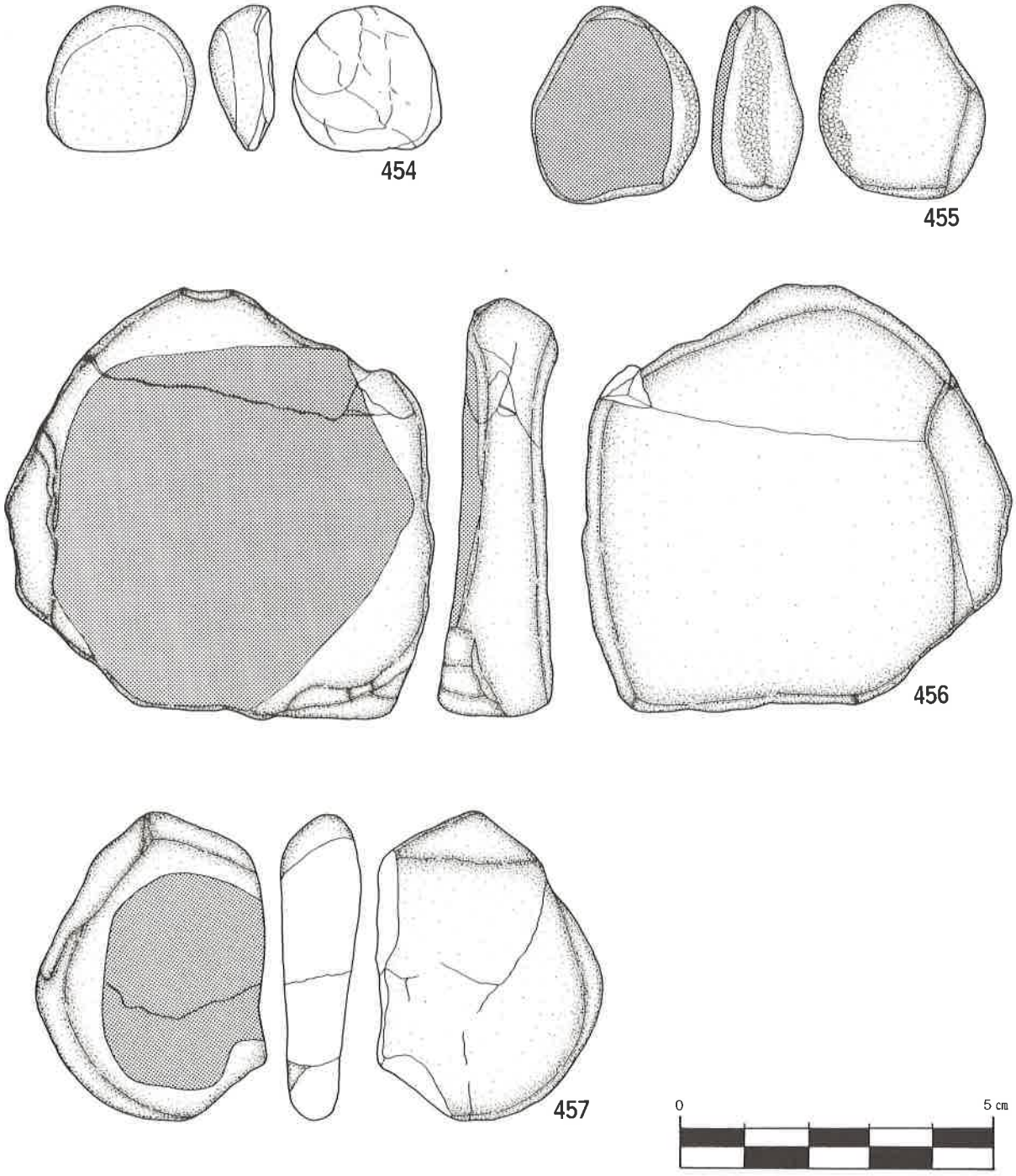


第79図　3トレンチ出土遺物（一）

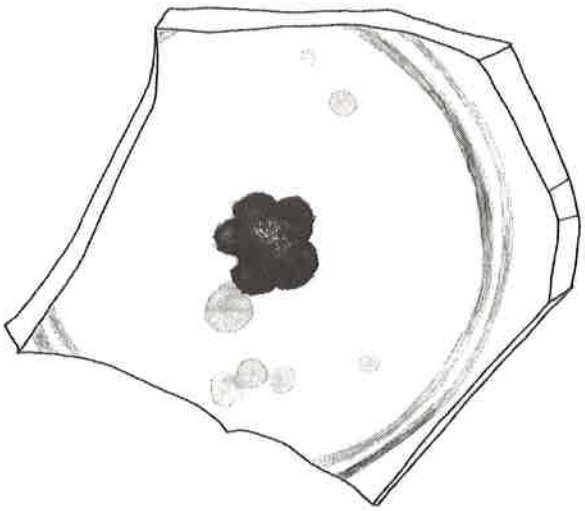


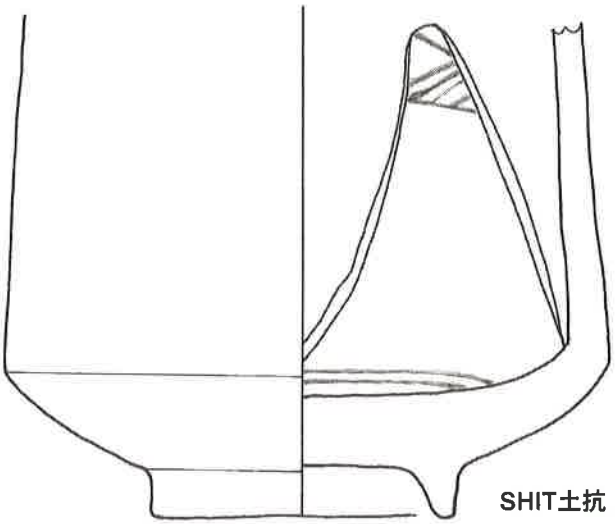


第80図　3トレンチ出土遺物（二）



第81図　3トレンチ出土遺物（三）





458

第82図　近世の遺物

が認められる。424・426は黒耀石A製の剥片である。425・428・430は打面調整剥片であろう。427・429・431・432・433は細石刃核の作業面の剥離が進み，新たに作業面を作り出すための作業面調整剥片であろう。427は5本，429は6本，431は3本，432は4本，433は4本の細石刃剥離痕が観察できる。434～442は細石刃である。434・435・436・442は完形品である。443は頁岩製で研磨痕が残る。恐らく石斧の欠損かと思われる。

2．3トレンチ出土遺物（第78～81図）

3トレンチ出土遺物はすべて縄文時代の遺物である。旧石器時代の遺物は確認できなかった。444・446はⅢ層出土遺物で，445・447・451・452はⅣ層下から出土，448～450はⅣ層から出土した。444・446・448～450は口唇部は丸みを帯び，口縁部上部に貝殻で横位に条痕文を施し，口縁部から胴部にかけて貝殻腹縁による刺突文を横位・縦位に施文する。口縁部は内彎するようである。451・452は，層位的に上記の土器よりも下層からの出土である。口唇部は平坦に作られ，口唇部平坦面は内傾している。445・447は同一個体と思われ，口唇部は平坦に作られ，平坦面にはヘラ刻みが入れられる。口縁部には楔形突帯文が貼付され，胴部は貝殻による押引文が施文される。

453は石斧である。Ⅳ層から検出された。石材は頁岩で，長さ13.3cm，幅6.4cm，厚さ3.5cm，重量が370gである。刃部と基部を研磨し，側辺部は剥離により調整している。454は磨石である。半分が欠損しており，重量は370gである。455は磨石と敲石の併用である。片面が特に研磨が進み，側面は敲打痕が観察できる。456・457は石皿である。Ⅲ層から出土した。456は長さ26.4cm，幅26.6cm，厚さ7.2cm，重量が6.8kgである。457は一部欠損している。長さ19.4cm，幅14.2cm，厚さ5.1cm，重量が1.85kgである。

3．近世の遺物

458は肥前焼の染付碗である。口径約7.4cm，底径4cmで，見込にコンニャク印判で五弁花文を施文している。18世紀頃のものであろう。

第8節　まとめ

ここ才野ケ原遺跡はその殆どが近年の基盤整備により削平を受けていたことは以前から判っていた。それは路肩や農道に露出している土層を見ても明らかである。今回，確認調査を実施するにあたり土層が残存していそうな場所を重点的に確認トレンチを入れ確認調査を行なった。その結果，やはり殆どが削平を受け遺物包含層の確認ができなかったが，約1500m²に遺物の存在が認められた。時代は旧石器時代終末期と縄文時代早期である。旧石器時代は1トレンチを中心に検出され，細石刃核や細石刃，また石斧の破片などが検出された。細石刃核は市来町では現在，松尾平遺跡・瀧之段遺跡で確認されている。今回の旧石器時代終末期の石斧の検出は初めての例である。縄文時代は445・447などの早期前葉の土器，即ち，新東晃一氏や本田道輝氏などの言う吉田式土器の栫ノ原タイプの土器と縄文時代早期後葉の桑ノ丸式土器などが出土した。この桑ノ丸式土器は器形は桑ノ丸式土器であるが文様は貝殻腹縁による刺突文で，下剥峯式土器の文様と酷似している。また，手向山式土器の破片も表採されており，才野ケ原遺跡は旧石器時代終末期から縄文時代早期の前葉中葉後葉にかけての時期の遺跡と思われる。

石器一覧表(7)

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	器　種	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
75	414	表			石匙	頁岩	4.30	2.05	0.75	7	
	415	〃			石鏃	〃	2.60	(1.75)	0.30	2	
	416	〃			〃	黒耀石A	1.80	(1.50)	0.52	1.9	
	417	〃			〃	黒耀石D	1.90	(1.00)	0.35	0.8	
	418	〃			〃	黒耀石A	1.45	1.45	0.20	0.7	
	419	〃			〃	黒耀石B	0.95	1.10	0.35	0.5	
	420	〃			〃	黒耀石D	—	—	—	0.2	
77	421	18	1T	Ⅶ	細石刃核	黒耀石A	(2.70)	(2.35)	(1.75)	13	
	422	30	〃	〃	〃	〃	2.60	2.40	1.65	11	
	423	59	〃	〃	〃	〃	1.80	2.20	2.25	11	
	424	125	〃	〃	剥片	〃	2.90	1.65	0.90	3.8	
	425	128	〃	〃	打面調整剥片	〃	1.55	1.60	0.35	1.2	
	426	26	〃	〃	剥片	〃	3.15	2.40	1.10	8	
	427	314	〃	〃	作業面調整剥片	〃	1.75	1.15	0.50	1	
	428	81	〃	〃	打面調整剥片	〃	1.40	1.75	0.50	1.5	
	429	97	〃	〃	作業面調整剥片	〃	1.10	1.30	0.40	0.7	
	430	95	〃	〃	打面調整剥片	〃	1.60	1.60	0.55	1.9	
	431	105	〃	〃	作業面調整剥片	〃	1.70	1.15	0.35	1.2	
	432	93	〃	〃	〃	〃	1.00	1.40	0.50	0.6	
	433	54	〃	〃	細石刃	〃	1.05	0.85	0.15	0.5	
	434	168	〃	〃	〃	〃	1.25	0.80	0.25	0.5	
	435	40	〃	〃	〃	〃	1.20	0.50	0.15	0.3	
	436	163	〃	〃	〃	〃	1.00	0.45	0.15	0.2	
	437	174	〃	〃	〃	〃	0.95	0.80	0.15	0.4	
	438	68	〃	〃	〃	ガラス質流紋岩	1.25	0.85	0.30	0.6	
	439	22	〃	〃	〃	黒耀石A	0.75	0.90	0.20	0.3	
	440	46	〃	〃	〃	〃	0.70	0.75	0.20	0.4	
	441	137	〃	〃	〃	〃	0.80	0.70	0.15	0.4	
	442	169	〃	〃	〃	〃	0.75	0.55	0.10	0.1	
80	443	32	1T	Ⅶ	石斧片？	頁岩	—	—	—	1	
	453	283	3T	Ⅳ	石斧	〃	13.30	6.40	3.50	370	
81	454	270	〃	ｱｶﾎﾔ	磨石	安山岩	(9.05)	9.20	(3.90)	360	欠損
	455	272	〃	Ⅳ	〃	〃	12.20	10.50	5.60	890	完
	456	268	〃	ｱｶﾎﾔ	石皿	〃	26.40	26.60	7.20	6800	
	457	246	〃	〃	〃	〃	19.40	(14.20)	5.10	1850	欠損

土器一覧表(5)

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	部位	焼成	色調	調整 外	調整 内	胎土	備考
74	410	表		表	胴部	良好	茶褐色	綾杉条痕文	ナデ	石英・長石・角閃石・礫	
	411	〃		〃	口縁部	〃	淡赤褐色	楔形突帯・ヘラ刺突文・貝殻刺突文	〃	〃	
	412	〃		〃	胴部	〃	茶褐色	貝殻押型文	〃	〃	
	413	〃		〃	〃	〃	黄茶褐色	山形押型文	〃	〃	
79	444	262	3T	ｱｶﾎﾔ	口縁部	〃	灰褐色	貝殻条痕文	〃	〃	
	445	281	〃	Ⅳ下	〃	〃	淡赤褐色	楔形突帯・貝殻刺突文・ヘラ刺突文	〃	〃	
	446	269	〃	ｱｶﾎﾔ	〃	〃	暗茶褐色	貝殻条痕文・貝殻刺突文	〃	〃	
	447	277	〃	Ⅳ下	胴部	〃	茶褐色	貝殻押型文	〃	〃	
	448	298	〃	Ⅳ	口縁部	〃	淡赤褐色	貝殻条痕文・貝殻刺突文	〃	〃	
	449	260	〃	〃	〃	〃	淡灰褐色	貝殻刺突文・貝殻条痕文	〃	〃	
	450	302	〃	〃	胴部	〃	淡赤褐色	貝殻刺突文	〃	〃	
	451	279	〃	Ⅳ下	口縁部	〃	黄茶褐色	条痕文	〃	〃	
	452	278	〃	〃	胴部	〃	黄褐色	〃	〃	〃	

磁器一覧表

挿図	番号	遺物番号	出土区	層	部位	器種	備考
82	458	表	1T	遺構内	底部	青磁染付碗	中央見込にコンニャク印板（五弁花文），土坑

図　　版

図版 1

3 トレンチ

3 トレンチ堀り下げ

3 トレンチ細石刀核出土状況

10トレンチ出土遺物

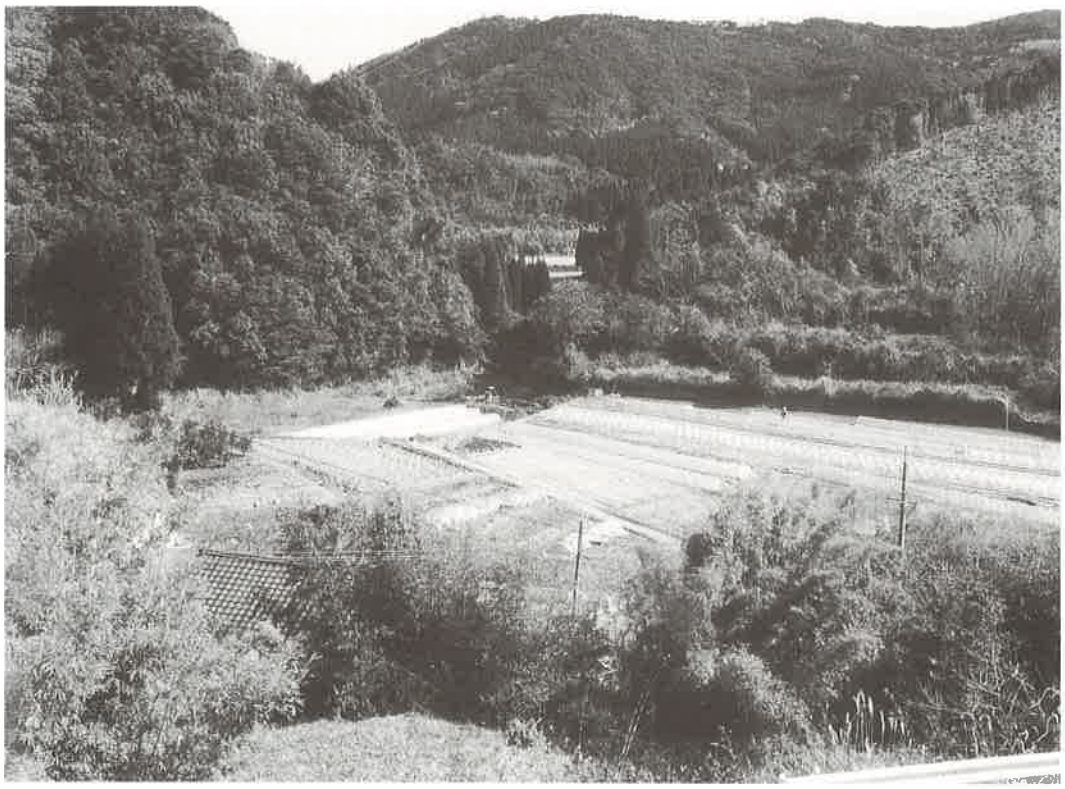
図版 3

10トレンチ堀り下げ

作業員の皆さん

図版 4

落シ平遺跡遠景



瀧之段遺跡北から南

図版 5

発掘状況

1 トレンチ検出

図版 6

集石遺構出土状況

SS－１号検出状況

SS－１号出土遺物

SS－２号出土検出状況

SS－2号遺物出土状況

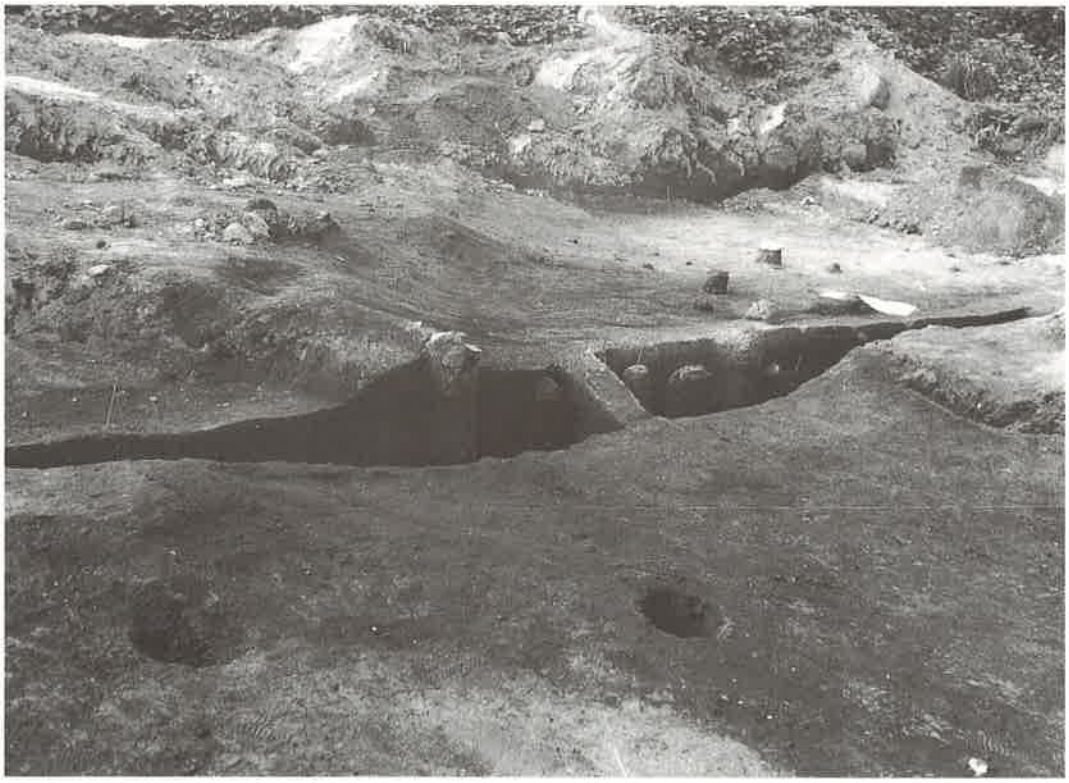
石皿検出状況

SS－3号

SS－ 4 号検出状況

石皿・集石検出状況

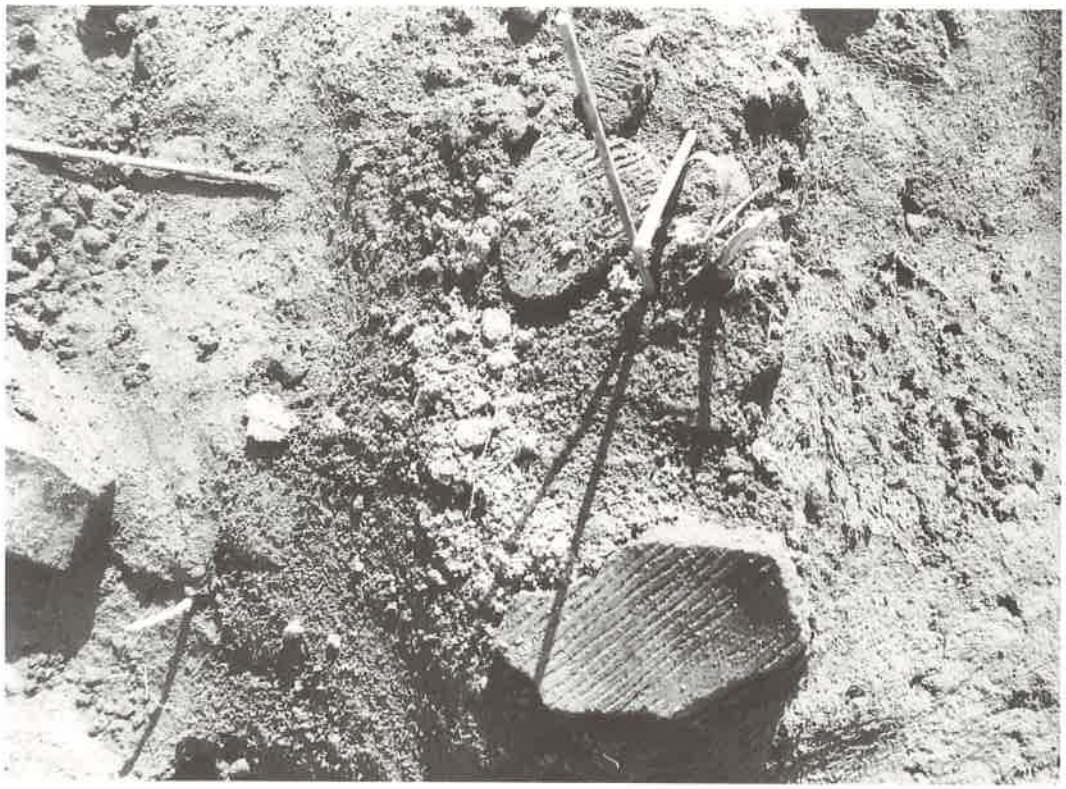
SD－１号検出状況



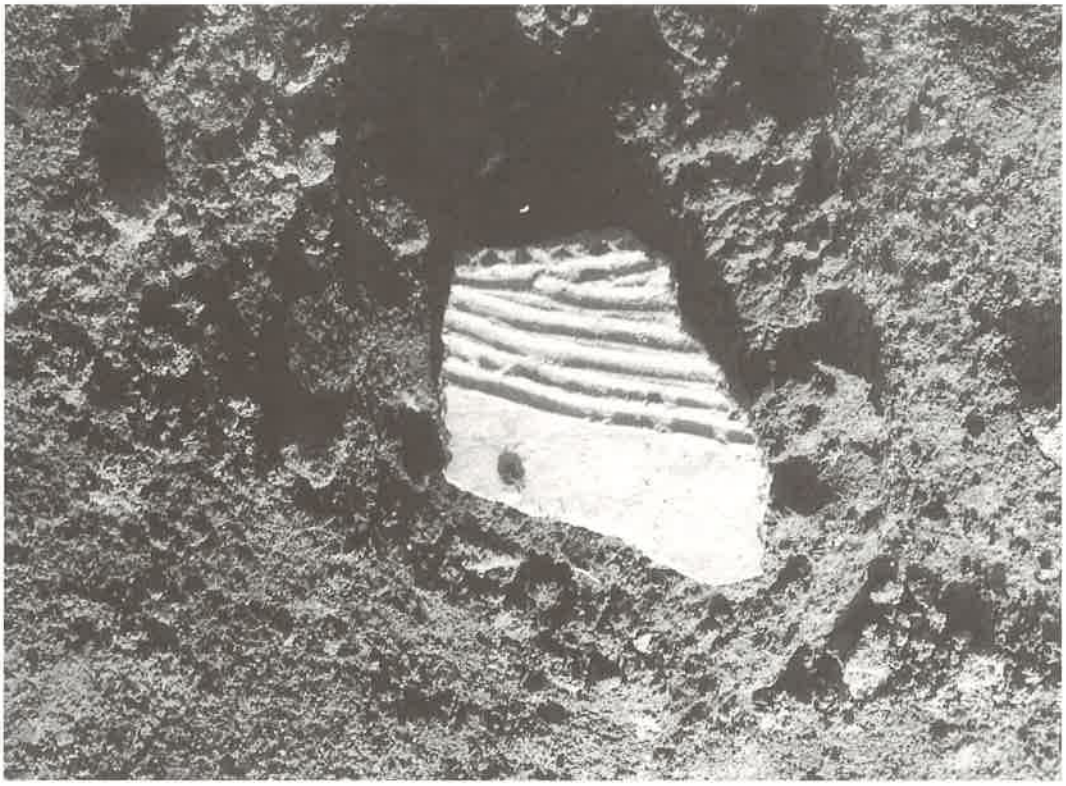
SD－１号½カット

SD－１号遺物出土状況

SD－１号土出断面



遺物出土状況（一）



遺物出土状況（二）

遺物出土状況（三）

遺物出土状況（四）

Ⅶ層堀り下げ

縄文草創期遺物出土状況

工事との同時進行

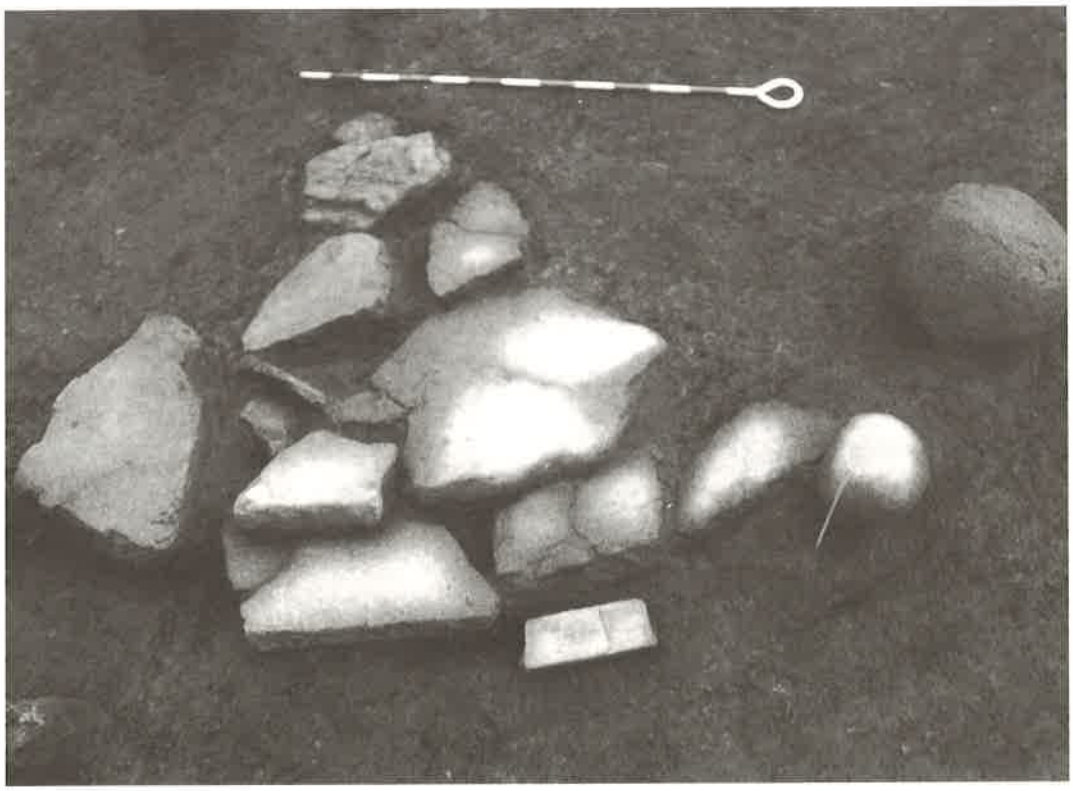
草創期遺物分布状況

草創期無文土器

ハンマーストーン検出

石鏃検出状況

石鏃出土状況



配石炉検出

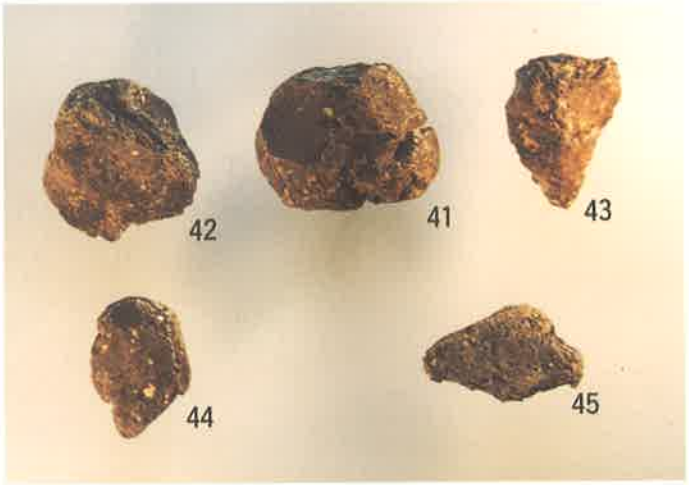
落シ平遺跡表採遺物（第４図）

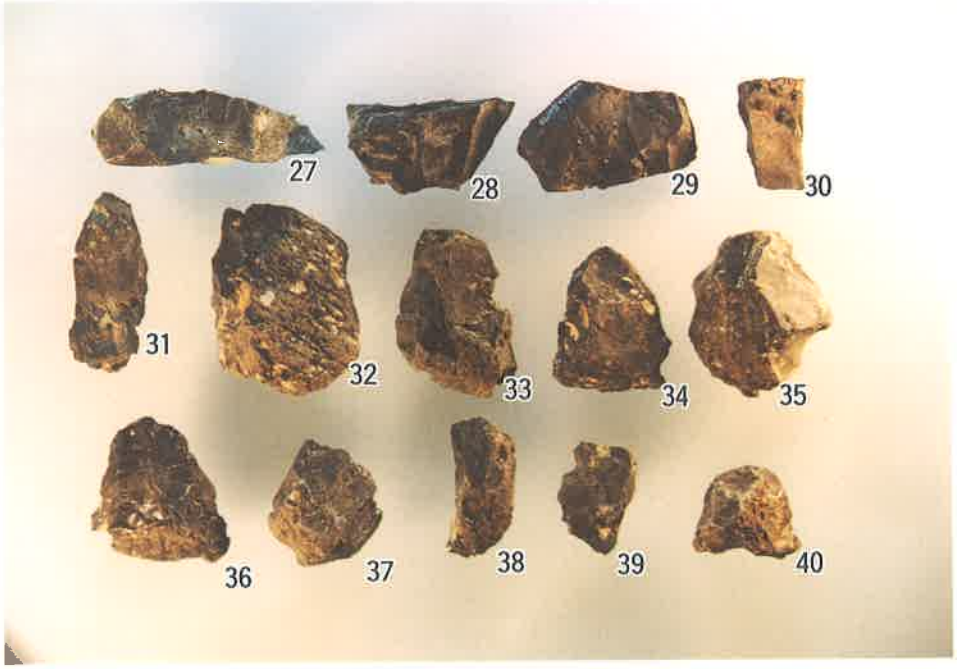
瀧之段遺跡表採遺物（第５図）

細石刀核（第６図）

３トレンチ出土遺物（第７図）

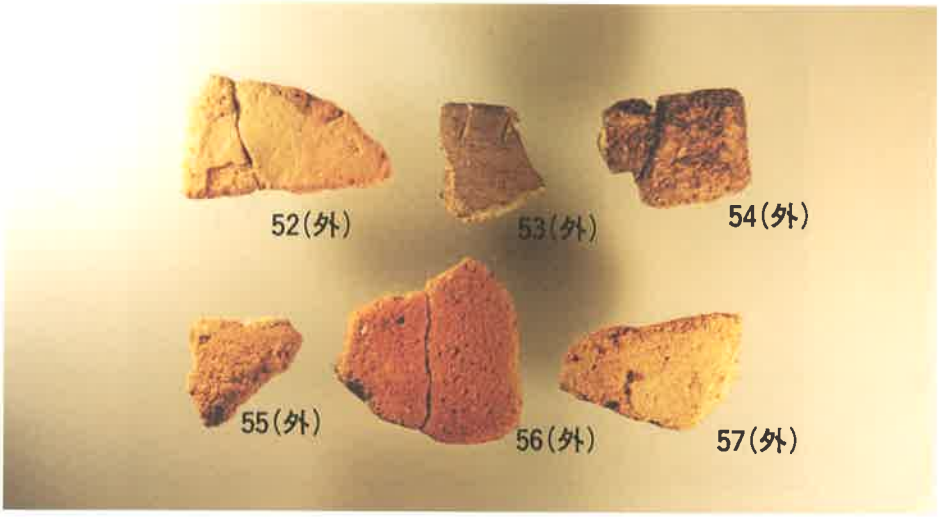
3トレンチ出土遺物（第7図）

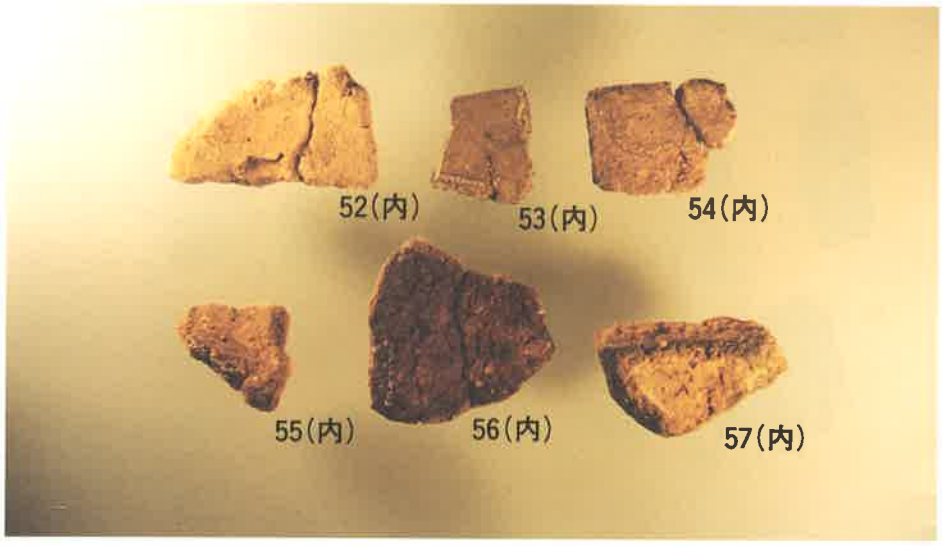




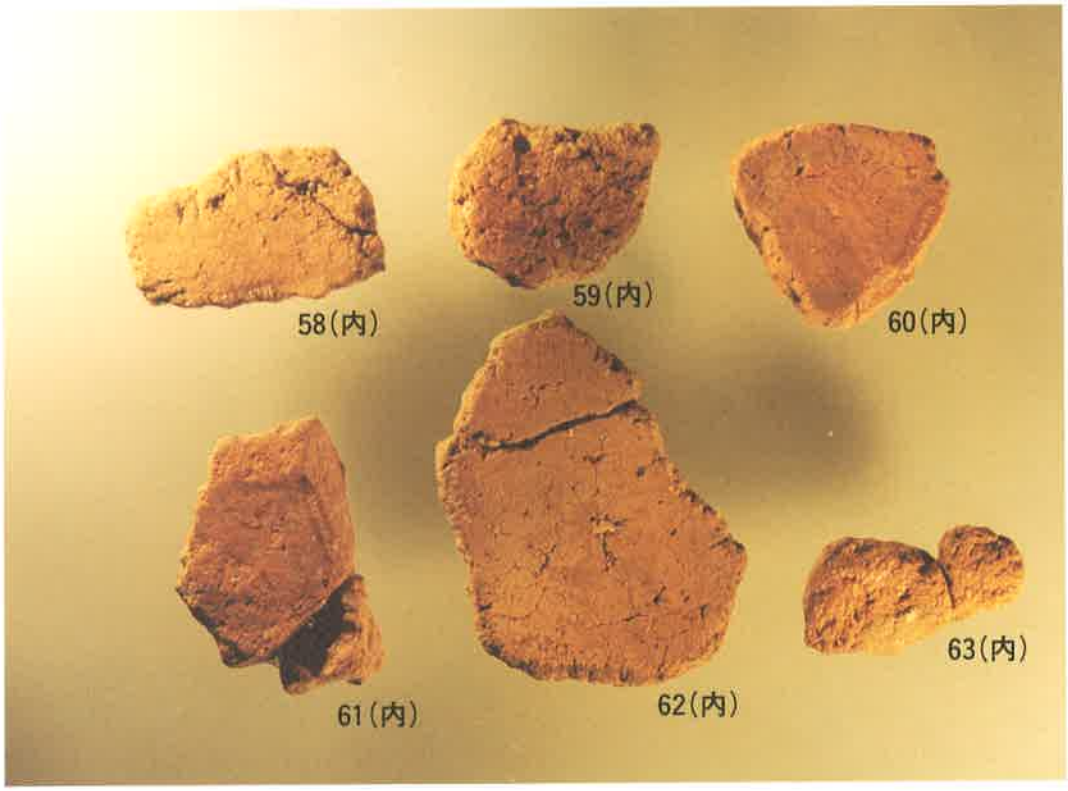
10トレンチ出土遺物（第9図）

瀧之段遺跡表採遺物（第14図）

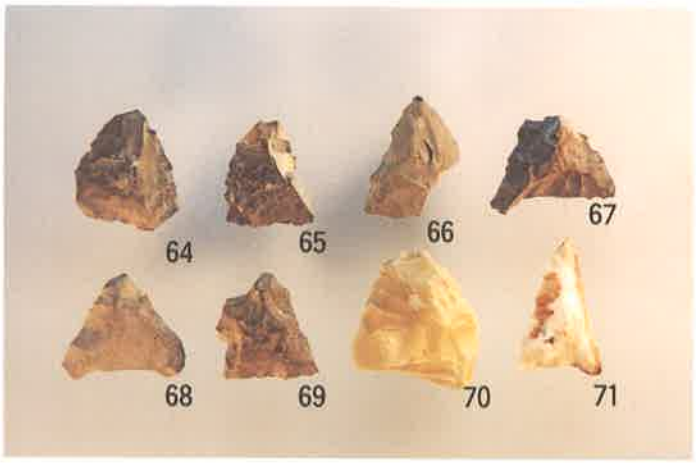


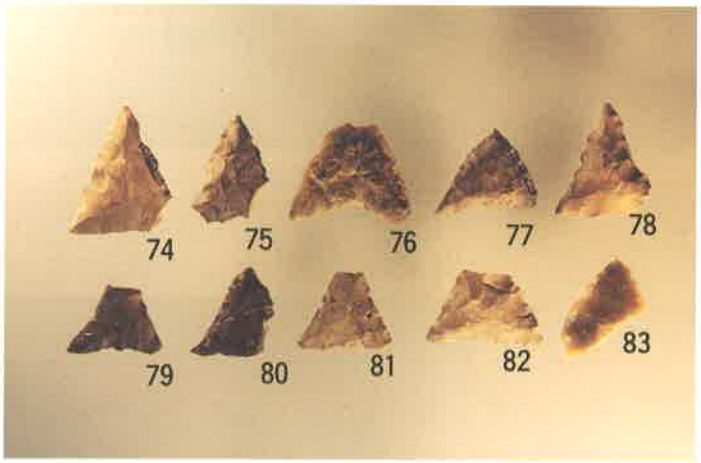


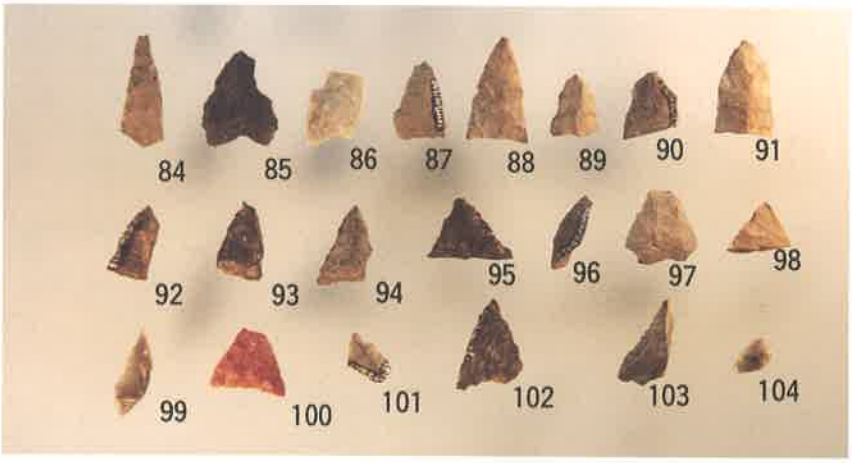
A地区出土遺物（土器）（第16図）



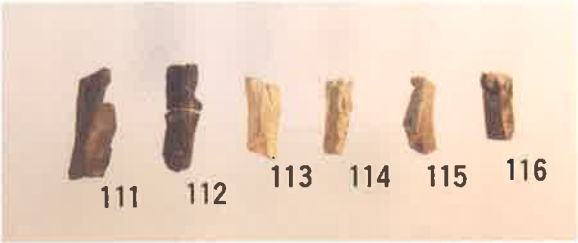
B地区出土遺物（土器）（第17図）







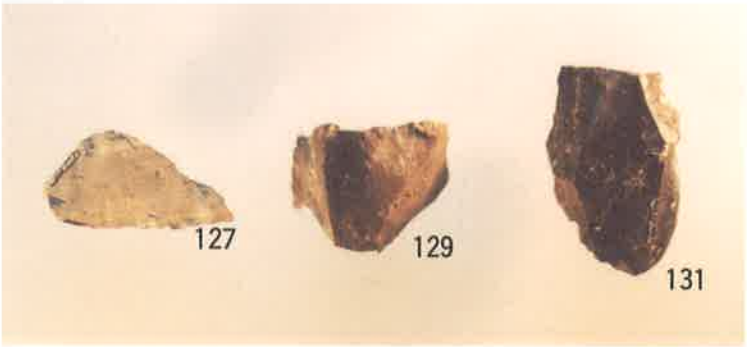
草創期石鏃（一～三）（第18～20図）



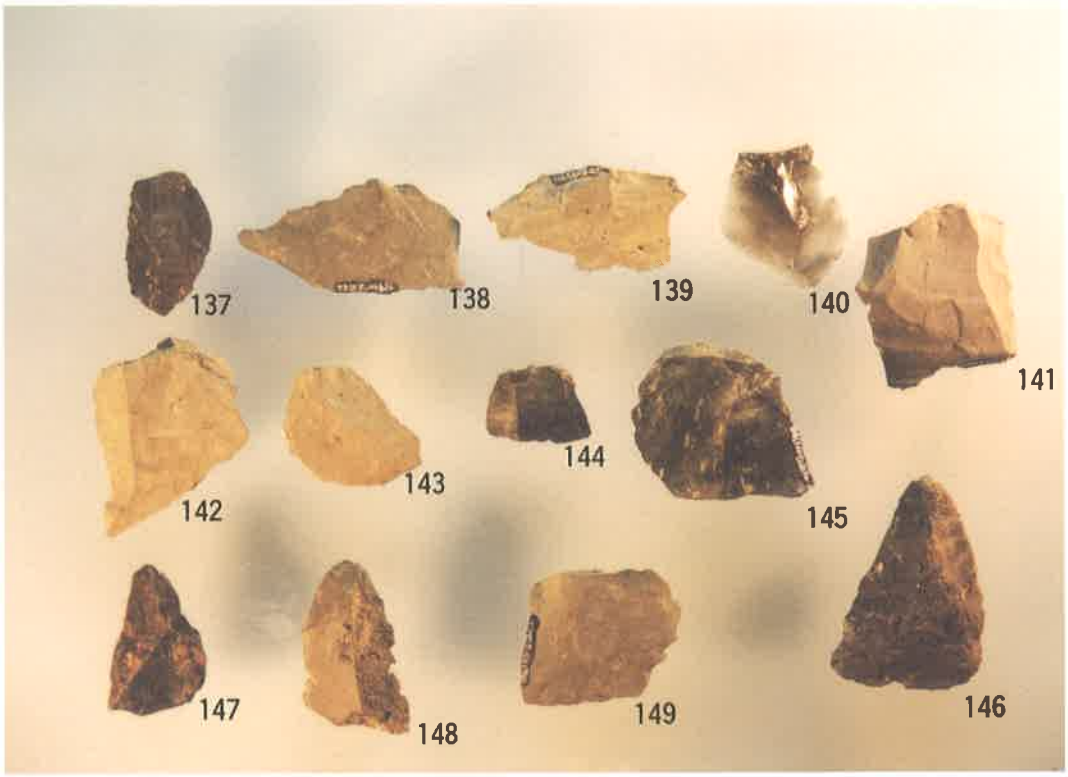
ブランク　細石刃（第29図）

ハンマーストーン（第31図）

石核，掻器，楔形石器（第30図）

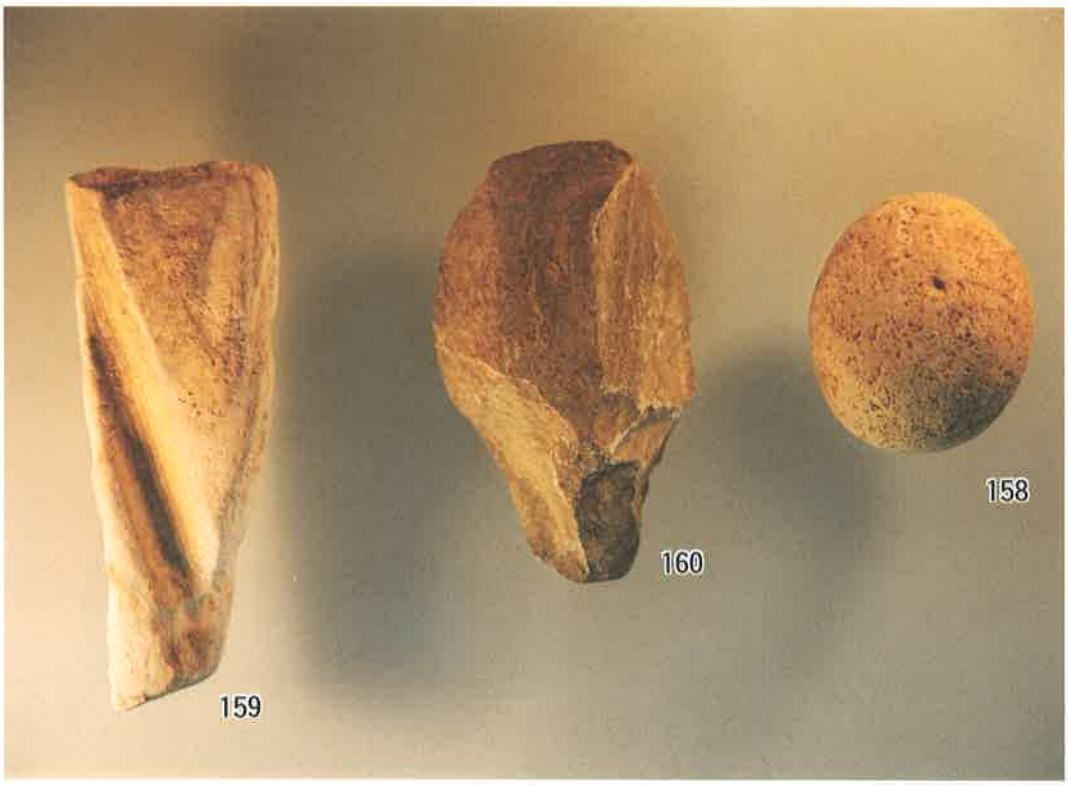


石核，剥片類（第32図）


137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149

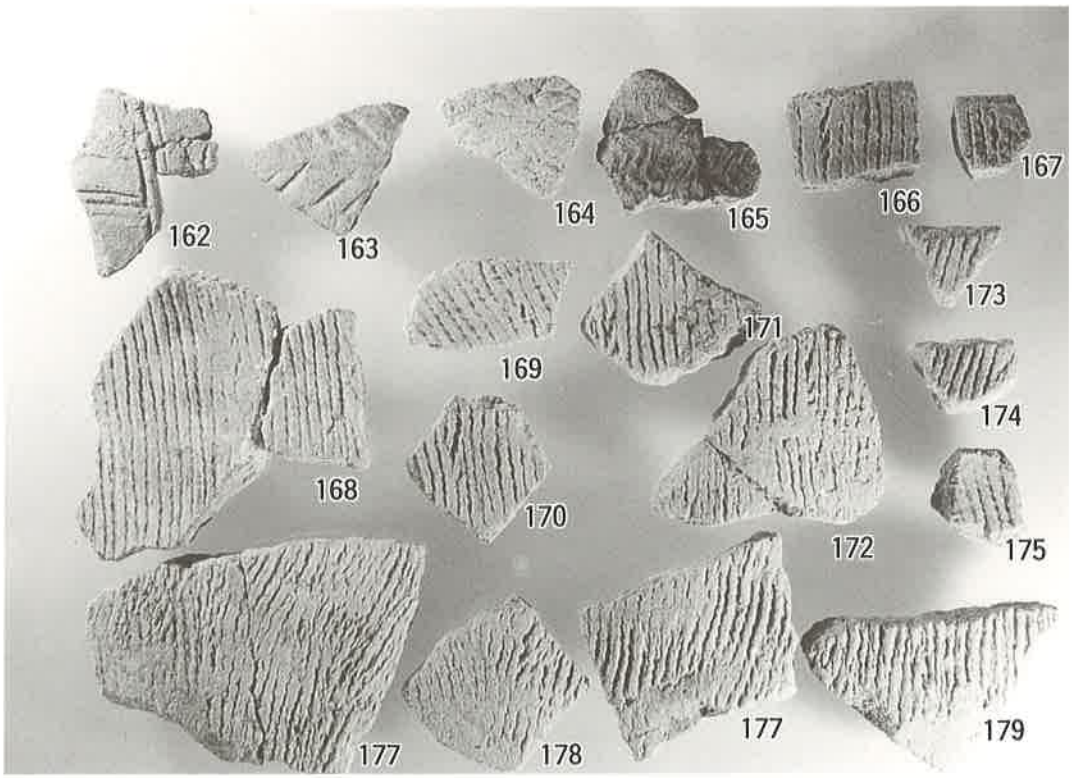
128
130
132
133
134
135
136

石核，剥片類（第32図）

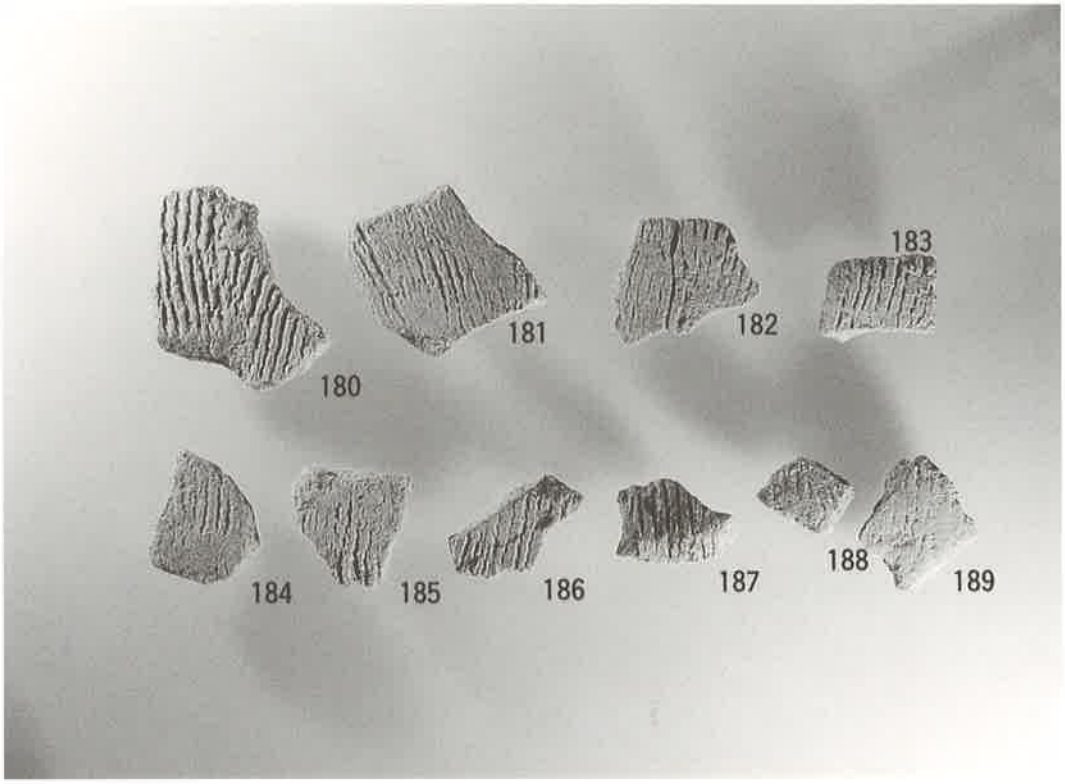


剥片，その他の石器（第33図）

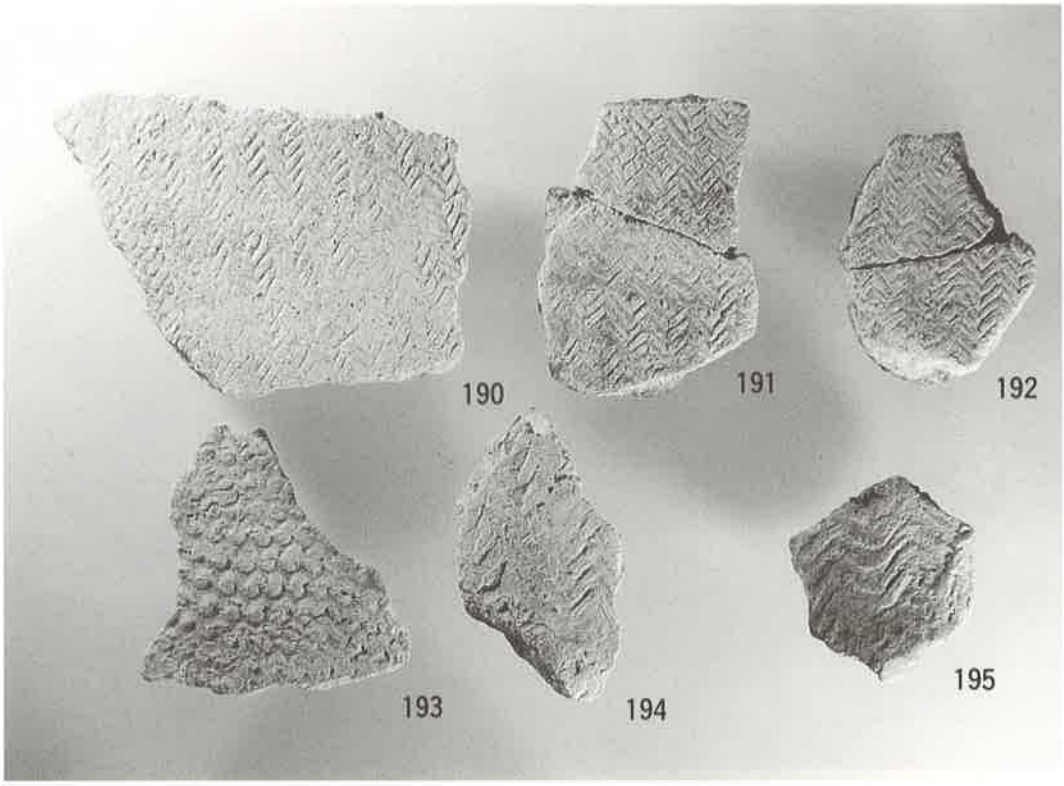
砥石（第35図）



Ⅰ・Ⅱ類土器（一）（第36図）

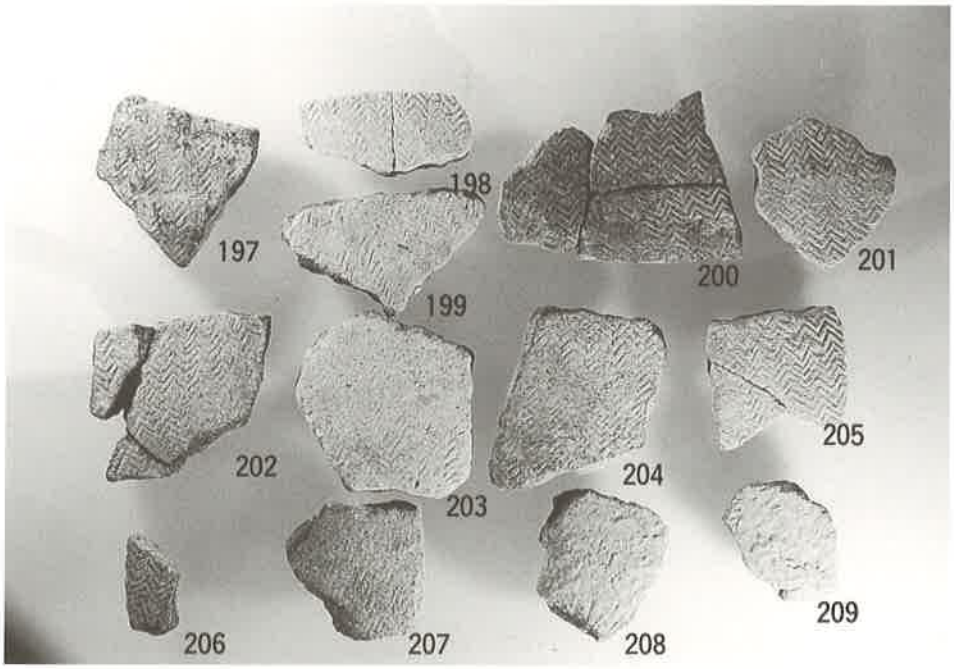


Ⅰ・Ⅱ類土器（一）（第36図）

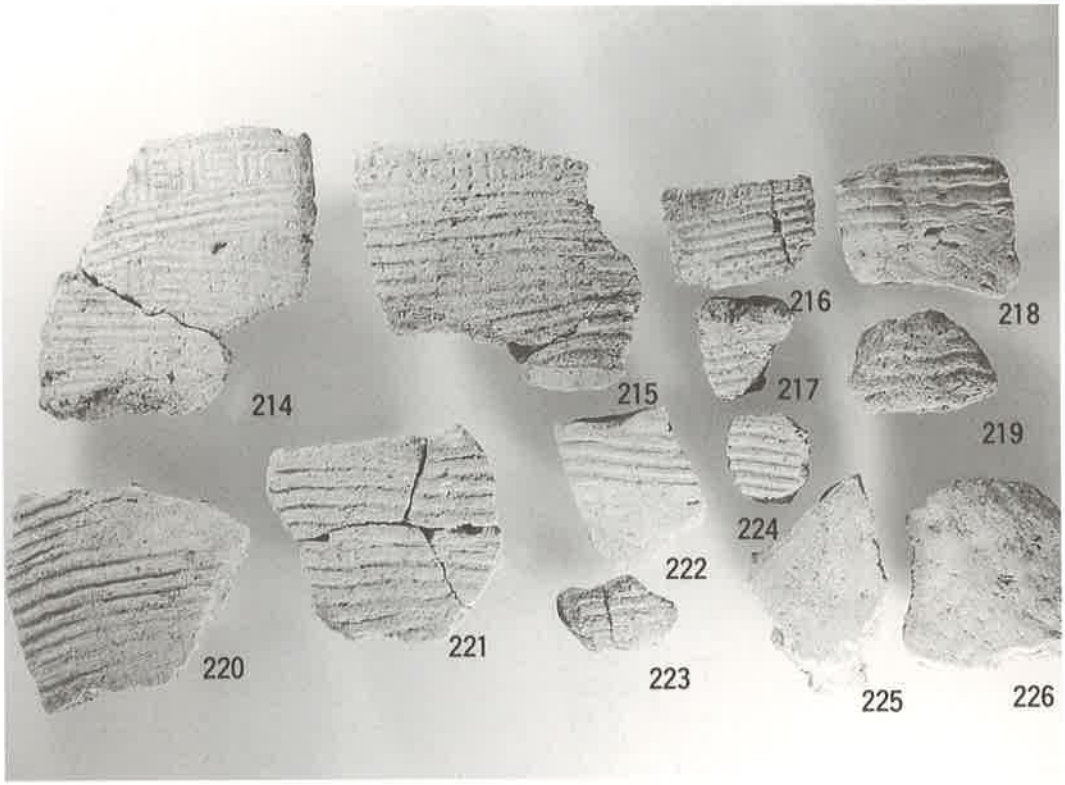


Ⅲ類土器（Ⅲ層）（第37図）

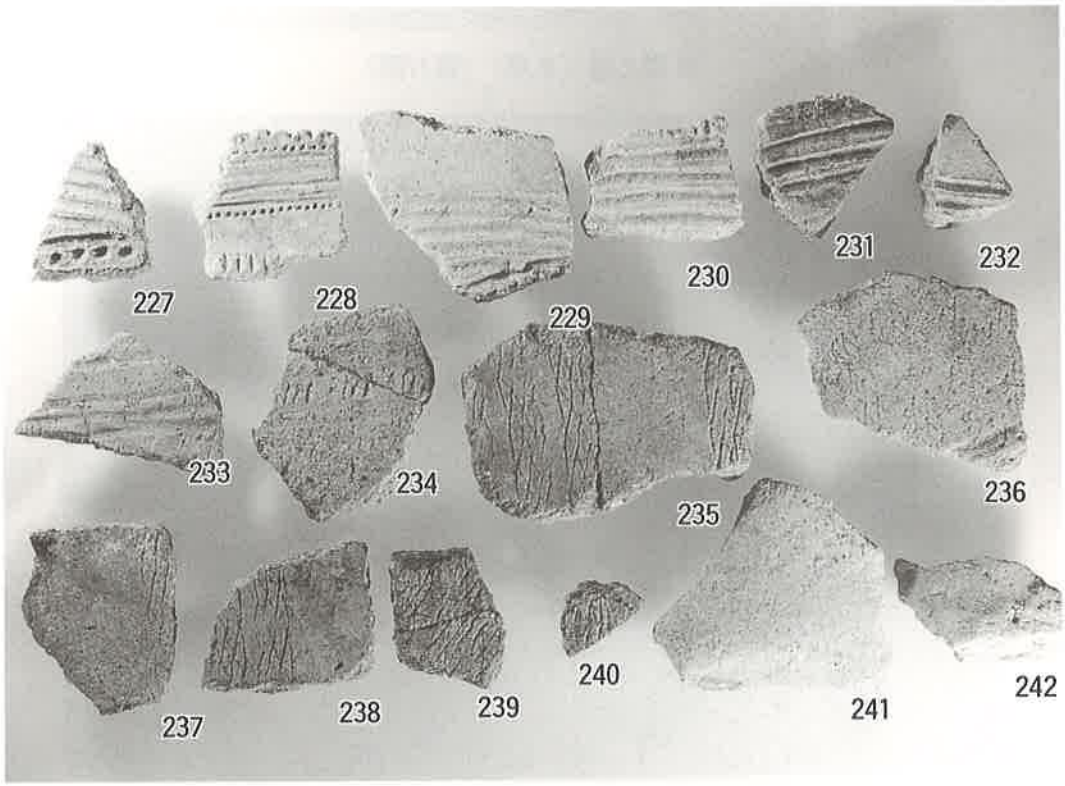
Ⅲ類土器（Ⅲ層）（第37図）



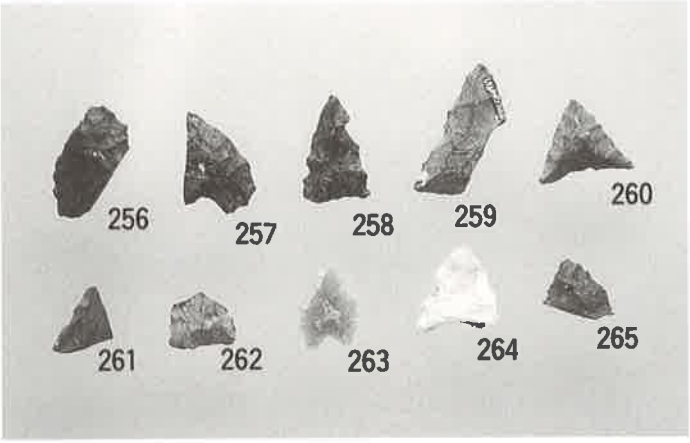
Ⅲ類土器（Ⅳ層）（第38図）



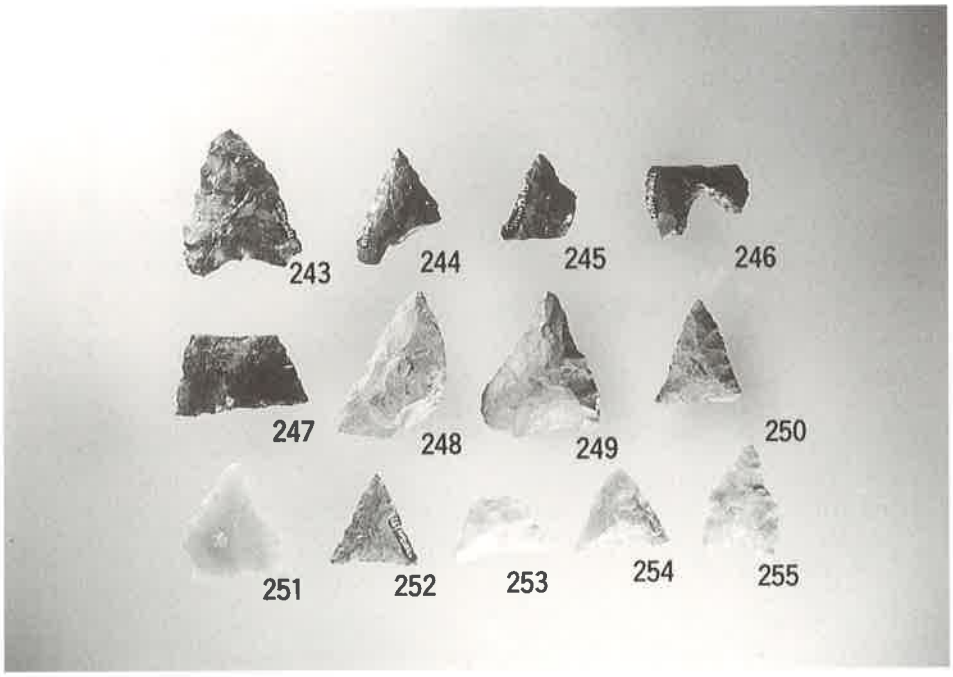
Ⅳ類土器（Ⅲ，Ⅳ層）（第39図）



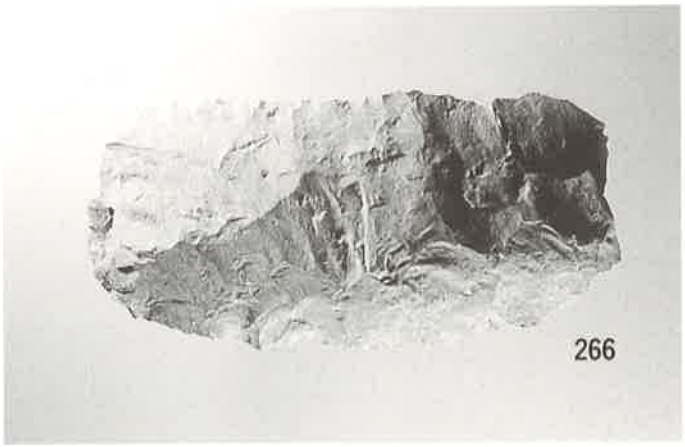
Ⅴ類土器（Ⅳ層）（第40図）



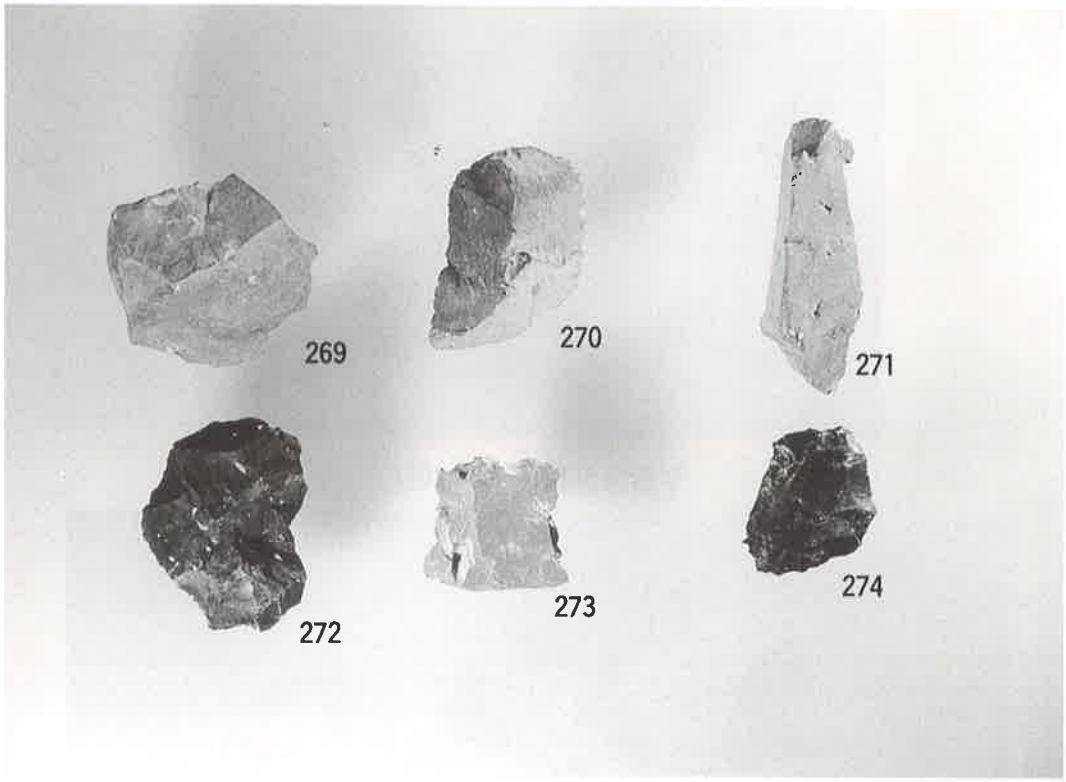
Ⅴ層出土石器（第43図）



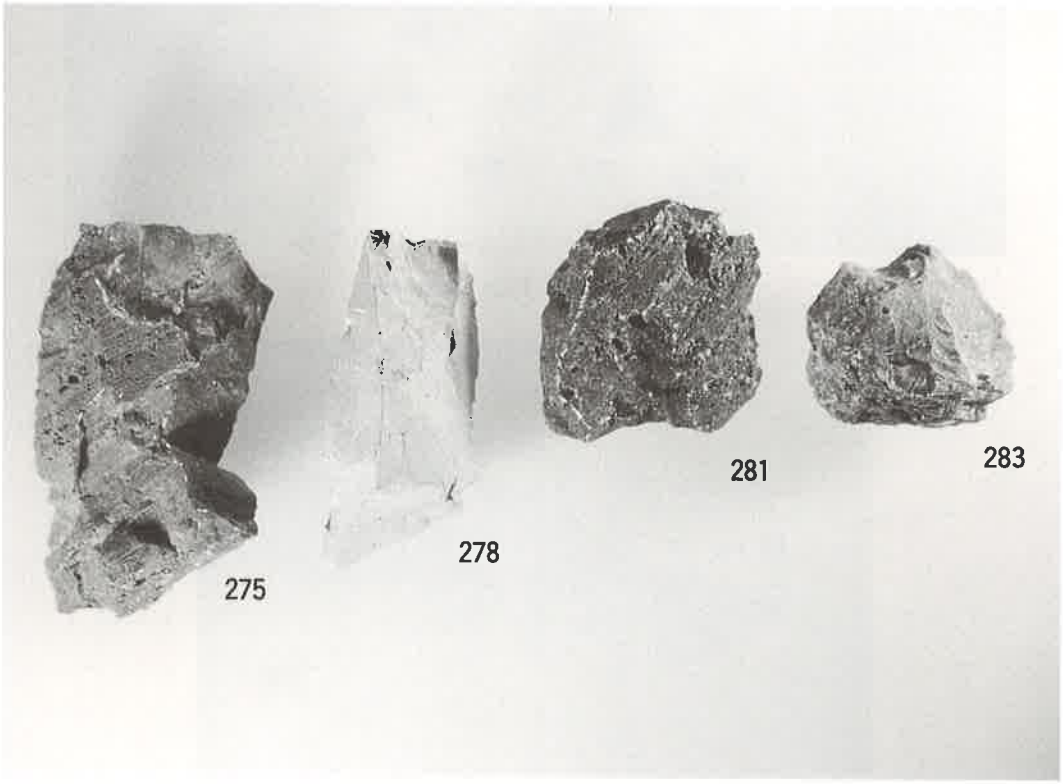
Ⅳ層出土石器（一）（第42図）



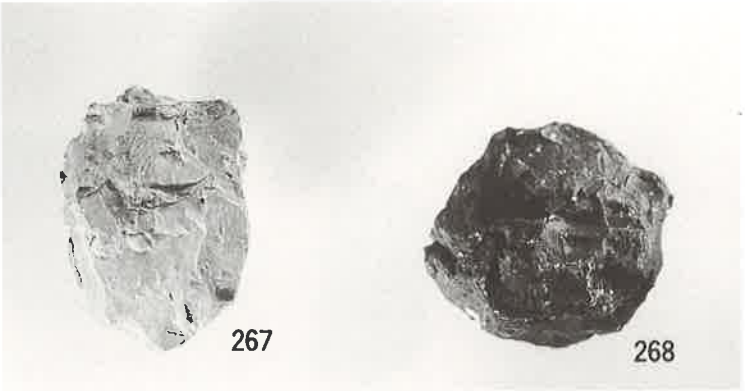
Ⅳ層出土石器（二）（第44図）



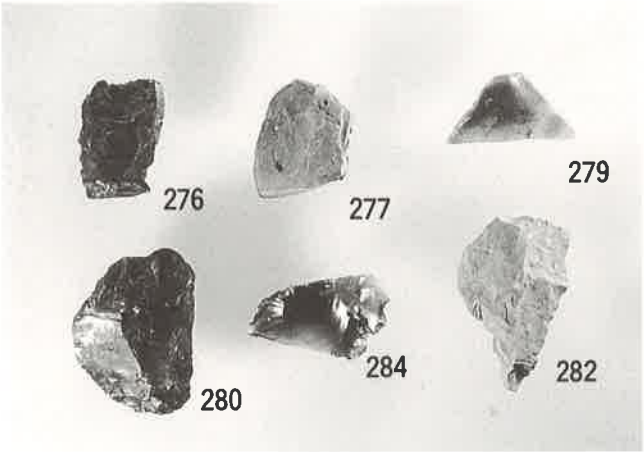
Ⅳ層出土石器（三）（第45図）



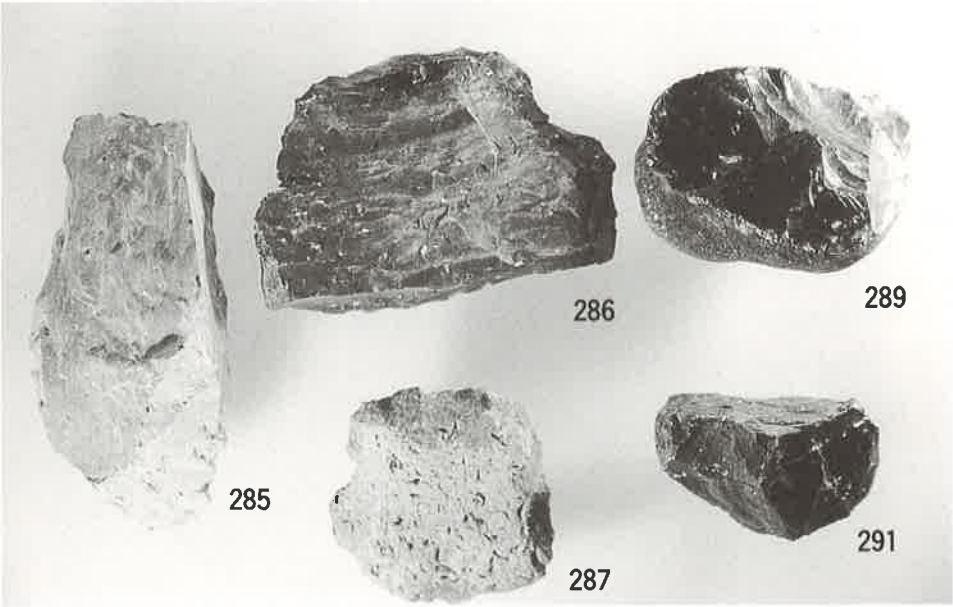
Ⅳ層出土石器（四）（第46図）



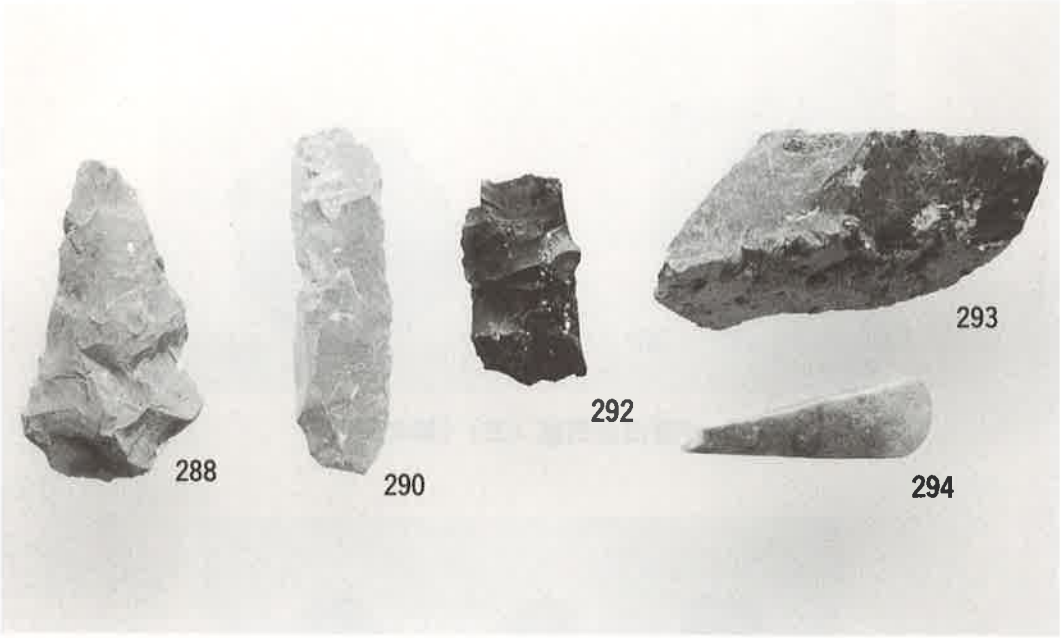
Ⅳ層出土石器（三）（第45図）



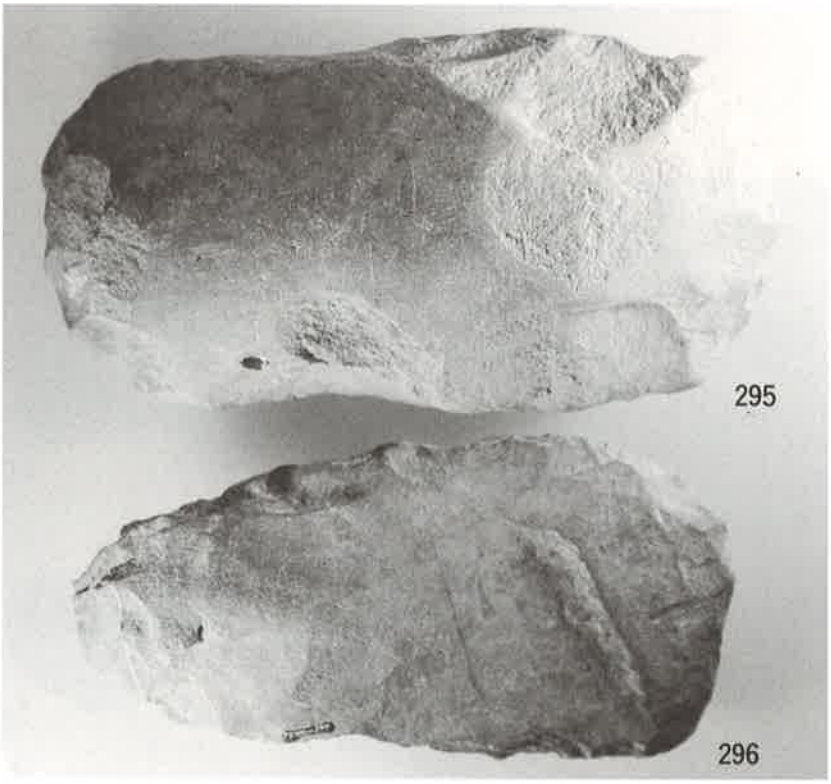
Ⅳ層出土石器（四）（第46図）



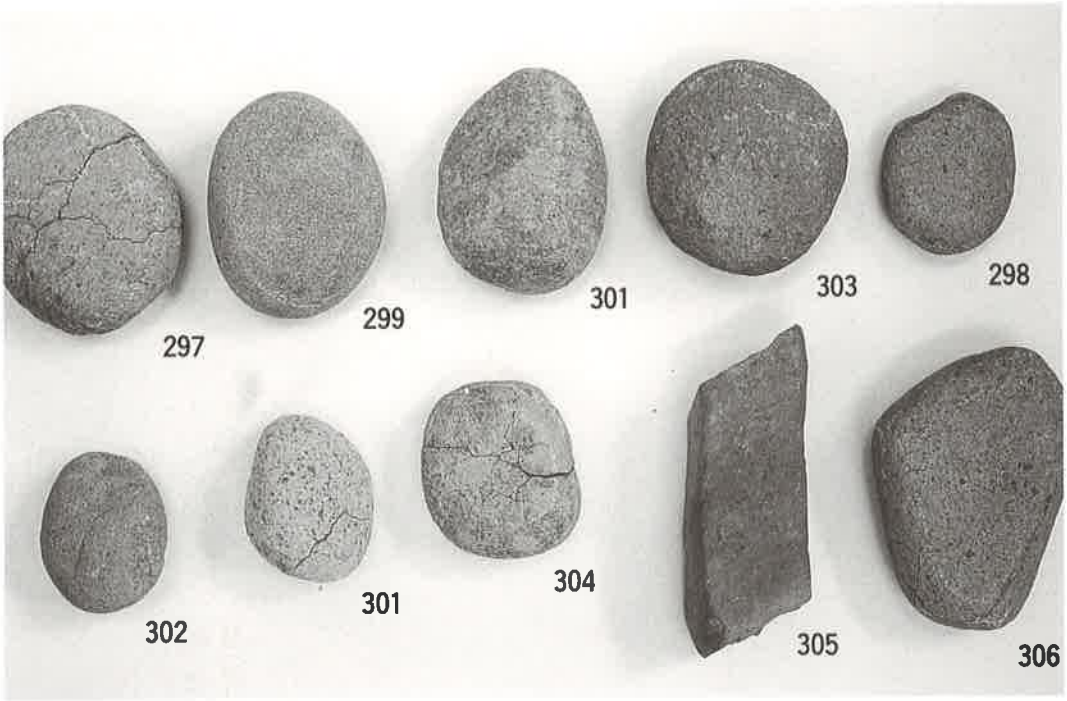
Ⅳ層出土石器（五）（第47図）



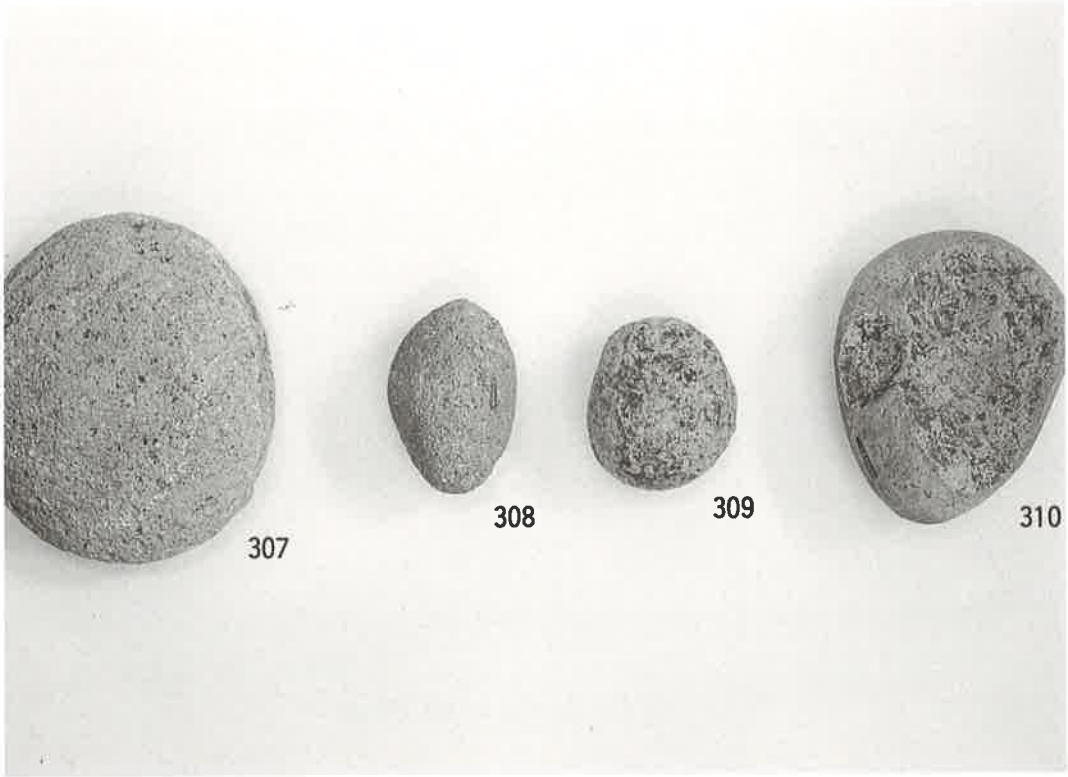
Ⅳ層出土石器（五）（第47図）



Ⅳ層出土石器（六）（第48図）

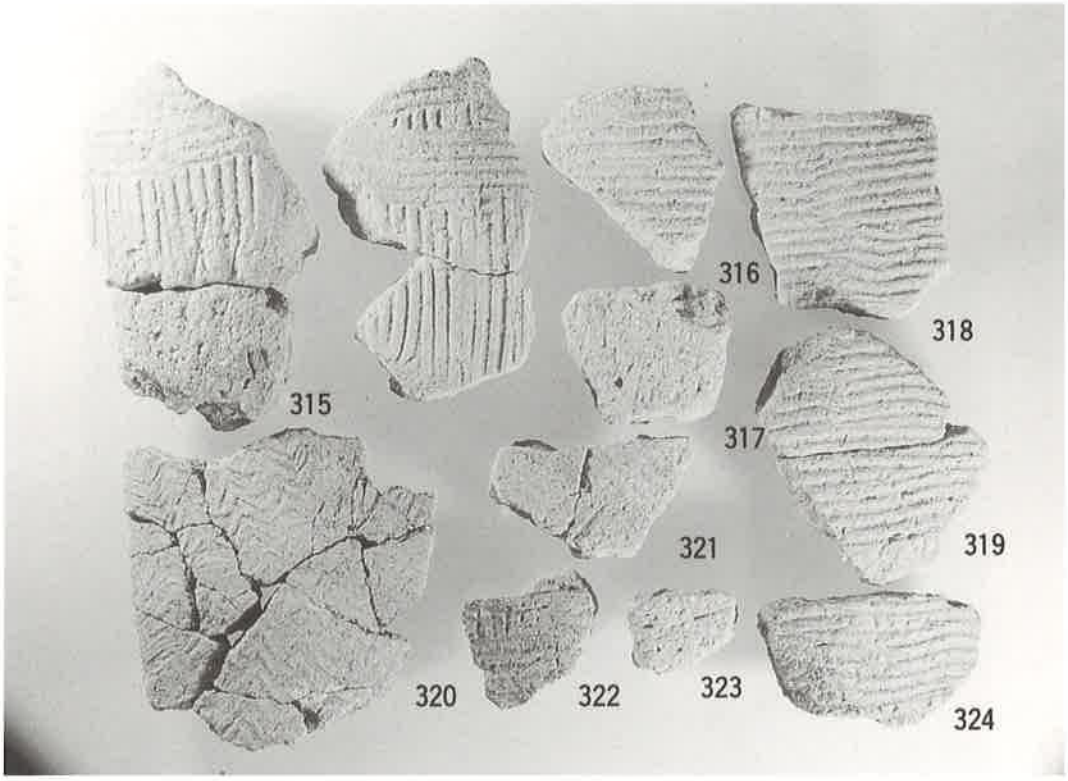


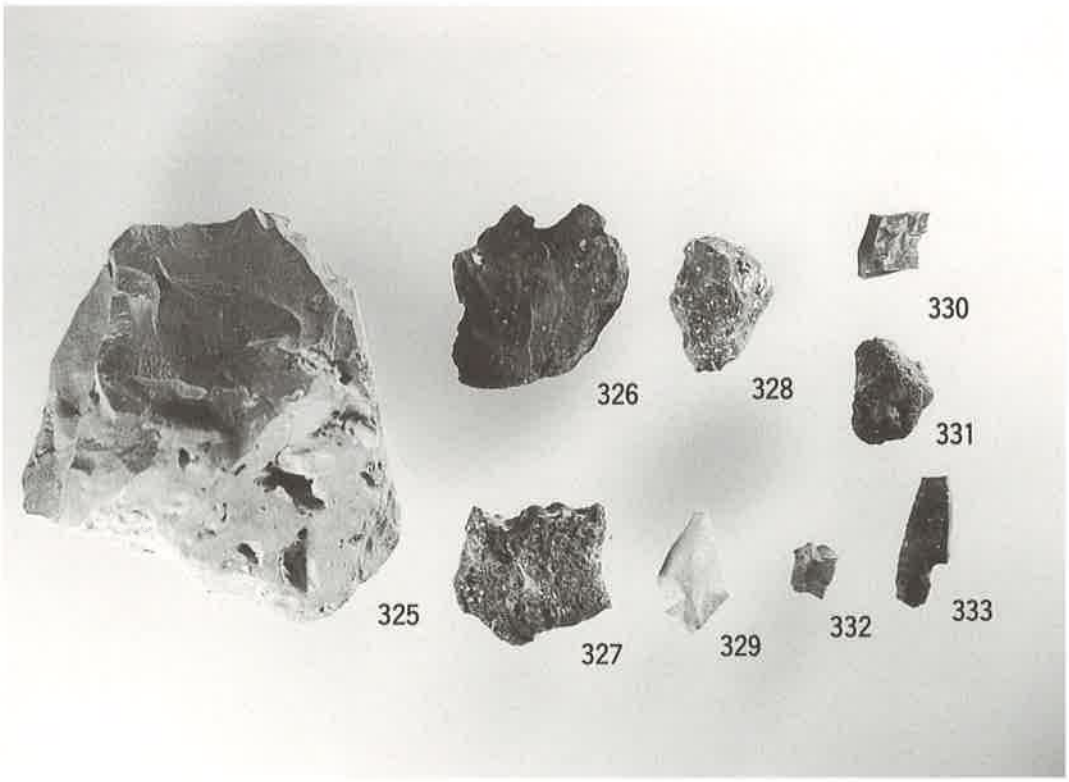
Ⅳ層出土石器（七）（第49図）



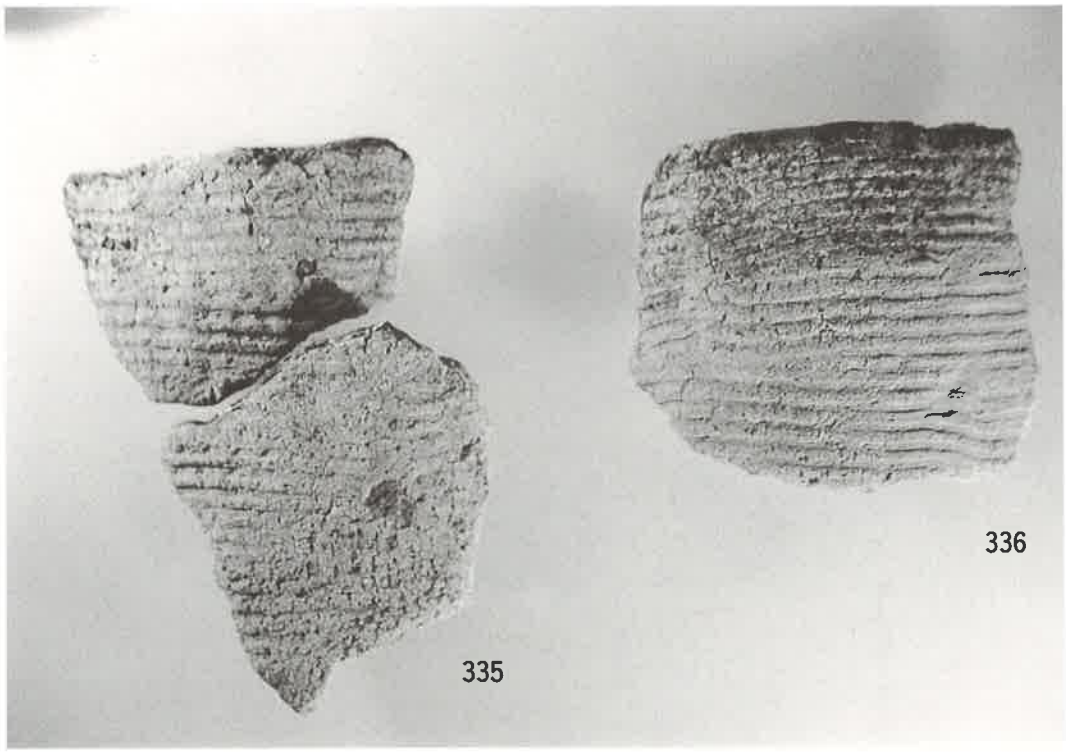
Ⅳ層出土石器（八）（第50図）

Ⅳ層出土石器（九）（第51図）

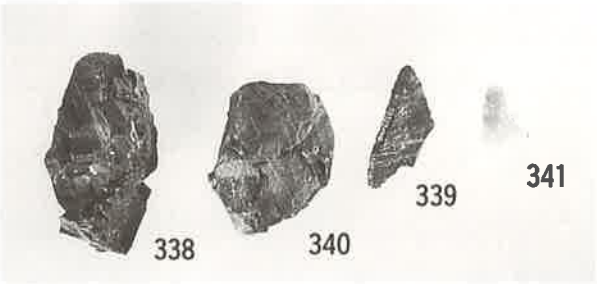




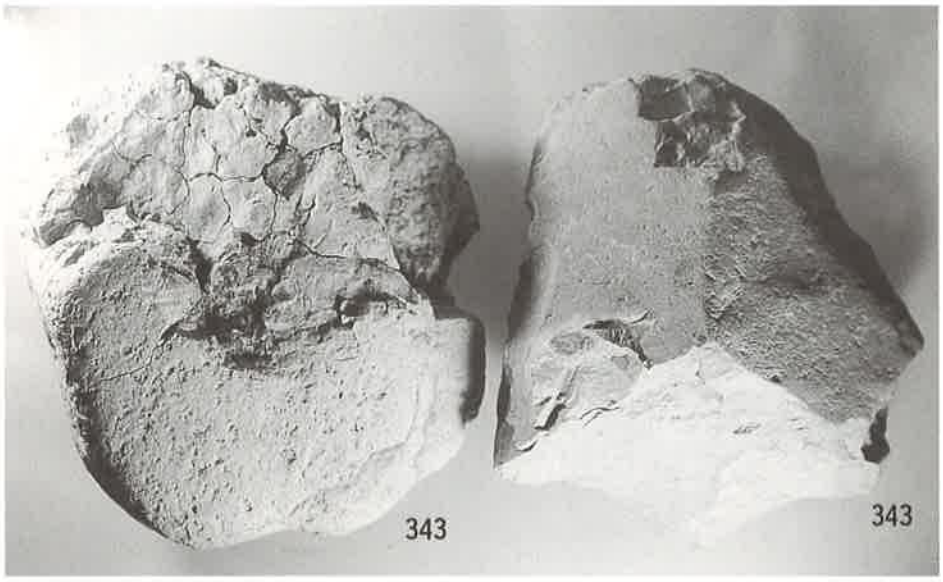
SS－１号出土遺物（一～二）（第56・57図）

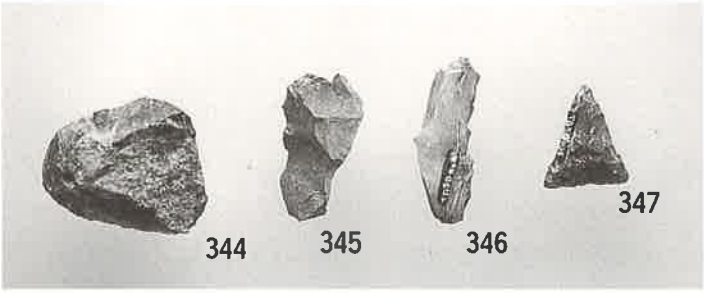


SS－２号出土遺物（一）（第59図）

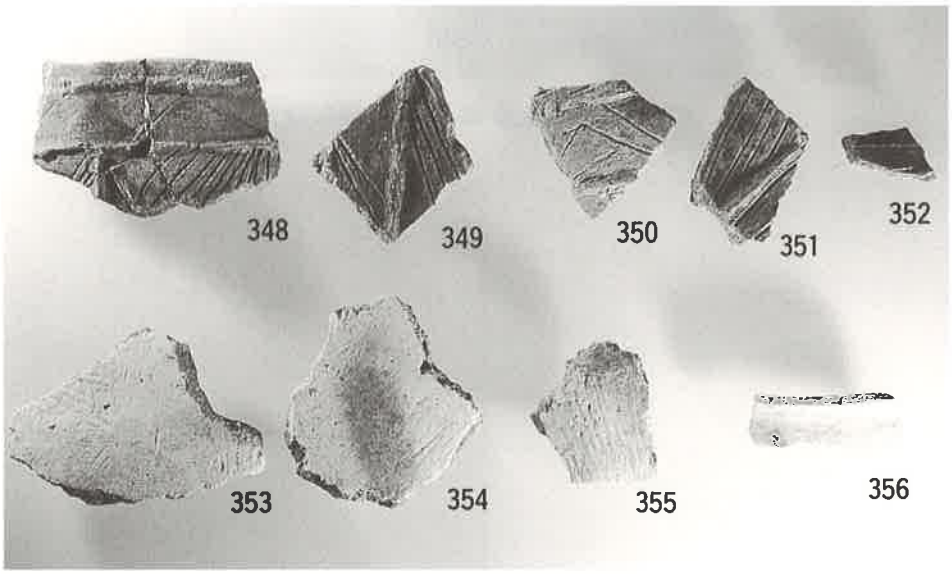


SS－2号出土遺物（二）（第60図）

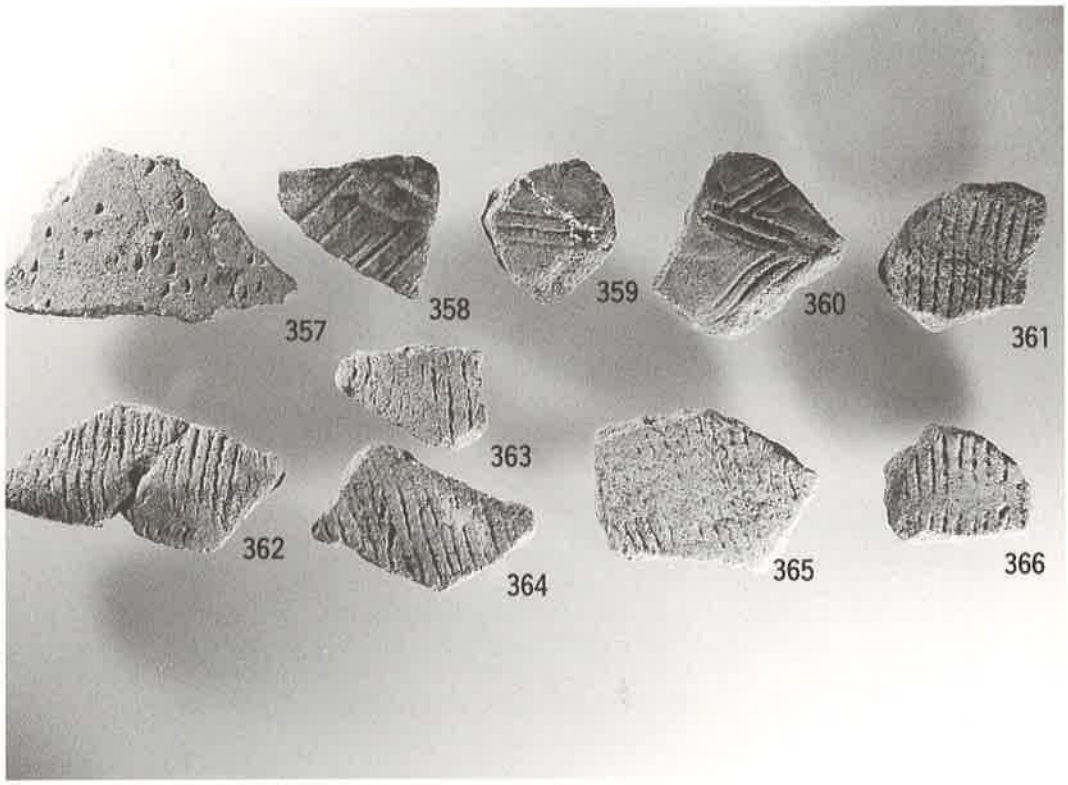




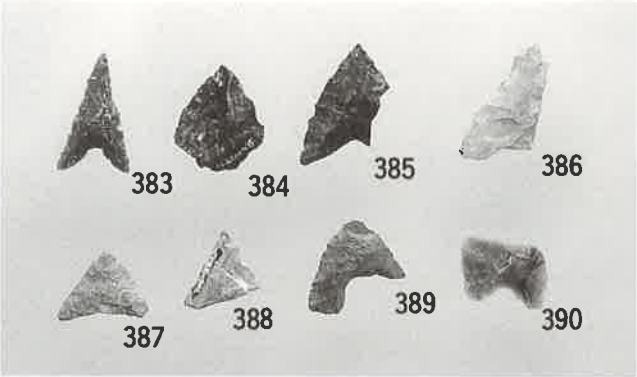
溝状遺構出土遺物（第64図）



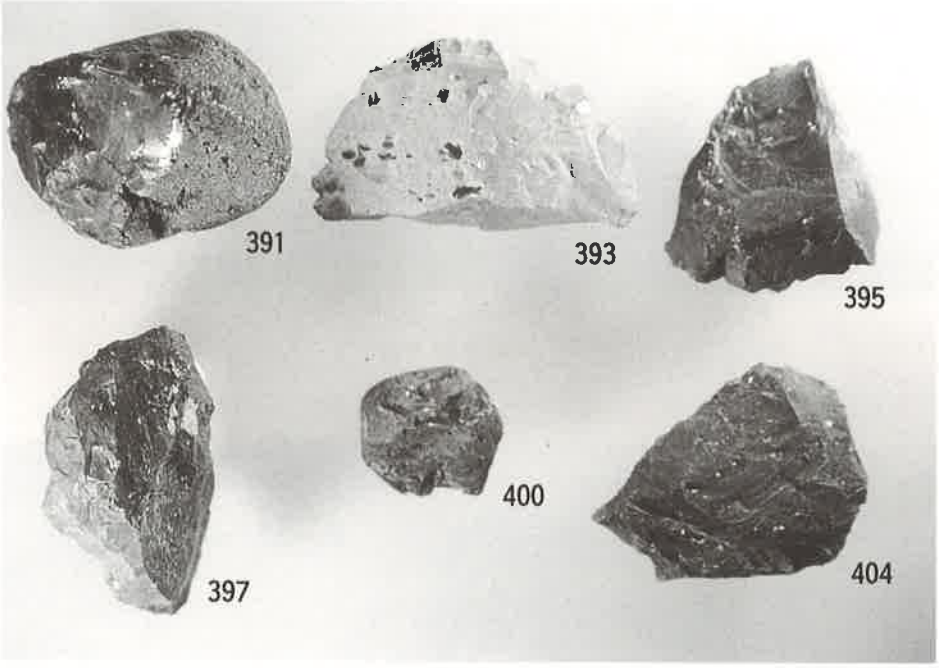
Ⅵ～Ⅷ類出土遺物（第65図）

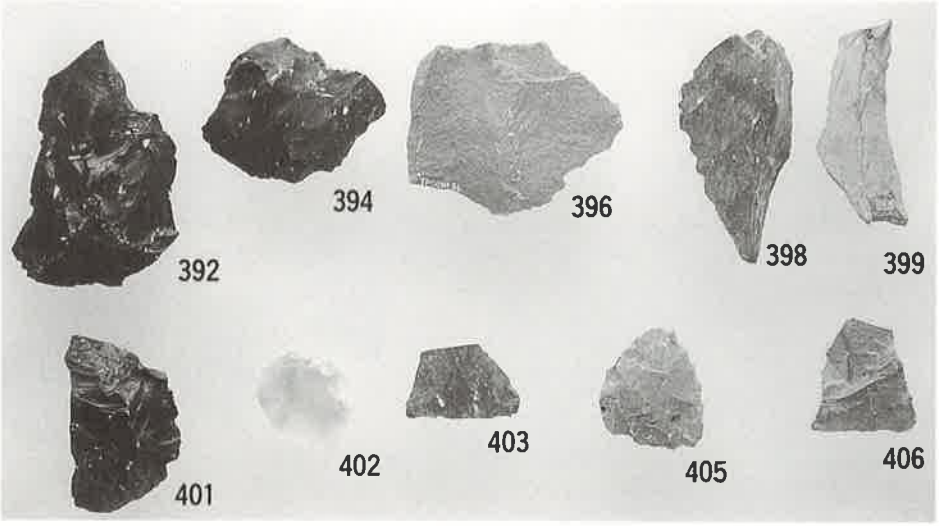


Ⅲ層出土遺物（一）（第66図）

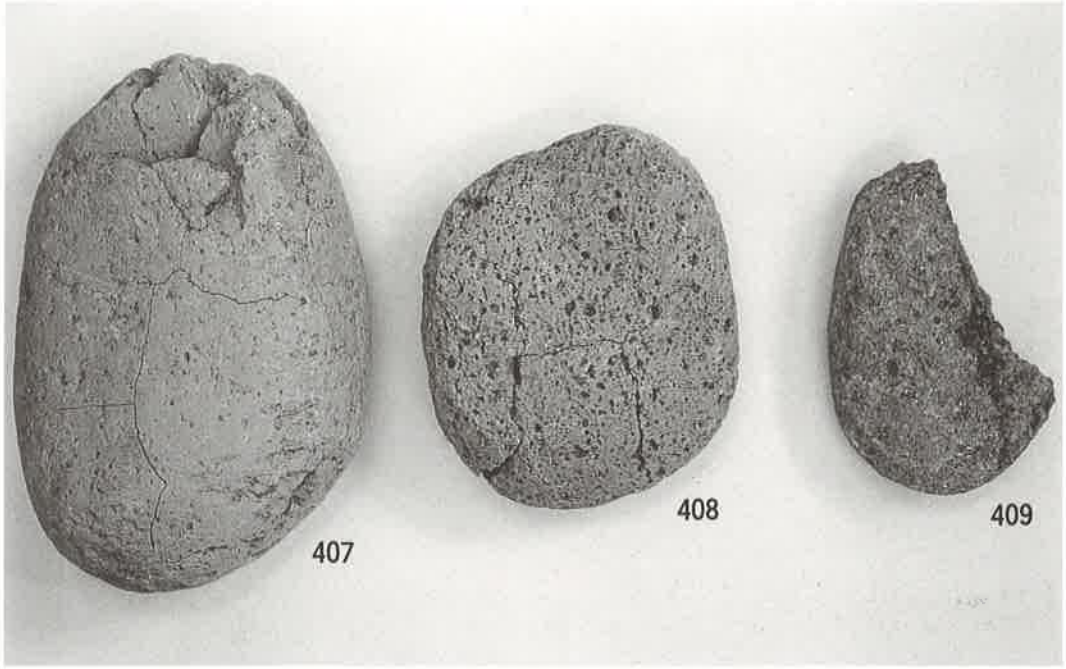


Ⅲ層出土遺物（二）（第67図）





Ⅲ層出土遺物（三）（第68図）



Ⅲ層出土遺物（四）（第69図）

1トレンチ

3トレンチ

4トレンチ

6トレンチ

7トレンチ

8トレンチ

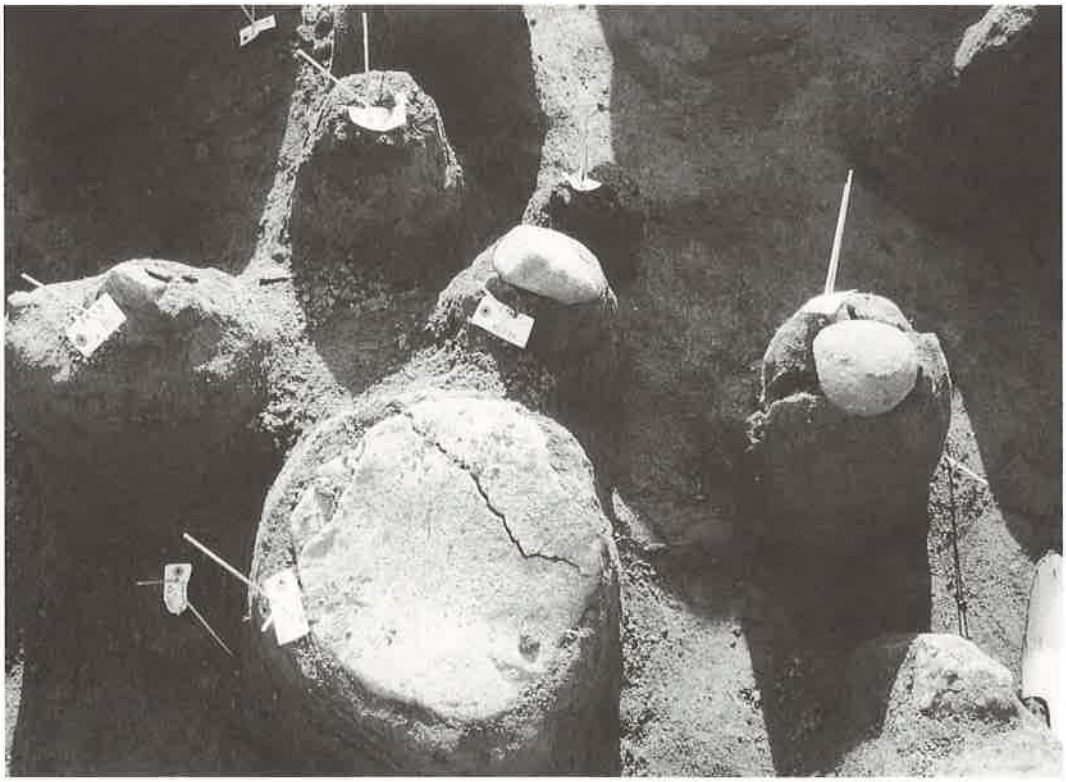
9トレンチ

11トレンチ

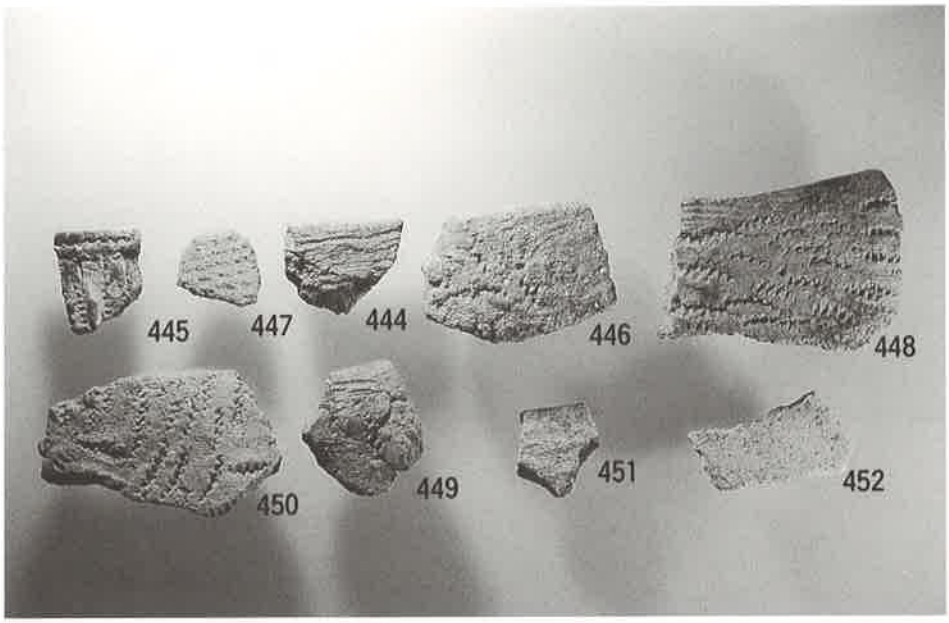
1トレンチ遺物出土状況

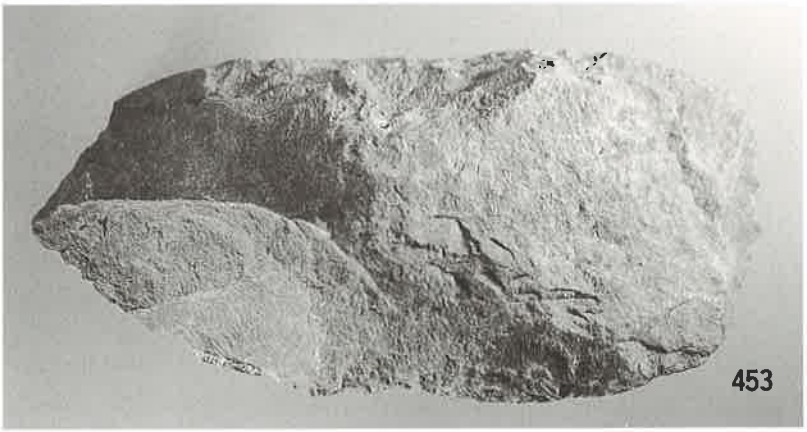
細石刃核出土状況

3トレンチ遺物出土状況

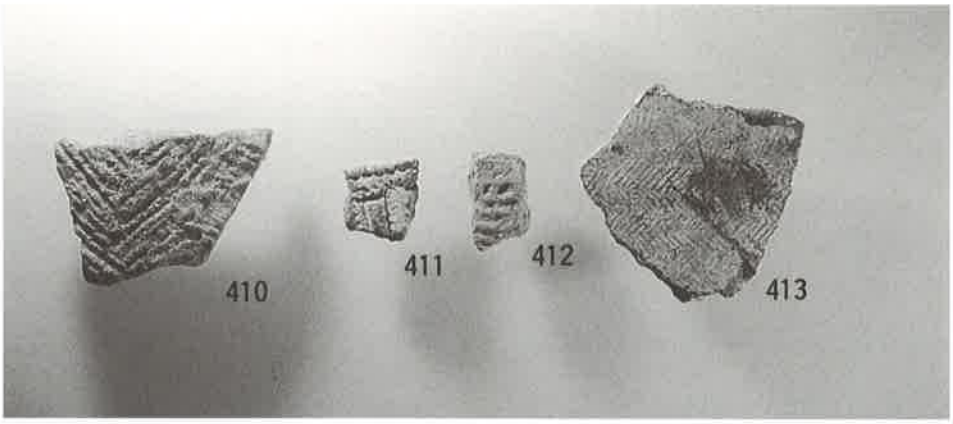


3トレンチ石皿出土状況

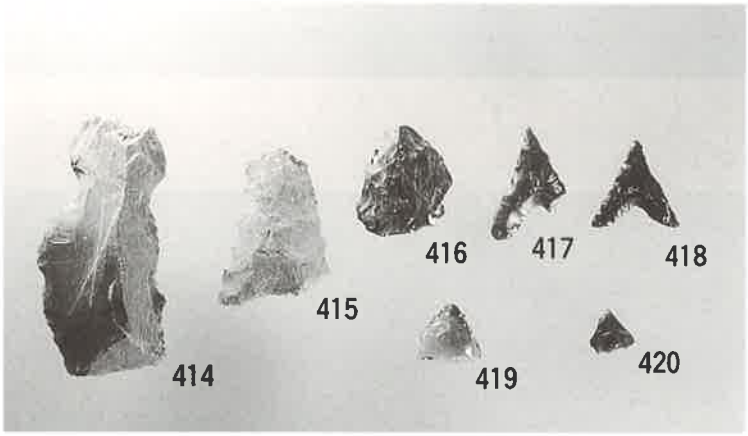




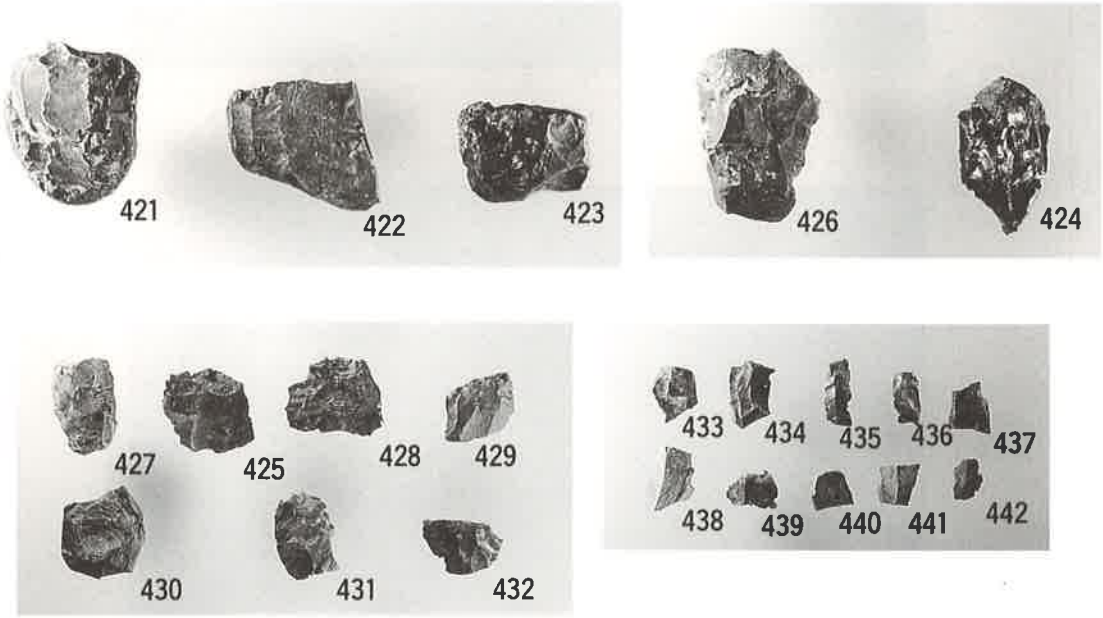
3トレンチ出土遺物（一～二）（第79・80図）



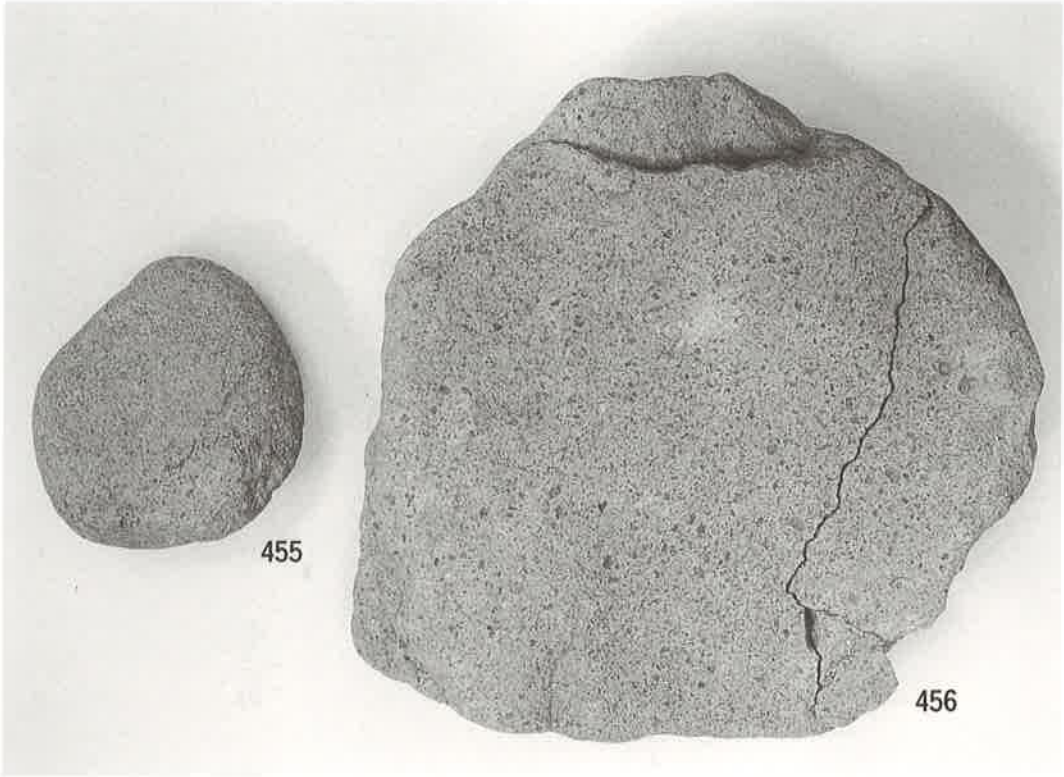
才野ヶ原遺跡表採遺物（第74図）

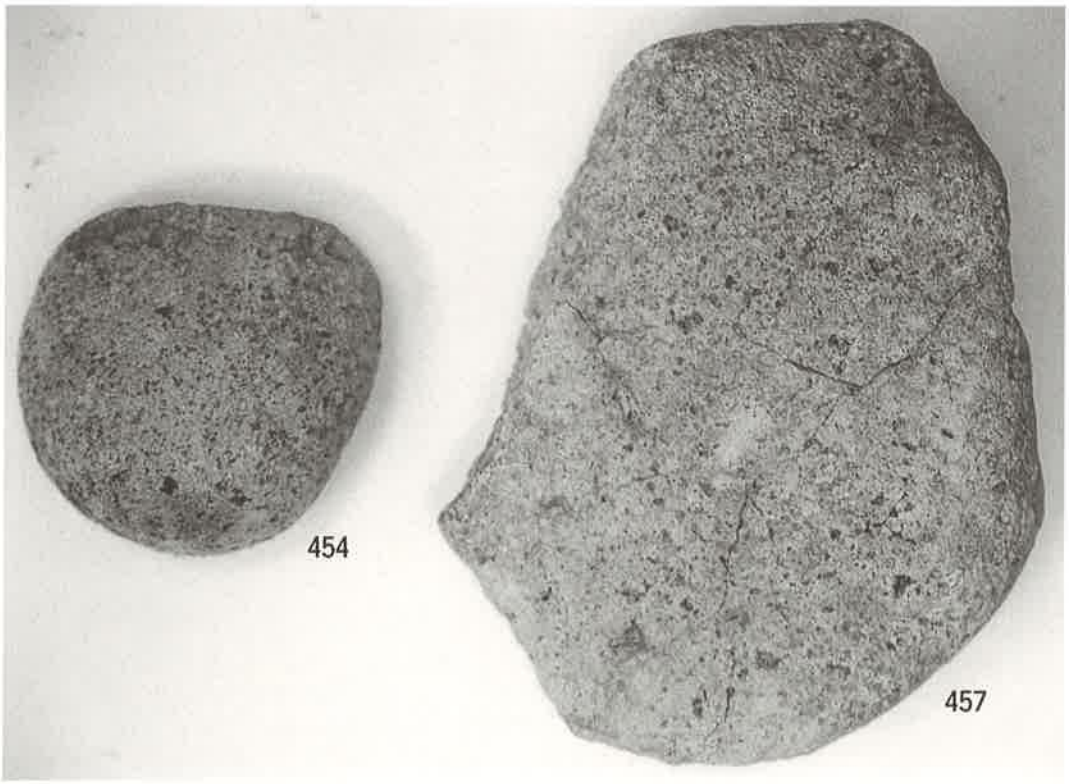


才野ヶ原遺跡表採遺物（第75図）

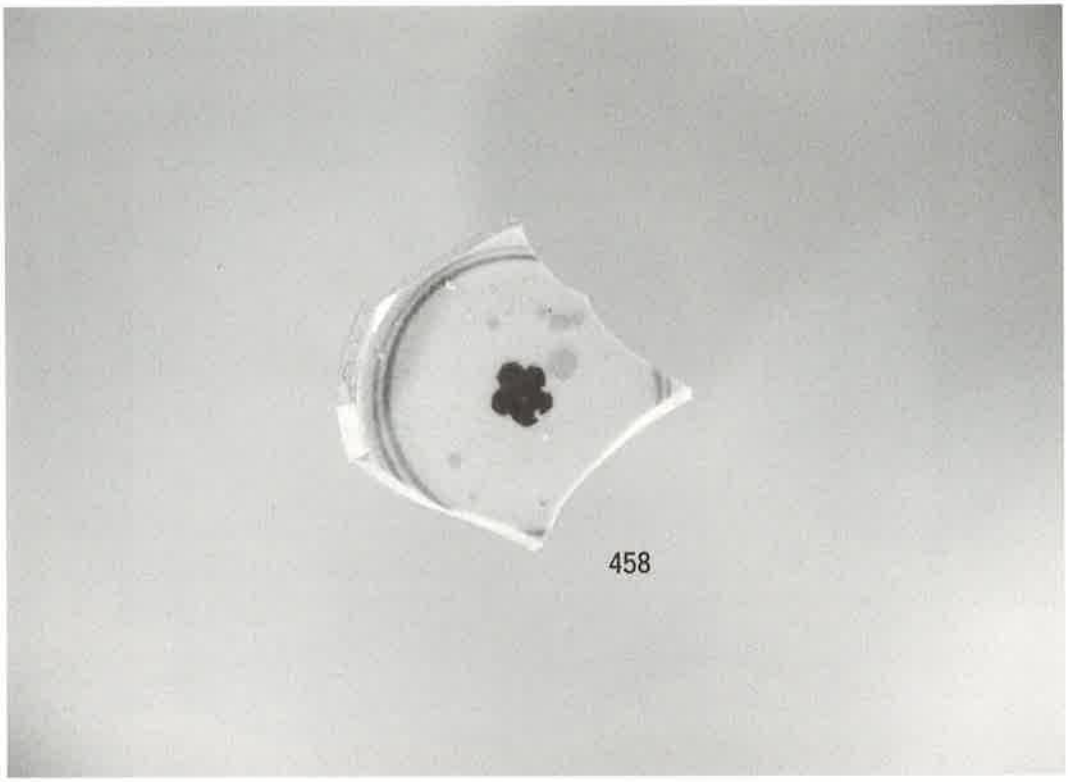


1トレンチ出土遺物（第77図）





3トレンチ出土遺物（第81図）



近世の遺物（第82図）

あ と が き

夏の激しい日照が首の辺りに突き刺さる。畑の土手に生えた草花を踏み歩くと，バッタが慌てて跳び逃げる。私は通称「チュッチュ」と呼ばれるアイスを片手に持ちながら，木陰に寄った。木陰では山下さんや秋丸さんらが「ヒョーヒョー」と突然叫びだす。その声に導かれてか，僅かに風がそよぐ。私も真似をしてみた。「ヒョー」私の下手な声にみんなが笑った。固くなった地面に水をジョロでまきながら，過去を掘り下げる。かすかに「ゴオー」という滝の音が聞こえてくる。そう滝が近くにあるのだ。近くに行ってみると，７m程の落差から山水が落ちている。滝壷にはハヤ通称（モッゴロ）が泳いでいる。岩影には山太郎蟹が隠れていた。川とんぼの様子をみながら現場に戻る。あさりでも掘るような格好で，みんながんばっている。「あさりはとれたけ?」私のくだらないジョークにみなが笑ってくれた。私はそんなこんなしながら出土遺物チェックにまわった。「おっ，いいものがでましたね。」「こんな小さなもの良くみつけましたね。」その声にみな喜んで，生徒が先生に褒めてほしくて頑張るようにみな一生懸命掘っている。「あたいがとは，マイコロブレッドじゃっせんけ。」「やじいがでもした。」自慢そうに語りかける。私はこの人達が大好きだ。たまにけんかしたり，自慢したり，笑ったり，本当に純粋な人たちである。この人達の前で私は自分の醜さを感じてしまう。「あれ，ここにあった遺物はどうしました?」昨日帰るときまであった遺物が袋ごとなくなっていたのだ。「うんだしたん。」みなが口々に言う中「きのうんゆがた，からいがくわえてもっていきもしたど。」と現場横に住んでいる山下さんが言う。現場ではよくあることである。からすは光るものや人間が大事そうにしているものを良いものだと思い，持ってゆくのだ。しかも，からすだけではなく，だんざ（たぬき）もよく出没し，水糸などを切ってしまうのだ。時々服を着たタヌキが，我々が帰ったあと見に来て，竹串を踏んでいることもあった。「しようがないですね。」私は言った。そしてみんなはまた掘る。あと，もう少しで作業終了だ。

＜発掘作業員＞

山下美香　秋丸スズ子　大迫静子　前田ナミ　前田サツエ　前田ナツエ　石神マツエ
大六野智恵美　松田マツ子　楮山紀代美　武田明代　坂口ひろ子　池之上えみ子
児玉千香子　溜池厚予　蒲池ヨシエ　久保アツ子　松崎道子　久徳祐子

市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

落シ平遺跡
瀧之段遺跡
才野ケ原遺跡

発行日　平成11年３月
発　行　市来町教育委員会
〒899-2192　日置郡市来町湊町3305番地
印　刷　㈱　朝日印刷
〒890-0055　鹿児島市上荒田町854－１